

---

# 魔法少女リリカルなのは～風の辿り着く場所～

龍視

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは風の辿り着く場所

### 【Nコード】

N9262K

### 【作者名】

龍視

### 【あらすじ】

海鳴の守護者として人知れず平和を護ってきた少年と魔法少女たちが会ったとき、物語の歯車が静かに動き始める。

初投稿で至らないところがあると思いますが、よろしく願います。

## プロローグ〈別離（わかれ）と出逢い〉（前書き）

皆さんはじめまして、龍視<sup>タツミ</sup>と申します

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です

完結まで書いていけるように頑張りたいと思いますので  
最後までお付き合いをお願いします

## プロローグ〈別離（わかれ）と出逢い〉

一人の少年がいた。

少年にはとても優しい両親と

マンションの隣の部屋に住む、仲のよかった親子がいたため寂しいと思ったことはなかった。

### プロローグ〈別離<sup>わかれ</sup>と出逢い〉

少年の家系は特殊な家系だった

この地・・・、少年の住む土地、海鳴といわれる土地の守護者という役割を持っていた

世界には一般人が知ることの無い“魔物”と呼ばれる存在がいる  
その“魔物”と呼ばれる存在から“魔法”と呼ばれる不思議な力を使い

一般人たちを人知れず護るのが少年の家系、巽家の役割だった  
普通の土地なら少年の家系のような人たちは  
必要の無いものだったであろう

だが、海鳴という土地は彼らという存在が必要だった  
この地には“魔物”を・・・、いや、強い力を引き寄せる  
という、厄介極まりない土地だからだ

当然、そんな家系に生まれた少年も護るための力を持っていた  
ある日、事件が起こり、少年の父親は亡くなり

少年の力が覚醒した・・・、それはとても危険な力だった

「あの子の力を封印してください」

それが、海鳴の山の上に建つ巽の本家を訪れた

少年の母親の第一声だった

「・・・それは可能だが、一時的なものに過ぎない

あの力はたとえ封印されていたとしてもあの子の体を蝕んでいく

・・・少しだけ、あの子の生きる時間が長くなるだけだ・・・」

「わかっています、でも、その少しの時間が必要なんです」

「あなた、何をやる気？」

母親と対しているのは少年の祖父母

母親の父と母である

「・・・しばらく、あの子の面倒を見てはくれませんか？」

「・・・」

「私は、あの子を必ず救って見せます

・・・幸せになってほしいんです

それが、私とあの人の願いですから」

そう言った娘の決意に満ちた表情を見て

二人は止めることはできないと痛感した

「これをあの子に・・・、あの子のことをよろしくお願いします」

それ故にノートとネックレスを渡し、部屋を出て行く娘を見送るこ

としかできなかった・・・

そして、少年の母親は姿を消した

それと時を同じくしてマンションの隣の部屋に住んでいる親子も

姿を消した、少年は周りの親しくしていた人間が姿を消したことに

対して

人を信じることができなくなっていた・・・

少年は訓練を受けた。

戦い方を祖父母と祖父母の付き人に叩き込まれた。

少年の本来の力は封印されたが、“魔法”を使うことはできたし

巽の血筋の人間が使うことのできるもうひとつの能力も  
問題なく使用することができるようになった

そんなある日、一人の女性が祖父母を訪ねてきて

「幼稚園に通わせて見ませんか？普通の子と同じように」と言った。  
その女性の進言によってか、祖父母は少年を幼稚園に行かせること  
にした。

戦いのことより、普通の生活をしてほしかったのだろう。

しかし、両親がいない少年に周りの子供たちが普通に接するわけも  
なく、少年はいじめの的となった。

少年はそんな子供たちを徹底的に排除した。何回か続けると周りの  
子供たちは少年を無視し始めた。

少年はそれで構わなかった、自分は独りでいいと思っていた・・・。  
一人の少女と出会うまでは。

ある少女が声をかけてきた

「独りでさみしくない？」と

少年の状態に同情したのだろう。

少年は答えた

「さみしくない」と

「そんなわけないよ、独りはさみしいよ、私はそれを知ってるから・

・・・」

「・・・何が言いたい？高町なのは」

「友達になろう？巽達也君」

これが、少年と少女、巽達也と高町なのはの出逢いだった。

それからの達也はなのはの助力もあつてか、徐々に周りに溶け込ん  
でいった。

達也は基本的に何でもできる人だったので、ひとたび和解してしま  
えば、周りから頼りにされる

中心人物になっていた。

その頃には達也も、なのはのおかげで人を信じることができるようになっていた  
なのはともよく遊んだ。なのはの母親を紹介されたとき、どこかで見た顔だと思ったが達也は思い出せなかった。

平穏無事な生活が続いた。

もちろん、訓練は欠かさなかったが、いつまでもこの生活が続けばいい。

達也は、この生活を守ってみせると心に誓っていた。

t o b e c o n t i n u e d

ブログと別離（わかれ）と出逢い（後書き）

このようになつたない作品を読んでいただいて、本当にありがとうございます  
ございます

更新は不定期、誤字脱字も多いと思いますが、これからもよろしく  
お願いします。



## 設定集（前書き）

オリジナルの登場人物や魔法等の設定集です。

H22年11月15日更新

## 設定集

タツミ  
異 達也 タツヤ

この物語の主人公でなのは幼なじみ

容姿的には

- ・ るろうに剣心 四乃森 蒼紫
  - ・ SHUFFLE 土見 稟
  - ・ うたわれるもの ベナウイ
- を黒髪で想像してください

4歳の頃から母方の実家である異家で戦闘技術を叩き込まれた

幼少時代に父の死亡、母と隣の家に住む親子がいなくなった事で周囲の人たちには無関心になっていたが、なのはとの出会いにより考えを改めた

普段は少しクールだが穏やかな性格で他人には厳しいが、身内には  
激甘

何もすることが無い場合は昼寝をすることが多い

また、眠っていても何かの気配を感じるとすぐに目を覚ますことができるが

達也が気を許している人物の気配には鈍感で、近くにいっても目を覚ますことは無い

桃子の策略のターゲットになる事が多い

その為、達也にとって桃子は天敵である

恋愛ことが苦手なのと従来の性格もあり全員に分け隔てなく接している

魔道師ランクは総合戦闘能力的にはAAA+だが、魔術師的に見るとAとなる

これは保有魔力が膨大なのに対し出力が低い為である

出力が低いのは強力なりミッター（封印と言ってもいい）により抑えられている為

魔力はその身に宿した精霊のもで、達也自身の保有魔力はそれほど多くはない

“龍視<sup>タツミ</sup>”と呼ばれる瞳を持っている

達也の抱える問題

達也が封印している能力は命を落とす危険性を秘めている  
その為、【蒼龍王】がその能力のすべてを使い封印している

蒼夜<sup>ソウヤ</sup>

なのはを助けた謎の少年 正体は達也

ユーノの説明通り、蒼いバリアジャケットのようなものを纏っている（デザインは聖なるかなの暁 絶の間接部の銀色の部分を無くしたものをイメージしてください）

左腰に刀型のデバイスを帯刀している

認識障害の魔法をかけたサングラスをかけている為

顔が見えているのに正体はわからない・・・バレバレですが  
名前は達也の父親のモノをとっさに言ってしまったようである

### 【天龍】

謎の少年、蒼夜 達也のデバイス？

刀身が青い刀形のデバイスであるが

インテリジェントデバイスとは違うものらしい

デバイスではなく契約者に力を与えるために

精霊の身体が武器に変化したものだと判明

使用者のイメージ通りに形が変化する

昔はそのまま武器の形をしていたが

今現在はデバイス技術を取り入れ

待機状態や、電子機器操作も

出来るようになってる

トルネードバインド

風の渦で対象を拘束する魔法  
風の渦は凶器にもなり  
無理に引き千切ろうとすれば  
対象を切り裂く刃となる

蒼破刃「そうはじん」  
達也がもつとも使用する魔法  
簡単に言えば飛ぶ斬戟  
風を纏わせた魔力の刃を飛ばす  
威力はそれほどでもないが、なのはの  
アクセルシューターなどを  
切り裂く力は持っている

天翔「あまがけ」  
達也が使用する高速移動術  
ただし、長距離の使用には向かない  
加速力は驚異的であり、近・中距離までの間なら  
フェイトを凌ぐスピードを出せる  
魔法ではなく純粋な体術である  
異家の人間が使う移動術であるが  
その習得には困難を極める  
本来は地上でしか使えないが、達也は空中に魔力で構成した  
空気の足場を作りだし、それを蹴り足に使うことで空での使用も可  
能にした

魔物「まもの」  
達也たち海鳴の守護者の敵  
ある理性のない意識のもとに魔力が集った魔力体  
回復力が驚異的であるため  
倒すには、核となる

意識を完全に消滅させなければならぬ  
その正体は途中で失敗作になった  
精霊の成れの果て

ドラグーンブレード

魔力による小刀を生み出し発射する魔法

弾速と連射性に優れ

なのはのアクセルシューターほどではないがある程度は自動追尾し  
誘導もできる

発射された小刀は身体やシールドに突き刺さり、爆発しダメージを  
与える

小刀の数と連射性能は調節ができ

もつとも能力を高めた“フルバースト”は

フェイトの“ファランクスシフト”と同等の性能を誇る

龍視「たつみ」

巽の血を引く者が瞳に宿す能力

発動中、完全空間把握能力の効果が現れる

把握できる最大範囲は個人によって差が出るが

達也は五十〜二百メートルほどまで広げられる

なお、この能力の使用時は瞳の色が蒼に変化する

精霊（せいれい）

守護者たちに力を貸す

自我をもった魔力体

その身に宿す魔力は膨大であり

契約者の身体に宿り、武器（精霊器）と魔力を与える

だが、属性が決まっており

それに関連した魔法しか使えない

魔力と精霊器を使い、魔力体として

その姿を現すことが出来る

魔力適正が無い人でも、契約者になれば  
魔法を使うことができる

・・・この特性利用しない手はないよね（笑）

海鳴市（うみなりし）

原作では普通の街だが

本作では無限とも言われる魔力を内包している

その為、魔力に引かれ、さまざまな問題が発生する

それを人知れず解決するために海鳴の守護者が存在する

魔力が集まるが問題も集まると言う

とんでもな街である

海鳴の守護者（うみなりのしゅごしや）

その名の通り、海鳴市を護るもの達の総称

少数だが異家以外にも存在するらしい

異家はそのもの達を束ねる総括を任されている

サイクロンクラッシャー

広域空間殲滅魔法

竜巻を発生させ空間内に存在するものを切り裂く

範囲外にいても周りに風が渦巻いているため

吸い込まれる可能性がある

「風陣招来」

ドラグーンブラスター

砲撃魔法

なのはの“デイバインバスター”

フェイトの“トライデントスマッシャー”

と同等の威力を持つ

達也の砲撃魔法の主力  
発射には一拍の溜めが必要だが  
移動しながらでも撃てる為  
優秀な砲撃魔法

蒼破連刃「そうはれんじん」

蒼破刃の上位技

一振り数十の蒼破刃を放つが  
一つ一つの威力は蒼破刃と変わらない  
空間制圧や一对多の状況で使用する  
発動には一拍の溜めが必要

瞬天殺「しゅんてんさつ」

達也の父・蒼夜の編み出した奥義であり  
達也が今回習得した超速の剣技

天翔による超高速移動から、抜刀による一撃  
さらに数度斬りつける技  
これを全て一瞬でやってのける為  
相手は斬られた事に気付かない程である

アルテマ・ウエポン

時の庭園に現れた謎の機械兵  
達也と【天龍】は何かを知っているようだ  
庭園の傀儡兵はこいつが生み出したものらしい  
イメージはFF8のアルテマ・ウエポン

斬影一閃「ざんえいいつせん」

達也が使用するカウンター技

魔力で分身を作り出し、回避及び高速接近後

斬りつける

魔力探知を防ぐ為、分身後は殆ど魔力を使わず

斬戟も魔力強化はしていない

分身時「舞うは影」

斬戟時「残すは屍（かばね）」

粹護陣「すいごじん」

達也の防御魔法、シールド系

掌をかざし、六花の魔方陣を出現させ攻撃を弾く

月村すずか

吸血種であり海鳴の守護者の一人

しかしその魔力は精霊と契約した際に起きた事件がトラウマになり  
ほとんど使うことができない

現在は日常生活で達也をサポートしようとしている

フィーナ

すずかの精霊

その能力はまだ謎だが精霊体は猫の形をしている

ドラグーンブレード・フルバースト

ドラグーンブレードの発展型射撃魔法

術前の溜めと術後の硬直に隙ができるが

フェイトの“ファランクスシフト”と同程度の性能を誇る

達也は“龍視”により無数に存在する敵に全弾命中させた

「断絶の刃、吞まれる恐怖に震えるか・・・」

破導の極み「はどのきわみ」

海鳴の守護者の一族の1つ

未寅の一族に伝わる技で



触れた箇所から“気”を浸透させ

防御を無視して身体の内部を破壊したり

“気”を拳や脚に一点集中させ

威力を爆発的に高めたりすることができる

蒼龍王「そつりゅうおう」

達也の深層心理に眠る精霊の少女

本来の姿はその名の通り龍なのだが

人型を好み、その姿を取ることが多い

容姿的には戦女神VERIITAのペテレーネ

の髪を蒼くした感じ

現在は達也の命を守るため

姿を見せることはほとんどない

龍牙穿「りゅうがせん」

結界貫通能力を持つ突きを繰り出す技

達也の能力により

結界や防御魔法の構成術式を分解対象を貫く

この技の使用時、魔力で体を覆い、それが龍の姿になる

その様はまるで龍に噛み砕かれたように見える

## 設定集（後書き）

この設定集は物語が進むにつれて更新していきます。

**それは不思議な出会いなの（前書き）**

お待たせしました。

（待ってた人なんているのか？）

第一話投稿です。

それは不思議な出会いなの

4月某日 明け方

海鳴市 海鳴公園 林道周辺

「はぁ、はぁ、くそ！」

少年は満身創痍だった。

いくら不意打ちを受けたとはいえ、自分の不甲斐なさがいやになった。

がさがさ

「！」

草陰に何かがいた、黒い体に赤い目をした大きな影だった。

それは不思議な出会いなの

少年は手に待った赤い宝石を獣に向ける。

「見つけた、ジュエル・シード、封印！」

足元と獣に向けた手元に緑色の【魔法陣】が浮かび上がる。

獣はそれを阻止しようと、少年に飛び掛ってきた。

【魔法陣】と影が衝突する。

影の体が辺りに飛び散るが影の本体は無事だったらしい、小さくなった体でどこかに逃げていった。

「逃がした！、追いかけてくちや・・・」

少年はその影を追うことができずにその場に倒れる。

『誰か・・・、僕の声聞いて、力を貸して・・・、魔法の力を』

最後の力を振り振り絞って全方位に念話を飛ばし・・・、力尽き気絶した。

その時、少年の体が緑色に輝き、体長30センチくらいのフェレットのような動物に変身していた。

その一部始終を木の上から見ていた人物がいた。

軽く息をつくとき、気絶したフェレットの近くに音も無く着地した。

「回復魔法を自分に向け、誰に見つかっても良いように

動物に変身したか・・・、いい判断だと言っておこうか・・・」

《逃げていった異形、追跡しますか？》

「そうだな・・・だが、そろそろ時間をかけてはられないようだ」

その言葉と共に太陽が顔を出し、辺りが光に満ちていき

その人物を映し出す

それは、フェレットになった少年と同年代の少年だった

「こいつにサーチャーをつけといてくれ」

《助けられないですか？》

「・・・このままでも助かる、あまり俺たちの存在を広めないほうが

良いからな」

《了解しました。ですが良いんですか？

彼は最後に、無差別に念話を飛ばしました

彼女が覚醒するかもしれませんよ》

ネットワークから聞こえる女性の声に少年はため息をつきながら応

える

「・・・言っただけ、ほんとにこいつも余計なことをしてくれたもんだ」

少年はそう言いながら、もう一度ため息をついた

数時間後

海鳴市 高町家 なのはの部屋

夢を見た気がする。

同じ年くらいの少年が大きな影と戦っている夢

(なんだろう？これは・・・夢？)

まどろみの中、そんな事を考えていると携帯のアラームが鳴り響く  
どうやら、起きる時間のようだ。

携帯に手を伸ばしたが、うまく取れずベットから落ちてしまう。  
アラームはまだ鳴っている。

何とかベットの下に手を手を伸ばし携帯を手に取りアラームを止  
める

そこでようやくベットから体を起こす少女・・・

「変な夢見ちゃった」

窓の外を確認する。青空が広がっていた。

“う”と伸びをして体をほぐす少女

高町 なのはは、いつもと同じ、しかし少しだけ違う朝を迎えた  
今日、この日がなのはにとって人生の分岐点になるうとは、この  
時は気付きもしなかった。

なのはは制服に着替え洗面所で身支度を整える

「高町 なのは」・・・私立聖祥大附属小学校・三年生。の自称“  
ごく普通の少女”

実際は全然普通じゃないのだが、成績優秀、健康優良、家族想い  
でまじめで明るいよい娘。

深い優しさを持っており、悲しい出来事や困っている人を放って  
おけない性格。

本人にその自覚はあまりないが「正義」の心にとても厚い。

ちなみに左利き。

父、士郎・・・とある事件で廃れてしまった流派の剣術家、実は結  
構強い？

なのはには激甘な子煩惱パパ、現在は喫茶翠屋を経営

母、桃子・・・喫茶翠屋のパティシエ、周りには優しくきれいな母で通っているがその実態は・・・  
は！どこからか殺気が・・・

兄、恭也・・・士郎の剣術を継ぐ剣術家、一言で言うならシスコン、この一言にかぎる！！

現在は聖祥大学に通う大学1年生

姉、美由希・・・義姉、本当は従姉妹に当たる、士郎と恭也のもとで剣術を勉強中

見た目は三つ編み眼鏡の文学少女、なのはよりこいつに“普通”の称号をあげたほうが・・・

うお！どこからかナイフが飛んできた！！現在は聖祥大付属高校に通う高校2年生

とまあ、なかなかにぎやかな家族である。

そんなこんなで朝食、いつも通りの万年新婚夫婦な両親のやり取りをBGMに、食べ進める

その後、片づけを手伝い、学校へ登校

聖祥大付属はバス通学な為、バスに乗り込む。

「なのはちゃん、こつちだよ。あはよう」

「なのは、あはよう」

バスの最後方、そこには親友二人がいた。

月村すずかとアリサ・バニングスだ。

「月村 すずか」・・・私立聖祥大附属小学校・三年生。

なのはとアリサの同級生。

資産家・月村家の次女で、とてもおとなしい女の子。

どちらかと言うと内気な性格は思慮深さからのもの  
それ故か相手の心を汲むことが上手。

外見・性格とはうらはらに体育がとて也得意。

郊外の洋館で両親と姉と二人のメイドさん、大量の猫たちと暮ら  
している。

月村家にはとある秘密があるのだが・・・

「アリサ・バニングス」・・・私立聖祥大附属小学校・三年生  
なのはとすずかの同級生。

実業家の両親と共に暮らす女の子。

大好きで、家では10匹ほどの犬を飼っている。

学力は非常に優秀で、少々向こう気が強すぎる部分もあるが  
好きな相手には思いやり深い、とてもまっすぐな子。

なのは・すずかとは一年生のころからの親友同士。

「おはよう、すずかちゃん、アリサちゃん」

なのはは二人が取っていてくれた座席に座る

「あら、今日はあいつはいないの？」

「めずらしいね？」

一人で乗り込んできたなのはにアリサとすずかが疑問の声を上げる

「うん、さっきメールがあつてね、今日は公園前で乗るって言うて  
たよ」

なのはが答える。そうなのだ、なのは達のグループにはもう一人、  
なのはの幼馴染が居るのだ。

いつもはなのはと同じバス停で乗るのだが、今日は何か用事があ  
つたようだ。

「ふーん、そう。こんな朝早くから何やってのかしらね。あいつ」

「さあ？」

アリサの疑問に二人は答えられるわけがなかった。



同日 少し前

海鳴公園 林道周辺

少年は異形を探していた

「ここら辺だと思うが・・・、俺の探索能力だとこれが限界か・・・」

魔力の残滓を調べても、正確な位置をつかめなかった

「お前は分かるか、【天龍】？」

《いえ、あまりに反応が微弱すぎて、これ以上は・・・》

「そうか・・・さて、どうするか？」

少年のペンダントから声が発せられる。

《もう、学校に行く時間ですよ、若》

「そうだな・・・、行くぞ【天龍】」

《はい》

少年は学校に行くためにバス停へと歩き出した。

なのは達が乗ったバスが公園前に着いたところで一人の少年が乗り込んだ

最初に気づいたなのはが声をかける

「おーい、こっちだよ」

それに気づいた少年はなのは達の方へ近づいてきた

「おはよう、達也君」

「おはよう、なのは、すずかにアリサも」

「うん、おはよう達也君」

「・・・おはよう、あんた、こんな朝早くからどこへ行ってたのよ？」

なのは達の近くに座る少年

彼こそがこのグループ最後の一人でなのはの幼馴染、巽 達也だ

「巽 達也」・・・私立聖祥大附属小学校・三年生

なのはとは幼稚園のころからの付き合い

基本的に何でもできる完璧超人。そのため周りの人たちに頼られることが多い

単に、便利屋扱いされてるとの噂も・・・

両親は不在（父は死亡、母は海外へ単身赴任・・・ということになっっている）

祖父母が近くに住んでいるのにも関わらず

なのはの家の近くにあるマンションで一人暮らしをしている

その為か、妙に大人びた性格をしている

「少し、朝のトレーニングをしていただけだ、悪いな」

「べ、別に謝る必要はないわよ・・・」

「トレーニングって、実家の？」

「ああ」

「ほどほどにね、達也君」

達也の答えに納得したのかそれ以上の追及はなかった

達也の実家は海鳴市周辺の剣術や体術等、武術の道場を総括する道場なので

達也は異常に強いのである

それから四人は、たわいも無い話をしながらバスで揺られ、学校へ行くのだった

昼休み

私立聖祥大附属小学校 屋上

「将来の夢……、かあ……」

昼食時、屋上のベンチでお昼を食べている三人娘のうち、なのはが呟く

「どうやら、今日の授業で将来のことについて勉強したようだ

「アリサちゃんとすずかちゃんはもう決まってるんだよね？」

なのはの問いに二人は順に答える

「あたしは父さんも母さんも会社経営だし、いっぱい勉強して後継がなきゃ……、ぐらいだけど」

「私は工学系が得意だから、機械系の専門職がいいかなと、思ってるよ」

「二人ともすごいなあ、私は何にも考えてないから……」

「うかない顔なのはにアリサが当然のように聞きかえす

「なのはは喫茶翠屋の二代目でしょう？何も、悩む必要無いと思うけど」

「うん、それも将来のビジョンの一つなんだけど……、なんか私にしか出来なくてやりたい事があるして気がして……」

なのはが悩んでいるなら真剣に聞こうと思ってお弁当を食べる手を休める二人

しかし

「ほら、私、何の取り柄も無いし……、勉強苦手だし……」

この言葉に二人は憤慨する

「このバカチン！！そんな事言うんじゃないの！！」

「ふえ！？」

お弁当に入っていたであろうレモンの切り身をなのはに投げつけながらアリサが切れる

その後ろではさすがが「そうだよ」と同意している

しかし、この二人の怒りの理由は若干のズレが生じていた

「だいたい、あんたこのあたしより理数の成績は良いじゃない」

もとい、かなりのズレが生じていた・・・

「そんな事を言うのはこの口か、この口なのか!!」

なのはを後ろから抑えこみ、口を左右両側から引つ張るアリサ

親友の“そりゃあねえだろ、あんた”な行動に固まるさすが

「だ、だって、私、文系苦手だし、体育も苦手だし……」

「まだ言うか……!!」

まともに返すなのは・・・

ああ、無情、その言葉はこの理不尽大魔王をさらにパワーUPさせるだけ・・・

なのはの顔が伸びる。人間の顔はここまで伸びるのかと思うぐらい伸びる

その光景に屋上に居る周りの人々の注目を集めている事を当事者

二人は知らない

さすがにまずいと思ったさすがが再起動、二人を止めようとする

「だ、だめだよ、二人とも、皆注目してるよう……」

「……がやがや」「……」

さらに注目を集める三人、もうどうしていいか分からずいつそこいつら殺<sup>や</sup>つちまおうか

と、危ない思考にたどり着くわずか

すずかが怒りのオーラを発し始めたところで救世主が登場する

「……何やってんだ、おまえら」

目の前の光景に呆れるしかない達也だった

「……」、絶対に顔が伸びたと思うの「(TへT)」

「大丈夫、なのはちゃん？」

頬をさするなのはと心配するすずか（注、さつきまでもっとひどい事をしようとしていた・・・）

「ほらほら、お前らも、これは見せもんじゃないからとっとと散れ」

野次馬を追い払う達也

現在アリサはいない、なぜなら

回想シーン

アリサ「ずいぶん遅かったわね、何やってたのよ？」

達也「仕事を終わらせていただけだ」

アリサ「仕事？」

達也「この前の授業の宿題を男子分全部集めて先生に提出しただけだ・・・」

アリサ「宿題？・・・は！今日提出日！！女子の分は！？」

達也「出すわけないだろ、女子担当の学・級・委・員・長」

アリサ「使えない奴ね、男子担当の学・級・副・委・員・長」

にらみ合う二人、今回の勝者は達也だった

達也「ふう、こんなところで油を売っていていいのか？罰ゲームは連帯責任でお前も宿題二倍だぞ」

ニヤリと笑う達也にアリサは

アリサ「達也！おぼえときなさいよ！！」

と捨てゼリフをはきつつ、ダッシュで教室まで行ったようだった  
回想シーン終了

「じゃ、私はアリサちゃんを手伝ってくるね」

さすがにアリサがかわいそうに思ったのか、すずかが助け舟を出しにくようだ

「ああ、今からじゃ、一人で集めるのは無理だろうからな、よろしく頼む」

「がんばってね、すずかちゃん」

「うん、がんばってくるね」

その時、達也は教室へ戻るはずかと目が合った  
その目が言っていた。なのはの悩みを聞いてあげると

ずずかが去ったあと、達也となのはお昼を再開していた

自分の手作り弁当をつつきながら達也が切り出す

「で、なのは、何を悩んでるんだ？」

「うえ？」

パンをほうばりながらの為、変な声をあげるなのは

「何か悩んでるんだろ？話してみる」

「・・・うん、将来の事」

素直に話し始めるなのは

「将来？ああ、今日の授業のやつか？」

「うん、私、アリサちゃんやすすかちゃんみたく

明確な目標とかがないから・・・、このままでいいのかな

って、悩んでるの・・・」

自分だけ取り残されてると思ってるなのは、達也の意見は

「お前バカだろ」

「ええ！！」

一刀両断だった

「なんで!？」

自分が今、真剣に考えていることをバカで片付けられるのは納得  
がいかないなのはは

達也に理由を聞く

「だいたい、俺達は今何歳だ？9歳だぞ。これから高校や大学、も  
しくは中学を卒業して社会に出るまで

後何年残ってると思ってる？」

将来のビジョンが出来てない奴はこの学校だけでもかなりの人数  
になるはずだ」

「だ、だけど、今から考えていたほうがいいと思うの」  
達也の言葉に必死に反論するなのは

「出来てる奴は出来てる奴でいいさ、だがな、今俺達知ってる世界はどの程度だと思う？」

「たかだか数%だ。その数%の中から一生を左右しかねない将来のことなんて悩むな」

「まだまだ俺達の知らない世界、知らない職業がたくさんある。そいつらに出会ってから」

「悩んでも遅くないんじゃないか？」

「……」

黙ってしまったのは

「俺もまだ将来の事なんて考えてない、あの二人は特別だ。お前は  
お前のペースで」

「決めればいい。だから焦るな、自分に出来る事、自分にしか出来ない事が必ず見つかるから。な？」

と達也が言った所でチャイムが鳴った。

「さて、この話はここまで、教室に戻ろう」

達也が歩き出す、その後ろをなのはは

「……っん」

とつなずいて付いていくのだった

放課後

海鳴公園 林道入口

なのは、アリサ、すずかは塾へ行く為に公園前でバスを降りていた  
達也は用事があると言って先に帰ってしまった

なのはは達也の言葉を思い出す

(自分に出来る事、自分にしか出来ない事・・・か)

二人と雑談しながら自分に出来る事を考えるのは  
なんか犬が吠えてきたがアリサが黙らしたから問題無い  
少し歩くとアリサが林道を指差し

「ここを通れば近道なのよ、少し道は悪いけどね」

と言つて林道を進んでいく

なのはもすずかも特に反対をせずに進んでいく  
唐突になのはは昨日の夢を思い出す

(ここは、昨日の・・・)

その林道は夢で見た場所と酷似していた

「どうしたのなのは(ちゃん)」「」

急に立ち止まったなのはに二人が声をかける

「ううん、なんでも無い」

(まさかね)

夢は夢、気にしないでいこうと歩みを進める  
しばらく歩くと

「助けて」

声が聞こえてきた

「今何か聞こえなかった?」

二人に確認を取るなのは

「え、別に何も聞こえなかったわよ?」

「うん、わたしも」

どうやら、二人には聞こえなかったようだ

「助けて」

(やっぱり聞こえる)

2回目の声を聞いたときなのはは走り出していた

「ちょ、どうしたのよ?なのは」

「なのはちゃん!!」

二人の声も聞こえない

少し走るとひらけた場所に出た。そこにも見覚えがあった



その場所の真ん中あたりに何かがいた

イタチのような小動物で、どうやら怪我をしているようだ。  
そこによくやくアリサ達が追いつく

「なのは、なにかあったの？」

「あれ、その子」

「うん、怪我してるみたいなの」

三人で話し合って、その小動物を動物病院に連れて行く事にした  
その光景を見詰める人物がいた事に誰一人気付く事はなかった・

「行っただか・・・」

その人物、少年は木の上にいた

《やはり、あの子が彼を見つけ出しましたね・・・》

「ああ、これも運命ってやつかね」

少年はペンダントからの声に答える

《あの子もやはり、こちらの世界にやってくるのですかね？若、ど  
う動きます？》

「それはあいつ次第だろうが・・・、とりあえず様子を見よう。

奴がこの世界にきた理由、あの異形との関係が知りたい

それがわかるかわからないかで、大分動きが変わってくる」

《わかりました》

次の瞬間少年は消えていた

夜

高町家

なのはは家族にあの小動物（フェレットらしい）を飼えないか相談していた

アリサもすずかも家で犬や猫を飼っているため無理なのだそうだが、結果はなんとOK、本当の飼い主が見つかるまでなのはが預かる事となった

その旨を二人にメールで知らせ、明日いつしよに行く約束をする  
一通りやる事をおえて寝ようとしたなのはに例の声が聞こえた

『聞・えま・か』

何か言っているがよく聞こえない、なのはは集中しようと目を閉じる

『聞こえますか？僕の声が聞こえるあなた』

「昨夜と昼間の声と同じ声・・・」

確かに聞こえる、なのははその声に耳をかたむけた

『聞いてください、お願いです。僕に少しだけ力を貸してください』

（あの子が喋ってるの？）

なのはの脳裏に今日助けたフェレット？の姿が見えた

『お願い、僕のところへ、時間が・・・、危険がもう・・・』

その言葉を最後に声は聞こえなくなった

同時刻

動物病院

（お願い、届いて）

フェレット？は回復しきれていない体と魔力でなのはに念話を送った為、かなり弱っていた

そのフェレット？に近づく影があった

「はー!!」

フェレット?がその影に気づいたとき、影はもう目の前にいた・

「くう」

フェレット?は痛む体に鞭打って影と対峙した

夜

動物病院付近

なのはは走っていた

さっきの聲に急がなければならぬ何かを感じた

(なんで、こんなに一生懸命走ってるんだろう?)

わからない・・・、そう何もわからないまま、なのはは動物病院に着いた

「はあ、はあ、はあ・・・」

動物病院に何も変わったところは見られない

そう思い一歩踏み出した直後、世界が止まったのを感じた・・・

(結界!! いったい誰が?)

フェレット?は影からの攻撃をかわしながら世界の変化に気づいた

しかし、休む間もない影の攻撃にすぐに意識をそちらに戻し、開いていた窓から外へ飛び出す

その時、近くに人がいるのに気づいた

その人と目が合った気がした

フェレット?は追撃してきた影に攻撃をかわすため、その人に飛びついた

病院の窓から飛び出してきたフェレット？を見つけたなのは声を上げる

「あ！あれは」

フェレット？と目が合った気がした

そこへ、黒い影のようなものがフェレット？を襲う

フェレット？がこちらに飛んでくる

何がなんだかわからないまま、なのはそれを左に受け流す……  
、じゃなくて受け止める

「なにになにに、なんなの」

なのは混乱中

「来て、くれたの……」

受け止めたフェレット？が話しかけてくる

「……しゃべった！！」

なのはさらに混乱、驚きのため、フェレット？を落とすようになる  
なんとか思考を落ち着け、状況を整理しようと試みる

しかし、正面にいる影が動き出すとしているのを見て作戦変更  
その場から逃げ出した

なのはが逃げ出し、影がそれを追っていくのを見つめる少年がいた  
「さて、これからどうなるか……」

少年も彼らを追いかける、ことの成り行きを見守るように……

夜

住宅街

影から逃げ出したなのは走りながらフェレット？に事情を聞くとする

「え、え〜と、何がなんだかよくわからないんだけど、とにかくなんなの!？」

「君には素質がある。お願い、僕に少しだけ力を貸して」

「素質？」

何のことはわからないがとりあえずフェレット？の言葉を聴くなのは

「僕はある探し物のために、ここではない世界から来ました。だけど、僕一人じゃ思いを遂げられないかも

しれない、だから迷惑だとわかってはいるのですが素質のある人に協力してほしいです。魔法の力を・・・」

フェレット？はそう言うと、なのは腕から飛び降りる

「お礼はします。必ずします。だから僕の持っている力をあなたに使ってほしいんです。魔法の力を・・・」

「魔法？」

そのとき、追いついた影がなのはたちの前に落ちてきた

とつさに近くの電柱に身を隠すなのは

「お礼は必ずしますから」

「お礼って、今はそんなことを言ってる場合じゃないでしょう!」  
至極もつともな意見である

「どうすればいいの・・・」

「これを」

影の動きに注意しながらなのはがつぶやくとフェレット？が何かを差し出す

それは赤い宝石だった

「あつたかい」

宝石を受け取ったなのは、宝石には優しい暖かさがあつた  
「それを手に僕の言葉を繰り返して」

影のほうを見ると、もう動き出しそうだった

「いい？いくよ」

「・・・うん」

なんだかわからないが覚悟を決めるなのは

「我、指名を受けし者なり」

「我、指名を受けし者なり」

フェレットもどきに続いてなのはが言葉を繰り返す

「契約の元、その力を解き放て」

「えと、契約の元、その力を解き放て」

宝石が輝きだす

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

なのはは、自身の中で何かが湧き上がるのを感じる

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は」

「この胸に、この手に魔法を、【レイジングハート】セットアップ！」「」

《スタンバイレディ、セットアップ》

赤い宝石、【レイジングハート】から桜色の光が解き放たれる

「なんて魔力だ」

フェレットもどきはなのはの持つ魔力の高さに驚く

「落ち着いてイメージして、君の魔法を制御する魔法の杖の姿を、

そして君の身を守る強い衣服の姿を」

「急にそんなことを言われても・・・」

イメージしようとするが、これまでのことで混乱しているのはにそんな余裕はなかった

そのとき、唐突になのはの脳裏に杖と衣服の姿が浮かび上がる

「と、とりあえずこれで！！」

次の瞬間、はのはは光に包まれた

光がはれたときそこにいたのは、先ほどイメージした杖と服を装

備した、なのはだった

「成功だ」

「ふえ？え！え！うそ！！」

安堵の表情のフェレットもどきと驚きで顔が変わっているのは

「なんなの、これ」

自分の格好を見回すなのは

「あぶない！！」

「え？」

フェレットもどきの言葉に正面を向くのは

影が目前まで迫っていた・・・

t o b e c o n t i n u e d

## それは不思議な出会いなの（後書き）

読んでくれた皆様、ありがとうございます。

ほとんど原作どおり、再構成と言って良いのか疑問ですが・・・  
こんな感じで書いていこうと思います。

しかし、うちのオリ主はほんとに9歳かと疑いたくなります。

こんな主人公ですが、よろしく願います。

あと、感想・アドバイス等も願います。

では、次の更新でお会いしましょう。



## 魔法の呪文はリリカルなの？（前書き）

どうも、お待たせしました。

第二話更新です。

第一話をお読みの人はお気づきかもしれませんが作者は英語等が出来ません

その為、デバイスのセリフは日本語表記になりますのでご了承ください。

作者は会話等をわかり易くする為

「普通のセリフ

」念話

（）思考・心の声等

《》デバイスのセリフ・念話

【】武器・デバイスの名前

という風に分けていきますのでよろしくお願いします。  
では、第二話どうぞ

## 魔法の呪文はリリカルなの？

目前には黒い影、後ろは壁、この時のなのはに出来たことはただ目を瞑って来るべき衝撃に、身を震わせることだけだった

魔法の呪文はリリカルなの？

夜

海鳴市 住宅街

黒い影がなのはに迫る、その時、【レイジングハート】が輝いた  
《プロテクション》

影がなのはにぶつかる寸前、なのはの周りに桜色の障壁が出現する障壁にぶつかった影は、体がバラバラに吹き飛んだ

その体が道路やブロック壁、電柱に突き刺さり、一瞬にしてなのはの周りは大惨事になった

「え？ええ？えええ~~~~~！！！」

目の前で起こった出来事に驚きの声しか上げられない

そうこうしているうちに、影から触手のようなものが伸びバラバラになった体を

集めて再生をはじめた

「うそ！？」

なのははとりあえず、フェレットもどきを抱えて逃げることにした

「僕らの魔法は発動体に組み込んだプログラムという方式です」

なのはは走りながらフェレットもどきの説明を聞いていた

「そして、その方式を発動させる為に必要なのは術者の精神エネルギー

ギーです」

「はあ、はあ、はあ」

一度、後ろを確認するのは  
まだ追いかけてはこないようだ

「そして、あれは忌まわしき力をもとに生み出されてしまった思念体  
アレを停止させるにはその杖で封印して、元の姿に戻さなくちゃい  
けないんです」

なのは立ち止まり、フェレットもどきを地面に下ろす

「よくわかんないけど、どうすれば？」

「さつきみたいに、攻撃や防御などの基本魔法は心に願うだけで発  
動しますが

より、大きな力を必要とする魔法には呪文が必要になるんです」

「呪文？」

「心を澄ませて、そうすればあなたの呪文が浮かんでくるはずですよ  
なのは目を閉じ、心を澄ませる

すると、頭に一つの言葉が浮かんだ

そこへ、再生を終えた影がなのはめがけて触手で攻撃してきた

なのはは心を落ち着かせ杖を前に向け防御の魔法を願う

《プロテクション》

【レイジングハート】の声に反応するように桜色の障壁が生まれる  
障壁は触手を一つ残さず防いだ

「お願い、【レイジングハート】」

《はい、マスター。シーリングモードセットアップ》

【レイジングハート】から桜色の魔力が放出される

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード……！」  
フェレットもどきが叫ぶ

「リリカル・マジカル」

なのはが心に浮かんだ呪文を唱える

【レイジングハート】から影に向かって桜色の帯が殺到する

その帯は影を雁字搦めにし、動きを封じた

「ジュエルシード、シリアル21封印!!」

なのはの言葉と共に帯が強い光を放つ

「がああああああつあああああああああああ」

影は断末魔の叫びをあげながら消滅した

「あれは？」

先ほどまで影がいた場所に青い宝石が落ちていた

「あれが、ジュエルシードの本体です。【レイジングハート】をそれに近づけてみてください」

なのはは言われた通りに【レイジングハート】を青い宝石に近づけると、青い宝石が【レイジングハート】の赤い宝玉に吸い込まれていった

それと同時になのはの服と【レイジングハート】が元の姿に戻った

「これで終わりなの？」

「はい、あなたのおかげで無事封印する事ができました。ありがとうございました。とうとう……」

フェレットもどきは体力の限界だったのか、倒れてしまった

「だ、大丈夫!？」

なのはが持ち上げる、その時になってようやく周りが見え始めた……

「……」

挟まれた道路、穴の空いたブロック壁、倒れた電柱、その他もろもろと周りは散々な状態だった

「も、もしかすると私、ここにいたらものすごくヤバ目なのでは?」  
もう一度周りを見渡すなのは

挟まれた道路、穴の空いたブロック壁、倒れた電柱、その他もろもろ……

誰かに見つければ間違いなく説教だけじゃ終わりません

「と、とりあえずごめんなさ……い」

なのははフェレットもどきを抱えて逃げ出した……

少し離れた空では少年が事の成り行きを見ていた

「終わったようだな、どう思う【天龍】？」

《すごいですね、彼女の魔力は》

「ああ、だからこそ、これから否応無しに巻き込まれて行くだろうけどな・・・」

少年は先程までなのはがいた位置に降り立つ

「結界解除」

《はい、若》

その言葉と共に世界が動き出した

「まあ、これで、こちらの動き方も決まった。俺達は俺達でやらしてもらおう」

《そうですね》

少年は歩き出し、やがて闇に消えて行った

## 海鳴公園

なのはは一生懸命走って、一番近くにあったこの公園に到着した

「ふうー」

ベンチに座り息を整える

「すみません」

走っているうちに意識を取り戻したフェレットもどきが声をかけてきた

「あ、起こしちゃった？ごめんね、乱暴で」

抱えていたフェレットもどきを、ひざの上に降ろす

「怪我、痛くない？」

「怪我は平気です。もうほとんど治っているから」

そう言うと、フェレットもどきは体を振るわせ包帯を外した

「本当だ、怪我の痕がほとんど消えてる……。すごい」

「助けてくれたおかげで残った魔力を怪我の治療にまわせました」

「ふーん、よくわからないけど、そうなんだ？ねえ、自己紹介していい？」

「え？うん」

なのはは「えへん」せきばらいを一つしてから

「私、高町 なのは、小学校3年生、家族や仲の良い友達とは”って呼ぶよ”」

「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だから“ユーノ”が名前です」

「ユーノ君か、かわいい名前だね」

なのはは、オスにかわいいはちよっと・・・

「すみません、あなたを・・・」

「なのはだよ」

「なのはさんをまきこんでしまいました」

「えーと、私多分大丈夫だよ。あ、そうだ、ユーノ君怪我してるんだしここじゃ落ち着かないよね

私の家に行きましょう、話しはそれから、ね」

「え？」

そう言うと、なのはは少々強引にユーノを家に連れて帰った

高町家 玄関前

なのはは静かに門を開けた

何も言わずに家を出てきた為、怒られるかもしれないからだ

誰にも気付かれないように忍び足で玄関に入るうとしたところで

「おかえり・・・」

見つかったorz

「お、お兄ちゃん？」

横を見る。そこにはシスコン大王、恭也が立っていた

「こんな時間までどこにお出かけた。なのは」

「あう、えつと、その・・・」

ユ一ノを背中隠し必至に言い訳を考えるが上手く言葉がでない

そこへ助け船を出す声があった

「俺と一緒にいたんですよ」

突然の声に二人は振り向く

そこに達也が立っていた

「どういう事だ？」

「なのはが少し行きたいところがあるっていうんで俺が付き添いをしたんですよ」

突然の達也の登場に固まるしかないなのは

そこへ更に声がかけられる

「あら、かわいい」

なのはの後ろから美由希が現れる

「なのははこの子の事が心配で出かけたんだよね？」

「う、うん」

「気持ちわかるが、こんな時間に家を出るのはいただけない」

腕を組みあきれ顔の恭也

「まあ、いいじゃない、達也君も一緒だったんだし、それになのはいい子だから

もう、こんな事しないもんね」

なのはにウインクする美由希

「うん、その、お兄ちゃん、内緒で出かけて、心配かけてごめんなさい」

素直に謝るなのは

こうなると恭也は何も言えなくなるので標的を変える事にした

「で、達也、お前なのはに何にもしてないだろうな・・・」

（なのはもそういうことなら俺が付いて行ったのに、なぜこいつに）  
シスコン丸出しである。さすが大王

「・・・あいかわらずですね、恭也さん、ですがそろそろ妹はなれ  
したほうがいいですよ」

知り合いに男が少ない為か、普段は仲の良い二人だが

なのはが絡むととたんに仲が悪くなるのである

まあ、恭也が一方的に達也を敵視するだけだが

いつもの事なので男二人はほつといて

美由希がユーノをなのはから受け取り目の高さで掲げて話を進める

「しかし、ほんとにかわいいわね。母さんが見たらかわいすぎて悶

絶しちゃうんじゃない？」

その光景を想像する3人、ものすごく容易に想像できた

「・・・その可能性は否定できないな（ないね）・・・」

これから起こるであろう、ユーノを襲う悲劇になのは達は苦笑する  
しかなかった

翌日 朝

高町家 なのはの部屋

携帯のアラームが鳴っている

その音でなのはは目を覚ます

いつもと同じ、だけど少し違う生活の始まりだ

「おはよう、ユーノ君」



「あ、うん、おはよう」

机の上のバスケットに寝ていたユーノに声をかける

「昨日はお疲れさま」

「その、それは、こちらこそ」

昨日、あれから土郎と桃子にユーノを紹介したところ

予想どおり、桃子が悶絶

目を星にして可愛がり、寝るまで片時も離す事がなかった

「もう、名前で呼ぶの慣れてくれた？」

「うん、なのは」

その為、できた話といえば、普通に名前で呼んで普通に話してといったことだけだった

「じゃあ、私学校行かないといけないから。帰ってきたらお話聞かせて」

「あ、大丈夫、離れていても会話はできるよ」

「え？」

そう言うのと口を閉じ、念話を始めるユーノ

『なのははもう魔法使いなんだ』

なのはの頭にユーノの声が聞こえてきた

「あ、これ私を呼んだときの」

『そう、【レイジングハート】を身に付けけたまま心で僕に話し掛けてみて』

言われた通りにするなのは

「えっと」

『「じつ?」』

『そう、簡単でしょう』

「わあ、ほんとだ」

『空いてる時間にいろいろ話すよ、僕の事とか、魔法の事、ジュエルシードの事』

「話しかけても大丈夫なら、僕に呼びかけてきて」

「うん、わかった、じゃ行ってくるね」

「いつてらっしやい」  
「なのはが出ていった後、ユーノは一人考える  
(・・・昨日の結界、あの結界は一体誰が?)  
その疑問に答えられる者は今ここにはいなかった

### 高町家近くのバス停

「おはよう、達也君」  
「ん、ああ、おはよう、なのは」  
「なのはがバス停に着くとすでに達也がバスを待っていた  
「昨日はありがとうね、達也君のおかげであれからお兄ちゃんの追  
求はなかったよ」  
「たまたま通りかかったただけだし気にするな、それにいつもの事だ  
る」  
「あはは、いつもすいません」  
「そこでなのははある事に気付く  
(そういえば、どうして達也君はその時間に外に出ていたんだろう  
)」  
「・・・・・・・・・・うしてる?」  
「え?」  
「どうやら考え事をしてるときに話し掛けられたようだ  
聴いていなかったなのはに達也は呆れ顔で問い掛ける  
「お前、まだ寝てるんじゃないのか?」  
「ううん、大丈夫だよ。で、なんだっけ?」  
「あの、フェレット“もどき”はどうしてる?って聞いたんだよ。  
昨日桃子さんに遊ばれてたんだろ」

昨日の光景を思い出し苦笑する達也

なのはも苦笑しながら返す

「あれはユーノ君がかわいそうだったね」

「ユーノ君？」

「うん、あの子の名前だよ」

「へえ」

「さつきは元気だったから大丈夫だよ」

「そっか、よかったな・・・」

そんなたわいもない話をしているとバスが到着した

なのはは気付かなかった・・・、達也がユーノのことを“もどき”  
と言った事に・・・

バスの中には例のごとく、アリサとすずかの二人がいた

「・・・おはよう」「・・・」

「ねえ、なのは、夕べの話聞いた？」

「へ？夕べって？」

「昨日の病院、車の事故かなんかあって壁が壊れたんだって」

「だから、あのフェレットが大丈夫か心配で」

昨夜の光景を思い出すなのは

確かにジュエルシードのせいで壁が壊れていた

「えーとね・・・、その件は、その・・・」

なのはは昨夜あった事をでっちあげて説明した  
もちろん魔法関連のことは言わずに

「そっか、無事になのはの家に居るんだ」

「でもすごい偶然だったね、たまたま逃げ出したあの子と道でばっ  
たり会うなんて」

「・・・ねえ」

「あはははは（嘘はついてない嘘はついてないちょっとちょっと  
だけ真実をばかしただけ）はははは」

その話しを聞いていた達也が心の中で

(ごまかすならもっとうまくやれよ……)

このような突込みをいれていたという

「あ、でね、なんかあの子、飼いフェレットじゃないみたいでしばらく家で預ることになったんだ」

「そうなんだ」

「じゃあ名前つけてあげなきゃね。もう決めてる？」

「うん、ユーノ君ていうの」

「ユーノ君？」

「うん」

「へー」

「おい、お前ら、もうそろそろ着くから準備しろよ」

達也のその言葉に外を見るのは達

もう、学校は目の前だった

どうやら話しに夢中になって周りが見えていなかったようだ

三人は急いで準備をしてバスを降りた

## 授業中 小学校 教室

この時間帯はあまり話を聞かなくても良い授業なので  
なのはユーノに話しを聞くことにした

『ユーノ君、ユーノ君、そろそろお話を聞かせて』

『ん？なのは？今は大丈夫なの？』

『うん』

『じゃ、最初は………』

『…』

なのははこの日の授業をユーノの話聞くのに費やした

『じゃ、次にジュエルシードのことだね。ジュエルシードは僕達の世界の古代遺産なんだ

本来は手にした者の願をかなえる魔法の石なんだけど、力の発現が不安定で昨日みたく

単体で暴走して、使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるし、たまたま見つけた

人や動物が間違っ使用して、それを取りこんで暴走する場合もある』

『そんな危ない物がどうして家のご近所に？』

『僕の所為なんだ。僕は故郷で遺跡発掘を仕事にしているんだ

そしてある日、古い遺跡の中でアレを発見して、調査団に頼んで保管してもらったんだけど

運んでいた時空艦船が事故か何らかの人為的災害にあってしまって・  
・・・・

21個のジュエルシードがこの世界に散らばってしまった。今まで見つけたのはたったの2つ』

『残り19個か、あれ？でもちよつと待って、話を聞く限りではジュエルシードが散らばっちゃった

のって別にぜんぜんユーノ君の所為じゃないんじゃない？』

『だけど、アレを見つけてしまったのは僕だから・・・、全部見つけてちゃんとあるべき場所に

返さないと駄目だから・・・』

『なんとなく、なんとなくだけど、ユーノ君の気持ちわかる気がする』

『え！？』

『真面目なんだねユーノ君は』

『そ、そんなことないよ。え、えっと昨夜はまきこんでしまって、助けてもらって

本当に申し訳無かったけど、この後、僕の魔力が戻るまで少しだけ休ませて

ほしただけなんだ。一周間・・・いや、五日もすれば力が戻るからそれまで・・・」

「・・・戻ったらどうするの？」

「また一人でジュエルシードを探しに出るよ」

「それはダメ」

「だ、駄目って・・・」

「私、学校と塾の時間は無理だけど、それ以外なら手伝えるから」

「だけど、昨日みたいに危ないことだってあるんだ・・・」

「だって、もう知り合っちゃったし話しも聞いちゃったもん、ほっとけないよ」

それに昨夜みたいなのがご近所でたびたび合ったりしたら皆さんのご迷惑になっちゃうし、ね。

ユーノ君一人ぼっちで、助けてくれる人いないんでしょ？

一人ぼっちは寂しいもん、私にもお手伝いさせて

困っている人がいて、助けてあげられる力が自分にあるなら

その時は迷っちゃいけないって、これうちのお父さんの教え

ユーノ君は困ってて、私はユーノ君を助けてあげられるんだよね

魔法の力で・・・」

「・・・うん」

「私、ちゃんと魔法使いになれるかどうか、ちょっと自信ないんだけど」

「なのはもう魔法使いだよ。多分、僕なんかよりもずっと才能のある」

「そ、そうなの？自分ではよくわからないんだけど、とりあえずいろいろ教えて

私、頑張るから」

「・・・うん、ありがとう」

「あ、授業がもう終わるから」

『うん、勉強頑張ってたね』

『はい』

授業が終わりなのはとユーノの念話もとりあえず終わる

しかし、二人は気付けなかった、二人の念話を聞いているものがないた事を……

少年はなのは達の念話を聞いていた

《……良いんですか？盗み聞きなんかして》

『良くは無いだろが、聞こえるのだから仕方が無いだろ』

《よく言いますね、無理やり傍受してくせに……》

『何のことだかわからんな……、それにお前も聞いているだろ』

《むう、否定はしませんが……》

『まあ、結構いろいろな事が分かった。損はしてないだろ』

《そうですね》

『しかし、あいつの性格も相変わらずだな、自分から厄介ごとに首を突っ込むとは』

《だからこそ、助けてあげるのでしょうか？》

『……そうだな、その通りだ。周囲の警戒しておけ、こちらも直ぐに出られるようにな』

《はい、わかっています》

『なのは達の念話も終わった様だ、こちらも“授業”に戻るとしよう』

少年の意識もまた授業へと戻っていった

放課後

帰り道 商店街

家の近くまできたなのはユーノに念話を送る

『ユーノ君、もうそろそろ帰るよ』

『なのは？わかった、気をつけて帰ってきてね』

『うん、帰ったら、とりあえず、一緒におやつを食べよう』

『うん』

『さーで、今日のおやつはな〜にかな〜』

その時、二人は近くで大きな魔力の破導を感じた

『ユーノ君、今のは』

『新たなジュエルシードが発現してる！！』

『どうするの？』

『とりあえず、一緒に向かおう』

『うん』

『合流地点は……』

なのはは走り出す、ユーノとの合流地点でありジュエルシードの発

現場所

海鳴神社へと……

同時刻

海鳴神社 境内

女性は尻餅をつき、恐怖に震えていた

「ぐるるるるるる」

目の前には化け物、彼女の飼い犬だったものがいた

あまりの恐怖に女性は気絶してしまった

そこへ、ユーノと合流したなのはが階段を上ってきた



「なのは、【レイジングハート】を」  
「うん」

首から下げたある【レイジングハート】を外す  
階段を上りきったなのは息を整えながら周りを見渡す  
そして丁度正面に気を失った女の人と狼に似た化け物がいた  
「現住生物を取り込んでる！」

なのは、気をつけて、実体がある分  
魔力が安定してるから昨日より手強いよ」

「・・・ねえユーノ君？」

「なに？なのは」

「魔法を使うなら変身しなきゃだめだよな？」

「え？いや、簡単な魔法ならそのままでも使えるけど  
昨日言った通り、封印とか難易度の高い魔法だとデバイスを起動させないと厳しいよ」

「じゃ、起動つてどうやるの？」

「昨日教えた起動コードを言えばいいんだよ」

「あんな長い覚えられないよー！！」

「ええ！！じゃあ、もう一度言うからそれに続いて・・・」  
隙だらけである

化け物その隙を見逃すはずもなく  
すばやい動作でなのはに襲い掛かっていた  
なのはが気付くがもう遅い

化け物なのはの喉を噛みきった・・・はずだった  
その攻撃は一人の少年と一本の青い刀に防がれた  
「え？」

なのはとユーノは目の前の出来事に驚きの声を上げる  
少年は刀で化け物を弾き飛ばすとなのはの方へ振り向き  
「大丈夫か？」

と声をかけてきた

「う、うん、大丈夫です」

なのはが何とか返事を返す

ユーノは少年を観察していた

（歳は僕やなのはと同じくらい、髪は黒でサングラスをかけているから表情は伺えない

おそらく幻術系の魔法を使っているのだろう、正体がよくつかめないこれならばたとえ知人だとしても気付かないだろう

そして蒼い戦闘服、バリアジャケット？いや違う、用途は似ているが術式が違う

という事は彼はミッドチルダの魔導師じゃない

さらに、あの青い刀、あれは間違いないくデバイスだ

だけど、なぜこの次元に魔法を使える人がいる？

この次元じゃ、魔法は広まっていないはず・・・

まさかとは思うけど他の次元からジュエルシードを狙って・・・)

そこまで考えたところでユーノは少年に声をかけられる

「おい、そのフェレットもどき」

「・・・僕の事？」

「他に誰がいる？そんな事よりあいつは現住生物を取り込んでると言っただけ？」

「え？うん」

「おそらく犬かなんかだろうが、普通に攻撃して倒してもその犬は大丈夫なのか？」

「・・・いや、多分そんな事をすれば取り込んだ犬も危ない

犬を助けるにはそれを取り込んでいる力を封印しなきゃだめだよ」

「だとすると俺には無理だな・・・、おいあんた」

「え！」

少年はなのはの方を向いた

「俺がああな化け物を引き付けるから、その間に封印を頼む」

「あ、はい、じゃ、ユーノ君、起動コードを「必要ない」え！？」

なのはの言葉を遮る少年

「必要ないと言っただけ」

「でも、【レイジングハート】を起動しないと・・・」  
「起動コードを言わなくても起動できる」

「・・・そうなんですか？」

「ああ、落ち着いてデバイスに呼びかける、答えてくれるはずだ」  
目を閉じ意識を集中しデバイスに声をかけるなのは

「【レイジングハート】」

《・・・はい、マスター》

「聞こえた！」

「なら、そのデバイスに聞いてみな、どうすれば良いかを」

「はい、どうすれば良い【レイジングハート】？」

《私の起動を心で念じてください、そして“セットアップ”と・・・》

なのはは心で強く【レイジングハート】の起動を念じながら

その言葉を口にする

「【レイジングハート】セットアップ！」

《オールライト、スタンバイレディ、セットアップ》

その言葉とともに、なのはは桜色の光に包まれた

「そんな！起動コードも無しにデバイスを起動するなんて・・・」

「それだけ彼女とデバイスの相性がよかったのさ」

驚きの声を上げるユーノに少年は当然といった感じで返す

光がはれるとそこには白いバリアジャケットに身を包み赤い宝玉の  
ついた杖をもった

なのはがいた

「これは昨日の」

「防護服は一度考えれば後はデバイスが自動的に保存してくれる」

「そうなんだ・・・」

「君はいつたい？」

疑問の声を上げるユーノ

しかし

「どうやらそんな話をしている場合じゃないようだ」

「え？」

「がるるるるるるるるるる」

先程少年に吹き飛ばされた化け物が体制を立て直しこちらをにらんでいた

「まずは逃げ道をなくす、【天龍】」

《はい、若》

少年が自分の持つ刀に声をかけると女性の声が答える

少年はその青い刀を地面に突き立てる

するとそこに六角形の中に六花（雪の結晶の形）が描かれている

蒼い魔法陣が浮かび上がり

さらにそこを起点に神社を包む結界が出来上がった

「これで奴は逃げられないし、一般人も入ってこれない」

「ふへへ、すごいですね」

「なのはなら直ぐにできるようになるよ」

「そっか、私も頑張らないとね」

ユーノの言葉にうれしそうな声をあげるなのは

魔法を始めて二日目のなのはにはわからなかったが

ユーノは気付いていた

（この結界は昨日の・・・でもあれは見たことのない魔法陣だ）

ユーノは少年の結界を見て、昨日結界を張っていたのもこの少年だと確信した

「じゃあ、俺があいつを押さえるからいつでも封印できるように準備しててくれ」

「うん、気をつけて」

「ああ」

そして、少年と化け物の戦闘が始まった

少年は圧倒的だった

すばやく動き回る化け物のスピードについて行くばかりか

さらにその上をいくスピードで化け物を攪乱する  
その少年を、なのははなんとか目で追って行く事しかできなかった  
少年が優勢なのを感じ取って封印の準備に入るなのは  
しかしそこで化け物が動いた

影の分身を出し、影は少年へ、本体はなのはへ向かって突進した

「あぶない!!」

影を切り払いなのはに注意を促す少年

なのはもすぐに障壁を張るが咄嗟の行動の為、体勢が不十分だった  
「くそっ!!」

少年は思い切り地面を蹴る

そのスピードは先程の戦闘を軽く凌駕していた  
なのはの障壁と化け物がぶつかる

結果的に言えば化け物の攻撃は無駄に終わった

なのはの障壁は異常に硬かった為、化け物の決死の攻撃でも敗れな  
かった

さらに、体勢を崩し、階段を落ちそうになったなのはを少年が助け  
たのだった

「なのは!!」

境内の方からユーノの心配そうな声が聞こえてくる

「大丈夫だよ。ユーノ君」

その声に答えながらも少年に支えられていたなのはには奇妙な感覚  
があった

少年の近くにいるとなぜか安心するのだ

その感覚が何なのかはわからない、だけどいつもどこかで感じている  
そんな感じの感覚だった

「すまん、引き付けると約束したのに油断した」

少年の声にようやく正気にもどるなのは

「い、いえ、こっちこそ助けてもらってすみません」

「あんな攻撃もできるんだな、だが・・・」

そこへ化け物が上から再度アタックをかけてくる

しかし化け物の体は空中で浮いたまま止まった

「トルネード・バインド」

《トルネード・バインド》

蒼い風が化け物の周りに渦巻いている

少年が化け物に拘束魔法をかけたのだ

「今だ」

「はい」

なのはが【レイジングハート】を化け物に向ける

「【レイジングハート】、お願い!!!」

《オールライト、シーリングモード、セットアップ》

声と共に【レイジングハート】から桜色の帯が飛び出し

化け物に巻き付く

化け物の額に??の文字が浮かびあがる

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル16封印」

《シーリング》

桜色の帯が輝き出し化け物を包み込む

「があああああつあああああああああ」

光が収まった後には青い宝石と一匹の子犬が倒れていた

同日 夕方

海鳴神社 境内

何かざらざらしたものが頬に触れる感覚で女性は目を覚ました

横に目を向けると自分の飼い犬が心配そうな目で見つめていた

「私なんてこんな所で寝てるんだらう? 転んで頭でも打ったかな?」

外傷はないようなので子犬を抱き上げ

「まあいいや、帰ろっか」  
子犬のワンという返事とともに女性は歩き出した

「とりあえず一件落着かな」  
「うん」

女性が無事帰るのを見送ったなのはとユーノがつぶやく  
ユーノは、なのはの顔を見ながら考える

(あの衝撃で無傷だった、やっぱりなのははすごい才能の持ち主だ)  
「あなたもお疲れ様」

なのはは後ろに振り返りながら声をかける

ユーノもそれにならない振り返り、その人物を見つめた  
(そして、彼も・・・)

かの人物、少年は結界を解除し答える

「ああ、おつかれ」

そしてそのまま帰ろうとする少年にユーノは疑問を投げかける

「・・・君は何者なの？どうして僕たちを助けたの？

なぜ魔法を使えるの？そして、君の目的は何？」

「ユ、ユーノ君!？」

ユーノのいきなりの質問攻めになのはは驚き

少年は苦笑を浮かべる

「まあ、当然の反応だが、答えられる質問は2番と4番だ

まず、どうして助けたかと言うとき言った通り、俺では封印できなかつたからだ

自分で封印できないならお前達にやってもらうしかないだろ？」

「それは・・・、そうだけど」

「そして、俺の目的、平穏な暮らしを守る為、それが俺の使命、と  
いったところかな」

「「平穏？使命？」」

予想外の答えだったのか疑問符を浮かべる二人

「ああ、俺は俺の海鳴に居る人達がただ、平和に暮らしていけるよ

うに、その宝石

ジュエルシードを封印する、普通に暮らしていくには、その宝石の力は大きすぎる

そんなものが近所にあつては周りの奴らがいつ巻き込まれるか分かつたもんじゃ

ないからな・・・」

「・・・」

何も言えなくなった二人に少年は

「質問はもう良いだろ？」

と言つて帰つていく

「ちよ、ちよつと待つて」

「ん？」

なのはの呼び止めに素直に振り向く少年

「その、ジュエルシードを封印するなら、これからも会つと思つから名前教えて？」

「・・・“蒼夜”<sup>ソウヤ</sup>」

そう言つとすたすと歩き出した

「じゃあな、お前らも気をつけて帰れよ」

その言葉を最後に少年は帰つていった

後に残された二人は顔を見合わせる

「なんか、変な奴だね」

「うん、でも・・・」

ユーノの言葉に頷くなのはだがやはり気になるのはさっきの感覚

(あの感覚は一体・・・?)

「なのは?どうしたの？」

「ううん、なんでもない、なんかお腹すいたね。帰ろっか、ユーノ君」

「そうだね」

(少なくとも今の所は敵ではないみたいだしね)



ユ一ノはなのはの肩に乗る

「じゃ、帰ろう」

そう言うとなのはは走り出した

高町　なのはの魔法使いになって初めての長かった1日がやっと終わります

いろいろわからない事は多いけどこれからも頑張ろうと思うなのはでした

同日

河川敷

「何だろうこの宝石みたいなの、きれいだな」

野球のユニホームを着た少年が青い宝石を拾う

「あいつにあげたら喜ぶかな？」

そう言う少年はポケットにその宝石を入れて歩き出した

t o b e c o n t i n u e d

## 魔法の呪文はリリカルなの？（後書き）

お読みいただきありがとうございます  
今回から後書きで本編中に出てきた公開できる設定を公開していきます

蒼夜<sup>ソウヤ</sup>

なのはを助けた謎の少年  
ユーノの説明通り、蒼いバリアジャケットのようなものを纏っている（デザインは聖なるかなの暁 絶の間接部の銀色の部分を無くしたものをイメージしてください）  
左腰に刀型のデバイスを帯刀している  
髪は黒、認識阻害の魔法をかけたサングラスをかけている為顔が見えているのに正体はわからない・・・バレバレですが

### 【天龍】

謎の少年、蒼夜のデバイス  
刀身が青い刀形のデバイスであるが  
インテリジェントデバイスとは違うものらしい  
トルネードバインド  
風の渦で対象を拘束する魔法  
風の渦は凶器にもなり  
無理に引き千切ろうとすれば  
対象を切り裂く刃となる

今回はこれで終了です。

感想・アドバイス等もお待ちしています。

町は危険がいつぱいなのか？（前書き）

お待たせしました！！第三話投稿です。

本編中、サッカーが野球に変わっております

サッカーも嫌いではありませんが、作者は野球少年でした

その為、野球に書き換えました。ご了承ください。

それでは、第三話をどうぞ！！

町は危険がいつぱいなのか？

闇夜に走る、桜色の閃光と蒼き疾風  
今夜もまた一つ、魔法の石が回収された

町は危険がいつぱいなのか？

金曜日 夜  
とある学校 校庭

「なのは、これで5回目か？」

蒼い服を着た少年が白い服を着た少女・高町 なのはに話し掛ける  
「うん、蒼夜君」

なのはと少年が会ったのは、これが3回目、なのはは2度目に会ったときに

自己紹介をして、名前で呼んでくれるように頼んだ

少年のことは最初に教えてもらった通り蒼夜君と呼ばせてもらっている

「お疲れさま、二人とも」

なのはの肩からフレットのような動物・ユーノがひょっこりと顔を出す

「うん、ユーノ君もお疲れさま」

ユーノは魔力もずいぶん回復したので前回から結界の生成や怪我の治療などの

戦闘の補助をもらっている

元々防御や補助などの魔法が得意な結界魔術師らしい、たしかに結界も蒼夜より

高性能なものを展開していた

「一週間で4個集めて計5個、このペースならすぐに集まりそうだから、だね」

言葉の途中で大きなあくびをするのは

体もフラフラしている、半分寝ているようだ

「そうだな」と答えながらユーノに念話を送る蒼夜

「ユーノ」

「ん、なに？」

ユーノも自己紹介は済ませている

「聞かなくてもわかってるだろ」

「・・・そうだね、なのは少しオーバーワーク気味で疲れが溜まっているみたいだね」

「始めたばかりなんだから、体が慣れるまで少しペースを落とした方がいい」

ジュエルシードの回収、それほど急がなきゃならないものでもないだろ？」

「今はまだ、ね。僕たち以外の誰かが自分の目的の為にジュエルシードを回収しているなら」

もつと急がなきゃならないけど・・・まあ、早く終わるにこした事はないけどね、きみもそうだろ？」

「それはそうだが・・・、だがそれで身体を壊される訳にもいかなだろ」

「うん」

「明日と明後日は世間じゃ休日だ。なのはに休むように言ってやれ」

「そうだね、探索するだけなら僕一人でできるし」

「バカ、お前も休むんだ」

「え？」

自分も休めと言われた事がよほど意外だったのか

ユーノはきょとんとした顔で蒼夜を見つめる

「怪我は治ったようだが、お前もこちらの世界に来て、なれない生

活をしてるんだ

自分が思っている以上に疲れが溜まっているはずだ。

この機会に一度ゆっくり休め」

「だけど・・・」

「・・・それに、お前が休まないとなのはが休むはず無いだろ。

こいつはそういう奴だ」

「それはそうかもしれないけど・・・、君はどうするんだ？」

「俺一人で動いたって意味が無いだろ、俺もゆっくり休ませてもらうよ」

予定が無いわけでもないんでな」

「わかった、みんなで休もう、何も無ければだけどね」

「ま、そういうことだな、じゃ俺は帰るからそいつをちゃんと家まで届けてやれよ」

その言葉になのはがこの念話での会話に参加していないことによろやく気付いたユーノ

なのはの顔をのぞきこむ

「くうー」

立ったまま寝ていた

【レイジングハート】を引きずりながら歩くなのは

あの後、ユーノはなのはを起こして家に帰るようにうながした

蒼夜はユーノがなのはを起こしている最中に帰ったよう

なのは達が気付いた時にはもう影も形も見当たらなかった

「なのは、大丈夫？」

「大丈夫だけど・・・、ちょっと疲れた」

そう言っ

「ちよ、なのは!!」

いきなり倒れたなのはに驚くユーノだがよく見てみると

「くうー」寝ていた

「またかい!!」

おもわず突っ込みを入れる

このままじゃ仕方ないので、なのはを家まで転送しようとして魔法陣を展開しようとするユーノ

しかし、足音がひとつ、近づいてきた為、術式と【レイジングハート】、なのはのバリアジャケットを解除

動けないのはをかばうように足音の主を警戒する

変な奴なら魔法を使って驚かせて追い払おうと心に決め準備をする

そこに現れたのは・・・、一度だけだが、見た事のある人物だった

「ん、うにゅ〜」

ゆらゆらとした振動に目を覚ましたなのは

まだ覚めていない頭で自分の状態を確認

誰かに背負われているようだ

それはとても安心できる背中だった

（あれ？この感覚、最近どこかで？）

だんだんと意識が回復してくる

（うええええええ！！）

完全に覚醒したなのは自分を背負っている人物を確かめる

その人物は自分がよく知っている幼なじみの少年だった

「た！達也君！！」

「ん、起きたか、なのは」

「な、なんで達也君が私を？」

確か自分は家に向かって歩いていたはずでは

と自分の行動を思い出すとするなのは

（お、覚えていない？）

半分寝ていた為、途中から記憶がない

「道路でお前が寝ていたのを見つけたんだ。そのままにしておくわけにもいかんだろ

っ！か、なんであんな所に寝ていたんだ？」

「うつ、そ、その疲れてたから・・・、と、とにかくもう大丈夫だから降ろして」

と、達也の背中から慌てて飛び降りるなのはぐしゃ！！

「ぎゃー！！」

本当に大丈夫そうなので、とりあえず今の音と声は無視する事にした達也

なのはは慌てていて気づいていないし

「まあ何をしているのかは聞かないが、この頃夜間外出も多いみたいだし

見つからないようにしとけよ、特に士郎さんと恭也さんはお前に対して

超がつく過保護だからな」

「うん、ありがと。気をつけるよ」

と、ここまで来てようやくユーノがいない事に気付いたのはさりげなく聞いてみることにした

「ところでユーノ君でどっかいつちゃった？」

「ああ、この間拾ったフレット“もどき”だな、あいつならそこだ」

と、達也はなのはの足元を指差しながら言った

なのはの左足には何かを踏んでいる感覚があった  
恐る恐る足をどかして下を見してみる

「きゃー！ごめんユーノ君大丈夫！？」

・・・見事にぺしゃんこになったユーノがいた・・・

その後、何とか元に戻ったが、ぐったりしているユーノを肩に乗せ達也に家まで送ってもらった、なのは

その間に何度かユーノに念話で謝ってみたが、ユーノはまったく反応を見せなかった

今は玄関前、今のところあの二人の気配はないようだ



「どうやら待ち伏せはしていないようだがこの間みたくに見つかからないようにしろよ」

「あはは、頑張ってみるよ・・・、達也君も明日頑張ってね」

「ん？ああ、お前達も来るんだっけ？」

「うん、私は行けたらだけど、一生懸命応援するからね」

「なんか予定があるのか？」

「いや、まあ、ちよつとね」

「歯切れが悪いな？」

しかし、まだ3年で、たまにしか顔を出さない俺が出て良いものかと、本気で思うんだが」

「それだけ、お父さんも達也君の実力を認めてるんだよ。きっと」

「ふむ、買い被り過ぎなんだがな、まあ今日は早く寝ておこつ」

「うん、その方がいいよ、送ってくれてありがとう。おやすみ」

「おやすみ、お前も疲れてるみたいだし、無理せず早く寝ろよ」

そう言っただ達也は帰って行った、といっても達也の住むマンションはすぐ近くののだが

「なのは、彼は・・・」

達也が帰ったのを見計らってか、ユーノが話し掛けてきた

「あ、よかった、ようやく話し掛けてくれたね、大丈夫？

ユーノ君ずつと無反応だったから、怒ってるのかと思ったよ」

「ちよつと痛かったけど大丈夫だよ。怒ってない

考え事をしてたから、それで、彼の事なんだけど・・・」

「うん、確か会うのは2回目だよな？」

彼は異 達也君、私の小さい頃からの友達だよ

達也君がどうかしたの？」

「・・・いや、明日何かあるの？」

「うん、ちよつとね、ふあ~~~~、大丈夫、ちゃんとジュエルシー

ド探しもするから」

「え？いや」

「ごめん、私もうお風呂入って寝るね。おやすみ」

「うん、おやすみ……って、ちょ、なのは」

早々と家の中に入っていくのは

(休みの事伝え忘れちゃったな。まあ明日伝えればいいか)

そう思い、ユーノは達也が消えていった方に顔を向け考える

(でも、彼はもしかしたら……いや、決め付けるのは早計だ、もう少し様子を見よう)

ユーノも高町家の中に入り、夜がふけていった

翌朝

高町家　なのはの部屋

「なのは、朝だよ、起きて」

「うー、今日は土曜日で休みだからもうちょっと寝かせて」

朝、ユーノに起こされても、なかなか起きないなのは、大分疲れが溜まっているらしい

すぐに布団に包まってしまった

「なのは朝だって、なのは？おーいなのは、なのは？…なのは……は……のは？」

ユーノ君が何か言ってるが気にしない

(だって眠いし……、でも……)

「なのは？なのはってば……」

(あう、このまま寝ていたいけど、応援に行きたいし、ジュエルシードも探したいし、どうしよう?)

「なのは？うわ！」

なのはが寝返りをうったことで脇に飛ばされるユーノ

気にせず、【レイジングハート】を取りだし、集めたジュエルシー

ドを見てみる

5個、何処から見ても5個、何回見ても5個

「はぁー」

思わずため息をついてしまった

（昨日は直ぐに集まりそうだななんて言っちゃたけど、後16個、先は長いな〜）

そんな事を思っていると言いつつ上がったユ一ノが提案してくる

「なのは、今日と明日はゆっくり休もうよ」

「え！？でも」

（思いがけない申し出でだけど早く集めないとならないんじゃない？）

ユ一ノの言葉に困惑するのは、そこでユ一ノは話しを続ける

「実は昨日、蒼夜に言われたんだ、なのはも僕も疲れているみたいだから休めってね」

「いいの？」

「もう5個も集めてもらったからね、少しくらい休んでも全然問題無いよ

それに今日はなんか予定があるんでしょう？」

「うん、そっか、そうだね。じゃ、今日と明日はジュエルシード探しはお休みってことで」

「それがいいよ。でも、何時に集合かはわからないけど、2度寝は駄目だからね」

「うーん、もうちょっと寝ていたい気もするのですが・・・、今の時間・・・は・・・」

時計を見たなのはがフリーズする

現在時刻8時35分、アリサ達との集合時間8時45分  
集合場所までここから約10分・・・

「ち」

「ち？」

わなわなと震えだし、意味不明な言葉を発するなのはに

ユ一ノは首をかしげる

「ちくちくすする〜!!」

なのはユーノを驚づかみにし、光速で出かける用意をしたそのスピードは後のF執務官も真つ青な早さだったという・・・ちなみに、驚づかみにされて振り回されていたユーノはいい具合にシエイクされ、なのはが気づいたときには口からエクトプラズムを出し、ぐったりしていたのは余談である

「なのは、遅いわよ」

「まあまあ、アリサちゃん、一応時間内だし、ね」

なんとか時間内に集合場所に着いたなのはを待っていたのは仁王立ちのアリサと苦笑いを浮かべているはずだった

「お、おはよう、二人とも」

「おはよう」

ここは河川敷野球場、今日はここでなのはの父、士郎がオーナー兼監督を務める

少年野球チームの試合が行われるのだ

「よっぽど暇なんだな、お前ら・・・」

達也が練習の手を休め三人に話しかけてきた

「何よ、達也、あたし達が応援に来ちゃ駄目なの？」

「そうは言わん、だがこんなことに来るより、家族で出かけたたりしたほうが良いと思うが」

「その点は大丈夫だよ達也君、私とアリサちゃんは午後から家族でお出かけだから」

「それなら尚のこと、家にいたほうがよかったと思うが・・・？」

「久々に達也君の活躍するところ見たかったんだよ」

「ふむ、まあ、そうか・・・」

なのはの言葉に照れたのか、頬をかく達也

「おや、なのは達、応援に来てくれたのかい？」

そこへ現れたのはジャージ姿なのはの父、士郎

「はい、達也君の応援に」

「何!？」

すずかの言葉に固まる土郎

「なのはもなのかい!？」

「うん」

ピシッ!とひびの入る音が聞こえる

「どうやら、なのはが自分の応援ではなく達也の応援に来たのがシヨツクらしい」

実際試合をするのは達也たちなのだから当然と言えば当然なのだが

「達也君、後で覚えておけ」

「俺がいつたい何をしたというんだ・・・」

「とりあえず、土郎の行動に気をつけておこうと思った達也だった」

「さて、気を取り直して、ギャラリーも集まった事だし」

「そろそろ試合を始めようとおっちの監督に挨拶してくるよ」

「土郎がいなくなり、そろそろ試合が始まりそうなので気を引き締める達也」

「じゃあ俺もアップに戻りますか」

「うん、頑張つてね」

「期待してるよ」

「ヒット、一本・・・じゃあ簡単過ぎるわね・・・、そうだ!!達也、あんたのポジション、外野なんでしょう?」

「ああ、そうだが・・・」

「アリサの質問に達也は嫌な予感がしたが素直に答える」

「じゃあ、レーザービーム見せてくれない?イローみたいなやつ」

「・・・さて、早いとこアップ終わらせないとな」

「達也はアリサの言葉を聞かなかったことにして、グラウンドの方へ歩きだす」

「ちよつと、無視すんじゃ無いわよ!!」

「その言葉にも達也は振り返らず行ってしまった」

「ふん!!出来ないから聞かなかったことにしようって魂胆ね、そうはいかないわよ」

「アリサちゃん、いくらなんでもプロの人みたいなのは無理だよ」  
憤慨すアリサをなのはが苦笑しながら宥める

「確かに難しいかもしれないね、でもねアリサちゃん」

去っていく達也の姿を見送ったすずかはアリサ達に笑顔を向け

「達也君、出来ないとは言わなかったよ」

そう言っただけで応援席の方へ歩き出した

試合が始まった

なのは達がベンチで応援していると

一緒に連れてきたユーノから念話が入る

『なのは、これってこっちの世界のスポーツだよ？』

『うん、野球って言っただけ、あの真ん中にいる人の投げるボールを

バットで打って四つあるベースを一周すれば一点』

『ふーん、面白そうだね』

『ユーノ君の世界ではこういうスポーツってないの？』

『あるよ、僕は研究ばかりであんまり得意じゃなかったけど』

『あはは、私と同じだ、あんまり運動は得意じゃないんだ』

そういう話しているうちに達也の打席になる

ワンアウト、二塁のチャンスだ

「達也、打ちなさいよー!!」

「達也君、頑張って!!」

「チャンスだよー!!」

「きゅー!!」

達也は周りの選手達の怒りのボルテージが一気に上がるのを感じた  
女の子の応援、それも3人ともかなりレベルが高い美少女なのだから  
周りの男子達の嫉妬は計り知れないものだろう（最後のフェレット  
もどきのは微妙だが）

娘の為なら死ねる監督が懐から2本の小刀を出しているのが見えた  
ので

達也は本気で逃げ出そうかと思った

「死ね!!」

相手のピッチャーが殺気を込めて投げるがそこは達也、しっかりと打ち返しセンターオーバーのスリーベースで一点先制

しかし、その後を抑えられ結局一点どまりで攻撃が終わった

その後の攻撃も達也を含め、ヒットを打ちチャンスはつくるのだが相手のピッチャーが踏ん張り、ホームベースを踏むことは出来なかった

相手の攻撃は味方ピッチャーが好投により最終回までノーヒットピッチング

「あのピッチャー凄い」

「うん」

アリサとすずかが驚きの声をあげる

しかし、ピッチャーも疲れを見せていた

四球と盗塁×2でワンアウト3塁となり

三振を取ろうと投げたボールは力みすぎの棒球

バッターもそれを見逃すことなくバットを振りぬき

センターへのフライが上がる

タッチアップを行うのには絶好のフライ

センターはその試合で最年少の少年

三年生だが今日の試合の活躍でただの少年じゃないことは

相手チームの誰もが知っていた

だが、それでも同点にするため

ランナーはタッチアップを決行する

ボールがセンターのグローブに触れた瞬間

ランナーがスタートを切る

これ以上ないくらい完璧なタイミング

(もらった・・・!)

ランナーがそう思った瞬間だった

キャッチャーミッドに白球が突き刺さったのは

「・・・何？今の？」

アリサは自分の目を疑った

なのにも呆然としている

「達也君、アリサちゃんのお願いを聞いてくれたね」

すずかだけが笑顔でアリサに言う

「お願いって・・・」

「レーザービーム、だよ」

アリサははっとして、達也に視線を向ける

その視線に気づいたのか、達也は微笑みで応える

「！..!」

アリサは顔が火照るのを感じて視線をそらす

「すずかちゃん、試合が始まる前に言ってたのって・・・」

なのはが恐る恐る尋ねると

すずかは笑顔のまま応えた

「達也君て出来ないことは出来ないって言うと思ったから・・・」

すずかはそのまま達也に目を向けるとさらに笑顔を深くした

なのははそんなすずかの様子を見て、何か不思議な感情が

湧き上がってくるのを感じていた

結局、達也のチームが1・0で勝利した

達也の成績は三打数三安打一打点と好成績を残し

ピッチャーもノーヒットで抑えたのだった

「ヨーシ、お前ら今日はよく頑張った」

「.....はい!!..!」

「じゃ、飯でも食うか」

「.....いえーい!!..!」

というわけでみんなで翠屋に移動して食事をするようになった



同日 昼

翠屋

食事の後、デザートを食べながら

なのは達はユーノで遊んでいた

「しっかし、この子、ホントに珍しい種類よね？」

「動物病院の先生はフェレットみたいだって言ってたけど、こんな種類見たことないよ」

ぎくっ！

なのはとユーノは体を強張らせる

「あはははは、ほら、珍しいフェレットと言う事で、ほらユーノ君

お手！」

「きゅ」

なのはにお手をするユーノ

「きゃ〜、かわいい！！」

「すごいね、おりこうさんだね」

どうやらつぼにはまってしまったようで、アリサとすずかはユーノをおもちやにして遊んでいた

『あはは、ごめんねユーノ君』

『だ、大丈夫』

と、その時、達也の方に何気なく耳を澄ませてみる

「達也、そのケーキ食わないなら、俺にくれないか」

「いいですよ」

どうやらチームメイトにケーキを譲ったようだ

そのチームメイトは一気にケーキを口にかき込む

「うぐー！！」

「でも、それ、土郎さんが持ってきたものなんで  
何が入っているかわかりませんよ、つてもう遅いか・・・」

急いでトイレにかけ込むチームメイト

影で土郎が「チツ」と舌打ちをしていた

(・・・ごめんね達也君、後でお仕置きしておくから)

達也に視線だけで謝っておく、達也も苦笑しながら頷いていた

そんなこんなで解散の時間になったので野球少年達は解散していた  
ピッチャーの少年がポケットから何かを取りだし直ぐにしまった  
それを一瞬だけ見ていたなのは、少年が持っていたものに  
ものすごく見覚えを感じた

(まさか!)

少年はマネージャーの女の子と一緒に立ち去ってしまう

(今のは、でも、まさかね・・・)

なのは二人の後姿をじっと見つめていた

「あゝ、面白かった、はい、なのは」

アリサの声に現実に引き戻される

ユーノがぐったりしていた

どうやらかなり遊ばれたらしい

「じゃ、そろそろ解散だね」

「そういえば二人とも午後から用事があるんだっけ」

「うん」

と、そこへ達也と土郎がやってきた

「お、君達も解散かい？送っていいこうか？」

「いえ、迎えを呼びますので大丈夫です」

「同じくです」

土郎の申し出を断る二人

「じゃあね、なのは、達也」

「ばいばい、なのはちゃん、達也君」

「うん、ばいばいまた月曜日ね」

「気をつけて帰れよ」

二人で帰っていった

「達也君はどうするの？」

残った達也に聞いてみるなのは

「ちよつと用事が出来たから、このまま行くよ」

「そつか、気をつけてね」

「ああ、お前もな」

達也も帰っていった

「なのははこれからどうする？」

「ちよつと疲れたから、家に帰って一眠りするよ」

「そつか、父さんも汗を流したら仕事再開だ、一緒に帰るか？」

「・・・下剤入のケーキを達也君に食べさせようとした人のことな  
んか知りません」

そう言つて足早に帰宅するなのは

「あ、あれは仕方なかったんだ、ちよ、待つてくれなのは！！」

それを言い訳しながら追いかける情けない父親の姿が在ったとか無  
かったとか・・・

ピッチャーの少年とマネージャーの少女が並んで帰宅している

そんな二人を気配を消して尾行している人物が居た・・・

同時刻

なのはの部屋

「疲れた〜」

なのはは帰って早々ベットに倒れこむ

「なのは、寝るならちゃんとパジャマに着替えなきゃ」  
そのまま寝てしまいそうな、なのはにユーノが注意する  
いきなり着替え出すなのは

「はう！！」

同年代の少女の生着替えを見るわけにもいかないため

慌てて後ろを向くユーノ

(振り向いちゃ駄目だ振り向いちゃ駄目だ振り向いちゃ駄目だ・・・)

そんな欲望と理性が決闘しているユーノを気にもせず着替えを終えるのは

「ユーノ君も休んだほうがいいよ、なのはは夕ご飯までおやすみ」  
すぐに寝てしまった

(やっぱり、慣れない魔法でかなり疲れてるんだ、僕がもつとしっかりしていれば・・・)

なのはの為にもっと自分にできる事がないかを考えるユーノだった

少年と少女は帰宅途中の横断歩道に居た

そして、それを尾行する人物、蒼夜が思考する

(このまま、何も無ければ一旦、追跡を止めるか・・・、だが発動していない今なら、俺の力で抑える事ができるはずだ・・・)

蒼夜にはわかっていた、あの少年がジュエルシードを持っている事をそして、その力で今日のノーヒットを達成した事を・・・

もちろん、少年の無意識の願いがなつてしまった結果であるが

(さて、どうするか・・・、あいつらに休めと言った手前

結界を張ってしまえば、確実にばれる、それは避けたいが・・・)

蒼夜がどうやって回収するか悩んでいると

それは、起こった。ジュエルシードが発動した

「ちっ！【天龍】、最大出力で結界を」

《はい、若》

結界を展開し、街の被害を最小限に食い止める

しかし、ジュエルシードの魔力は強大だった  
魔力でできた巨大な木がどんどん大きくなっていく  
今は蒼夜の結界により実害はないがこのままでは  
いずれ蒼夜の結界が破壊され、現実の街を破壊していくだろう  
「ああくそ、こんなことなら意地を張らずに  
あいつらに知らせればよかった、俺の結界じゃ長く持たない」  
《今はそんなことを言っても仕方ありません！！  
あの二人が来ることに期待しましょう》  
「ああ、それまで結界を持たせるぞ」

《はい》

蒼夜は結界の維持に全力を注ぐ  
しかし、やはりジュエルシードの魔力は強大であり  
蒼夜の限界が来るのも時間の問題だった

ジュエルシードの発動は、なのはとユーノも気付いていた  
直ぐに着替えを済ませ、足早に家を出ようとする  
そこへ、入浴中の土郎から声がかけられる

「お、なのは一緒にはいるか？」

どうやら、お風呂に入りに来たと思っただけらしい

「ごめん出かけてくる、と言うか、もう一緒になんか入りません！」

「な！なんだって！ーーーー！ーーーー！ーーーー！ーーーー！」

「じゃ、行ってきます」

「ま、待つてくれなのは、そんな事言わずに一緒にお風呂に入ろう  
！」

残念、もう出かけた後だった・・・

「なのは！ーーーー、カアアムバアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ク！」

高町家に絶叫が響き渡った

その日、翠屋に泣きながら仕事をする店主が居たと言う噂が流れた。  
・  
・

なのはは近所で一番高いビルに上った  
屋上で見る光景になのは達は絶句する

巨大な木が街中に生えていた

「・・・人間が発動させたんだ。ジュエルシードは  
人間が発動する事で一番、効果を発揮するから・・・」

ユーノの呟きになのはは先程のピッチャーの少年を思い出す  
正確には少年の持っていた宝石をだが・・・  
(やつぱり、あの子が持ってたんだ)

なのはは後悔した

なぜあの時、直ぐにでも行動しなかったのかを  
未然に防げたかもしれないのに・・・

その時、念話が割り込んできた

『聞こえるか、なのは、ユーノ、どうやら間に合ったようだな』

『蒼夜君？今どこに？』

『ああ、巨大な木の近くで結界を張って、これ以上の巨大化を防い  
でいる』

『ジュエルシードの魔力を防いでいるだって！？そんな無茶な！！』  
『多少の無茶は承知の上だ、これを野放しにしたら街の被害が尋常  
じゃなくなる』

『・・・わかった、じゃあ、僕も手伝『いらん』な！どうして！？』

『お前となのはは、ジュエルシードの封印を最優先に行動しろ、そ  
れまでは持たせる』

だが、できるだけ早く頼むぞ、結構きついん・・・な・・・』

『蒼夜君？』

『そろそろ念話をするのもしんどくなってきた、こっちは結界に集  
中するから、後を頼む』

そう言つて、蒼夜は半ば強引に念話を切った

なのはも落ち込んでいる場合ではないと行動を開始する

「ユーノ君、こんな時はどうすればいい？」

「とりあえず、ジュエルシード本体の位置を特定しないと・・・」  
「わかった。お願い、【レイジングハート】！セットアップ！」  
《はいマスター、セットアップ》

なのはが桜色の閃光に包まれ、バリアジャケットを装着する  
「ジュエルシード本体の位置を探し出して！」

《エリアサーチ》

【レイジングハート】から数十の閃光が飛び出す  
その閃光達は広範囲にわたった、木からジュエルシード本体を探す  
為に飛び回る

その中の一つが気絶している少年と少女、さらに

少年の手に握られているジュエルシード本体を見つけ出した

「見つけた！」

「ほんと、じゃ、早く封印を・・・」

ビシイ！！

「「え！？」」

蒼夜の張っていた結界にひびが入った

『蒼夜君！！』

念話で呼びかけてみるものの返事がない

返事を返す余裕もないのだろう

結界も、もう長くは持ちそうもない

本体のある場所まで行くには時間が足らなすぎた

「早く封印を、【レイジングハート】お願い！！」

《はい》

突然のなのはの行動にユーノは驚きの声をあげる

「なのは、ここからじゃ無理だよ！もっと近づかないと」

「できるよ！そうだよね、【レイジングハート】」

《シューティングモード、セットアップ》

【レイジングハート】が変形する

杖の形から音叉のような形になった

「行って、捕まえて！！」

『行きます』

【レイジングハート】の先から桜色の光の奔流が放たれる  
それは寸分の狂いも無く目標へ直撃した

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル？封印」

《シーリング》

さらにもう一発、砲撃が放たれ、ジュエルシードを直撃

ジュエルシードは封印された

その瞬間、ジュエルシードから発せられていた魔力がなくなり  
巨大な木も跡形も無く消えうせた

《モードリリース》

【レイジングハート】が元の杖の形へともどる

「ありがとう、【レイジングハート】」

《どう致しまして、マスターの想いに応えるのが私の役目です》

さらに小さな宝石まで戻り、それと同時になのはバリアジャケッ  
トも解除される

そばで全てを見ていたユーノは絶句する

（僕にも使えない遠距離魔法、この子いったいどれだけ魔法の才能  
を持つてるんだ・・・）

「そつだ！蒼夜君とあの二人は！！」

「心配無い、俺が安全な場所に寝かせておいた

俺のほうも特に問題はないから、安心しろ」

上空から飛行魔法を使った蒼夜が降りてくる

「そつか、良かった」

ひとまず安堵の表情を浮かべるなのは

しかし、すぐに思いつめた表情に変わった

「いろんな人に迷惑をかけちゃったね」

「え？何言つてんだ、なのははちゃんとやってくれているよ」

突然のなのはの言葉にユーノは疑問の声を上げる

「蒼夜君、今回の被害、完全に防げたわけじゃないよね」

「・・・ああ、確かに道路の陥没が数ヶ所あるな」



「うん、私ね気付いてたんだ、あの子がジュエルシードを持つてるのでも、気のせいって思っちゃった・・・」

座り込み、膝に顔を埋め落ち込むのは

そんななのはをなんとか勇気付けようと言葉をかけるユーノ

「なのは、元はと言えば僕の所為なんだ、なのはが責任を感じる事じゃないんだ

だから、落ち込まないでなのは」

顔を上げないなのは

「今回の件は俺のミスでもある、すまん」

「「え？」」

突然の蒼夜の謝罪にユーノと顔を上げたなのはがそろって意外な表情を浮かべる

蒼夜は一番早く現場に着いて被害を抑えたのである

ミスなどしてはいないはずだと二人は思っていた

「なぜ、俺があんなところにいたと思う？」

俺も気づいていたんだ、あいつがジュエルシードを持っていることを

だから、尾行していた。いつでも対応できるようにと

そしていざ回収に動こうとしたらこれだ

海鳴を守れなかった

ほんと、自分がいやになってくる」

なのはは黙って蒼夜の話聞いていた

なのは自身も自分のことがいやになっていたので

「私も・・・、私も海鳴を守りたい・・・、だから私は私自身の意

思でこの事件を解決してみせるよ」

半端な気持ちでやって、同じことを起こしたくはない

それがなのはの出した答えだった

夜

海鳴市のどこか

「この世界だね」

「うん、この世界にあるよジュエルシードが・・・」

一人の少女と大型の狼が夜の街を見下ろしていた

少年と少女は新たな誓いを胸に進み始める

そしてもう一人の少女の思い

運命の歯車が少しずつ、だが確かに動き始めた

t o b e c o n t i n u e d

**町は危険がいっぱいなのか？（後書き）**

お読み頂きありがとうございます。

第三話どうだったでしょうか？

一話のアイコンタクトの時もそうでしたが

すずかは達也のことをなのはよりもよく理解しています

その理由は・・・、後ほど本編で

今回は特に紹介する情報も無いですね

感想等お待ちしております。

これからも更新頑張っていきますので

よろしく願います。

ライバル！？もう一人の魔法少女なの！（前書き）

お待たせしました。

第四話更新です。

ライバル！？もう一人の魔法少女なの！

一人の少女がたたずんでいる  
その手には金の宝石のついた黒い戦斧が握られ  
傍らにはオレンジの毛の狼が控えていた

ライバル！？もう一人の魔法少女なの！

夜

海鳴市 ビル屋上

「この当たりに反応があるよ、フェイト」  
狼が言葉を発する

「どうやら、少女・フェイトの使い魔のようだ

「うん、そうだねアルフ」

「どうする？このまま見つけ出そうか？」

首を横に振り否定するフェイト

「今日はもう遅いしね、それにお客さんのようだ」

フェイトが振り返る

そこにはサンングラスで目元を隠して、腰に帯刀し

蒼いバリアジャケットのようなものを着た、フェイトと同年代の少年がいた

「こんばんは、と言ったほうが良いかな」

少年がフェイトに声をかける

「グルルルルルル！！」

使い魔の狼・アルフが威嚇するように呻いた  
フェイトが落ち着かせるように撫でる

「こんばんは」

「なぜこんな時間に、こんな所に居るか聞いても良いか？」

「ちよつと、探し物を」

「そうか」

お互いに警戒心を解くことなく問答を繰り返す

「そう言う君はどうしてここに？」

「微弱な魔力反応があつたから様子を見る」

「と、言う事は管理局の魔導士？」

自分たちのことを調べようとしている存在はそれぐらいしか  
思いつかなかつた、しかしそれは直ぐに否定される

「・・・管理局？それが何処かは知らないが

違つよ、俺は善良な一般市民だ」

「こんな所に来ておいて、一般市民なわけないだろう！」

アルフが突つ込みをいれる

「ふむ、確かに。だが嘘は言つてないんだがな・・・」

悪びれた様子もなく少年が答える

どうやら、最初から信じてもらえるとは思つてないらしい

「で、ここに来た本当の目的は？」

少年に動く気配が無いので

フェイトは警戒を解き、問う

少年も警戒を解いて答える

「本当に様子を見に来ただけだよ。それと、確認かな」

「確認？」

「君たちの探し物、ジュエルシードだろ」

「なぜそれを！！？」

アルフの顔が驚愕の表情に変わる

フェイトの方は少しだけ驚いただけだつたが

「かまを掛けたただけだが、どうやら正解だつたようだな」

「な！！」

アルフが更に表情を変える

それは憤怒、自分がはめられたのが許せなかつた

少年は言葉を続ける

「あれがあると、こちらは迷惑なのでね、俺の連れが回収させてもらっているよ」

「ちゃんと、あるべき場所へ返す為に・・・」

「そう、じゃあ、私たちは敵と言う事になるのかな・・・」

「そうだな」

アルフは直ぐにでも飛び掛れるよう構える

「フェイト、どうする。ここでやっつけようか？」

少年は警戒は解かないが特に構えることなく言葉をつむぐ

「君たちが、このまま何もせずに撤退するなら俺も何もしない

だが、ここで魔法を使い、ジュエルシードを探索するならば

俺は、海鳴の守護者として君たちを排除しなければならぬ」

「海鳴の守護者？」

「なんだい、それは？」

「気にしなくてもいい、さてどうする？」

少年の問いにフェイトは少し間を置き、応えた

「・・・ジュエルシードがここに無いなら戦闘をする意味は無いよ」

「フェイト!？」

アルフが驚きの声を上げる

「そうか、なら今日はこの当たりで失礼するよ・・・」

できれば君とは戦いたくないが、次に会う時はお互い覚悟を決めようか」

フェイトは、そう言い残し立ち去ろうとする少年の背に問いかける

「どうして、私達の前に出て来たの？」

フェイトは気になっていた

彼が本当に様子を見に来ただけなら姿を現す必要はない

確認をとる為といっても、ほぼ確信していた節がある

さらに、一番気になったのは最後の言葉

どうして彼は自分と戦いたくないんだらうか？

その疑問の為にポツリと出た言葉

呟いた程度のその言葉は少年に届いていた

少年・蒼夜は立ち止まり背を向けたまま答える

「・・・君がどこか、昔の俺に似ているから・・・かな？」

蒼夜は少女に昔の自分を重ねていた

正確には少女の表情が似ていたのだ

昔の、ある少女に助けられる前の自分に

（あれは、何かを抱え込んで

何かにとらわれ自分が見えなくなっている奴の顔だ）

蒼夜は昔助けてもらったように

今度は彼女を助けてあげたいと思った

（だけど、俺にはそんな器用な事はできない。だから・・・）

「・・・君たちは、これから一人の女の子と出会っただろう？」

「・・・女の子？」

少年の急な話題変化にフェイトは首を傾げる

「ああ、あいつなら君達を・・・」

（救えるかもしれないな）

「そ、その女の子が何だっけって言うんだい!？」

アルフが聞き返すが、少年は少しだけ微笑んでから

飛行魔法を使い何処かに飛んでいった

「待て!！」

アルフが追いかけようとするが

「いいよ、アルフ」

「フェイト?でも・・・」

フェイトに止められ渋るアルフ

「また、直ぐに会う事になるよ。そんな気がするんだ」

（そう、直ぐに会う事になる、彼にもその女の子にも

彼が何を言おうとしたのか、彼の正体、その女の子の事

わからないことばかりだけど・・・、でも、私は負けない



あの人の、母さんの為に絶対にジュエルシードを集めてみせる)

「そりゃあ、同じ物を取り合ってる敵なんだ

直ぐに会うだろうけどさ、だからこそ

早いうちに潰しとかなくて良いのかい？」

「大丈夫、誰が何人相手でも私は

絶対に負けないよ、母さんの為にね」

「フェイト……」

アルフは何かに堪えるような顔をする

しかし、直ぐににこやかに笑いながら

「そうだね、フェイトは強いからね

なんたって、私のご主人様なんだから」

「うん、頑張ろうね。アルフ、でも今日は遅いし疲れたから

帰ろうか、明日手分けして探そうね」

フェイトは月を見上げる

きれいな満月だった

「【バルディッシュ】も頑張ろうね」

《はい、主》

相棒の返事に満足しつつ、フェイトは帰路についた

朝

すずかの家 玄関

なのはは玄関の前に立っていた

インターフォンを押すと中から女性の声が聞こえ

ドアが開けられる

「おはようございます。恭也様、なのは様、忍様とすずかお嬢様が

お待ちですよ」

シヨートカットでメイド服の女性・ノエルがなのは達を迎えてくれた

なのははこの日すずかの家におよばれしていた

恭也は恋人であるすずかの姉、忍に会うためについて来たのだった

すずかの家は通称猫屋敷と言われるほど猫を飼っていて

なのは達は久々にいつものメンバーで猫達をかわいがろうと集まった訳である

恭也は一人で忍に会いに行ったので

なのははノエルに案内された

奥のテラスに着くとすずかとアリサが

猫と戯れながら紅茶を飲んでいた

「おはよう、なのはちゃん」

「おはよう、なのは」

「おはようございます、なのはちゃん」

「おはよう、すずかちゃん、アリサちゃん、ファリンさん」

「なのは様、お飲み物の方はいかがいたしましたでしょうか？」

ノエルの言葉になのはは苦笑しながら答える

「あはは、よく分からないのでお任せで」

なのはがそう言った直後

インターフォンが再び鳴った

「私に対応します、その後は忍さまの所へ向かうので

すずかお嬢様たちのことは、ファリン、貴方に頼みましたよ」

「はい、わかりましたお姉さま」

ノエルはこちらをもう一人のメイド・ファリンに任せ

玄関の方へと向かい

ファリンは飲み物の用意の為に出ていった

「今日は誘ってくれてありがとうね」

「ううん、こちらこそ、来てくれてありがとう」

一通り挨拶を済ませてなのはも椅子に座り猫をいじり始める

その時、なのはの鞆からユーノが降り立つ

今、なのはの家は留守なので、一人（一匹？）だけ残していくのも  
かわいそうに思い連れてきたのだった

だが、降り立った先でユーノが見たものは・・・

初めて見る小動物に興味津々で興奮しているっぽい小猫だった

（ヒイ！）

小猫の準備は万全、いつでも飛び掛かれるだろう

カウントダウンが始まる

ユーノからいやな汗が滝のように流れ落ちていった

挨拶してからずっと口を閉じ紅茶を飲んでいたアリサが口を開く

「今日は元気そうね」

「ふえ？」

なのはは一瞬何を言われたのかわからなかった

すずかが補足する

「なのはちゃん、この頃元気なかったから少し心配してたの」

「まあ、何か悩みが有るなら聞いてあげるわよ」

「アリサちゃん、すずかちゃん・・・」

自分の小さな変化に気付き、心配してくれる親友二人に

なのはは思わず、涙しそうになる

そんな感動的なシーンも

「きゅ~~~~~~~~ん!!」

という悲鳴でぶち壊される

悲鳴のした方を見てみると、ユーノが小猫に襲われていた・・・

「ユ、ユーノ君!!」

「駄目、アイ!!」

すずかが小猫を止めようとすも、そこは好奇心旺盛な小猫

その程度で止まるはずもなく、ユーノと小猫のおいかっこは続く

「は〜い、皆さん、おいしい紅茶とクッキーですよ〜」

そこへタイミングが良いのか悪いのか、ファリンが紅茶とクッキー

の乗った

ティーセットを持ってやってくる

小猫から逃げるのに必死のユーノは小猫を引き離そうと  
ファリンの足元で走り回る

しかし小猫も負けずに追いつがる

さて、ここで問題、周囲の誰もが認めるドジッ子メイド  
ファリンさんはこの後どうなるでしょう？

1・見事な体裁きでユーノ達をかわし

「ザ とは違うのだよ！ クとは！！」

2・強い光が目に入り

「目が！目が~~~~~！！」

3・ユーノと小猫を踏み潰し

「ふっ、またつまらぬものを踏んでしまった」

4・キ 肉マン主題歌風に

「私は（ドジで）完璧な（つもり）ファリンさん」

廻る（滑る）見事に（転ぶ）

ああ、心に愛があっても、完璧なメイドじゃないのさ

ファリンさん、ゴーフアイト」

さあ、どれ？

なのは「1じゃないかな」

アリサ「2なんかも面白いわよ」

すずか「ファリンなら3もやりそう」

達也「いや、どう考えても4だろ」

さて、答えはどれなんでしょうね。解説のユーノさん？

ユーノ「きゅ、きゅ〜」（僕的には悪戯な風が吹いて、パンツがち

らりの方が・・・）

ぎゃ~~~~~

~~~~~

女の子達にボコボコにされるユーノ

ユーノ「ぐふ！な、なぜだ？誰にもわからないように獣言語で言ったのに・・・」

あ、この世界作者の自由にできるんで、翻訳して彼女たちに聞こえるようにしました

ユーノ「ば！馬鹿な・・・、ふふふ、だが、僕を倒しても、第2、第3の僕が・・・ぐふっ！」

ユーノ死亡

はい、淫獣はほつといて、次行きましょう

ファリン「あれ？そういえば達也君はいつのまに？

というかなんの話をしてるんですか、皆さん？」

はたしてファリンさんの運命は！？

ファリン「え？ちょ・・・」

じゃ、答え行ってみよう

ファリンの足元を走り回る2匹

「え、ひゃ、ほ、はわわ」

それを必死のかわそうと廻りながらじたばたするファリン

おや、3か4が正解か？

いや、太陽の光が入ってきたぞ2も捨てがたい

かわしければ1も有りうるぞ

さあ、結果は・・・

なかなか頑張つてかわし続けたが、そこはドジッ子メイド

皆さんの期待は裏切りません

散々回転して目を回して、フラフラの状態

ワックスかけたばかりでつるつるの床

この条件がそろえば・・・

「はう」

滑って転ぶのは必然ですね

芸術的なドジでティーセットを吹っ飛ばしながら後ろに倒れるファリン

「ファリン！危ない！！」

「すぐか達の助けも間に合わない

このまま頭を打ってバタンキューかと思われたその時

「だから、4が正解だって言っただろ」

「達也が現れ、ファリンを後ろから片手で支えて

ティーセットももう一方の手で受けとめた

「ま、負けた・・・orz」

「と言うかこれ、勝負だったのか？」

「いえ、ただの遊びです

「は！！」

「どうやら、ファリンが気がついたようだ

状況を確認、自分は目を回して倒れた

自分を支えている達也、ティーセットも彼が持っている

これにより導き出される答えは・・・

自分がすぐか達に迷惑をかけ、それを達也が助けてくれた

状況の確認が終わったファリン

「はうあゝ！ごめんなさい皆さん、そして、達也君ありがとう！！」

その声は屋敷中に響きわたったため

「またやってる」

「まったく、あの子にも困ったものです」

数分後、ファリンは忍とノエル（主にノエル）から説教をくらいま

したとさ

「気を取り直して、庭のテーブルでお茶をする4人

ちなみにファリンはノエルに怒られている際中で席を外している

「しかし、本当にすぐかの家って猫天国よね」

「お前の家も似たようなもんだろ」

「否定はしないわ」

「アリサの言葉に達也が突っ込む

ちなみにアリサの家は犬天国である

「でも、子猫達かわいいよね」

「うん、里親に出すのが決まった子も居るから少し寂しいけどね」  
「そっか」

子猫を撫でながら言うすずか

その表情は寂しそうだ

その後は雑談をしながらお茶を飲みつつ猫達をかわいがる  
穏やかな時間が過ぎた

しかし、平和は長くは続かないものである

月村家の庭は広い為、家の周りには森が広がっている

その奥で先ほどユーノを追っかけた好奇心旺盛な子猫が青い宝石を  
見つけた

「！！！」

なのはとユーノはジュエルシードの反応を感じ取った

『なのは！』

『うん、近いね』

『どうする？』

なのははみんなを見まわす

それぞれ、猫と遊んでくつろいでいるようだ

『どうしよう？』

理由も無しに森に行くわけにはいかない為

なのはは行動を起こせなかった

『・・・は！そっだ！』

急に森の方へ走り出すユーノ

「ユーノ君？」

（！！そっか）

なのはもユーノの行動の意味がわかり  
直ぐに行動を開始する

「ユーノどうかしたの？」





「ユーノ君！しっかりして！！」

なのははユーノを掴み上げ、勢いよくシェイクした

「ああ、ゴメンなのは

た、多分、あの子猫の大きくなりたいたいという願いが正しく叶えられたんだと思うよ」

「そ、そうなんだ・・・」

なんとなく頭を抱えるなのは

「封印！早く封印しようなのは！！」

ユーノは猫の恐怖から開放される為、早く封印したいらしい

「そうだね、このままじゃすずかちゃんもお世話をするの大変そうだし」

いや、それはそうですがね、ちょっと論点が違いますよ・・・

「じゃ、【レイジングハート】！！」

無視ですか！！

【レイジングハート】を起動しようとするなのは

その背後から金色の雷が奔る

その雷は寸分狂いなく猫に直撃した

「ぎにゃ~~~~~！！」

子猫が倒れる

なのはは振り返る

少し離れた場所に人影が見えた

そこには金の髪に漆黒の戦斧を持つ少女・フェイトがいた

「【バルディッシュ】、フォトンランサー連撃」

《了解です、主》

【バルディッシュ】から雷光が連続で放たれた

なのはは【レイジングハート】を起動する

バリアジャケットを身にまとい

子猫の背に乗り、障壁を張る

「魔導師？」

フェイトはすぐさま猫の足元に狙いを変える

足元に着弾した雷光に驚き、バランスを崩す猫

「わ！ふわっ！うわ〜！」

なのはは何とか姿勢を整えて着地する

その光景を少し離れたところで見つめる視線があった

蒼い戦闘服を身にまとった少年・蒼夜である

「あの二人が接触したか、さてこの戦闘どうなるか・・・」

蒼夜は二人の初めての戦闘を見守っていた

なのはは着地のあと、猫を狙った人物に視線を向ける

しかし、そこにはもうその人物はいなかった

（どこに？）

その時、上に気配を感じた

「え！？」

その人物は自分と同じくらいの女の子だった

「同系の魔導師、ロストロギアの探索者か」

「やっぱり、僕と同じ世界の住人

しかも、ジュエルシードのことを知っている」

なのはに視線を向けたまま、少女・フェイトは

先日あった少年の言葉を思い出す

（「君たちは、これから一人の女の子と出会うだろう」）

（この子が、彼の言っていた・・・）

（「ああ、あいつなら君たちを・・・」）

自分たちを何だと言うのかはわからない

だけど、ジュエルシードを持ち帰るため

こんなところでつまづくわけにはいかなかった

「ロストロギア、ジュエルシード」

《サイズフォーム、セットアップ》

【バルディッシュ】が變形し、金色の刃が現れる  
その形は鎌そのものだった

「申し訳ないけど、頂いていきます」

「!?!」

すばやく切りかかるフェイト

なのはは飛行魔法を使いぎりぎりでかわす

《フォトンセイバー》

「やっ!」

フェイトは光の鎌を飛ばし攻撃してくる

《プロテクション》

なのはの周りに桜色の障壁が現れる

フェイトの攻撃がなのはの障壁にぶつかり

煙に包まれる

「なのは!?!」

ユーノが声を上げる

煙から飛び出したなのはには傷はない

障壁が完璧に防いでくれたようだ

「は!」

なのはは【レイジングハート】を構える

フェイトが切りかかってきたのだった

なのはは何とかその攻撃を止める

「なんで、なんで急にこんなことを」

「話しても、多分意味がない」

「そんなこと・・・」

なのはが押し返しいったん距離をとる

二人とも砲撃系の魔法を準備する

《ダイバインバスター、スタンバイ》

《フォトンランサー、ゲットセット》

二人とも構えたまま動かない

どちらかが動けばそれが決定打になる

だが、だからこそ動けない

(私と同じくらい、きれいな瞳ときれいな髪、だけど・・・)  
なのはが思考していたその時、子猫が意識を取り戻したのか動きを  
見せる

「にゃ〜〜」

なのははその瞬間、猫に気を取られた

それが命取りになる

「ごめんね・・・」

フェイトはそう呟き、フォトンランサーを放った

「あー!!」

砲撃はなのはの足元に当たり、なのはは吹き飛ばされた

「やはり、あの子が勝ったか・・・、なのはは実践不足だな」

そう呟き、蒼夜は走りだした

「なのは!!」

ユーノが叫ぶがなのはに反応はない

どうやら気絶しているようだ

そこに一陣の風が吹く

その風は一人の少年だった

(蒼夜!?)

蒼夜はなのはを抱え、着地する

そのまま、なのはを寝かせ、怪我がないことを確認する

どうやら右手を捻ったが大きな怪我はないようだ

「よし、大丈夫だな」

「蒼夜・・・」

「ユーノ、誰か呼んできてくれ」

「え!?!」

「このまま、ここに寝かせておくわけにはいかんだろ」

「でも、君は?」

「少し、彼女と話す事がある」  
そう言つて、蒼夜はフェイトの方に視線を向ける  
フェイトもジュエルシードの封印が終わったところで  
こちらに視線を向けていた  
ユ一ノはもう一度心配そうになのはを見る  
「大丈夫だ、なのははこれ以上傷つけさせない」  
ユ一ノは少し悩んだ後、切り出した  
「・・・君が」  
「ん？」  
「君が彼女の仲間という可能性も捨て切れない」  
「その根拠は？」  
「仲間じゃないという証拠もない」  
「・・・はあ」  
「な、なんだよ」  
「いや、そこまで信用されてなかったかと思つてな」  
「え、あ、いや」  
「俺の正体、気付いてるんだろ？」  
「!!!」  
「それが証拠にならないか？」  
お前が知っている俺は、なのはを裏切る奴かどうか」  
「わかつた、後を頼むよ・・・、達也」  
「ああ」  
ユ一ノは助けを呼ぶ為に走り出す  
そして、蒼夜こと達也はフェイトと対峙するのだった  
フェイトはフェレットが立ち去るのを見つめ  
すぐ、少年へと視線を移す  
「その子が、例の・・・」  
「ああ」  
「彼女じゃ、私たちをどうにかする事なんてできないよ」

「今はまだ・・・な」

「・・・あなたは何がしたいの？」

「俺はこの街に起きた問題を解決したいだけさだが、こいつは君を救おうとするだろうな」

「何から？」

「さてね、それはわからない

ただ、君が何かを抱え込んでるのは俺でもわかるよこいつは俺以上にそういうものに敏感だ」

「私は何かを抱え込んでなんか・・・」

「自分で気付いていないだけだ」

「そんなこと、ない」

「なら、なんでそんな顔をしている？」

「そんな表情を・・・」

「・・・」

「俺では君を救えないかもしれない、だけどこいつならきつと君を・・・だから、話してみてくれないか」

「・・・話すことなんてなにもない」

（そう、なにも・・・）

そう言つて踵を返すフェイト

少年はその背中を見つめていた

ユーノはアリサ達になのは事を伝えようと奮闘していた

「きゅ、きゅ〜！」

アリサの袖を引っ張りながら、懸命に鳴いている

「ど、どうしたのユーノ？」

「・・・ひょっとして、なのはちゃんに何かあったの？」

「きゅ〜！」

「！それじゃ、早く助けに行かなきゃ」

「そうだね、さっき達也君が探しに行ったから大丈夫だとは思っけど」

そんな会話をしていると森からなのはと小猫を背負った達也が出てきた

「「なのは(ちゃん)！？」」

「大丈夫だ、おおきな怪我はない、右手の捻挫と軽く脳震盪を起こしているだけだ」

達也の言葉に二人は安堵する

「とりあえず、中に入れよう少しベットで休ませた方が良い」

「うん、直ぐに用意するね！」

そう言っ、さすがが駆け足で家の中に入り、ノエル達に頼んでベットと治療の

用意をしてもらう

達也とアリサはなのはを気遣いながらゆっくりと部屋まで移動した

しばらくして、意識を取り戻したなのはは状況を説明した

と、言っても、達也がほとんど憶測(なのははそう思っている)で話していたものが、完璧なものだった為、その通りと言う事で話を濁した

「達也君ごめんね、ありがとう」

「気にするな、今はゆっくり休め」

「うん」

そう言っ達也はベランダに出て行った  
なぜか、ユーノもその後を追う

少し気になりながらも他の面々へ謝るなのは

「ごめんね、すずかちゃん、アリサちゃん

忍さんたちも、ごめんなさい」

「大丈夫？」

「うん、もう平気だよ」

(また、嘘ついちゃったな、本当にごめんね、皆)  
なのはは、嘘をつきつづける事に罪悪感を感じているのだった

ベランダには達也とユーノが居た

「さて、俺に聞く事があるんじゃないか？」

「話してくれるのかい？」

「・・・話せない事のほうが多いな」

「なら、今は聞かない、話す気になったら話してくれ」

「ありがとう、・・・二つほど確実に言える事は

俺はお前達の敵じゃないという事と

今まで言った事に嘘は無いという事だ」

「分かった、信じるよ。」

さっきの娘はどうだった？」

「少し話をしたが、すぐに立ち去ったよ

何もわからなかったという事だ」

「・・・そうか、なぜ彼女はジュエルシードを・・・」

「また会う事になるさ、ジュエルシードを集める限り、必ず」

「・・・」

「それと、俺のことはなのはには言わないでくれないか」

「なぜ？」

「只でさえ慣れない事をやって負担が掛っているのに

蒼夜の正体が俺だと分かれば、それだけであいつの負担になるからな

だから、この事件が終わったら自分からきちんとした形で話すさ」

「・・・分かった」

そこまで話したところですかがベランダに出て来た

「達也君、なのはちゃんのこともあるし

お姉ちゃんが車で送ってあげるって言ってるんだけどどうする？」

「そうだな、お言葉に甘えよう」

こうして、月村家での1日が終わろうとしていた



夜

高町家　なのはの部屋

「あの娘は恐らく、いや確実に僕と同じ世界の住人だ」

「ジュエルシードを集めていけば、またあの娘とぶつかっちゃうのかな？」

「・・・うん」

(不思議の程に怖くは無い、けど、なぜか哀しい

だってあの娘は・・・、あの娘のあの表情は・・・)

「話しをしてみよう」

(そうすれば、きっと・・・)

同時刻

フェイトの部屋

「おめでとう、フェイト、この調子ならすぐ集まるね」

「うん、ジュエルシードシリアル14

でも、何個かはあの子達が持つてるんだよね・・・」

「フェイト・・・」

「大丈夫だよアルフ、私は迷わない

待ってて、母さん、直ぐに帰ります」

(あの子達の事は気になるけど  
それでも、私は・・・)

同時刻

達也の部屋

「これでお膳立ては済んだ」

(これから、どうなるのかはわからないけど  
なのはならきつとあの娘を救ってやれるはずだ)

「その為にも俺もやれるだけの事はやらないとな」

(もう、今までの平穩には戻れないけど

今度は新たな平穩の為に・・・)

それぞれがそれぞれの思いを胸に歩き出す

今はまだ絶対に交わらない道

それが交わる時、この物語は終着点へと向かうのだろう

t o b e c o n t i n u e d

ライバル！？もう一人の魔法少女なの！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ユーノに正体がばれました、少し早いかと思いましたが大丈夫でしょうか？

今回も達也はまったく戦闘をしていません（泣）

次回、次回こそは・・・！！

感想等お待ちしております。ではでは

ここは湯のまち、海鳴温泉なの（前書き）

遅くなりましたが、第五話投稿です。

作者はとらはをやったことありません

この話には、原作には出てこないキャラクター  
が出てきますが、オリジナルキャラクターとして  
受け入れてください（笑）

なお、この話はかなりキャラが壊れています。

こんなのリリカルなのはじゃない  
と思われる方もいると思いますが

見捨てず読んでいただけるとうれしいです。

## ここは湯のまち、海鳴温泉なの

世間で大型連休と言われるこの時期  
なのは達も仲の良い三家族 + (高町家、月村家、バニングス家 +  
達也)

で温泉旅行に来てみました

ここは湯のまち、海鳴温泉なの

朝

温泉までの道のり

二台の車が温泉に向かって走っていた

メンバーは第1号車

士郎、桃子、美由希、なのは、達也、アリサ、すずか、エロイタチ  
(笑)

の7人 + 淫獣1匹

第2号車

忍、恭也、ノエル、ファリン

の2人 + 2機・・・もとい、4人

の計11人 + 淫獣1匹である

尚、月村家及びバニングス家の両親は仕事の為

少し遅れるとの事

と、言う訳で楽しい楽しい地獄の旅の始まり始まり

皆で楽しい旅行、しかしなのはは時折、何かを思い出しては  
暗い表情をしていた

それを見ていたユーノが声をかける

『なのは、本当に旅行中くらいゆっくりしなくちゃ駄目なんだからね』

『分かってるよ、大丈夫』

（あの女の子のこと、アレから見つかっていないジュエルシードの事考える事はいっぱいあるんだけどね・・・）

そんな事を思いながら窓の外を見るなのは

その表情は、やはり冴えないものだった

（でも、せつかくユーノ君や蒼夜君がゆっくりしろって言うてくれたのに

無理するわけにもいかないよね）

時は前日にさかのぼる

## 回想

今後の対策を考える為に集まった、なのは達はとりあえず現状維持という結論にいたり、余った時間を世間話で過ごしていた

「そういえば、蒼夜君は連休、どこか行くの？」

「・・・ああ、いや、まあ、その、少しな」

「？何処行くの？」

「・・・さてね、サプライズなんだと」

「サプライズ旅行か、へえ、面白いね」

「そう言うのは何処行くんだ」

「私？私は家族と友達の家族も一緒に温泉旅行だよ」

「そうか、いいな温泉」

「うん」

「なのは、今回の旅行はゆっくり体を休めようね」

「うん、ユーノ君もね」

「そうだな、この頃いろいろあったんだから、たまには何も考えずにだらだら・・・」

「じゃなく、ゆっくりして来い」

「そうさせてもらっよ、この間は結局休めなかったしね」  
回想終了

と、いう風な事があったのである

(このままじゃ肉体的にはともかく、精神的にリラックスできないよね)

だから、今回は私も年相応にお子様らしく、遊んじゃおうかな)  
なんとか思考を打ち切り、リフレッシュしようとするのは  
そんな彼女を心配そうに見つめる一人と一匹の姿があったのに気付くことは無かった

そうこうしている内に、旅館に着いたのだった

ユーノは大変困っていた

旅館に着いたのは良いものの

お風呂好きの美由希が早速温泉に行こうとするもんだから  
どうせなら皆で行こうということになり

達也たちとともに男湯に行こうとしたユーノだが

「じゃ、ユーノ君は私たちと一緒に入ろうね」

「きゅ！きゅ！きゅ！きゅ！」え！ちよ、なのは！あ〜れ〜」

と、なのはに拉致られ女湯につれてこられた

目の前では女性陣が一斉に服を脱ぎ始めていた

「はっっ」

ユーノは背を向け、女性陣を極力見ないようにする

(見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目  
だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ  
駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見  
ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目  
だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ  
駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ駄目だ見ちゃ)

某残酷な天使の主人公並である

結構紳士なユーノ、これでなぜエロイタチなんて不名誉なあだ名が





『その状況で何を言っても説得力無いな』

『うぐ・・・と、とにかく助けてくれよ〜心の友と書いて心友だろ、僕達は』

『いつから、心友になったかは知らないが、もう女湯に入っているお前を』

どうやって助けろというんだ？』

『そ、そこを何とか』

『・・・それにな、こっちは来ないほうが良いぞ』

『なぜに？』

『今、土郎さんと恭也さんが、「いくらペットとはいえ、家の娘（妹）達の裸を見ることは万死に値する！！」とか言うてからな、後で殺されないように気をつけるよ、心友？』

『・・・』

『お〜い』

『・・・』

『ま、自業自得だな、んじゃ切るぞ』

念話を切る達也

ユーノの命運もここまでだった・・・

（ふふ、燃えたよ、燃え尽きた真っ白にな）

真っ白な廃人になったユーノを

「じゃ、ユーノ君行こうか」

なのはが浴槽へ連行した

当然、ユーノに抵抗する力は残ってなかった

浴槽の方では目を瞑って極力何も見ないようにしていたユーノだが所々ちら見したり、アリサに体を洗ってもらったりして悶えながら過ごした

ユーノだったそうだ・・・

一方、達也の方は土郎と恭也がユーノを懲ら死める（笑）為の用意に出かけた為

一人で温泉に浸かっていた

そこへ【天龍】が話し掛けてきた

《若、気付いていらっしやいますか？》

『ああ、あの娘達が近くにいるな』

《はい、彼女たちがいると言う事は・・・》

『まあ、俺達みたいに休養にきた訳でないだろうな

おそらく、あるのだろう、近くにジヨエルシードが・・・』

そう言つて温泉からあがる達也

《行きますか？》

『ああ、様子を見るぞ。まずは・・・』

《近くに居るのは使い魔の方ですね》

『よし、行こうか』

《はい》

達也は着替えを済ませ、脱衣所を出ていった

「じゃ、お姉ちゃん」

「私たちは探検してくるね」

なのは達は温泉から上がつて旅館を探検する事にしたようだ

「はい」

「気をつけてね」

と、送り出す姉二人

ユーノは美由希の肩でぐったりしている

そんなユーノを横から驚つかみにした者がいた

「さ、ユーノ、行くわよ」

アリサだ

アリサは反対の手をにぎにぎさせながらユーノをつかみ上げる

その手の意味は？

おそらく、“体を拭いてあげる”という意味だろう

ユ一ノは先程の体を洗ってもらったときの事を思い出し  
また遊ばれるのかと、ぐったりした

温泉から上がったなのは達

浴衣を着て準備万端、さあ行こうと廊下を歩いていると

声を掛けてくる人物がいた

「はーい、おちびちゃん達」

目を向けると、そこには

オレンジ色の髪をした女性がいた

女性はなのはに近づくと遠慮も無しに言った

「君かね、家の子をアレしてくれちゃってるのは」

「は、え、その」

「あいつの話しだと、うちらをどうにかできるみたいだけど  
あんまり賢そうにも強そうにも見えないし

普通のカギんちょにしか見えないけどね」

(何?この人?)

いきなり声を掛けてきてしかも、馬鹿にされたのだから

なのはでなくても、なんだこいつと思うだろう

そこへ助け船を出す人物が一人

「なのは、お知り合い?」

「ううん」

なのはが否定したのを受けアリサは強気な態度で対応する

「この子、あなたの事を知らないって言ってますけど、どちら様で  
すか!？」

「ふむ」

アリサと女性のにらみ合いが勃発

いや、正確にはアリサが一方的ににらみつけていて

女性の目はなのはに向いていたのだが

(!!!)

その時、女性にだけわかるように放たれた強い殺気があった



「まあまあ、くつろぎ空間だし、いろんな人がいるよ」  
「だからって、限度つてもんがあるでしょが、あくもつ、気分悪い」  
なのはの言葉も意味がないようだ  
その後、アリサを静めるのになのはとすずかはかなりの苦勞を要したという

達也はなのは達の居る所とは反対にある

男湯への廊下に居た

腰に帯刀した【天龍】に手をかけた体勢で構えていた  
女性がなのは達に手を出していたら

ただではすまなかっただろう

とりあえず女性はなのはから離れたみたいなので  
構えをととき、ユーノに念話を送る

『ユーノ聞こえているな』

『達也？ごめん彼女を追い払ったのは君だろうか？』

「いったい何をやったんだ？」

『別に変わった事はやってない、少し殺気をぶつけたただけだ』

『殺気つて・・・』

『それより、俺は少し離れる、なのは達の事頼んだぞ』

『え！おい！！』

強制的に念話を切る達也

「あっちだな」

達也の視線は森のほうへ向いていた

《そのようですね》

達也はその場所に向うことにした

同時刻

森の中

フェイトは木の枝に腰掛け【バルディッシュ】を抱えて精神を集中し  
ジュエルシードを探していた

そこへ彼女の使い魔から連絡が入る

『あゝ、もしもしフェイト、こちらアルフ』

その使い魔は先ほどの達は達に声をかけてきた

オレンジ髪の女性だった

『うん』

『ちょっと見て来たよ、例の白い娘』

『そう、どうだった？』

『うーん、対したことはないね、フェイトの敵じゃないよ』

『そう、こっちはジュエルシードの位置がだいたい特定できたよ』

『んゝ、ナイスだよフェイト、さすが私のご主人様だ』

『ありがとうアルフ、夜にまた合流しよう』

『はいはい、あ、でも気を付けなよフェイト』

『どうやら、あいつも来ているみたいだからさ』

『あいつ？』

『ほら、蒼夜だか呼ばれてるあの少年さ』

『・・・そう、彼も来てるんだ』

『ホントに気をつけるんだよフェイト』

何かあったら直ぐに呼び出してね

速攻で駆けつけるからさ』

『うん、わかった、じゃあねアルフ、温泉満喫してきなよ』

『今度はフェイトも一緒に入るうね、じゃあね』

念話を終えたフェイトは再度ジュエルシードの位置特定

の為に集中しようとするが、蒼夜や白い少女のことが

頭から離れず、集中し直すのに少し時間が掛ってしまった

その光景を少し離れた木から見ている人物がいたことは

気付く事ができなかった

「見つけた」

達也は見つからないように気配を消していた

《どうやらまだ見つけてはいないようですね》

「ああ、発動はしていないようだが・・・

ここはあの場所から付かず離れずの距離だ

魔力に反応して、やつらが現れる可能性がある」

《我々の本来の仕事、というわけですね》

「そういうことだな、ジュエルシードのことは

あいつらに任せる、俺たちはやつらの動きに

警戒しておくぞ」

《了解しました》

達也はその場から姿を消し、ジュエルシードとは別な反応を警戒して周辺の探索を開始した

数時間後

旅館　なのは達の部屋

その後、達也が帰ってきて

体が冷えていたので、温泉に入り直し

部屋に戻った時に見た物は・・・地獄だった

バニングスと月村、両家の両親が到着し宴会になったのだろうか

すっかり酔っ払った父親達が何やら騒いでいる

「・・・家の娘が一番だ！！」「」

どうやら娘自慢らしい

「家のアリサは頭が良くて、強気なツンデレっ娘なんだ！

こんなに可愛い娘が他にいるわけないだろう！！」

「家のすずかは器用で、お淑やかでやさしい娘なんだ！

こんなに可愛い娘が他にいるわけないだろう!!」

「家のなのは可愛くて、可愛くて可愛い娘なんだ!

こんなに可愛い娘が他にいるわけないだろう!!」

ああ、もう訳分からん、特に最後!!

とりあえず、なのは達の所に移動して事情を聞いてみる

「ごめん、家のお母さんが「誰の娘が一番可愛いでしょかね?」

なんて言ったからあんな事になってるの」

なのはの言葉に桃子を見る達也

・・・笑っていた、それはもう楽しそうに

次に恭也に視線を向ける

・・・死んでいた、いや表現が違う、正しくは魂が抜けていた

恐らくは桃子さんにやられたのだろう

高町桃子は自分が楽しむならばどんな犠牲も厭わ<sup>いと</sup>ない女なのだ

そんな桃子の座右の銘は“他人の不幸は密の味”

つまり、桃子にとって一番楽しいことは、他人の不幸を見ることな

のだ

そして、その犠牲になるのはいつも恭也や達也といった男性陣だ

さて、ここで問題です

男性陣・恭也・父親達〓X

この方程式の答えは?

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

X〓次のターゲットは達也君????? or z

達也は逃げ出した・・・、が





「あんたら、なんでこんな時だけチームワークがいいんだ!」  
いや、むしろこんな時だからではないだろうか  
と、そこに達也を助ける三つの影

「『いいかげんにしなさい!!』」

なのは、アリサ、すずかの3人娘だ

達也を包囲網から救い出し、父親達の前に仁王立ちになる

父親達は娘にしかられてしゅんとしている

達也はかなりフラフラの状態なのでなのはに支えられて立っていた

「達也君、大丈夫?」

「すまん、助かった」

今回は軽めで済んだと、安堵する達也

ところがどっこい、悪魔はこんな事では満足しません

静かに達也たちの背後に忍び寄り背中を押す

「うわっ!」

「『きゃ!』」

ちゅ

フラフラの状態の達也はふんばる事もできず

なのはたちを押し倒す形になってしまった

「いたたた、大丈夫か、お前ら」

「大丈夫じゃないわよ、いきなり何!」

「あら、達也君大胆ね、こんな所で娘達を押し倒すなんて」

白々しく桃子が言う

「いや!あんたが押し込んだんでしょうが!」

そう言いながら立ちあがり桃子の顔を見た達也は固まった

悪魔が盛大に笑っていた

そして、後ろから殺気と歓喜が湧き上がる

おそろおそろ、後ろを確認

「『娘(妹)が押し倒されて、襲われた……』」

「いや、襲ってないですから!」

達也の突っ込みも効果なし



腐っても剣士の二人

その殺気はすさまじく、今にも御神流の奥義を出そうとしている

「く、ここは逃げるしかないか!!」

全速力で逃げ出す達也

「くくくまぐちやくがれ!!」「くくく」

それを追いかける男達

その姿はあっという間に見えなくなった

残された女性陣はというと

「まったく、いつもいつも何考えてんのよ

私達の気持ちとかはどうするわけ!!」

いつもの事なので呆れるしかないアリサ

「あはは、そうだねアリサちゃん」

すずかも苦笑しながら応えるが

(うまくやらないと、許さないよお父さん)

と内心ではそのようなことを考えていたとか・・・

そして

「うふふ、やっぱり達也君をからかうのは

面白いわ、次はどうやってからかおうかしら」

悪魔、未だに健在

(誰か この人を何とかしてくれ~~~~~)

~~~~~ (~~~~~!!) 達也の

心の叫び

「.....」

そんな中、なのはは真っ赤になって自分の唇を抑えながら固まっている

「どづしたの、なのはちゃん？」

「へ、いや、その、なんでもないよ」

「そう言えばさっき、変な効果音なかった？」

「!!..!気のせいだよ気のせい!!..!」

「そうかな？」

「そうそう」

なんとか誤魔化そうとするのはに  
桃子は二人に聞こえないように問う

「達也君とのキスの味はどうだった？」

ボン！と音をたてて赤くなるのは

「お母さん！！」

「おっほほほほほほほほほほ」

突然追いかけてこを始める高町親子に首をかしげる二人  
こういう状況をカオスと言うんですね（笑）

とまあ、收拾がつかなくなってきたので結果だけ述べると  
何とか落ち着いたなのはは

（アレは事故だからノーカウントだよな？）

という、ことで忘れることにしようだ

アリサとすずかは、なんか釈然としないながらも問い詰めるのは止  
めたそうだ

一方、男性陣の方と言うと

達也はなんとか追っ手をふりきり、森の中で隠れていたそうだと  
結婚を迫っていた二人は

「「達也君と結婚するのは家の娘だ！！」」

と、二人で婿を賭けた戦いが勃発していたり

殺気を撒き散らしていた二人は

「「キシヤ~~~~~!!!!」」

と、やり場のない怒りを二人で殺し合いをする事で解消していたり  
したそうなの・・・

美由希以下あの場にいなかった女性陣は温泉に入っただけ

そこで、娘（妹）と一緒に温泉に入った罪で

半殺しにされたフェレットを見つけ大騒ぎになったとか

とてもとても、楽しい地獄を味わった面々なのでした（笑）

深夜

森の中 川の辺

ようやく皆が寝静まった頃

ジュエルシードが発動

なのは達が急いで現場に向かっていたが

ジュエルシードは

あらかじめ予め動いていたフェイトたちが封印していた

「あなたのお母さんはなんでこんな物、欲しがるんだろうね?」

「さあ、でも理由は関係ないよ、母さんが欲しがってるなら集めるだけ……」

アルフの問いにフェイトが答える、そこへ第三者が介入した

「なるほどね、君たちがそれを集める理由は母親か……」

声のした方に視線を向けると蒼夜が現れた

「先を越されたようだな」

フェイトの手におさまっているジュエルシードに目を向ける蒼夜

「……遅かったね、もう少し早く来ると思ってたよ」

「いや、悪魔の策略から逃げていたらついな……」

蒼夜は顔を真っ青にして俯いた

「悪魔?」

「ああ、まあ気にするな、それより、到着のようだな」

蒼夜の言葉に気配が近づいてくるのを察知したフェイトとアルフ

その方向に目を向けてみると

フェレットを肩に乗せ

白いバリアジャケットを装着した少女がいた

なのはが現場に到着してみても驚いた、ここには居ないはずの蒼夜がいたのだ

「蒼夜君!! どうしてここに?」

「俺もこの近くに来ていたのさ」

「そうなんだ・・・、あつ!!」

その答えになにか釈然としないものを感じたが視線をずらしある人物を見た所でそんなちっぽけな事は忘れ去っていた

「あくらあらあら、子供は良い子でって言わなかったか?」

その人物は、昼間見たオレンジ髪の女性だった

「それを・・・、ジユエルシードをどうする気だ!?

それは危険な物なんだ!」

クーノが叫ぶ

「つか、あなた生きていたのですね・・・ちつ

あ、いや、気を取り直して本編いつて見よう

「・・・続けて良いの? あつそ、あくゴホン

さあね、答える理由が見つからないよ

それにさ、あたし親切に言っただよね?

良い子にしないとカブツと行くよって」

「!!」

そう言うのと女性の体の変化が始める

ものの数秒でオレンジ色の狼に変化した

「やっぱり、あいつ、あの娘の使い魔だ」

「使い魔?」

「そうさ、私はこの子に作ってもらった魔法生命製作者の魔力で生きる変わり命と力の全てを賭けて守ってあげるんだ」

アルフがフェイトの方を向き言葉をかける

「先に帰ってて、直ぐに追いつくから」

「うん、無理はしないでね」

「OK!!」

オレンジ色の狼がなのはに飛び掛る  
それをユーノがシールドで止める

「なのは、あの娘をお願い!!こいつは僕が」

「やらせると思ってたのかい!？」

「やらせて見せるさ!!」

ユーノの魔方阵が輝き出す

「これは、転移魔法!しまっ!!」

使い魔が最後まで言う前に転移魔法は発動した

ユーノと使い魔の姿が消える

なのはは心配になり蒼夜に視線を向けた

「大丈夫だ、あまり遠くには転移してない

西に約百メートルといったところだ」

それを聞いて安堵しつつも一人の少女に視線を向ける

「防御に転移魔法、良い使い魔だね」

「ユーノ君は使い魔ってやつじゃないよ

私の大切な友達」

なのはの言葉を遮るようにドンという破裂音が聞こえた

「どうやら、ユーノとあの使い魔が戦闘を始めたようだな」

目は黒い少女に向けたまま蒼夜が言う

「・・・蒼夜君はユーノ君をお願い

こっちは私が・・・」

《若!!》

「・・・いや、俺にもやる事が出来たようだ」

「え?」GYAA

AAAAAAAAAAAA!!」・・・何?今の?

なのはの疑問に声に応えるように咆哮が上がる

「あれが、俺たち守護者が存在する理由のひとつだ」

その咆哮のする方へ、ゆっくりと歩き出す

「蒼夜君たちが存在する理由・・・」



「あちらは俺に任せろ、お前は彼女のことを頼む」

その際、黒い少女と目が合ったが特に

何も言わずにその場を離れていった

蒼夜の後ろ姿を見送った二人は数秒の沈黙の後

黒い少女の方から話を切り出す

「それで、どうするの？」

「なんとか、話し合いで解決できるってことないかな？」

なのはの提案に少女は否定の言葉を返す

「私はジュエルシードを集めなければならない

そしてあなたも同じ目的なら、私達は敵同士ってことになる」

「だから、そういうのを簡単決め付けない為に

話し合いって必要なんだと思う！」

なのはの言葉に少しだけ動揺する少女

だが、直ぐに表情を戻し、答える

「・・・話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ

きつと何も変わらない、伝わらない!!」

その言葉と共になのはの背後に回り、切り掛かる少女

なのははそのスピードに一瞬、少女を見失うも

何とかその一撃をかわし、飛行魔法で空へと逃げる

「でも、だからって・・・」

「賭けて、それぞれのジュエルシードを一つずつ」

「!!!」

またも少女を見失うなのは

上空からの高速の攻撃を何とかかわす

なのはは少女のスピードに翻弄され防戦一方をしいられるのだった

「ちい、ちよこまかちよこまかと！」

森の中を狼が駆ける

その前方には懸命に逃げるフェレット・・・ユーノがいた

「使い魔を作るほどの魔導師がどうしてこの世界に来ている

それに、ジユエルシードの何を知っている!？」

「答える理由がないと言っただろう!！」

ユーノに飛び掛かる狼の使い魔

「く!」

横に飛びかわすユーノ

「もらった!！」

追撃がユーノを襲う

躲すのは不可能と判断し、バリアを張るユーノ

「あまいよ!！」

使い魔の攻撃がバリアに当たった瞬間

バリアが分解を始める

「障壁分解能力だって!しまった!！」

バリアが突破され、攻撃がユーノに迫る

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

AAAAAAAAA!！」

「!！」

左から赤黒い影が使い魔を襲う

攻撃を中断し、数回跳んで躲すが

その威力は凄まじく、二人は風圧で吹き飛ばされた

「な!なんなんだい、あれは!！」

「ぼ、僕にも分からない」

二人が赤黒い影の姿を確認する

赤黒い筋骨隆々の身体に角の生えた獅子の顔を持つ魔物がいた

「あいつは、俺が相手をしよう」

森の奥から蒼夜が現れる

「あんた、あれがなんだか分かるのかい？」

「・・・俺たちの存在意義だよ」

苦笑して答える蒼夜、そのまま地面を蹴り魔物に接近する

「【天龍】」

《蒼破刃》

達也が【天龍】を振ると、そこから蒼い魔力を纏った風の刃が放たれた

「GRUUUUUUUUU!!」

魔物に寸分狂いなく迫る風の刃

魔物は防御するがその刃の威力に押され

吹き飛ばされ、森の中に消える

「たつ・・・、蒼夜すまない」

「気にするな、それより気を抜くなよ

まだ、終わってない」

「ああ」

「GRAAAAAAAAAAA!!!」

草陰から魔物が飛び出し、達也たちに襲いかかった

それを散開することでかわす三人

魔物は掌に炎の塊を生み出し

空へと逃げた蒼夜に追撃をかける

蒼夜は冷静にその炎の塊を【天龍】で切り裂く

すると炎の塊はあっさり霧散した

「あまり時間をかけるわけにも行かないんでな、終わらせるぞ?」

蒼夜はその瞬間から、空中に“立った”

「足場のサポートは任せた」

《お任せください》

【天龍】の声を合図に、蒼夜は空中を“蹴る”

「天翔あまがけ」

その言葉とともに蒼夜の身体が掻き消える

そこからは一方的な展開だった

高速移動術である天翔という技を使い

地面を、木を、空を蹴り、魔物の反応できない速度で

縦横無尽に切り裂いていく

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

A!!!」

数秒後、魔物は光の粒子となりあっけなく消え去ってしまった

「・・・魔力体？」

「ああ、その通りだ

あいつらは理性を無くした魔力の塊

そいつらを純粋な魔力に戻してやるのが

俺たちの仕事の一部ってわけだ」

ユーノの疑問にいつの間にか隣に立っていた蒼夜が答える

《完全な消滅を確認、蘇ることはなさそうです》

「蘇る？」

「魔力体だからな、放っておけば魔力を補充され

回復してしまうんだよ、だから、完全に魔力を操っている

“意思”を排除しなければならぬ

淡々と答えた蒼夜の言葉を、ユーノとアルフは黙って聴いていた

「あちらも、もうそろそろ終わりそうだな」

そう言っただけで空を見上げる蒼夜の視線を二人が追う

なのはとフェイトの戦いも架橋に入っていた

「これ以上はここで話すことじゃないな、気になるだろうが

俺たちやあの魔物のこと、説明はまた今度にさせてくれ」

「・・・うん」

ユーノはそれ以上聞いても無駄だと悟り

小さく頷いて、なのは達の戦いに意識を向けたのだった

《フォトンスマッシャー》

《デイバインバスター》

なのはと少女が同時に砲撃を放ち、激突、拮抗する

「【レイジングハート】お願い！！」

《オールライト》

【レイジングハート】が追撃を放ち、なのはの砲撃が競り勝つ

「！！！」

少女は桜色の閃光に飲み込まれた

「なのは、強い!?!」

ユーノが声を上げる

「確かに……でも、あまいね」

使い魔が冷静に言い放つ

「そうだな、だが……」

《サイズスラッシュ》

なのはがそれに気づいたときには目の前に少女がいた

「!?!」

上空より高速で降下した少女は【バルディッシュ】の刃をなのはの首筋に突きつける

決着はついた

「……お前の主も相当あまいようだ」

蒼夜が苦笑を浮かべながら答えた

《フードアウト》

【レイジングハート】からジュエルシードがひとつ出てくる

「【レイジングハート】!なにを!?!」

「きつと、主人思いのいい子なんだ」

ジュエルシードを受け取り、地上に降りる少女

「さっきの声のやつは?」

「俺が倒した」

フェイトの問いに蒼夜が簡潔に答える

「そう……帰ろう、アルフ」

その言葉とともに歩き出す少女

「さっすが私のご主人様、じゃあね、おちびちゃん達」

使い魔も人型に戻り、少女の後を追う

「待って」

なのはが少女を引き止める

少女は立ち止まり、振り返ることなく言う

「できるなら、もう私たちの前に現れないで

次に会ったら、今度は止められないかもしれない・・・

蒼夜、あなたもだ」

「それはできないな、君の母親がそいつを何に使うかは知らないがこんな危険な物が海鳴にあるのを、ほっておくことなんてできないんでね」

「そう」

そのまま歩き出そうとする少女になのはは

「名前、あなたの名前は？」

「・・・フェイト、フェイト・テストロッサ」

「あの、私は・・・」

なのはに最後まで言わせることもなく少女・フェイトは飛行魔法を使い飛んでいった

「じゃあね」

使い魔・アルフもそれに続いて飛び去っていった

後には悲しい表情でたたずむなのはと

それを心配そうに見つめる蒼夜とユーノの三人が残された

未だ交わることのない二人の少女と一人の少年

周りの人たちもその変化に気づいていく

いつか交わる日が来ることを信じて、歩き続ける少女たち

この悲しくも暖かい物語は少しずつ、確実に終わりに近づいている

t o b e c o n t i n u e d

## ここは湯のまち、海鳴温泉なの（後書き）

第五話、読んでいただき本当にありがとうございます。  
男性キャラ、暴走しました。

なぜこうなったのかは作者にも分かりません（笑）  
達也が戦う敵と理由も少し明かされました。

そして短いですが達也の戦闘シーン、難しいです。

蒼破刃（そうはじん）

達也がもつとも使用する魔法

簡単に言えば飛ぶ斬戟

風を纏わせた魔力の刃を飛ばす

威力はそれほどでもないが、なのはの

アクセルシューターなどを

切り裂く力は持っている

天翔（あまがけ）

達也が使用する高速移動術

ただし、長距離の使用には向かない

加速力は驚異的であり、近・中距離までの間なら

フエイトを凌ぐスピードを出せる

魔法ではなく純粋な体術である

異家の人間が使う移動術であるが

その習得には困難を極める

本来は地上でしか使えないが、達也は空中に魔力で構成した

空気の足場を作りだし、それを蹴り足に使うことで空での使用も可能にした

魔物（まもの）

達也たち海鳴の守護者の敵  
ある理性のない意識のもとに魔力が集った魔力体  
回復力が驚異的であるため  
倒すには、核となる  
意識を完全に消滅させなければならない

今回はこれまでです。

感想等、お待ちしています。

では、次回の更新をお待ちください。



わかりあえない気持ちなの？（前書き）

お待たせしました。第8話更新です。

今回も若干、キャラが壊れています（笑）

わかりあえない気持ちなの？

ずっと考えている

会えば、きつとぶつかり合う事になっちゃうけど  
だけど、綺麗な澄んだ瞳、その中にある深い悲しみ  
私にそれを取り除く事はできないのかな・・・

わかりあえない気持ちなの？

昼休み

聖祥大付属小学校 教室

「いいかげんにしなさいよ！！」

教室にアリサの声が響き渡る

「この間から何を話しても上の空で、ボーっとして」

「あ、ごめんね、アリサちゃん」

アリサが怒っている相手はなのはだった

そのあまりの剣幕にクラスメイト達も何事かと注目している

「ごめんじゃない、そんなに私達と話して退屈なら

一人でいくらでもボーっとしてなさいよ！！」

なのはは冴えない表情をし、隣にいたはずかは

突然の事態に戸惑いの表情を見せる

「あまり大声を出すな、周りの奴らも注目してるぞ」

達也が近づいてきて注意する

「分かってるわ、そんな事」

しかし一向に治まる気配のないアリサ

「・・・いつたい、何が原因だ？」

状況を掴めない達也が理由を聞くと

アリサは一度なのは見つめてから

「なんでもないわ、行こうすずか」

と言つて教室を出ていった

「アリサちゃん！なのはちゃん・・・」

「いいの、今のは私が悪いんだから仕方がないよ」

すずかの言葉に冴えない表情のまま答えるのは

「そのことにはないと思うけど、今のはアリサちゃんも言い過ぎだよ  
私ちよつと話して来るね」

「うん、ごめんね」

アリサを追い、教室を出て行くすずか

後にはなのはと達也が残り、それをクラスメイト達が  
興味深そうに見つめていた

その中の一人が声をかけてくる

「なあなあ、何があつたんだ」

その顔は活き活きとしていた

その子は最近始まった、デマを混ぜた噂話でいじめるのを楽しもうと  
しているやつらだった

「何か用か？」

「ひい、す、すいません、なんでもないです！！」

達也が一睨みすると、その迫力に一目散に逃げていくクラスメイト  
そのクラスメイトは今年初めて一緒のクラスになったので知らなかつた

去年、またはその前の達也を知っている者ならば絶対にやらないこと  
達也を怒らせない事、つまり、なのは達に危害を加えるようなこと  
はしない事

それが暗黙のルールだった

以前それで達也を怒らせた生徒は、次の日から一ヶ月ほど休み

活発だった性格が、一八〇度回転し、いつもウジウジ`している

根暗君になつてしまつていた

しかも、達也を見るだけで発狂しだす始末で困った学校側はその生徒に転校を勧めたのだった  
尚、達也は何かやったという証拠が無かったために無罪放免だったそのクラスメイトが去ったのを見て、あらためてなのは声をかける達也

「話す気は無いんだろ？」

「・・・うん」

「そうか」

そう言つて達也は自分の席に戻つていった

「ほらほら、なんでもね〜から、皆も自分達の話しに戻れ」

無理やり自分達の話しに戻るクラスメイト達

達也に逆らう事、お金で買えない恐怖がある、プライスレスいつもの喧騒に包まれていく教室

そんな中、なのはは机を見ながら

(怒らせちゃったな・・・、ごめんね、アリサちゃん)  
そんな事を思っていた

「アリサちゃん、アリサちゃん！」

廊下を走り、階段でようやくアリサに追いついたすずかに

「なによ」

不機嫌な声で返すアリサ

「なんで怒ってるのかなんとなく分かるけど

駄目だよ、あんまり怒っちゃ」

階段を上っていくアリサ、それを追うすずか

「だってむかつくわ、悩んでるのみえみえじゃない

迷ってるの、困ってるのみえみえじゃない

なのに、何度聞いても私達には何も教えてくれない」

「・・・」

「悩んでも迷つてもいないなんて嘘じゃん！」

「どんなに仲良しの友達でも言えない事はあるよ

なのはちゃんが秘密にしたい事だったら

私達は待つてあげる事しかできないんじゃないかな」

「だから、それがむかつくの、少しは役にたつてあげたいのよ  
どんな事だつて良いんだから、何にもできないかもしれないけど  
少なくとも一緒に悩んであげられるじゃない」

「うん、やっぱりアリサちゃんもなのはちゃんのこと好きなんだよ  
ね」

「そんなの当たり前じゃない!!」

屋上にたどり着いた二人は空を見上げ過去を振り返る

「あの子がいたから、私は一人じゃなくなつたんだ・・・」

「うん、そうだね・・・、私もだよ」

なのはちゃんがいたから私達友達になれたんだもんね」

二人は春の風を感じながら、ある事件に思いを馳せていた

放課後

教室

帰る準備をしているなのはにすずかが声をかける

「じゃ、なのはちゃん、ごめんね、私達今日お稽古だから」

「夜遅くまでなんだよね？いつてらっしやい、頑張つてね」

アリサがなのはを無視して歩き出す

「アリサちゃん・・・、あ、大丈夫だからね、なのはちゃん」

「うん、ありがとう、すずかちゃん」

無理に笑顔を作り、二人を送り出すなのは

少し離れた所でそれを見ていた達也には

その顔が悲しみに満ちているのを見逃すわけが無かつた

(一人で帰るのって、久しぶりだな)

そんな事を考えながら通学路を歩く

(・・・寄り道して帰ろう、皆に今の顔を見られたくない)

家とは関係無い方向へ行こうとするなのはに

声をかける人物が一人

「その顔を見られたくないから、寄り道でもしよう、ってところか？」

「!・・・達也君」

「ちよつと付き合え、場所を変えよう」

「え!ちよつと」

なのはの静止も聞かず、歩き出す達也

なのはその後を追いかける事しかできなかった

## 海鳴公園 海岸線

なのははベンチに座り海を見つめる

「ほら」

そこへ達也が缶ジュースを持って戻ってきた

「ありがとう」

達也はなのはの隣に腰を下ろした

「あいつがあんなに怒ったのって、あの時以来か？」

「うん」

「あの時は凄かったな、たしか・・・」

## 同時刻

「初めて会った頃はさ、私、今よりずっと気が弱くて、思った事全然言えなくて

誰に何を言われても反論できなくて・・・」

それは皆が出会った頃のある事件の話

「あたしは我ながら最低な子だったっけね、自信家で我俣で強がり  
で・・・

だから、クラスメイトをからかって馬鹿にしてた、心が弱かったからね」

昔、一人の女の子が大事にしていたカチューシャをもつ一人の女の子が

強引に奪い、からかって遊んでいた

「私も弱かったから言えなかった、それはすごく大切な物だから返してって」

「止めなよって言われても聴かなかった、他人の言う事素直に聞いたら

何かに負けちゃうような気がしてたから」

それを止めたのはまた別な少女だった

「いきなり割って入って、ビンタしたって聴いたが？」

「うん、あの時は何を言っても駄目だと思っただから」

「あの時なのはちゃん、なんて言っただっけ？」

「痛い？でも大切な物を取られちゃった人の心は  
もつともつと痛いんだよ」・・・」

「そうだったね」

「アリサちゃんとはその後大喧嘩になったっけ」  
「ああ、掴みかかって、引っ張ったり、引っかいたりしてたんだよな」

「うん、それを止めてくれたのが」

「事の発端のひどくおとなしい子」

その喧嘩は一人の少女の叫びで終わりをつけた

「あの時は・・・、だって、必死だったんだよ」

「そして、騒ぎを聞きつけた先生が来て、誰が悪かって話になった」

「私達は、良家の娘だから悪くないって言われて」

「なのはが悪いって事になるところだった」

「そんな時、助けてくれたのが」

「ありがとう」

「なんだ？藪から棒に」

「改めて、感謝の気持ちを言葉にしてみました」

「・・・たまたま、屋上に行ったら騒ぎになっていて、

よくよく聞いてみたら、あいつの言う事が気に食わなかったんだよ」

その時、なのはには聞こえないように達也に念話が届いた

《『たまたまですか、なのはさんの事が心配で

見に行ったと言えはいいのに、まったく素直じゃ

ないんですから』》

『うるさい、黙れ、折るぞこら』

《『くすくす、はい、仰せの通りに』》

と、念話で黙らせつつ、話を続ける

「まあ、要するにだ

俺は俺のしたいようにやっただけ



だから、気にするな」

少し視線を外して答える達也

なのははこの行動の意味を知っていた

「あ、照れてる？」

「・・・お前、桃子さんに似てきたな」

「あはは、ごめんね」

「ちゃんと原因を調べたのか？」

良家の娘だから許されるなんて法律

はこの国には無いんだよ

そんな事もわからねえのか、あんたは”」

「今思うと、教師に向かつて凄い事言ってるわね、あいつ」

「あはは、でもその家柄を気にする先生だから、達也君の

名前を聞いたとき、青い顔して逃げ出していったね」

「巽家、海鳴じゃ逆らう者のいない、逆らう事ができない家系」

「でも、本人はそんな事なんて関係なしに、私たちと普通に

接してくれてるけどね」

「そういえば、あの先生あの後、直ぐに学校辞めちゃったけど  
どうしてなのかな？」

「さあな、大方、俺の実家にびびって逃げ出したんだろう」

その発言を聞き取ってか、またまた達也にしか聞こえない念話が届く

《『よく言いますね、裏でいろいろ手を回してたくせに』》

達也は懐に手を入れる

そこで、ミシツという音が鳴った

《『え！ちよ！まつ！すいませんごめんなさいもうしませんだから

許して〜！』》

「それから少しずつ話しをする様になっただっけね」

「うん、なのはちゃんか声をかけてくれて、いつも私達の傍にいてくれた・・・」

「いつのまにか、達也まで巻き込んでたっけ、あの娘」

「そう、そして、私達四人は友達になった」

アリサは外の景色を確認する

そろそろ目的の場所だった

「で、すずかはそんな昔話をきっかけに、私に何をさせたいわけ？」

「分かってるくせに」

「!!!」

振り向きすずかを見るアリサ

すずかは微笑んでいた

「・・・私達に心配させたくないだけだったことくらい分かってるわよ

多分、私達じゃあの娘の助けにもならないってことも・・・

待っててあげる事しかできないなら、私はずっと怒りながら待ってる

気持ちを分け合えない寂しさと、親友の力になれない自分に」

「意地っ張り」

「ふんっだ」

そんな話をしながら目的の場所に着いた二人だった

同時刻

喫茶翠屋

ここにもなのはの心配をしている人達がいる

「ねえ恭也、なのはちゃんの事なんだけどさ  
最近なんか悩みがあるのかな？」

私が見ても思うし、さすがが結構気にしてるの」

一人はさすがの姉、月村 忍

「・・・そうだな、最近は夕方や夜の外出も多いしな」

もう一人はなのはの兄、シスコン大魔王

この二人は高校時代のクラスメイトで今では恋人の関係におさまっている

「お節介かも知れないけど、ちょっとお話聴いてあげてもいいかな？」

「それはありがたいが、多分なにも話さないと思うな」

「私じゃ駄目かな？」

「いや、忍が駄目とかじゃなく、誰にも話さないんだ

あれは昔から、自分一人の悩みや迷いがある時は

いつもそうだったから」

「そうなんだ」

「それに、あいつには頼りになる幼馴染がいるからな」

「くすつ、達也君？」

「ああ、悔しいが、なのはのことならあいつに任せたほうがいい

なのは一人じゃ、解決できない壁にぶち当たったときは

必ずあいつが、答えに導いてくれるはずだからな」

「そっか・・・、なんだかんだ言っつて、恭也も達也君のこと

信頼してるんだね」

「まあ、弟みたいなものだしな・・・」

照れ隠しにそつぽを向いて答える恭也

「そうね、もしかしたら本当の弟になるかもしれないしね」

からん、と何かが落ちる音がする

「・・・恭也？」

なにやら負のオーラを出し始めた恭也に恐る恐る声をかける忍

「・・・くくく、やはり今のうちに殺しておくか」

2本の小太刀を握り締めどこかへ行こうとする恭也

「ちょ！ちよつと、やめなさいよ！！」

それを羽交い締めにして何とか抑える忍

「離せ忍、あいつは今のうちに始末しておかなければと

俺の本能が言っているんだ、だから殺す、今すぐにでも！！」

「ええい、落ち着け！！」

しつこく抵抗する恭也を忍は全力でどついた

ごきつ！！

ともものすごい音がして、床に倒れる恭也

「まったく、このスコン大魔王にも困ったもんだわ

おっと、それより仕事仕事」

恭也をそのまま放置して仕事に戻る忍

恭也が意識を取り戻したのは深夜だったそうだ

尚、その際、恭也達の話が耳に入り

達也に突貫しようとしてパティシエ（桃子）に簀巻きにされ

倉庫に押し込まれていた店長（土郎）を発見したが

それはまた別の話である

さらに、この日店長（土郎）とウエイター（恭也）が同時にいなくなつた事から

翠屋に神隠し説が浮上、その噂を聞きつけ、客足が更に増えたのも別の話……

同時刻

海鳴公園 海岸線

「アリサちゃんもすずかちゃんもいつも一人で寂しそうだったから

助けてあげたいなって思った、だから声をかけて」

「・・・友達になった」

「うん、最初はぎこちなかったけど、話しをしていくうちに  
どんどん、二人のことが分かる様になって・き・・・て・・・」

なのは何かに気付いたのか、表情が変わる

達也は立ちあがり海を見つめながら言う

「・・・アリサもすずかも、そして俺も・・・お前に助けられた

お前がいたから今の俺達がいる、確かに最初は分かり合えないかも  
知れない

だったら、話せば良い、分かり合えるまで、何度も、何度もな」

なのはの表情が驚きに変わる

「見つけたんだろう？助けてあげたい人が」

「・・・なんで」

“私の悩みがわかったの”と口に出す前に達也が答える

「昼間のお前の表情、昔アリサ達とどうやったら仲良くなれるかを  
考えていた時の表情と同じだったからな」

「・・・」

「お前ならできるさ、だから自信を持って、なのは」

「・・・うん、ありがとう、達也君」

達也にお礼をするなのは

その顔はぎこちないが確かに笑顔だった

「それじゃ、そろそろ私行くね、達也君は？」

「もう少しここにいろよ」

「そっか、あんまり遅くならないように気をつけて帰ってね」

「お前もな」

「うん、じゃあね」

「ああ」

なのはは足早に帰っていった

それを見ていた達也に懐から声がかかる

《大丈夫でしょうか？》

「さあな、まだ分からん、だが後はあいつとあの娘次第だ」

《私達は見守るだけですか》

「あんまりひどい時は止めに入るけどな」

《そうですね》

達也は空を見上げ件の少女を思い浮かべる

「フェイトと言ったか・・・、機会があればあの娘とも話してみたいがな」

その呟きは潮風に飲まれ消えていった

高町家　なのはの部屋

「そっか、喧嘩しちゃったんだ」

「違うよ、私がぼーっとしてたからアリサちゃんに怒られただけ」

「親友なんだよね？」

「うん、入学して直ぐの頃からずっとね」

「・・・」

「はい、こっちユーノ君の分ね」

そう言っただけなのはおやつを差し出す

「今日は塾も無いし、晩御飯までゆっくりジュエルシード探し

が出るよ、一緒に頑張ろう」

「う、うん頑張ろう・・・」

「イヤキを受け取りながら、なのはに申し訳無い気持ちでいっぱいなのユーノだった」

同時刻

どこかのマンション フェイトのアジト

「こっちの世界の食事もなかなか悪くないよね」

人間形態でドックフードを食べながらアルフが呟く

「つかもう、使い魔じゃなくてペット……」

どがっ、ばぎっ、どじっ、ずばん

( 肅正中、しばらくお待ち下さい )

.....

ぐふっ！

「さーって、家のお姫様は……」

作者死亡中……

.....

.....

「ちゃんと仕事しろ、作者！！」

は、はい！ただいま！！

階段を上りフェイトのもとに近づくとアルフ

フェイトはベットで横になっていた

傍のテーブルにはすっかり冷えてしまった食事が置いてある

「あ、また食べてない、駄目だよきちんと食べなきゃ」

ベットに腰を下ろし、フェイトの髪を撫でるアルフ

「少しだけ食べたよ、大丈夫」

起きあがりながら答えるフェイト

その背中には最近ついたであろう傷があった

その傷と疲れが溜まっているであろうフェイトを見て

どうしようもない自分に嫌気が差してくるアルフ

「そろそろ行こうか、次のジュエルシールドも大まかな位置特定はできてるし

それに、母さんをあんまり待たせたくないからね」

「そりゃまあ、フェイトはあたしのご主人様だし

あたしはフェイトの使い魔だから、行こうって言われれば行くけど

さ

「少しは休んだ方がよいよ」と言う前にフェイトは何を勘違いした

のか

アルフの傍らにあるドックフードを見て

「それが食べ終ってからでいいよ」

と言ってきた

慌ててドックフードを退かし

「そ、そうじゃなくて、あたしはフェイトが心配なの

広域探索の魔法はかなりの体力と魔力を使うのにフェイトってば

「そ、そうじゃなくて、あたしはフェイトが心配なの



るくに食べないし休まないし、その傷だって軽くは無いんだよ」  
「一気にまくし立てるアルフ

自分を心配してくれる事がうれしかったフェイトは微笑みながら

「大丈夫だよ、私強いから」

そう言っつてバリアジャケットを装着し出かける用意をする

「フェイト・・・」

「さあ、行こう、母さんが待ってるんだ」

そして、今日もジュエルシードを巡る戦いが始まる・・・

夕方

海鳴市 街中

あれから、街中を歩き回りジュエルシードを探していたなのは達だ  
つたが

収穫はなく、夕飯の時間が近づいていた

「うーん、タイムアウトかも、そろそろ帰らないと」

「大丈夫だよ、僕が残って、もう少し探していくから」

「うん、ユーノ君一人で平気？」

「平気、だから晩御飯取っておいてね」

「うん」

なのはは夕飯の為、ユーノと分かれて行動する事にした

(アリサちゃんとすずかちゃん、そろそろお稽古が終わって帰る頃  
かな?)

一抹の期待を胸に携帯のメールを確認するなのは

しかし、メールは届いておらず、がっかりしながら家までの道を走り出した

その近くのビルの上にフェイトとアルフが降り立つ

「だいたいこの辺りだと思っただけ、大まかな位置しかわからないんだ」

「はあ、確かにこれだけごみごみしていると、探すのも一苦労だね」

「ちよつと乱暴だけど、周辺に魔力流を打ちこんで強制発動させるよ」

「待った、それアタシがやる」

「大丈夫？結構疲れるよ」

「ふふん、このアタシを一体誰の使い魔だと？」

頼もしい相棒の言葉にフェイトは笑顔になる

「じゃ、お願い」

「そんじゃ！！」

アルフの魔力が膨れ上がる

その魔力は空へ伸び、地上へ降り注いだ

ユーノはアルフの魔力を感じ取り空を見上げる

「こんな街中で強制発動！！結界、間に合え！！」

すぐさま結界を作りだし、間一髪間に合った

しかし、ジュエルシードの発現で結界が不安定な為

ユーノは身動きが取れず、その場で結界の維持に努めることにした

「【レイジングハート】、お願い！！」

なのはは走りながらバリアジャケットを装着する

そこへユーノから念話が届いた

「なのは、発現したジュエルシードが見える？」

『うん、すぐ近くだよ』

『僕は結界の維持で動けそうにない』

でもあの子達が近くにいるんだ、あの子達より先に封印して』

『分かった』

なのはは【レイジングハート】をシューティングモードに変形させ  
ジュエルシードに向けて砲撃を放った

「見つけた!!」

「けど、あっちも近くにいるみたいだね」

なのはの魔力が辺りに満ちてきていた

「・・・早めに封印しよう」

フェイトも【バルディッシュ】をシーリングモードに変形させ  
ジュエルシードに向けて砲撃を放つ

着弾は同時だった

「リリカルマジカル」

「ジュエルシード、シリアル19」

「封印」

二人の魔力が同時にジュエルシードの魔力を封印した

なのははゆっくりと空中に浮かぶジュエルシードに向かって歩いて  
いた

その時、頭に浮かぶのはアリサやすずか、そして達也との出会いの  
記憶

（アリサちゃんやすずかちゃん、もちろん達也君とも出会った時は  
友達じゃなかった

話しが出来なかったから、分かり合えなかったから・・・）

なのははジュエルシードの前で歩みを止める

（アリサちゃんを怒らせちゃったのも、私が本当の気持ちを、思っ  
ていることを

言えなかったから）

《マスター、確保を》

「そうはさせるかい!!」

上空からアルフが攻撃してくる

なのはは咄嗟に防御し、力が拮抗する

「蒼破刃!!」

「ちい!!」

アルフは横からの飛んできた蒼い風の魔力刃をかわし着地する  
なのはの横に蒼夜が着地する

「またあんたかい、いいかげんしつこいね!」

「それはお互い様だ、アルフそしてフェイト」

蒼夜は言葉とともに上空へ視線を向ける

なのはもそれに習い上空へ視線を向け、見つけた

(お互い目的があるからぶつかり合うのは

仕方ないのかもしれないけど、でも、知りたいんだ)

なのははフェイトを見つめ言葉を紡ぐ

「この前は自己紹介できなかつたけど、私なのは

高町 なのは、私立聖祥大付属小学校3年生」

(・・・どうして、そんなに寂しい目をしてるのか)

《サイズフォーム》

「あ!!」

なのはの言葉を無視し、すばやく切りかかるフェイト

《フライアーフィン》

【レッキングハート】が飛行魔法を発動

斬撃をかわし、跳び上がった

同時刻

ピアノ教室

すずかはお稽古が終わったことをなのはにメールで教えようとして

いた

「なのはにメール？」

アリサが声をかけてくる

「うん、お稽古終わったこと、教えておこうと思って」

「そう」

さりげなくアリサも携帯を見る

はたから見たら丸分かりなのだが、ここは黙っておこうと思うずかなのはからのメールが来ていないようだがっかりしているアリサを尻目にすずかはメールを書き足す

「アリサちゃんそんなに怒ってないからね、大丈夫だよ”送信つと”」

携帯からメールが送信される

「ほら、行くわよすずか」

「あ、ちよつとまってアリサちゃん」

急いでアリサの後を追うずすか

二人は帰路につくのだった

同時刻

海鳴市 街中

桜色と金、蒼とオレンジがそれぞれ交錯する  
なのははフェイトの背後を取り、砲撃を放つ

《デイバインシューター》

《デイフェンサー》

フェイトは障壁を展開し、これを受け流す

「フェイトちゃん!!」

「!?!」

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけどでも、話し合わなきゃ、言葉にしなきゃ伝わらない事だっけとあるよ」

フェイトの瞳が揺れる

「ぶつかり合ったり、競い合うのは、それは仕方の無い事かも知れないけど・・・」

「けど、何も分からないままぶつかり合うのは、私いやだ」

「勝手な事を・・・っ!」

アルフは蒼夜と交戦しながらなのはの言葉を聞く

「・・・お前は、このままで良いとホントに思っているのか」  
「なに!?!」

「これが本当にお前たちのしたいことなのかと聞いている」

「うるさい!!お前に・・・、お前に何がわかるって言うんだい!?!」

「わからないさ、何も聞いていないんだからな!」

「なっ!」

「だから、それを知るためになのはああやって、フェイトに話しかけてるんだ」

「・・・分かり合うためにな」

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だからジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、それをユーノ君はそれを元通りに集めなおさないといけないから、私はそのお手伝いでだけど・・・、お手伝いをするようになったのは偶然だったけど

今は自分の意思でジュエルシードを集めてる、蒼紫君と同じように私も自分の暮らしてる町や、自分の周りの人たちに危険が降りかかったらいやだから

「・・・、これが、私の理由!?!」

(・・・分かり合えるの？本当に？)

蒼夜となのはの言葉がフェイトの頭に反響する

「・・・私は・・・」

「フェイト、答えなくていい!!」

「「え!?!」」

「やさしくしてくれる人たちのとこでぬくぬく甘えて暮らしてるが  
きんちよ

になんか、なにも教えなくていい!!

あたしたちの最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ!!」

(・・・そうだね、ごめんねアルフ)

フェイトはおろしかけていた【バルディッシュ】を再び構える

「それがお前の答え、なんだな？」

「・・・あなたたちに理由があるように、私たちにも理由がある、  
それだけです!!」

蒼夜の問いに答えながらジュエルシードへ翔け出すフェイト

「待って!!」

なのはもほぼ同時に翔け出す

しかし、スピードは完全にフェイトが上、なのはに勝ち目はない

蒼夜はフェイトに向けて砲撃魔法を向ける

「ドラグーンブレード」

『セツト』

蒼夜の周りに数十もの蒼い魔力の小刀が出現する

「やらせない!!」

アルフが躍りかかりとめようとする

それをバックステップでかわし

「バースト!!」

その十数もの魔力の小刀が蒼い閃光となって放たれる

「くっ!!」

フェイトは最小限の動きでかわし、ジュエルシードに向かうがなのはが、追いついていた

二人は同時にデバイスにジュエルシードを封印しようとする  
二人のデバイスとジュエルシードがぶつかり合う

「！！！！！！！！！！」

その衝撃により、抑えられていた魔力が爆発  
あたりは閃光に包まれた

t o b e c o n t i n u e d



わかりあえない気持ちなの？（後書き）

ドラゴンブレード

魔力による小刀を生み出し発射する魔法

弾速と連射性に優れ

なのはのアクセルシューターほどではないがある程度は自動追尾し誘導もできる

発射された小刀は身体やシールドに突き刺さり、「イグニッション」の追加コマンドにより爆発しダメージを与える

小刀の数と連射性能は調節ができ

もっとも能力を高めた“フルバースト”は

フェイトの“フランクスシフト”と同等の性能を誇る

第8話どうだったでしょうか？

達也の実家である巽家、ますます謎が深まりました。

こんな主人公でいいのでしょうか？

感想等いつでもお待ちしております。

## もう一人の魔法使いなの（前書き）

### 第7話更新

今回、どこかで聞いたことのある名前のキャラクターが登場しますが、ご了承ください。

## もう一人の魔法使いなの

「!!!」

「すずかは何か大きな力が働いたような気がして  
後ろを振り返る」

（何だろう、今のいやな感じは？）

その力の働いただろう方角を見つめる

「すずか、どうしたの？行くよ」

近くにいたアリサが声をかけてくる

「え！？・・・ううん、なんでも無いよ」

「そ、じゃ早く帰る。あたしお腹すいちゃった」

「うん・・・」

車が二人を乗せ、家に向けて走り出す

その力が何なのかは分からない

だが、すずかの血筋としての感覚がその力の  
大きさを、敏感に感じ取っていた

## もう一人の魔法使いなの

夕方

海鳴市 市街地 結界内部

ジュエルシードの魔力が暴発した

その衝撃で吹き飛ばされるのはとフェイト

両者とも飛行魔法で急制動をかけ、問題無く着地するも  
デバイスが深刻なダメージを受けていた

「大丈夫？戻って【バルディッシュ】」

《はい、主》

所どころひびが入った【バルディッシュ】を待機状態に戻し  
フェイトはジュエルシールドに目を向ける

ジュエルシールドの暴走はまだ終わっていないかった

まばゆい光を発しつつ空中に浮かぶジュエルシールド

このままでは次の暴発が起きるのも時間の問題だった

（抑えなくちゃ！）

フェイトは一気にジュエルシールドまで駆ける

「フェイト！」

「え！？」

「！！！」

フェイトの突然の行動にその場にいた三人は驚く

ジュエルシールドまでたどり着き、両手でジュエルシールドの魔力を

抑えようとするフェイト、しかし、その魔力は強大すぎた

「フェイト！だめだ！！危ない！！！」

アルフがフェイトに近づこうとするがジュエルシールドから

発せられる魔力が邪魔で近づけない

フェイトは両手に魔力を集中し、ジュエルシールドの魔力を安定

させようとする。指の間から光がもれ、なかなか安定しない

（このままじゃ）

フェイトは座り込み、足元には金色の魔方陣を形成し

自身のありつたけの魔力でジュエルシールドを止めようとする

「止まれ・・・止まれ、止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ！！！」

グローブが破け、手に血が滲んでもフェイトは止めようとしなかった

（だめ、魔力が持たない・・・）

フェイトの魔力が尽きかけたその時、包み込むように

フェイトの両手に添えられる手があった

「俺の魔力を送りこむ、そのまま安定させるぞ」

「蒼・・・夜・・・？」

それは蒼い魔力光を放つ少年だった

「蒼夜君！？私も、きゃー！！」

なのはも二人に力を貸そうと近づこうとするが  
ジュエルシードの魔力の波で移動できないでいた

フェイトと蒼夜

二人の魔力で抑えこみ、ジュエルシードの魔力は  
何とか安定の兆しを見せていた

「もう少し、だな・・・、やれるか、フェイト？」

「うん」

二人は更に魔力を込めジュエルシードを抑えこむ

（だが、このままじゃ駄目だ、暴走した原因を取り除かな  
ければ・・・また、同じ事の繰り返しになる可能性がある）

「フェイト、少しだけ一人で持たせてくれ」

「え？なにを」

「暴走の原因を取り除く！！」

蒼夜はジュエルシードを抑えこむのをフェイト一人に任せ

そのままの体勢でジュエルシードに“魔力のようなもの”を流し込む  
フェイトはなんとか安定を保ちつつその様子を眺める

《若！！無茶です。その力は・・・》

蒼夜のデバイス、【天龍】から警告が発せられる

「ここで止めなければ、街に被害が出る

それだけは食い止めなきゃならんだろう！！」

《ですが、身体が持たなかったらどうするのですか！？》

「その時は・・・、俺という存在が消えるだけだ」

彼らの緊迫した会話にフェイトは訳がわからず声をかける

「どう言う事？」

「・・・この暴走の原因は、ジュエルシードがもともと不安定なの  
もあるが

俺やお前達の魔力を吸収して、魔力が膨れ上がったことが原因だ・

その原因となっていてる魔力を問題の無い量まで“消す”」

そう説明しつつ“魔力のようなもの”を流し込むのを止めない蒼夜

「消す？」

そこでふとフェイトは気付いた

ジュエルシードから発せられる魔力が少しずつであるが減っているのだ

(なぜ?)

「……ちっ……」

そんな舌打ちが聞こえ振り返るフェイト

蒼夜が脂汗を浮かべていた

「蒼夜!!」

「大丈夫だ、お前は安定させる事に集中しろ」

「でも……」

フェイトの言葉を【天龍】が遮る

《止める気は無いんですね……》

「当然だ」

《……. . . . . わかりました》

何かを決意した【天龍】が一度輝いた

その瞬間、蒼夜から流し込まれている

“魔力のようなもの”の力が各段に大きくなった

《封印を一つ解除しました。

……. . . . . どうなっても知りませんよ》

「すまん。……. . . . . 一気に決めるぞ」

さらに“魔力のようなもの”の力が膨れ上がった

「どうなってるの?」

なのは少し離れた位置からその光景に見入っていた

ジュエルシードから発せられる魔力が弱くなっているのを

なのはも感じ取っていたのだ

その時、ジュエルシードの魔力が蒼夜の顔を切り裂いた

「蒼夜君!!!」

蒼夜のサングラスが壊れ、その素顔が現れる

「・・・え?」

そこには思いも寄らない人物がいた

目が蒼くなっていたが、なのはがその顔を見間違えるはずが無かった

「達也・・・君?」

巽 達也がそこにいた

「蒼夜、大丈夫」

「問題無い、これで終わりだ」

そう言った直後、ジュエルシードが一度眩い光を放ち

その後沈黙した

「止まった?」

「・・・ああ」

フェイトは手に持っているジュエルシードを見る

魔力が安定し沈黙していた

「フェイト!!!」

顔を上げるとアルフが走りよってきた

「フェイト、大丈夫!? 怪我はない!? ああ、手からこんなに血が  
!!!」

フェイトの手を見て青ざめるアルフ

「大丈夫だよ、アルフ。それより・・・」

どさっ!

「え?」

背後で何かが倒れる音がした為、慌てて振り向く

「ぐ! はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ」

そこには荒い息をし、ぐったりとしている蒼夜の姿があった

「蒼夜!!!」

「ど、どうしたんだいこいつ?」

額に触れてみる

「!! 凄い熱」

額だけじゃなく全身が凄い熱を持っていた

「アルフ、お願いがあるの」

主の呼びかけになんとなく嫌な予感がしたがアルフは顔を向ける  
そこにはとても心配そうな目で少年を見つめる少女の姿があった

「・・・フェイト、拾う気?」

「!! ちちちちち違うよ、このままじゃ辛そうだから  
助けてあげようと思っただけで・・・」

アルフはこの顔の意味を嫌と言うほど知っていた

昔から捨てられていた動物を見ると放っておけない子なのだ  
あらゆる動物を拾ってきたのは世話をしていた

自分もそれで使い魔になつたクチだから文句は言えないのだが

「まさか、同年代の男まで拾うとは・・・、フェイト何する気?」

「何もしません!!」

「子供は何人の予定だい?」

「少なくとも二人は・・・、って、ちつがあああああう!!」  
顔を真っ赤にして叫ぶフェイト

「とにかく! 行こう!」

「・・・わかったよ」

フェイトの言葉に蒼夜を抱き上げ、しびしび従うアルフ  
フェイトはなのはの方へ視線を向ける

「・・・そんな・・・達也君が・・・どうして?・・・」

なのはは心ここに有らずといった感じで何かを呟いていた

(達也?)

その呟きがかろうじて聞こえたフェイトは誰かの名前だろうか  
と考え始めたところで

「フェイト? 行かないの?」

「え!?! うん、行こう」



フェイトはアルフの言葉で踵を返し、身体能力を上げる魔法を発動しアルフと共に一気に跳んでビルの上に着地、更に跳び続けその姿が見えなくなつた

なのは自分が混乱している事を自覚していた

しかし、いくら冷静になろうとしても、頭は正常に働かず

同じ事ばかりを考えていた

「なんで？達也君が蒼夜君？そんな達也君が、どうして……？」

それぐらいなのはには衝撃だつたのだ、蒼夜の正体が

（考えてみればいくらでも思い当たる節がある、どうして気付けなかったの？なぜ？）

思考がループしていた為、なのははフェイトたちが跳び去る時に反応が遅れた

「あ・・フェイトちゃん、待って……」

その声はフェイトには届かず、辺りに空しく響く

後に残つたのは立ち尽くしフェイトの跳び去つた方向を見つめる

なのはだけだつた

夜

海鳴市 高町家 なのはの部屋

ユーノは破損した【レイジングハート】を見つめながら

今日のことを思い返していた

結界を解除した後、なのはと合流したユーノは事の顛末を聞き出していた

（【レイジングハート】はかなりの大出力にも耐えられるデバイスなのに

それを一撃でココまで破損させるなんて・・・）

待機状態の【レイジングハート】は所々にヒビが入っていて

弱い点滅を繰り返していた

（ジュエルシードの暴走、達也の見解だとなのは達の魔力がトリガーになったらしいけど・・・）

達也の言葉はなのにも届いていたようだ

（確かに、もともと安定していない物だし、そう考えれば辻褄が合う）

ユーノは今ココにはいない人物の顔を思い浮かべる

（あの状況でそれを見ぬいた観察眼、そしてその後ジュエルシードの

暴走を止めた、魔法に似た別の力・・・）

「達也、君はいつたい何者なんだろうな？」

ユーノの呟きに反応してか、部屋のドアが開き

なのはがお菓子を持って入ってきた

「ユーノ君、【レイジングハート】は大丈夫？」

「うん、かなり破損は大きいけど、きつと大丈夫

今、自動修復機能をフル稼働させてるから、明日には回復すると思う」

「そっか、よかった」

安堵の息をつき、椅子に座るなのは

だが、その表情にはどこか、影が落ちていた

「なのはこそ、大丈夫？」

「うん、【レイジングハート】が守ってくれたからね」

「そう・・・」

二人の間に沈黙が下りる

ユーノが何を差して大丈夫と聞いてきているか、なのはにはわかっていたし

なのはがわざとずれた答えを言っていることを、ユーノもわかっていた

「・・・ねえ、ユーノ君」

「ん？」

「ユーノ君は、蒼夜君が達也君だって事、知ってたんだよね？」

「え！？」

ユーノは自分が蒼夜の正体知っている事は黙っていたのだった  
何があつたかを聞き出す時に

ただでさえ混乱しているなのはを、更に混乱させるわけには  
いかなかった為の措置だったのだが

「ユーノ君、達也君の名前出してもあまり驚いてなかったからね  
もしかしたらと思っただんだ」

「ごめん、さっきはなのは、混乱していたし、それに達也に口止め  
されていたから」

「ううん、責めてるわけじゃないよ、さっきの私に正常な判断が  
来たとは思えないし

達也君が口止めしてたのならしかたないもの」

なのはは一つため息をつき、続ける

「でも、達也君はどうして私に教えてくれなかったのかな・・・

まあ、気付かなかった私も私だけだ」

「僕も気付いたのは最近だし、偶然だったけどね

でも、この事件が終わったら自分からきちんとした形で話すって  
言ってたよ

なのはの負担になりたくないともね」

「負担？」

「うん、“只でさえなれない事をやって負担が掛っているのに

蒼夜の正体が俺だと分かれば、それだけであいつの負担になるから  
な”ってね」

「・・・そうかもね」

自分ではあまりそう言つつもりは無いのだが、なのは自身よりなの

はのことを

良く知っている幼馴染の言葉なので、認めざるをえなかった

「今度会ったら、今までのこと話してくれるかな？」

なのは窓の外に目を向ける

そこには綺麗な星空が広がっていた

同時刻

遠見市 マンション フェイトの部屋

「つう!!」

「あ!ごめんよフェイト、もう少しで終わるから後ちょっと我慢して」

アルフはフェイトの手に包帯を巻いているところだった

「大丈夫だよ、アルフ、このぐらいたいしたことないから」

「フェイト・・・、無理はしないでよ」

明日だって、アタシが一人で行ってくるから、フェイトはココで休んでたって」

「ううん、それはできないよ、母さんへの報告は私がやらないと」

「そ、そうだね、この短期間に4つも集めたんだから、きっと誉められるよ」

だったら、フェイトが行かないとね」

「母さん、喜んでくれるかな？」

「大丈夫だって、だから今日は早く寝て、明日に備えないと寝不足で会うわけにはいかないだろう」

「ふふ、そうだね」

「そつだよ」

やわらかな笑みを浮かべたフェイトにアルフも笑って答える  
しかし、フェイトは直ぐに心配した表情を浮かべて

自分のベットで寝ている少年に目を向ける

「ところで、彼の様子は？」

「ああ、詳しい事は分からないけど発熱も

だいぶ落ち着いたし、大丈夫だと思うよ」

アルフもつられてベットの方へ視線を向けながら答える

「彼のデバイスはなんて？」

「“ 助けていただいてありがとうございます。”

ですが、私からは何もお伝えする事は出来ません” だつてさ」

そう言うとアルフは立ちあがり、毛布を1枚持って戻ってきた

「さ、早く休もう、じゃないと本当に明日に響くよ

あいつの事は起きてから考えれば良いしさ」

「うん、ありがとうアルフ、お休み」

アルフから毛布を受け取り、フェイトはソファーで眠りについた

数時間後、自然に目がさめた

フェイトが身体を起こすと、足元に狼姿で寝ているアルフがいた  
自分の毛布をかけて頭を撫でる

ふと、少年のことが気になりベットへ足を向ける

少年は静かな寝息をたてていた

額に乗っていたタオルをどけ、手を当て、体温を確認する

(よかった、熱は下がったみたいだ)

「ん、・・・ここは？」

安堵の息をつくと、少年は目を覚ましたみたいだ

「ごめんなさい、起こしちゃったみたいだね

ここは私の部屋だよ」

「フェイト・・・？そうか、俺はあの後、気を失ったのか・・・」

「うん、そのままにも出来なかったから、ここに連れてきたんだ」

「すまない、ありがとう。だが、いいのか？」

敵の俺をここに連れてきて」

「私も助けてもらったから、お互い様

それに、ここなら別にばれても問題ないから  
いざとなつたら、別な場所へ移動するしね」

「・・・大丈夫だ、誰にも言わないよ」

そう言つて少年は身体を起こしたが

「ぐう！！」

痛みがはしつた為か、身体を抑えてうずくまつた

「大丈夫！？どこか痛むの？」

（目だつた外傷はなかつたはずだけど？）

フェイトは少年の背中を撫でながら考える

「問題ない、力の解放に身体がついていてないだけだ  
じきになれるさ」

「・・・あの力は一体何なの？魔力に似ていたけど・・・  
それにあなたの眼、さっきは蒼かったのに今は黒くなつてる。なぜ  
？」

「・・・そうだな、あまり話すことじゃないんだが、聞きたいか  
？」

「うん」

即答する

フェイトは少年のことが知りたいと思つた

最初に会つたときは違う感情がフェイトの中に芽生えていた  
もつとも、フェイト自身はそのことに気づいていないようだ・・・

「【天龍】、どこまで話した？」

《私は何も、指示を受けておりませんでしたので・・・》  
少年は自身のデバイスに声をかける

「そうか、なら、さっきの質問には最初から説明するしかないな  
けつこう長くなるけど聞くか？」

「うん大丈夫、・・・達也つて呼んでいい？」

「ん？」

「いや、その、あの白い子がそう呟いてたから、あなたの本名なのかなと思って……」

「ああ、そっか、なのはにもばれたのか……」  
「ばれた？」

「いや、こつちの話、蒼夜改め巽 達也だ、呼び方はどうでもいいよ、よろしくフェイト」

「うん、よろしく」

「じゃあ、説明しようか、それとあんまり口外しないこと、これは約束してくれ」

「うん、わかった」

そして、少年……、達也は自分のことについて話し出した

それから、達也は自分のことを話し終え、フェイトのことを聞いているときに

フェイトは静かな寝息を立て始めた

疲れているのだろうと思い、達也はフェイトをベットに寝かせ部屋を出て行こうとした

「その身体でどこに行く気だい？」

「……もう大分痛みも引いてきた

いつまでもここで世話になるわけにもいかないだろう？」

達也はゆっくり振り返りながら答える

そこには狼形態のアルフの姿があった

「あたしはあんたが何処に行こうとかまわないけど、うちの姫様が心配するんだ

もう少し、身体を休めていった方がいいんじゃないかい？」

「魅力的な申し出だがここにいるより、いい場所があるのでな」

「そうかい、ならもう何もいわないよ、とっとと出ていきな」

「ああ」

達也は他に話すことは無いとばかりに振り返りドアへ足を進める

だが、ドアの手前で立ち止まり

「一つ忠告だ、今回の戦い、俺達以外の第三者がどこかにいたかもしれない」

「どういう意味だい？」

「……何処から見られている感じがした」

「……」

「行動は慎重にした方がいいかもしれないぞ」

「あなたに「達也だ」……え!？」

「名前、俺もアルフって呼ばせてもらうから」

「ふん、そんな事は言われなくても分かっているんだよ

いいから早くいきなよ、達也」

「ああ、フェイトによく言っといてくれ」

そう言い残し達也はフェイトの部屋を後にした

アルフは人間形態になり、ベットですやすやと寝息を立てるフェイトに近づき頭を撫でる

「大丈夫、フェイトはあたしが守るよ」

アルフは、目覚ましをセットし、フェイトに寄り添う形で眠りについた

早朝

海鳴市 とある山に立つ屋敷

まだ白い霧が立ち込めるその場所には一人の青年がいた

青年は足を肩幅に開き、軽く息を整え、一気に気合を入れる

「ハア!!!」

それだけで周りの霧は霧散し、広大な敷地を持つ屋敷がビリビリと



振動する

「ふう」

力を抜き、息を整えて、佇まいを直す

そうして、屋敷の振動は止まり、朝のすがすがしい空気があたりを満たす

青年はそこで誰かが屋敷に近づいてきているのを感じ取った

「こんな時間に？」

そう思ったものの、出迎えてやろうと少し大き目の扉を開ける  
そこには身体を引きずりながら階段を上る達也がいた

「達也？」

ようやく階段を上り終え、屋敷に進もうとする達也だが足がもつれ倒れる

青年は驚き、足早に駆け寄る

「どうした達也!？」

「ああ、おはようございます。相変わらずこの階段はきついですね  
いつもの達也なら息一つ乱さず行き来できるはずの階段である  
不審に思い、達也の身体に触り魔力を通す

「!!お前、封印を解除したのか!？」

体中の組織がボロボロだった

その事実には驚き、訳を訊く

「あれほど、その力は使うなと言っただろう、何故使った？」

「使わなければならなかった、それだけです」

「……いいだろう、詳しい話は後で聞こう」

「すみません」

その言葉を最後に達也は気を失った

青年は達也を背負い屋敷の中に入っていく

「あれ、策<sup>サク</sup>?その背負ってるのって達也じゃん、どうしたの?」

そこへ少女が青年……異<sup>タツミ</sup>策<sup>サク</sup>へ声をかける

「メメ、ふたみを呼んできてくれ」

「お姉さまを?なんであたしが……!!……わかった、すぐ呼ん

でくる」

少女・・・愛々々（メメメ）はいやそんな顔をした直後、達也の様子がおかしいことに

気づき、急ぎ目的の人物がいるであろう場所へ向かった

策は達也を客間に連れて行き、ベットに寝かせたところで

愛々々がもう一人の少女を連れてきた

「お主人ちゃん、達也の様子は？」

「力の解放に、身体が耐えられなかったようだな

中がぼろぼろだよ、治せるか？」

「大丈夫、私に不可能はない・・・、かもしれない」

冗談を交えながら少女・・・ふたみは達也に手をかざしたのだった

数時間後

海鳴市 高町家

美由希がランニングから帰り道場へ入ると意外な人物がいた

「あつれー、なのは、どうしたの？すっごい早起きさんだね」

なのはが壁に寄りかかって待っていたのだ

「あはは、ちよっと早く目が覚めちゃって」

「そうなんだ」

「あれ、お兄ちゃんは？」

「今朝は父さんと一緒に少し遠くまで走りにいったる」

美由希は壁にかけられている木刀を手にとり答える

「稽古、見ていく？」

「うん」

なのはが正座をして姉の稽古を見つめていると念話が聞こえてきた

『なのは？』

『ユーノ君！？』

『どうしたの？こんなに朝早く』

『ちよつと、目が覚めちゃったから・・・、それでねユーノ君』

私・・・、私考えただけど』

『うん』

『私、やっぱりあの子の事、フェイトちゃんのが気になるの』

『気になる？』

『すごく強くて冷たい感じもするのに、だけど綺麗で優しい目をしてて』

なのに、なんだかすごく悲しそうなの』

『・・・』

『きつと理由があると思うんだ、ジュエルシードを集める理由』

だから私あの子と話がしたい、達也君もそれを望んでいるは』

ずだから、だからその為に・・・』

なのははその時、何かを決意した表情をしていた』

同時刻

時空管理局 次元空間航行艦船アースラ ブリッチ

時空管理局提督でありアースラの艦長“リンディ・ハラウン”がブリッチのクルーに声をかける

「みんなどう？今回の旅は順調？」

「はい、現在、第三船速で航行中です」

目標次元には今からおよそ三時間後に到着の予定です」

「前回の小規模次元震以来目立った動きはないようですが」

「二組の搜索者が再度衝突する可能性は非常に高いですね」

「そう、そのまま観測を続けて」

「はい」

「・・・地球、か」

リンディは艦長席に座り懐かしむような表情になる

（まさかこんな形でこの世界に来ることになるなんて、ね）

そこへ女性局員が紅茶を持ってきた

「失礼します、リンディ艦長」

「ん、ありがとねエイミィ」

紅茶を一口飲み、言葉を続ける

「そうねえ、小規模とはいえ、次元震の発生ははちょっと厄介だものね

危なくなったら、すぐに現場に向かってもらわないと、ね、クロノ」

その声に背のちっこい少年が反応する

「誰がちっこいだ!!」

こほんとリンディが咳をする

「あ、いや、大丈夫、わかってますよ艦長

僕はその為にいるんですから」

背のちっこい少年はカードのようなものを出しながら答えた

「ちっこい言うな!!僕はこれでも14歳だ!!」

いや、ナレーシヨンに突っ込むなよ!!って、え!!!

14でその背・・・

「なんだその哀れむような目は!!」

僕だって、僕だって気にしているさ!!

ありえないだろ!!14歳でこの背は!!」

え、あ、はい、そうですね、ですが少し落ち着いたほうが・・・

「これが落ち着いていられるか!!」

遣伝か、遣伝なのか!!誰だこんなちっこい

遣伝子持ったやつは!!名乗り出る!!

僕が直々に成敗してくれる!!」

今にも暴れだしそうなたっこい少年にリンディが近づき

「まあまあクロノ、叫んで喉渴いたでしょう、これでも飲んで落ち着きなさい」

そう言いながら自分の飲んでいた紅茶を差し出した

「ぜえぜえ、あ、ありがとございます」

「あ、クロノ君！それは・・・」

エイミーが何かを言っていたが、かまわず一気に飲み干すクロノ

「（口）。。。」

目玉が飛び出すほどの衝撃を受け、クロノは泡を吹きながら気絶した

「ふう、やっと静かになったわね」

あのく、いったい何を飲ませたんでしょうか？

「あら、普通の紅茶ですよ。リンディ茶ですけど」

リンディ茶？

ナレーション役の疑問にはエイミーが答えてくれた

「艦長はものすごく甘党なんです

だから、あの紅茶も砂糖が“ピー”倍なんです」

（口）。。。

思わず自主規制がかかる倍率にナレーション役も目玉が飛び出るのだった

ナレーション役フリーズ中の為、リンディさん、しめてください

「あああら、私ですか？じゃ、次行ってみよう」

いかりや 介！？

同時刻

高次元空間内 時の庭園

「たったの4つ、これはあまりにも酷いわ」

女性は豪華な椅子に座りながら部屋の真ん中にいる少女・フェイトを見つめる

フェイトはボロボロになって横たわっていた

「はい、ごめんなさい、母さん」

「いいわ、フェイト、あなたはこの大魔導士プレシア・テストロッサの一人娘、不可能などあつてはならない」

女性・プレシアは椅子から立ち上がり、フェイトに歩み寄る

「わかるわね、フェイト」

「・・・はい、わかります」

「これだけ待たせておいて、あがつて来た成果がこれだけでは母さんは笑顔であなたを迎えるわけにはいかないわ」

フェイトの目の前まで来たプレシアは手に持った杖を掲げながら言葉が続ける

「だからね、覚えてほしいの、これ以上母さんを失望させないよう  
に」

「!!」

杖を鞭に変えて振りかぶるプレシア

フェイトは次の瞬間にくるだろう痛みに耐えつづけるしかなかった

「何なんだよ、いったい何なんだよ!!」

あんまりじゃないかあの女!!」

アルフは扉の中から聞こえてくるフェイトの悲鳴にすぐに飛び込んで助けに行きたいのを必死にこらえていた

「あの女の、フェイトの母親の異常さとか、フェイトに対する酷い仕打ちは

今に始まったことじゃないけど・・・、今回はあんまりだ!!」

あのロストロギアは、ジュエルシードはそんなに大切な物なのか!」

鞭を振る手を休め、プレシアは口をひらく

「ロストロギアは母さんの夢をかなえる為に絶対に必要な  
特にジュエルシードの純度は他の物より遥かに優れている」

「・・・はい、母さん」

「あなたは優しい子だから、ためらってしまってもあるかもしれ  
ないけど

邪魔する者がいるなら潰しなさい、どんなことをしても・・・

あなたにはその力があるのだから」

プレシアは鞭を杖に戻し、フェイトに背を向けて歩き出す

「行ってきてくれるわね、私の娘、可愛いフェイト」

「・・・はい、行ってきます、母さん」

「しばらく眠るわ、次は必ず母さんを喜ばせて頂戴」

その言葉を最後にプレシアの姿が奥へと消える

「・・・はい」

フェイトの最後の返事がむなしく部屋に響いていた

扉が開き、出てきたポロボロのフェイトにアルフが近寄る

「フェイト、ごめんよ、大丈夫」

「何でアルフが謝るの？平気だよ、全然」

「だってさ、まさかこんなことになるなんて

ちゃんと言われた物を手に入れてきたのに

あんな酷い事されるなんて思わなかったし

知ってたら、絶対に止めたのに」

「酷いことじゃないよ、母さんは私の為を思っで・・・」

「思ってるもんかそんなこと！！あんなのただのやつ当たりだ」

「違うよ、だって親子だもん、ジュエルシードは、母さんに取っ

てすぐ大事なものなんだ・・・、ずっと不幸で悲しんできた母さん

だから

私、何とか喜ばせてあげたいの」

「だ、だってさ」

「大丈夫だよ、ジュエルシードを集めて帰れば  
母さんも、きつと昔の優しい母さんに戻ってくれる」  
「フェイト」

「だから行こう、今度は絶対に失敗しないように」  
フェイトはマントを羽織り、すぐさま地球への転移を開始した

同日 昼

清祥大付属小学校 教室

なのはは教室内を見渡し目的の人物を探し当てた  
その人物・・・アリサはなのはと目が合うと慌ててそっぽを向いて  
しまった

「なのはちゃん」

それを見ていたさすがが心配そうに声をかけてくる

「大丈夫、ごめんね、今は無理だけど

いつかきつと話すから」

「ううん、気にしないで、私もアリサちゃんも待ってるから

あ、でも無理に話さなくてもいいんだよ」

「うん、ありがとう」

「それより、達也君どうしたんだらうね？」

すずかの視線が達也の席に向く

なのはも自然に達也の席に目を向けていた

「家族の人から休むって電話あったらしいけど・・・

また、実家の方で修行でもしてるのかな？なのはちゃん、何か聞いてない？」

「・・・聞いてないよ」



「そっか、どうしたんだろっね」

(昨日、あの後どうなったのかは私にはわからないけど  
きつと、大丈夫だよ、達也君)

二人は心配そうに達也の机を見つめるのだった

同日 夕方

海鳴市 ビル 屋上

「【バルディッシュ】、どう?」

《リカバリーコンプリート、いつでもいけます》

フェイトはアルフと共に海鳴へ戻ってきていた

「頑張ったね、偉いよ、【バルディッシュ】」

「感じるね、あたしにもわかるよ」

「うん、もうすぐ発動する子が近くにいる」

同時刻

海鳴市 住宅街

なのはがバスから降りたところにユーノが待っていた

ユーノの首からは元の状態に戻った【レイジングハート】があった

「【レイジングハート】、直ったんだね、よかった」

《コンディショニンググリーン、ご心配をおかけしました》

「また、一緒に頑張ってくれろ？」  
《もちろんです、マイマスター》  
「ありがとう」

同時刻

海鳴市 臨海公園

雑草に隠れていたジュエルシードが発動  
近くの木を取り込んで暴れ始める  
それを感じ取った者達がこの場所へ集まり始めていた  
そして・・・

同時刻

海鳴市 山に立つ屋敷

策は街を見下ろして強い力を感じるの方向を見つめた  
「またこの力か、いつたい、下では何が起こっているのか・・・」  
「うん、様子を見に行こうか」  
隣にいたふたみが提案するが  
「いや、その必要はないだろう、そうだろうか？」  
「はい」

二人は振り返り返事をした人物を見る  
達也が歩きながら近づいてきた

「もう、動けるのか？」

「はい、問題ないです、以前より体が軽いですね」

「……、封印の一部を解除されたことで一緒に封印されていたお前の本来の力の一部も解放されたみたいだな

体のほうはどうなんだ、ふたみ？」

「中の傷はすべて修復した、体力も一眠りして回復したようだ、お主人ちゃん」

達也は二人の間を通り過ぎ階段を下りていく

その途中で立ち止まり、振り返った

「治療ありがとうございます、……すみません、いつも迷惑をかけて」

「気にするな、だが、無茶はするなよ」

「わかってます……と言いたいところですが、あそこには俺の守るべきものがある

その為に無茶をするかもしれないです」

「……そうか、頑張ってこい」

「はい」

達也は踵を返して空へ飛び上がる

「【天龍】、行けるな？」

《はい、今までより出力を上げれます》

「よし、行くぞ」

《行きます》

達也は一気に加速、すぐに見えなくなつた

「あの子はともまっすぐに育っている……、あいつは今どこに  
いるんだろうな」

「……」

二人は夕焼けに染まった空を見上げた

数分後

海鳴市 臨海公園

「封地結界、展開」

ユーノの結界が発動

なのはは【レイジングハート】を構え、ジュエルシードと対峙する  
そこへ背後から砲撃が放たれる

ジュエルシードはバリアを展開し、それを防いだ

「ほ、生意気に、バリアまで張るのかい」

「うん、今までのより強いね・・・、それに、あの子もいる」

「!!!」

後ろを振り向いたなのはの目に映ったのは、フェイトとアルフの二人組みだった

その隙をジュエルシードが根っこの部分で攻撃してくる

プチ

「ぎゃ!!!」

《フライアーフィン》

なのはが空へ飛び上がりジュエルシードの攻撃をかわす

「飛んで、【レイジングハート】もっと高く!!!」

《オールライト、いきますマスター》

【レイジングハート】の声とともに、なのはがさらに高く飛び上がる

「アークセイバー、行くよ、【バルディッシュ】」

《アークセイバー》

【バルディッシュ】が変形し、金色の魔力刃を展開、鎌の形になる

「や!!!」

フェイトが【バルディッシュ】を振り、魔力刃が飛ぶ

魔力刃はジュエルシードの根っこを数本切り裂き、本体まで到達する  
しかし、ジュエルシードのバリアによりかき消された

《シューティングモード、セットアップ》

「いくよ、【レイジングハート】打ち抜いて!!」

【レイジングハート】に桜色の魔力が集まる

「デイバイン」

《バスター》

上空からなのは砲撃が直撃する

バリアで防いでいるのが精一杯のジュエルシード

そこへフェイトの砲撃が重なる

「貫け轟雷」

《サンダースマシャー》

二人の砲撃はバリアを貫通

ジュエルシード本体がむき出しになった

《《シーリングモードセットアップ》》

二人のデバイスが変形する

「ジュエルシード、シリアル7」

「封印」

ジュエルシードの魔力が収まり空中に浮遊する

しかし、二人は対峙したままだった

フェイトが浮かび上がり、なのはに正対する

「ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「・・・うん、タベみたいなことになったら、私の【レイジングハ

ート】も

フェイトちゃんの【バルディッシュ】もかわいそうだもんね」

「うん、だけど、譲れないから」

「私はフェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど・・・

私が勝ったら、ただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら

お話聞いてくれる？」

二人のデバイスが元に戻る、次の瞬間

二人は同時に加速し、デバイスを振り下ろした

「そこまでだ」

その攻撃は第三者によって止められた

フェイトの【バルディッシュ】は刀身で、なのはの【レイジングハート】は鞘で止められる

「達也（君）！！」

達也が二人の攻撃を止めていた

「今ここでお前らがぶつかり合えば、現実世界に影響がでる」

「え？」

二人はその言葉に周りを確認する

展開したはずの結界が消滅していた

「ユーノ君！！」

なのはがユーノの方を確認すると、ジュエルシードの攻撃で潰されたエロイタチがいた

「現実に被害が出るなら、ここで戦闘させるわけがいかない

それに、お客さんの登場のようだ」

その宣言通り、なのは達の近くに魔法陣が展開する

「あれは、転移魔法」

そこから現れたのはちっこい少年だった

「ちっこい言うな！！」

「……」

「……ごほん、时空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ

詳しい事情を聞かせてもらおうか」

もう一人の魔法使いの登場だった

t o b e c o n t i n u e d

## もう一人の魔法使いなの（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

今回登場した異家のキャラクターは某ゲームからの登場です。

そして、達也の力の片鱗が見えてきました。

正体がバレた達也がこれからどう動くのか作者も楽しみです。

（笑）

感想等はいつでもお待ちしております。

遅れましたが、お気に入り登録してくれている方々

本当にありがとうございます。

更新を続けていくので、これからもよろしく願いします。

それは大いなる危機なの？（前書き）

遅くなりました、第8話です。

今回は主人公のことについての説明会です。

結構長くなってしまいましたので

飽きる方もいらっしゃると思いますが

最後まで読んでいただけるとうれしいです。



それは大いなる危機なの？

数分前

アースラ ブリッチ

「二組の探索者、戦闘を開始しました」  
オペレーターより報告が上がる

「まずいわね」

アースラ艦長リンディはすぐさま指示を出す

「クロノ執務官、行ってくれるわね」

「はい、任せてください、艦長」

クロノはトランスポーターに乗り、急いで現場に向かおうとする

「頑張つてね」

リンディがハンカチを振って、緊張感の無い顔で送り出した

「い、行ってきます」

微妙に顔を引きつかせながらクロノはトランスポーターを起動

現場へと跳んだ

それは大いなる危機なの？

夕方

海鳴市 臨海公園

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ  
詳しい事情を聞かせてもらおうか」

乱入者の黒衣の少年は黒い杖を構えこちらに拒否権がない事を告げ  
ていた

「まずは全員、武器を収め、こちらに降りてきてもらおう」  
フェイトとなのははどうしていいかわからず、お互い顔を見合わせる  
達はこの状況で逆らうのは得策ではないと判断した為、素直に指  
示に従い

【天龍】を鞘に収め、クロノの前に降り立った

他の二人も達也の行動に従うように、地面に降り立つ

「よし、それじゃ・・・!!」

クロノはとつさに障壁を展開、上空よりの魔法を弾いた  
全員が目を向ける

「フェイト、撤退するよ、離れて」

次の魔法の準備をしながら、フェイトに撤退を促すアルフ

「くっ!!」

フェイトは一瞬戸惑ったものの、すぐに地面を蹴り

ジュエルシードの回収に向かう

その瞬間、アルフの魔法が放たれ、地面に直撃

辺りに砂が舞い上がる

フェイトはジュエルシードに手を伸ばし、捕らえようとするが

「ぎゃ!!」

砂塵の中から魔法が放たれ、直撃はしなかったものの

衝撃により、吹き飛ばされ、落下する

「っっフェイト(ちゃん)」「っ」

地面ぎりぎりですアルフがフェイトを受け止める

砂塵の中から杖型のデバイスを構えたクロノは二人に追い討ちを  
かけるように魔法を放つ

「くっ!!」

アルフは障壁を張ろうとするが

(間に合わない!!)

障壁魔法の形成が追いつかなかった

魔法は二人に直撃したと思われた

魔法の爆発による煙が晴れる

魔法はもう一人の蒼い目の少年、達也の障壁によって防がれていた

「馬鹿かお前らは、結界も張らずに魔法を撃ち合いやがって

これ以上続けるのなら、海鳴の守護者として、貴様らを排除する」

「達也!？」

アルフは自分を庇った達也に驚きの目を向ける

『フェイトを連れて逃げる』

突然の念話にアルフは反応が遅れる

『達也?』

『フェイトの動きが鈍い、おそらく、全身にある傷のせいだろうが・

・

何故そうなったのかは聞かない、そして

このまま戦闘を続けても意味は無い、だから引け』

デバイスを構える少年から目を離さずに達也が言う

『・・・あたし達をかばうのかい?』

『それはあいつの受け取り方次第だな』

そこで痺れを切らしてか、クロノが魔法を放とうとする

「駄目!!!」

「え!!!」

そこへなのはが割り込み、クロノが驚きの声をあげる

「やめて、撃たないで」

なのはの突然の行動でクロノに隙が生まれる

「逃げるよフェイト、しっかり掴まって」

その隙を見逃さず、アルフはフェイトを連れ、高速で離脱

その姿が見えなくなった

「あ・・・」

(また、話ができなかったな・・・)

なのはは二人の消えていった方を悲しそうに見つっていた

同時刻

アースラ ブリッチ

「戦闘行動は停止、搜索者の一方は逃走」

「追跡は？」

「多重転移で逃走してます、追いきれませんか」

「そう」

オペレーターの報告にリンディは少し考えるそぶりを見せる

アースラのモニターではクロノがロストロギアを回収していた

「ま、戦闘行動は迅速な停止、ロストロギアの確保も終了

良しとしましょう、事情もいろいろ聞けそうだしね」

リンディは通信のスイッチに手を伸ばす

（それにしても、あの少年、あの目、そして海鳴の守護者か・・・）

リンディの脳裏にある女性の姿が思い浮かび、確信めいたものを持つて

通信をつないだ

同時刻

海鳴市 臨海公園

クロノがジュエルシートを回収し

なのはと達也はそれを無言で見つめる

そこへ空中に魔方陣が出現、人の顔が映し出された

「クロノ、お疲れ様」

「すいません、片方を逃がしてしまいました」

「うっん、大丈夫よ、でね、ちょっとお話を聞きたいからそっちの子達をアースラまで案内してくれないかしら」

「・・・彼もですか？」

達也の方へ視線を向け警戒心をあらわにする

「ええ、何か不都合があるの」

「いえ、アースラに連れて行くことに反対はしませんが

彼はもう片方の探索者たちが逃げ出すのを手伝いました

拘束をした方がいいと思いますか・・・」

当の本人は木に寄りかかり、無言でことの成り行きを見守っていた

「その必要はないわ、あれは境界も張らずに魔法を連発した

貴方が悪いわよクロノ、この世界の人たちは基本的に魔法の

概念がないの、だから彼は止めた、街と街の人々を守るために

それが、守護者の使命だから、そうでしょう？」

最後の言葉は達也に向けられたものだった

達也は困惑の表情で魔方陣に映る人物を見る

「それは・・・、わかりました、あれは確かに僕のミスです、すぐ

に戻ります」

魔方陣が消え、少年がなのは達に向き直る

なのはは目の前で起きたSFチックな光景にぽかんと口を開けたまま

固まっていた

数分後

アースラ 内部

クロノに連れられなのは達はアースラへと転移してきた

『ユーノ君、ユーノ君、ここっていつたい』

『時空管理局の次元航行船の中だね

えっと、簡単に言っと、幾つもある次元世界を自由に航行できる船』

『あ、あんま簡単じゃないかも・・・』

クロノはスタスタと先に歩いていく

達也もそれに従い無言で歩く

なのはは戸惑いながらも二人に着いて歩いていった

その隣にはユーノが歩いている

つか、さっきはスルーしたが、無事だったのかエロイタチ・・・

『えっとね・・・、なのは達の住んでいる世界のほかにいろいろな

世界があつて

僕たちの世界もそのひとつで、その世界の狭間を渡るのがこの船で

それぞれの世界に干渉し合うような出来事を管理してるのが彼ら

時空管理局なの』

『そうなんだ・・・』

なのはは達也を見る

達也は無言で歩きつづけるだけだ

『た、達也君』

『ん、どうしたなの？』

『え、いや、その、身体は大丈夫なの、夕べは倒れてたし』

『ああ、大丈夫だ、心配するな』

『そう・・・』

『・・・』

また無言になる

なのはは聞きたいことがあったのだが、結局聞けずじまいになってしまった

そうこうしているうちに四人は扉をくぐった

そこでクロノが振り返り

「ああ、いつまでもその格好っていうのも窮屈だろう

バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

「あ、そっか、それじゃ」

デバイスとバリアジャケットを解除するのは  
それに達也も続いた

次にクロノはユーノの方を向き

「君も元の姿に戻った方がいいんじゃないか？」

「ああ、そう言えばそうですね、ずっとこの姿でいたから忘れてました」

「へ？」

なのはが何言ってるのこの人達、と言う風な目で二人を見る  
そこでユーノの身体が光り始めその姿が徐々に変わっていく

「ひー！」

光が消え、ユーノがいた場所に現れたのは

なのは達と同じくらいの少年だった

「なのは達にこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

なのはの方を見るユーノ、しかしなのははユーノを指差したまま  
驚愕の表情を浮かべていた。(口) こんな感じ

「ふ、ふ、ふ、ふえ

~~~~~

次元空間内になのはの叫びがこだましたとさ  
ちゃんちゃん  
「なのは？」  
「ユーノ君で、ユーノ君でその何！？えつとえーとだって、ふえ〜  
〜！！！」  
なのはは夢から覚めようと、しきりに頭を振りまわす  
しかし何度見てもそこには同じ年くらいの少年しかいないわけで・  
・  
その状況に、当事者以外の二人の内一人は笑いを堪えるのに必死で  
もう一人は  
「二人の間で何か見解の相違でも？」  
と首を捻っていた  
「えーと、なのは？僕達が最初に会ったときって僕はこの姿じゃ・  
・」  
「違う違う、最初からフェレットだったよー！！」  
「・・・・」

困惑したユーノはおそらくこの場で一番状況を理解しているだろう



人物に視線を向ける

その人物は笑いを必死に堪えながら答える

「俺がお前の正体を知っていたのは最初に会ったときにその姿を見たからじゃ

ないってことだ、くくく・・・」

ユーノは状況をまとめる

ぼくぼくぼく、と頭の中で音をたてている

(えーと、僕は達也が僕の正体を知っていたから

最初に会ったときにこの姿だったんだと思っていた・・・・・・でもなのははおどろいていて、達也がこの姿のことを知っているのは最初に会ったときにこの姿をしていたからじゃない

ってことは・・・、なのははこの姿のことをまったく知らない!!)ちいくん、と頭の中で響いたような気がした

「あゝ、そつだそつだ、ごめんごめん、この姿を見せてなかった」「だよね!!そつだよね!!びっくりした」

ユーノの誤解が解けて一安心といった表情になる二人

「あれ?それじゃあ、なんで達也は僕のことを・・・」

当然の疑問に達也を見る二人

ようやく笑いが止まった達也が答える

「ふう、それはな」

「あゝ、その、ちよつといいか?」

クロノが三人の会話に割ってはいる

「君達の事情はよく知らないが、艦長を待たせてるのでできれば早めに話を聞きたいんだが・・・」

「ああ、そうですね」

「ごめんなさい」

なのはとユーノはクロノに謝り、達也に視線を戻す

「後で話すよ、今はその艦長さんに会ってみよう」

「うん」「」

話がまとまり、クロノに視線を向ける三人

「では、こちらへ」

その言葉とともに歩き出したクロノの後を三人は静かについて行った

少し歩き一つの扉についたクロノはその扉を開けて中に入っていた

「艦長、来てもらいました」

「は!?!」

その部屋を見たのはと達也は驚きの声をあげる

盆栽に獅子脅し、さらに茶釜まである

まさに日本といった風景だった

その中央に長い碧の髪をポニーテイルにした美女が座っていた

「お疲れ様、まあ三人ともどうぞどうぞ、楽にして」

「……」

「？」

呆然となる二人になんだかよくわかってないユーノがいた

「どうぞ」

「あ、はい」

とりあえず腰をおろしたが、出てきた羊羹とお茶に

また、動きが止まるのは

それでも気を取り直し、現在の状況を話し始めた

「なるほど、そうですね……あのロストロギア

ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

「それで、僕が回収しようとする……」

申し訳なさそうに答えるユーノに

艦長・リンディは微笑みながら言葉をつむぐ

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

だが、クロノはそんなユーノを叱咤する

「……」

自分でももつともだと思っていたため、ユーノは何も言い返せなかった

「あの、ロストロギアって何なんですか？」

「ああ、遺失世界の遺産、って言うってもわからないわね・・・」  
「なのは疑問にリンデイはわかり易いように説明をはじめた

「えっと、次元空間の中には幾つもの世界があるの

それぞれに生まれて育っていく世界、その中にごく稀に  
進化しすぎる世界があるの、技術や科学、進化しすぎた  
それらが自分達の世界を滅ぼしてしまつて・・・

その後にとり残された失われた世界の危険な技術の遺産」

リンデイの説明の続きをクロノが続ける

「それらを総称して、ロストロギアと呼ぶ

使用法は不明だが、使いようによつては世界どこるか  
次元空間さえ滅ぼすことのできる力を持つこともある

危険な技術・・・」

さらにリンデイが続ける

「然るべき手続きをもつて、然るべき場所へ保管しなければいけない品物

貴女達が探しているロストロギア、ジュエルシードは次元干渉型の  
エネルギー結晶体、いくつか集めて特定の方法で起動させれば

空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層まで巻き起こす  
危険物」

「君とあの黒衣の魔導師がぶつかった時におきた振動と爆発  
あれが次元震だよ」

「あ」

なのは達の脳裏に昨夜の光景が浮かび上がる

「たった一つのジュエルシードの全威力の何万分の一の発動で  
あれだけの影響があるんだ、複数個集まって動かしたときの  
影響は計り知れない・・・」

「聞いたことがあります、旧暦の462年、次元断層が起こつたと

きのことを」

ユーノが昔聞いた事件を思い出す

「ああ、あれは酷いものだった」

「隣接する平行世界が幾つも崩壊した歴史に残る悲劇・・・  
繰り返しちゃいけないの」

リンディはそう言いながら、お茶に砂糖を入れる

「あー!!」

はのはでなくとも驚くよ

リンディはそのお茶を一口飲み、今度は達也の方へ視線を向ける

「さて、次は貴方なんだけど、話してくれないかしら

海鳴の特殊な環境、そして、貴方の目、“龍視”<sup>タツミ</sup>について」

「!!何故それを」

達也の表情が驚きに染まる

「昔、長期捜査の任務で海鳴市に滞在した事があるのよ

その時に先代の海鳴の守護者に捜査を手伝ってもらったの」

「・・・そうですか」

達也がリンディを見詰める

リンディは動じた様子も無くにこやかにその視線を受け止めていた

「艦長が捜査した事件なら一通り報告書を読ませてもらいましたが

その、海鳴の守護者ですか？そんな事が書かれていたものはなかった

気がします・・・」

クロノがリンディに疑問をぶつける

「それはそうよ、書いてないもの」

「・・・」

あまりの事に啞然とするクロノ

そこへなのはが最初から疑問に思っていた事を質問する

「じゃあ、この部屋が妙に日本の和室っぽいのは・・・」

「日本の文化はすばらしいわよね」

どうやら、海鳴に滞在した期間ですっかり日本に染まってしまった  
ようだ

「そうか、この妙なインテリアはこの世界のものだったのか・・・  
ってちつがーうー！報告書に書いてないとはどう言う事ですか!？」  
クロノが詰め寄る、リンディはそれを笑顔のまま受け流す

「約束なのよ、いろいろな事を聞く為のね

その条件が守護者については一切口外しないって事だったの」

「ですが、報告に嘘を書くなんて」

「あら、嘘は書いてないわよ、ただ、海鳴の特殊性について書かなかっただけ」

「・・・」

二度目の啞然とした顔

リンディはクロノとの話はこれで終わりとはばかりに達也に向き直った  
ようやく話が進められると、達也はため息を吐く

「海鳴の事を知っているなら、話す必要はないんじゃないか？」

「もう、十五年くらい前の事なの、情報が変わっているかもしれない  
いでしょう」

リンディが悪びれもなく答える

達也は再度ため息を吐くと一度、なのはに視線を向けてから

「いいですよ、どうせなのはに話そうと思っていた事です

今更、人数が増えたって特に変わりません」

と言った

「達也君」

「今まで黙っていた事、話すよ」

「うん」

「ですが、その前に、あれはどうするんですか？」

ドアに視線を向けながらリンディに問う達也

「あら、気付いていた？」

「当然です、“龍視”<sup>タツミ</sup>の能力は知っているのでしょう?」

「ふふ、そうだったわね」

二人の会話についていけない他三名

とりあえず、ドアの方を見つめる

リンデイがそのドアに向かって声をかけた

「エイミィ、そんな所で盗み聞きしないで入ってきなさい」

その声に反応してドアがガタツとゆれる

そして観念したのかドアが開き、十代後半の少女が入ってきた

「すみません艦長、我慢できなくて」

えへへ、笑ってごまかす少女

クロノは眉間に皺を寄せて、「馬鹿」と呟いていた

「問題ないわ、達也君、彼女、エイミィにも聞かせてあげてくれな  
いかしら」

「いいですよ、ただ、さっきの話にもあつたようにあまり口外しな  
い事

これは守ってくださいね」

「ええ、大丈夫よ」

「お前達もな、なのは、ユーノ」

「うん」

「わかった」

その返事に満足して、達也は海鳴の異常性とその守護者の役割を静かに話し始めた

「まずは、どうしてジュエルシールドが海鳴に落ちてきたんだと思う  
？」

全員を見渡しながら達也がたずねる

「偶然じゃないの？」

エイミィがもつともな答えを口にするが

「違います」

達也はきっぱりと言いきった

「じゃあ、誰かが人為的に落としたと言うのか、君は？」

「確かに、輸送船は誰かに襲われた可能性は高いけど」

「襲われたのは間違いないだろうが……、それも、違う」

クロノとユーノの答えもきっぱり否定

「だいいち、次元空間をわたっている船を襲い  
ピンポイントで海鳴に落とすなんてこと出来るのか？」

「無理だ、常識的に考えてな」

「なら、なぜ海鳴に落ちた」

達也はなのはを見る

「なんなの？」

なのははわからないようだ

「引き寄せられた、と言う事ね」

最後にリンデイが答える

「ご明察」

どうやら正解だったようだ

「……どういう事？」

他の四人は訳が分からず首をかしげている

「海鳴の土地は強い力を引き寄せてしまっんだ」

「……？」

「ふむ、仕方ない、最初から説明するか……」

達也は要領を得ない四人の為に昔話をする事にした

「時代は数百年前に遡る……」

その以前から海鳴にはある問題があった」

「問題？」

「海鳴の土地には常に異常なほどの魔力が内包されている」

「ちよつと待て、アースラの計器にはそんな反応なんて出てなかった

僕もあの地に降り立ったときにそんな魔力を感じていない

そんな与太話を聞いている時間は……」

「まずは話しを最後まで聞け、いつまでたっても終わらん」

「な！？……くそっ！！」

クロノは腕を組んで黙る

エイミイが先を促すように質問する

「その魔力がどうしたの？」

「あの土地はその魔力を集めて、ある意識体を作り出す」  
「意識体？」

「お前たちは一度見ているはずだ  
温泉のときに出てきたあいつだよ」  
「なのはの疑問にすぐさま達也は答える」

「あの時の！！」

「まあ、あれは失敗作と言ったところだがな  
満足な意識を持たず、魔力で身体を作り上げてしまった為  
暴走し、周辺をただ破壊するだけの存在だ」

「じゃあ、それを止めるのが」

「そう、海鳴の守護者と言われる、俺たちだ」

クロノも気を取り直し会話に参加する

「・・・さつき失敗作と言ったな？」

成功作は存在するのか？」

「ああ、その成功体がいるから」

俺たちは魔法を使える」

「・・・??」「・・・」

リンディ以外の4人が首をかしげる

「俺自身の魔力の保有量は、なのはの足元にも及ばない」

「え！？でも測定では・・・」

「だから、俺たちの魔力の元は自分自身じゃない」

達也はその言葉と共に待機状態の【天龍】を取り出した

「【天龍】」

《はい》

【天龍】は声と共に光りだし、形を変えていく  
数秒後、小さな青い龍が姿を現した

「精霊・【天龍】、海鳴が作り出した成功体の一体だ」

《これは私の本来の姿を縮小化したものですが

この姿でお会いするのは初めてですね

改めて宜しく願います》



【天龍】が器用にお辞儀をしながら挨拶する

「あの街は常に精霊を生み出そうとしている  
殆どが意識も持たず、身体も構成されずに魔力は霧散して終わりだ  
だが、稀に成功体が出来たり、身体のみが構成された失敗体が出来  
たりするんだ

俺たちは魔力値はそれほど高くない、だから成功体の精霊たちをそ  
の身に宿し

その力を使い、海鳴を守っているんだ」

達也は一度目を瞑り、すぐに開く

その瞳は黒から透き通った蒼に変化していた

「……！！」

リンディ以外の全員が驚いた

「だが精霊の力はある一方向のみに特化している」

「……特化？」

目のことを気にしながらもユーノが声を出す

「属性が決まっているんだ、たとえば炎や水、そして……」

達也が微量の魔力を放出する

すると室内にもかかわらず、風が頬を撫でた

「風といったようにな」

達也が魔力の放出を止めると風がおさまる

「特化しているという事は有利に働く場合もあるが  
不利に働く場合もある

その為、昔から守護者をしている血筋の者たちは  
特殊な力を身につけた

肉体が強化されたり、物を改変したり

そして……、「完全空間把握能力」の瞳を持つ事ができたり、な  
のどが渴いたのか、ユーノは自分にあてがわれた

お茶を手にとり、一口飲む

「ああ、ユーノ、飲まない方がいいぞ、ものすごく甘いから……  
と、言っても遅いか」

その時なのはは、野球の試合の時を思い出した

（確かあの時も、お父さんが出した、下剤入りのケーキをこんな風に回避してたよね・・・、と言う事は！！）

なのははユーノの顔を見る

「（口）。。。」

達也の言葉を待たずにお茶を飲んだユーノは目を飛び出させながら  
気絶した

「お茶を配る前にリンディさんが俺たちに隠れて

何かを入れるのを感じたからな」

「ゆー！ユーノ君！？しつかり」

なのはの呼び声に答え、何とか意識を取り戻したユーノ

「な、何ですかこれは！！」

リンディに目を向けて質問するユーノ

「あら、普通のお茶のはずだけど・・・？」

リンディは頬に手を当てながら答える

「艦長の基準でしょ、それは」

おそらくお茶をいれる段階で大量の砂糖を投入されているのだろう

リンディ艦長恐るべし

そして、達也はそれを“完全空間把握能力”で看破していたのだ

「はあ、話を戻そう」

達也の言葉にみんなが真剣な表情に戻る

「“完全空間把握能力”“龍視<sup>タリミ</sup>”

それが俺の・・・、巽家の血を引く者の能力の名称だ」

達也は羊羹を口にすする

こっちもかなり甘かったが、お茶ほど口にできないものではなかった

「海鳴の守護者の詳細はわかった

だが、それと今回のジュエルシードに

どんな関係があると言うんだ？」

クロノが疑問をあげると達也は静かに答えた

「強い力は惹かれあう、失敗体を狩るのだけが守護者の仕事じゃない

海鳴の強大な魔力に引き寄せられたものを街に被害が出ないように処分するのも俺たちの仕事だ。

だが何度も問題が起こっていたんじゃ、さすがにまずいからな昔はそれを止めるため、海鳴に強力な結界を張り

外界との接触を断つた・・・、そして異や乾<sup>イヌイ</sup>など能力の発現した一族達の統治の元

海鳴は、時々力に引き付けられてくる問題はあったが、いたって平和な時間を過ごした」

「おかしいだろう、そんな結界は感知できなかったし、そのような強大な力が眠っているなら

こちらで感知できたはずだ」

「そうだね、私が調べたときには何にも無かったよ」  
クロノとエイミイが口を挟む

達也も落ち着いて答える

「・・・約50年前、事件が起こった  
事件は解決したが、その結果として

結界を制御していた者の死亡により外界との接触を断っていた

結界も消滅、海鳴も他の街と同じ時間を進み出した

残ったものたちは海鳴の発展と守護に尽力し、

結界は弱体化したが街は急速に発展した

そして、現在に至る」

達也は眼を元の黒に戻した

「しかし、問題が解決した訳ではない

強い力を引き付けると言う点は、改善されていない

だから今でも問題が起こる事がある、今回の件がそうだ

だからこそ俺のような守護者が必要なんだ

これが、海鳴の異常性だ、何か質問は？」

達也がみんなを見渡す

まずはエイミイ

「精霊って誰にでも契約できるものなの？」

「その精霊に認められればな  
実際に魔法を発動するのは精霊で  
俺たちはそれを外に出す器官みたいなもの  
だから魔力が無い人間でも  
契約すれば魔法を使うことができる」  
次にクロノ

「そのデバイスは？」

「正確にはデバイスじゃない

精霊たちの身体を武器の形にしたものだ

精霊たちは契約に際し、魔力を契約者に宿し

身体を武器に変え、共に戦うんだ

昔はそのまま武器の形だったらしいけど

少し前にこちらの先代の守護者のときに

デバイスの技術を取り入れ

待機状態やバリアジャケット展開、電子機器操作も

出来るようになってる

インテリジェントデバイスとそう変わらないさ」

さらにユーノ

「僕の正体はどうして？」

「お前がフェレットになる前の戦闘を

俺は見えていたからな」

「その時助けてくれなかったのは・・・」

「お前が別の次元世界の人間だったことは

わかってたからな、信用に足る人物か

様子を見させてもらってたんだ

悪かったな」

最後になのは

「海鳴に住んでいる人たちが巽の家を称えているのは？」

「昔の名残だな、今はほとんど表世界にはでないが

昔はそれこそ、神のような扱いだったようだ」

「じゃあ、“蒼夜”っていうのは？」

「・・・俺の父さんの名前だよ

お前たちに名前を聞かれたとき

とっさに出てきたのがそれだったんだ」

「・・・そっか、これからもそう呼んだほうがいい？」

「達也でいいよ、いつまでも父さんの名前で呼ばれるのは

なんか、くすぐったくてかなわん」

「うん、わかった、それともう一個、達也君がこの間使った、ジユ

エルシードの暴走を止めた力は？」

「・・・俺が発言した能力は“龍視”だけじゃなかったのさ、今ま

では封印されていて

使わなかったんだが、あの時は状況が状況だったからな、三つある

封印の一つを

解除して、使用した」

「じゃあ、あの後倒れたのは・・・」

「けっこう厄介な力だな、力を使った反動といったところだ、今は

もう問題ない」

「うん、それどころか魔力が上がってるね」

「俺の能力は魔力の付加能力みたいなものだ

封印すれば当然、魔力も一緒に封印される

俺の場合は特に出力関係がな」

達也はリンディに視線を向ける

「どこか、変わっているところはありましたか？」

「そうね、大体は聞いた通りだけど、新しくわかったこともけっこ

うあったわ」

「俺が今話せることはこれが全部です、何度も言いますが

このことはあまり話さないでくださいね」

「却下だ！！そのような危険な力、局で管理しなければ、いつ問題

が起こるか・・・」

「ふう、だからあまり話したくないんだがな・・・、それで？」

時空管理局の管理に入り、俺たちはどうなる？

おそらく、実験動物にされるのが関の山だろうな」

「そんなことは」

「無いと言いつけるか!？」

「・・・」

達也の睨むような視線にクロノは無言になる

「クロノ、これは命令よ、今ここで聞いたことは口外することは許さないわ

基本的に管理外世界への干渉が出来ないのは貴方も知っているでしょう？

報告も私がするわ、これは先代とも約束したことなの  
その約束を破るつもりはないわ」

「・・・、わかりました」

「さて、これでこの話も終わりね」

リンディは再度お茶を飲み、告げる

「これより、ロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「「え!？」」

「・・・」

なのはとユーノはリンディの言葉に驚く

達也は無言のままだ

「君達は今回のことは忘れて、元の世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも、そんな」

納得がいかないのはが反論しようとするが

「次元干渉に関わる事件だ、民間人に介入してもらおうレベルの話じゃない」

クロノはきつぱりと言いつ切った

「でも!?!」

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう」

今夜一晩ゆつくり考えて、二人で話し合っ

それから改めてお話をしましょう

達也君については、こちらの指示は受けないでしょうからね」

「ええ、海鳴での事件で俺が出ないわけにはいきませんからね」

「でしょうね、先代にも同じことを言われたわ」

リンディはクロノに目配せする

「送っていいこう、元の場所でもいいね、エイミィ、転送の準備だ」

「あ、待ってよクロノ君」

クロノは反論は許さないとばかりに、立ち上がり、歩き出す

エイミィもそれに続く

なのは達も逆らう訳にはいかないので、立ち上がって、クロノ達を追った

「ああ、そうそう、達也君」

「はい」

最後尾を歩いていた達也にリンディは声をかける

「先代はお元氣？久しぶりに会ってみたいのだけれど」

「さあ、わかりませんね、今は守護者をやめて、単身で世界中を飛び回っているそうですから」

「あら、そうなの？残念ね、話をしたかったのに……」

「多分会えますよ、目的さえ達せば、いつかきつと……」

「え？」

リンディが疑問を口にする前に達也は部屋を出て行った

「何なのかしら」

リンディはこの言葉の真意を理解することができなかった

夕方

なのは達は夕焼けに染まる海をしばらく見つめていた

「とりあえず、帰ろっか」

「うん」

なのはの言葉にユーノが答える

「えっと、同い年くらい？」

「ああ、うん、多分」

そんな話をしていると達也がなのはに頭を下げた

「すまなかつた、今まで黙ってた」

「どうして謝るの？」

「結局、お前をだましてたことには変わりないからな」

「でも、理由があるんでしよう？」

私の負担になりたく無かつたって聞いたよ」

達也はユーノを睨む

ユーノはそっぽを向いて口笛を吹いていた

（ ） こんな感じ？

『後で覚えとけよ』

と念話だけ飛ばしとく

「いや、まあ、それもあるが・・・、お前を巻き込みたくなかったんだ

お前達には普通に過ごしてほしかった、だから俺は守護者になったんだ」

「ありがとう、でも私は・・・」

「今ならまだ戻れるが・・・、その気は無いのだろうか？」

「・・・私はフェイトちゃんと話がしたい、そしてお友達になりたいから」

「言つと思つた」

達也はなのはの想像通りの答えに苦笑する

「さすが達也君、よくわかつてる」



「付き合いが長いからな」

ふと達也は真面目な顔になり、なのは達に告げる

「これから先、どう動くかは二人でよく話し合ったほうがいい探索を続けるのなら彼らと動けば、行動は制限されるがいろいろなサポートを受けられるだろう」

「うん、でも達也君は？」

「俺は個人で動くさ、自由に動ける人間が一人は必要だからな」

（あいつと接触する為にも、な）

「そっか」

「ああ・・・、そろそろいい時間だな、帰るか？」

「うん」

「あ、待って僕も」

家に向かって歩き出す二人をユーノは急いで追う

途中でフェレット姿に変わって、なのはの肩に乗った

「とりあえず、普段はこっちの姿でいたほうが便利そうだから」

「はは、そうだね」

和気藹々と帰宅する三人

しかし、しばらくして達也が爆弾を投下する

「ああ、そうそうユーノ、謝っておけよ」

「ん？何を？」

人間だったことを黙ってたことは歩いている最中に謝ったので

達也の言葉の意味がわからなかった

達也はにやりと笑う

「温泉の時とか、一緒にお風呂に入ってたことをだよ（笑）」

二人が固まった

「んじゃ、俺は先に帰るから、結界は張っておくから安心しろ」

『けっこう丈夫なのを作りましたから、全力でやって大丈夫ですよ』

【レイジングハート】

「ユーノ、お前のことは忘れないよ」

達也が遠い目をしてつぶやく

『それ死亡フラグがたつちやいますよ(笑)』

達也と【天龍】はそう言っていると結界を張り、さっさと帰ってしまった

(やはりこれは仕返しなんだろうな・・・)

恐る恐るなのは顔を見るユーノ

「ユーノ君」

「は、はい」

なぜだろう前髪に隠れて目が見えないよなのは

「私ね、強い衝撃を与えれば、記憶って吹っ飛ぶと思うんだ」

「え!?!」

「でもね、論理だけじゃ誰も信じてくれないんだ、だから実験して証明しないとね」

「な、なのはさん!?!」

「【レイジングハート】も協力してくれるよね」

(そ、そうだ【レイジングハート】、君なら元の持ち主である僕を助けてくれるはず!!)

『もちろんです』

(やった!!--やはり君は僕のみか)

『マスターの役に立つのが私の最高の喜び』

(うっそ!!--)

『【天龍】のお墨付きもありますし、全力をもってあの淫獣で実験しましょう』

「い-----や-----」

「-----!!--」

『「デイバインバスター-----」

「-----!!--」』

「ぎゃ-----」

「-----!!--」

結界内にエロイタチの叫びがいつまでもいつまでも響いていたそう  
だ・・・

同時刻

アースラ データ解析室

モニターには先ほどのなのはとフェイトの戦闘が映し出されている

「すごいや、どっちもAAAクラスの魔導士だよ」

エイミーが映像よりはじき出される二人のデータに感嘆の声を上げる

「ああ、そして彼もな」

達也が映像に映し出されたところでクロノが返事を返した

「なのはちゃんはクロノ君の好みっばいかわいい子だし」

「エイミー!!そんなことはどうでもいいんだよ」

クロノの抗議は無視して解説を続けるエイミー

「魔力の平均値を見ても、なのはちゃんで127万、黒い服の子は143万

達也君は98万だけど、本来の力を封印されているらしいから正確には不明

なんだけどね。最大発揮時はさらにその三倍以上

クロノ君より魔力だけなら上まっっちゃってるね」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない、状況にあわせた応用力と的確に使用できる判断力だろう」

「それはもちろん、信頼してるよ。アースラの切り札だもん、クロノ君は」

こいつ調子いいな、と顔を歪めるクロノ

とそこで扉が開き、私服姿のリンディが中に入ってきた

「あ、艦長」

「ん？」

ゆっくりと近づいてくるリンディ

「ああ、三人のデータね」

「はい」

リンディも一緒にモニターを見つめる

「確かにすごい子たちね」

「これだけの魔力がロストログアに注ぎ込まれれば、次元震が起きるのもうなずける」

「なのはさん達のジュエルシードを集めている理由はわかったけど・

・

こっちの黒い服の子は何でなのかしらね？」

「ずいぶんと必死な様子だった、何かよほど強い目的があるのか・

「

「目的・・・ね、まだ小さな子よね、普通に育っていれば、まだ母親に甘えていた年頃でしょうに・・・」

三人は黒い服の少女が映るモニターをじっと見詰め続けた

同時刻

遠見市 フェイトの隠れ家

「駄目だよ、時空管理局まで出てきたんじゃない、もっとうにもならないよ

逃げようよ、二人でどっかにさ」

アルフは体を休ませているフェイトに懇願する

「それは、駄目だよ」

「だって、雑魚クラスならともかく、あいつ一流の魔導師だ

達也は約束を守ると思うけど、本気で捜査されたら此処だっていつまでばれずにいられるか……

あの鬼婆、あんたの母さんだって、なんか分けわかんないことばっか言うし

フェイトに酷い事ばっかするし」

「母さんのこと、悪く言わないで……」

「言うよ！！あたしはフェイトが心配なんだ

フェイトが泣くのも悲しむのもあたし嫌なんだ」

「大丈夫、私は泣かないし悲しくもないよ」

「あたしはフェイトに笑って、幸せになっただけなんだ  
なんで、何でわかってくれないんだよ！！」

「ありがとうアルフ、でもね私、母さんの願いを叶えてあげたいの  
母さんの為だけじゃない、きつと自分の為」

フェイトはアルフの頭に手を置き、優しくなでる

「だから、後もう少し……、最後までもう少しだから、私と一緒にがんばってくれる？」

「……約束して、あの人の言いなりじゃなくて、フェイトはフェイトの為に」

自分の為だけに頑張るって、そしたら、あたしは必ずフェイトを守るから」

「うん」

夜

海鳴市 高町家 なのはの部屋

「だから、僕もなのはもそちらに協力させてもらおうかと」

ユーノは【レイジングハート】をかいしてアースラと通信していた  
『協力・・・ね』

「僕はともかく、なのはの魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思えます」

ジュエルシードの回収、あの子たちとの戦闘、どちらにしてもそちらにしては便利に使えるはずですよ」

『うん、なかなか考えてますね、それならまあいいですよ』

『か!!かあさ・・・、艦長!!』

リンディの予想外の答えにクロノはつい素で驚いてしまう

『手伝ってもらいましょう、こちらとしても切り札は温存したいの、ね、クロノ執務官』

『・・・はい』

反論を許さないリンディの物言いにクロノは渋々了承するしかなかった

と、そこでエイミィがこちらを見ているのに気づいた

その目は“私の言ったとおりでしょう”といていた

『条件は二つよ、両名とも身柄を一時、時空管理局の預かりとすること』

それから、指示を必ず守ること、よくって?』

「わかりました」

なのははキッチンでの手伝いを終えて、桃子と向かい合って

ソファアに座り、今までの事そしてこれからの事を話した（魔法の類は無しで）

恭也達三人は御神流の修行のため外に出ている

「もしかしたら危ないかも知れない事なんだけど、大切な友達と一緒に始めたこと

最後までやり通したいの」

「うん」

「心配かけちゃうかもしれないんだけど・・・」

「それはもう何時だって心配よ、お母さんはお母さんだからなのは  
の事がすごく心配  
だけどね、なのはがどっちにするかまだ迷っているなら、危ないこ  
とは駄目よって言うと思うけど  
でも、もう決めちゃってるんでしょ？友達と始めたこと最後までや  
り通すって

なのはが会ったその女の子ともう一度話をしてみたいって」

「うん」

「じゃあ、いつてらっしゃい、後悔しないように、お父さんとお兄  
ちゃんはお母さんがちゃんと

説得しといてあげる」

「うん！！ありがとう、お母さん」

なのははリュックに必要な最低限の物を詰めて家を出た  
少し行くと達也が街灯の下で待っていた

「行くのか？」

「うん」

「そうか、よくあの二人を説得できたな」

「まだ、説得できてないよ、でもお母さんが必ず説得してくれるか  
ら」

達也は微笑みながら答える

「いい判断だ、桃子さんならあの二人を丸め込むこともできるだろ  
う」

なのはも笑いながら答える

「うん、家の最強はお母さんだからね」

「ああ、あの人には勝てる気がしない」

一通り笑った後、なのはは達也に真面目な顔で聞く

「達也君はやっぱり・・・」

「俺には俺の、なのはにはなのはの役目が、やらねばならないこと  
がある

だから俺は一緒には行けない」

「そう・・・だよな」

なのはの顔が翳る、そんな表情を見るためにここに来たわけじゃないだから、達也は言葉をつむぐ

「心配するな、俺たちは方法は違うが、行き着く先は同じはずだ

それに、同じジュエルシードを追うんだ、今までとそんなに変わら  
ないさ」

なのはは顔を上げる、その表情は決意に満ちていた

「・・・この事件、必ず終わらせようね」

「ああ、そのときはフェイト達も一緒にな」

「うん！！じゃあ、行ってきます！！」

「行ってこい」

すれ違いざまにハイタッチを交わし、なのはは走り出した

その姿が闇に消える

達也もその場から移動する

《いいのですか？なのはさんを一人にして》

達也の首飾りから【天龍】が声をかけてくる

「さつきも言ったろ、俺には俺の、なのはにはなのはの役目がある  
それに、あいつは一人じゃない」

《そうですね、・・・結末はどうなるのでしょうかね》

「わからないが・・・、あいつが悲しむ結果にはしないさ、俺が必  
ずな」

達也もまた闇に消えていった



四つのジュエルシードが鈍い光を放っている

プレシアは玉座に座りそれを見詰める

「早く、早くしなさいフェイト、約束の地が・・・、アルハザードが待ってるの

私の・・・、私達の救いの地が・・・」

その言葉は、プレシアと“もう一人”以外誰もいない場内に、むなしく響いていた

t o b e c o n t i n u e d

それは大いなる危機なの？（後書き）

どうでしたでしょうか？

なんかごちゃごちゃしててわかりにくいかも知れませんが

そのうち設定集にまとめようとは思いますが

それを待てないと言う方、ご不明な点がある方には

ネタバレしない範囲でお答えしたいと思います。

感想・アドバイス等お待ちしております。

決戦は海の上でなの（前書き）

無印編、第九話更新です。

## 決戦は海の上でなの

なのはとユーノはアースラに合流  
アースラは本格的にジュエルシードの搜索に  
動き出したのだった

## 決戦は海の上でなの

### 次元空間 アースラ内部

「と、言う訳で本日0時をもって、本艦全クルーの任務は  
ロストロギア、ジュエルシードの搜索及び回収に変更されます」  
ミーティングルームではリンディが主要メンバーに話をしていて  
そこにはクロノはもちろんのこと、なのはやユーノも参加していた  
「また、本件においては特例により問題のロストロギアの発見者で  
あり

結界魔導師のこちら」

と言ってユーノに視線を向けるリンディ

ユーノはその視線を受け、緊張しながらも立ち上がり

「はい、ユーノ・スクライアです」

と自己紹介をする

「それから、彼の協力者である現地の魔導師さん」

今度はなのはに視線を向ける

なのはもそれを受け、慌てて立ち上がった

「た、高町なのはです」

「以上の二名が臨時局員として事態に当たってください」

「よろしくお願いします」

二人は勢いよく頭を下げる

なのはが頭を上げると丁度、クロノと目が合った

笑いかけてみた、真っ赤になってそっぽを向かれました

そんなクロノに殺気を伴った視線を投げかける二人

一人は

(いくら可愛いからって、そんなあからさまに反応する事無いじゃない!!)

私だって、私だって~~~~)

もう一人は

(なのはに手を出すようなら、バインドで縛り上げて、土郎さんと恭也さんに

差し出そう、あの恐怖を貴様にもあじあわせてやる!!くくく)

と、まあそんなことを思っていた訳で・・・

ちなみになのははと言つと、何故顔をそらされたのかわからず

頭に?マークを浮かべているのだった、鈍感ですからこの子

その後

アースラ ブリッチ

ブリッチに移動した一行はこれからの動きを確認していた

「じゃあ、これからはジュエルシードの位置特定はこちらでするわ場所がわかったら、現地へ向かってもらいます」

「あ、はい」

「艦長、お茶です」

「ありがとうございます」

エイミィがお茶をもって登場、リンディがそれを受け取る

ユーノはその味を思い出したのか、「ひい!!」と悲鳴を上げて距離をとった

そんなことは日常茶飯事なのか

気にせずお茶に砂糖とミルクを大量に入れるリンディ

「はふう」

それを一口飲むと、とても幸せそうに顔をほころばせる

その光景をみたなのはは砂糖とミルクの量に顔を引き攣らせていたのだった

「そういえばなのはさん、学校の方は大丈夫なの？」

急に声をかけられてびっくりするなのは

だが、あまりに普通の内容で、リンディも怒っている感じじゃない  
どうやら顔を引き攣らせていたのを見られた訳じゃないようだ

「あ、はい、家族と友達には説明してありますので」

「そう、それならいいのだけどね」

「艦長!!」

オペレーターが声を上げる

「見つかったの!？」

「はい、場所は海鳴の西地区です」

再びなのは達に向き直るリンディ

「ユーノ君、なのはさん、お願いね」

「はい」

二人はトランスポーターに乗り込んだ

(アリサちゃん、まだ怒ってるかな・・・)

一瞬、そんな思いがなのはに浮かぶ、その次の瞬間なのは達は目的の場所へと飛ばされていた

朝

海鳴市 聖祥大付属小学校 なのはのクラス

「そういう訳で、高町さんはご家庭の事情でしばらく学校をお休みするそうです

でも、病気や怪我や不幸な事があってお休みする訳ではないですの  
で心配しなくて

大丈夫ですよ。巽君の方もご家族の方から昨日に引き続き休むと連  
絡がありました

こちらもちよつとした用事があるそうで、しばらく休むそうです」

朝のHRの前の時間帯、なのはと達也の席が空いていた  
その席を心配そうに見つめるアリサとすずか

「二人がお休みの間、ノートとプリントは・・・」

「はい、私が」

先生の言葉にいの一番に手を上げたのはアリサだった

「アリサさん、それじゃよろしくね」

「はい」

すずかはそんなアリサをにこやかに見つめていた

アリサもそんな視線に気づき、慌ててそっぽを向く

その態度にすずかはおかしくなり、つい笑ってしまった

「さて、それじゃあHRを始めましょう」

学級委員であるアリサが号令をかける

「起立、礼、着席」

HRが始まり、先生が話し始めるがすずかは窓の外を見つめていた

(なのはちゃんと達也君、元気にいるかな?)

すずかには二人が何かの事件に巻き込まれているんじゃないかと  
気が気でなかった

数日後

海鳴市 林の中 結界内

「アングャー………！！！」

結界内部では巨大な鳥が羽ばたき、逃走しようとしていた  
もちろん、これはジュエルシードである  
その鳥に緑の鎖が絡みつく

「捕まえた！！なのは！！！」

「うん！！！」

ユーノのチェーンバインドによって動きを封じられたジュエルシードに

なのはが封印を実行する

《シーリングモードセットアップ》

【レイジングハート】が変形する

《スタンバイレディ》

「リリカル、マジ刈る（笑）」

桜色をした魔力の帯もジュエルシードに絡みつく

「ジュエルシードシリアル？、封印！！！」

《シーリング！！》

「アングャー………！！！」

鳥の姿をしたジュエルシードはなのはにより封印され  
後には青い宝石が残った

それを【レイジングハート】の中に収める

《ジュエルシードナンバー？》

少し離れた場所では達也が二人の様子を見ていた

「あいつらは問題ないようだな」

《はい、ですがなぜこんなに離れているのですか？》



「あんまり情報を与えたくないのにな」

《時空管理局の方々にはですか？あんまり悪い人たちには見えませんが》

「あいつらはな、だが組織には必ず膿うみがあるもんだ」

《リンディさんでしたっけ？あの方は報告はしないと断言していましたが》

「いくら嚴重に情報を制限しても、どこからか伝わるものさ

万が一にでもその可能性がある限り、あちらに残す記録は少ないほうがいい

ま、リンディさんもそこら辺はわかまえているからこちらを無視しているんだろうがな」

《それもそうですね・・・、！！見つけました》

「ようやくか」

《これは・・・、面白いところにいますね、巽の山の湖です》

「あそこか・・・、確かにあそこなら見つかる心配はないだろう」

《あそこは特殊な結界で覆われていますからね、まあ、私には効果の無いものですが》

「そういう設定にしてあるからな、おそらく海鳴の魔力に呼ばれたか」

《力があればなんでも呼び込みますからね、あそこは》

「だから、俺のような存在が必要なのだろう」

《そうですね・・・、なのはさん達も帰ったみたいですし》

「ああ、俺たちも行くぞ」

達也が居た位置には一陣の風だけが残った

同時刻

アースラ ブリッチ

「状況終了です、ジュエルシードナンバー？、無事確保  
お疲れ様、なのはちゃん、ユーノ君」

封印を確認後、オペレーターはなのは達に労いの言葉をかける  
『はい』

「ゲートを作るね、そこで待つてて」  
その様子をモニターで見っていたリンディは二人の働きに感嘆の声を  
上げる

「うん、二人ともなかなか優秀だわ、このまま管理局くわんりゅうに  
欲しいくらいかも」

と、その言葉を聞いたブリッチのクルーは、この人ならやりかねない  
と本気で思ったりした

リンディ・ハラオウン、のほほんとしているがその計算高さは  
桃子とためをはれるほどなのである

「艦長、いいのですか？もう一人の少年の方は・・・」  
オペレーターオペレーターの一人がリンディに尋ねる

「データには残さないようにね、彼らの情報は最小限にする必要が  
あるわ」

「それは大丈夫ですが、何故ですか？」

「上には頭の固い連中がいるのよ、その人たちを刺激しないように・  
・・ね」

「はあ？」

まだわかってないようだったが、これ以上は説明の使用が無い

その為、この話は無理やり打ち切り、オペレーターは仕事に戻らせた  
(そういえば、昔もこんなやり取りをしたわね)

リンディは思い出が一瞬頭をよぎるも、すぐに気を取り直し  
新たな指示を出したのだった

こちらはデータ解析室

エイミィとクロノは引き続き黒衣の少女・フェイトの素性と居場所を

探っていた

「この黒い服の子、フェイトって言ったっけ？」

「フェイト・テストアロツサ、かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

「へー、そうなの？」

「だいぶ前の話だよ、ミッドチルダの中央都市で魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして、追放されてしまった大魔導師・・・」

「その人の関係者？」

「さあね、本名とも限らない」

コンピューターがフェイトの居場所をはじき出す

答えは、“見つからない”だった

「やっぱり駄目だ、見つからない、フェイトちゃんてばよっぽど高度なジャマー結界を使っているのかな？」

モニターにオレンジの使い魔が映し出される

「使い魔の犬、多分こいつがサポートしてるんだらうけど

使い魔一匹でやるには巧妙過ぎる、一体何処に隠れているんだ？」

「・・・もう二個もこつちが発見したジュエルシードを奪われちゃってるんだよね」

「しっかり探して捕捉してくれ、頼りにしてるんだから」

「はいはい」

二人はもう一度フェイトの居場所を探し始めた

「フェイトちゃん、現れないね・・・」

「うん」

アースラの通路でなのはとユーノはブリッチチに向かいながら話していた

「こつちとは別にジュエルシードを集めていつてるみたいだけど・・・」

「うん、達也君もあれから会ってないし」

「僕達がジュエルシードを封印しているとき、近くまで来ているみ

ただよ  
封印されるとすぐに帰っちゃうけど、おそらく僕達を見守ってくれ  
ているんだね  
危なくなったらすぐに助けられるように」  
そんなことを話しながら歩いてみると、ブリッチはもう目の前だった  
二人は今回のことを報告するために、ブリッチへ入っていった

同時刻

海鳴市 巽の山にある湖

フェイトとアルフは運良く見つけた、結界が張ってあるこの地に  
身を潜めていた

(ミッドチルダでは見ない術式だ、ものすごく巧妙にこの湖を隠し  
てる

ここを見つけれられたのはラッキーだったね)  
アルフはそんなことを思いながらフェイトに視線を移す  
フェイトは大きな岩の上で風を感じていた  
その時、今まで強く感じていたジュエルシードの気配が消えたのが  
わかった

「フェイト、駄目だ、取られたよ」

「そう、あの白い服の子達だね」

「やっぱ、向こうに見つからないように探すのは、難しいよ」

「うん、でももう少しがんばろう」

フェイトは腕に巻きつけられていた包帯を取った

腕は完治しているようだっ

「もう、怪我は大丈夫みたいだな」

「「!!」」

急に声をかけられ、驚き振り返ると達也が歩きながら近づいてきた  
「達也」

「なんであんたがここに!？」

「なんでって、ここが俺の守護する最重要地点だからさ」  
ある程度近づいて立ち止まり答える

「じゃあこの結果は!！」

「話したろ、海鳴は未だに力あるものを引き寄せていると・・・

ここがその中心地、魔力の全てが集まる場所だ」

確かによく見ると、湖の中に鳥居みたいなものが見える

フェイトたちはこれの意味を知らなかったのだが・・・

「だからこの地には海鳴の街を覆っている結果より

強力な結界がかけられている、・・・まあ気休めにしか  
ならないけどな」

「あいつらに言うのかい・・・」

「言わないよ、もちろんあのアジトのこともな

俺はお前達の敵じゃない、あいつらに荷担する気もない」

「信じていいんだね？」

「さあな、それは俺が決めることじゃない、お前達が決めることだ  
ろう?」

達也はフェイトの方を向く

「一つだけ聞く、これから先二人でやっていくのは無理に近い

それでも、手を引くつもりは無いんだな？」

「母さんが待つているから、ジュエルシードを集めれば母さんは

元の優しい母さんに戻ってくれる、だからやめるつもりはないよ」

「そうか、なら止めはしないが、だがなのはの話も聞いてやってく  
れないか

少しだけでもいい、今のあいつの立場だと難しいかもしれないが・・・

「・

」話をしても何も変わらない」

「変わらないかも知れない、だが変わるかも知れない」

アルフが唸りながら答える

「そんな、勝手な話!!」

「それに、話しても何も変わらないのなら、話をしてもいいはずだ、違うか？」

「・・・」

「難しく考えなくてもいい、ただ話を聞いてくれと言ってるんだ俺が望むのは、変わる、変わらないじゃない、やるかどうかただそれだけだ

頼む」

「・・・考えてみるよ」

「フェイト!!」

「そうか・・・、しばらくはここにいてくれてもかまわない家の連中には俺から言っておこう」

そう言っただけは踵を返し、結界の外へ消えていった

「フェイト？」

「・・・アルフ、もう少し回復したら少し無茶をするけど、許してね」

フェイトは湖を見ながら、そう呟いた

数日後

次元空間 アースラ

「僕達がアースラに来てから、もう十日か」

なのはとユーノは部屋で今までの状況を整理していた

「私達が手にいれたジュエルシードは？、？、？の計三つ

フェイトちゃん達が手にいれたのがシリアル？と？の二つだから・・・

「あ、と六個か」

一方、こちらはブリッチ

「残り六つ、見当たらないわね」

「搜索範囲を地上以外まで広げています、海が近いのでもしかするとその中かも」

例の黒い服の子と合わせてエイミーが搜索してくれています」

「そう・・・」

リンディとクロノも後六つに手をやいているようだ

さらに食堂に移動

部屋から移動してきたなのは達がクッキーを食べていた

「今日も空振りだったね」

「うん、もしかしたら結構長くかかるかもね・・・」

なのはごめんね」

「へ？」

「寂しくない？」

「別にちつとも寂しくないよ、ユーノ君とも一緒だし

一人ぼつちでも結構平気、ちっちゃいころはよく一人だったから・・・」

家、私はまだちっちゃい頃にね、お父さんが仕事で大怪我しちゃってしばらくベットから動けなかったことがあるの・・・」

喫茶店も始めたばかりで今ほど人気が無かったから、お母さんもお兄ちゃんも

いつもずっと忙しくて、お姉ちゃんはずっとお父さんの看病でその頃はずっと一人で過ごしていたの・・・だから結構一人でいるのは慣れてるの」

「そっか・・・」

「そういえば私、ユーノ君の家族の事とかあんまり知らないね」

「うん、僕は元々一人だったから」

「え、そうなの？」

「うん両親はいなかったけど部族のみんなが育ててくれたからだから、スクライアの一族みんなが僕の家族」

「そっか」

そんなことを話しながらクッキーを食べる

(そういえば、達也君と初めて会ったのも確かその時期だったよね)  
なのはの脳裏に幼馴染の顔が浮かぶ

その時艦内に警報が響き渡った

『エマーゼンシー、捜査区域内の海上にて大型の魔力反応をキャッチ』

エイミイが画面を見ながら叫んだ

「なんてことしてんのあの子達!!」

同時刻

海鳴市 海上

そこには巨大な金色の魔法陣が浮かんでいた

その魔法陣は雷の力を溜め込んでいて、今にも雷が海へ落ちそうだった

周囲の天気もあまりに強力な魔力で雷を呼び出した為か、雲が空を覆い、雨が降りだし、その勢いを増していく

そばに控えるアルフが結界を張っているようだ

(ジュエルシードは多分海の中、だから海に電気の魔力流を流し込んで



ジュエルシールドを強制発動させ、位置を特定する。そのプランは間違っている

ないけど、でも、フェイト……)

「撃つは雷、響くは轟雷」

フェイトの詠唱とともに魔法陣の周りに電気の塊が出来上がる

「はぁー！ー！！サンダーウォール！！」

フェイトが魔法を発動、いくつもの雷が海に降り注いだ海に流しこんだ魔力により、ジュエルシールドが発動するその数、六つ

「はぁ、はぁ、はぁ、見つけた残り六つ」

フェイトは肩で息をしながらその光景を見つめる

(これだけの魔力を撃ちこんで、さらにすべてを封印して

こんなのフェイトの魔力でも絶対に限界越えだ)

「アルフ、空間結界とサポートをお願い」

「ああ、任せといて」

(だから、誰が来ようが、何が起きようが、あたしが絶対に守ってやる！！)

ジュエルシールドの魔力により、海は荒れ、風が吹き、竜巻が発生する

フェイトは自身のデバイス【バルディッシュ】に声をかける

「行くよ、【バルディッシュ】、頑張ろう」

フェイトは竜巻に向かって加速した

同時刻

海鳴市 海岸線

「ちい！！あいつ等、ここまで無茶するか!?!」

達也は急いでフェイト達がいるであろうポイントに移動している

《焦っているようですね、勝負をかけたのでしょ》

「ああ、俺の所為かな・・・」

《若？》

「俺の言葉がフェイトにスイッチを入れちまったんだろ？

おそろくあいつ自身わかってるんだ、なのはと話をすれば

何かが変わってしまうことに・・・」

《だから、その前にすべてを終わらせようとしたわけですね》

「おそろく、二つの思いがひしめき合っているんだ

このままでいいと思う気持ちとこのままじゃ駄目だと思っ気持ちがない

だから混乱し、こんな無茶な行動にでる」

《昔の貴方のようにですか？》

「俺はこんな無茶はしなかったけどな。だがあの時混乱したのは確

かだ

・・・今論議する事じゃないな、急ぐぞ

《はい》

達也は更に加速、目的地はもう目の前だった

次元空間 アースラ ブリッチ

「なんとも呆れた無茶をする子だわ!!」

「無謀ですね、間違いなく自滅します」

ブリッチのモニターには竜巻とそこから発生する電撃を懸命にかわすフェイトが

映っている、リンディ達はその様子を見つめていた

「あれは、個人に出せる魔力の限界を超えている」

その時、ブリツチの扉が開き、なのは達が走り込んでくる

「フェイトちゃん!!」

モニターに映るフェイトを見て、なのはは声を上げる

「あの!! 私急いで現場に!!」

「その必要はないよ、放っておけばあの子は自滅する」

「え!!」

クロノの答えになのはは愕然とする

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい」

「でも!!」

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

今、この場でなのはの言葉に耳を傾けてくれる人物は皆無だった

彼らは、そのように教育されてきた集団なのだから

同時刻

海鳴市 海上

フェイトは懸命に電撃をかわすが、竜巻の強風によって動きが制限され

徐々に追いつめられていった

「きゃ!!」

電撃の一つがフェイトをかすめ、その衝撃でフェイトは吹き飛ばされる

「フェイト!!」

助けようとするアルフだが、雷撃がまるで意志を持っているかの

とく

まわり付き、身動きが取れない

「く……っ!!」

何とか体勢を立て直すフェイトだが、最初に放った一撃で魔力の殆どを使っていた為

【バルディッシュ】の魔力刃が霞んで形成できていない、それほどまでに弱っていた

さらにそこに追い討ちをかけるかのごとくフェイトに雷撃が降り注いだ

かわす事も、防ぐ事もフェイトには出来なかった

「フェイト!!」

雷撃が直撃するかと思われた瞬間、フェイトの身体は横から来た蒼い影にさらわれる

間一髪のところまでフェイトは雷撃をよける事が出来た

「どうやら間に合ったようだな」

「た・つや？」

自分の状態がよく理解できていないフェイト、蒼い影・達也がフェイトの肩を支えていた

次元空間　アースラ　ブリッチ

「達也君!!よかったフェイトちゃん」

達也の登場により、助かったフェイトを見て、なのはは安堵の息を吐く

今にも飛び出していきそうななのはにリンディは諭すように言う

「私たちは常に最善の選択をしなければならぬわ、残酷かもしれ

ないけど

これが現実」

「でも……！」

モニターにはフェイト達が雷撃をかわし、竜巻に近づこうとしているのが映っている

なのはは何もできず、ただモニターを見つめていた

『行つて』

突然、念話が聞こえてきた、その声の主はユーノ

『なのは行つて！僕がゲートを開くから、行つてあの子を……！』

『でも、ユーノ君、私があの子と、フェイトちゃんと話したいのはユーノ君とは……』

『関係ないのかもしれない、だけど僕はなのはが困っているなら力になりたい』

なのはが僕にそうしてくれたみたいに……』

ユーノの背後に魔法陣が現れる、それは転送の魔法

「……！」

気付けば、なのはは走り出していた

「君は……！」

それにいち早く気付いたクロノが声を上げるが、その時にはなのはは魔法陣の上に乗っていた

「ごめんなさい、高町なのはは指示を無視して勝手な行動をとります……！」

「あの子の結界内へ、転送……！」

ユーノが術式を組み上げる、次の瞬間、なのはは空へ放り出された

なのはは落下しながら【レイジングハート】に声をかける

「行くよ【レイジングハート】、私に力を貸して！」

《もちろんです、私の力はあなたの為に》

「風は空に、星は天に、輝く光はこの腕に、不屈の心はこの胸に！！

【レイジングハート】セエエツトアアアップ！！」

《スタンバイレディ、セットアップ》

なのはの身体が桜色の光に包まれた

その魔力にいち早く感じ取ったのは、幼なじみの少年だった

「ようやく来たか・・・」

フェイトも気付き、上空を見上げる

白いバリアジャケットに身を包み、桜色の魔力光をもつ少女、高町なのはがそこにいた

「フェイトの邪魔をするなーーーーー！！！」

アルフは絡まっていた雷光を引き千切り、なのはに襲い掛かるそれを止めたのは緑色の魔力光を持つ少年・ユーノだった

「違う、僕たちは君たちと戦いに来たんじゃない！」

「ユーノ君！！！」

「馬鹿な！！何やってんだ君たちは！！！」

クロノからの念話は怒り半分、驚き半分と言った感じだった  
リンディは無言で事のなり行きを見ている

「ごめんなさい、命令無視は後でちゃんと謝ります、でも放っておけないの」

「な！！！」

「あの子きつと一人ぼっちなの、一人きりが寂しいのは、私少しだけどわかるから！！！」

雷光がユーノ達を襲う

「まずはジュエルシードを止めないとまずい事になる！！  
だから今は、封印のサポートを！！！」

ユーノがチェーンバインドを発動、竜巻に絡み付き、その力を抑えようとする

「・・・」

アルフはその姿を呆然と見詰めていた

「フェイトちゃん!!」

なのははフェイトの隣まで移動する

「手伝って、ジュエルシールドを止めよう!!」

【レイジングハート】から桜色の魔力が溢れ出す、その魔力は【バルディッシュ】へと

流れ込んだ

《魔力が・・・、すまない》

《いえ、マスターのご意志ですから》

「二人できつちり半ぶんこ」

なのははフェイトに自身の魔力を分け与えたのだった

「うわっ!!」

ユーノは六つの竜巻を一人で懸命に抑えるが、上手く行かず、吹き飛ばされそうになるのを

防ぐので精一杯だった

そこへ、アルフのオレンジのチェーンバインドが竜巻に絡み付く

「ユーノ君とアルフさんが抑えてくれてる、今のうち!」

「けど、二人がかりでも、あの竜巻を全て突き破って封印するのは・

・・・」

「それは・・・」

『それは俺にまかせてくれないか』

達也が、雷光をかくぐりながら念話を送ってくる

『俺がああ竜巻を一時的にだが吹き飛ばす、そのタイミングで封印しろ』

『達也君・・・、わかった、お願い!!』

達也が少し離れたところで陣を張った

「フェイトちゃん、今聞いていた通りだよ

達也君が竜巻を吹き飛ばしたら、二人でせーので一気に封印!!」  
なのはフェイトから離れて、雷光をかわしながら自分の射撃範囲  
まで移動する

《シューティングモード》

まるで狙いすましたかのような雷撃の嵐を、なのはは掻い潜って行く  
（一人ぼっちで寂しいときに一番してほしかった事は、大丈夫って  
聞いてもらう事でも、優しくしてもらう事でもなくて・・・）

なのはは足元に魔法陣を展開して、フェイトに視線を向けた

《シーリングフォーム、セットアップ》

フェイトのデバイス【バルディッシュ】が自身の判断でモードを変  
更する

「【バルディッシュ】？」

《私も彼女の意見に賛成です、まずはジュエルシールドを止めないこ  
とには

どうすることもできません》

「・・・そうだね、やろう【バルディッシュ】」

フェイトも自身の射程に入るため、上空へ上っていく  
ふとなのはの方へ目を向けると、彼女はともうれしそうに笑って  
いた

達也の方へ目を向けてみる、彼も穏やかに笑っていた

フェイトは射程距離内へと到達、魔法陣を展開した

フェイトが魔法陣を展開したのを見届けてから

なのはは【レイジングハート】に声をかける

「デイベインバスターフルパワー、いけるね？」

《オールライト、マイマスター、一気にいきますよ》

【レイジングハート】の宣言通り、なのはの魔法陣は一気に  
その大きさを広げていった



なのはとフェイト、二人の魔力が膨れ上がっていくのを達也は感じた  
二人から視線で合図を受ける

「いいみたいだな、【天龍】今出せる最大出力で吹き飛ばすぞ！」

《はい、行きますよ！！》

達也の前方にも蒼い魔方陣が現れる

《魔力収束完了！》

「風陣招来！」

達也は左腕を前方に構える

「サイクロンクラッシュャー！！」

蒼い竜巻が現れ、六つの竜巻を飲み込み、かき消す

逆回転の竜巻で相殺したのだ

後には六つのジュエルシードが残った

「今だ！！なのは！！フェイト！！」

達也の攻撃が竜巻をかき消した瞬間、なのははフェイトに

合図を送っていた

「せえーの！！」

なのはとフェイトは、自身の限界まで貯めた魔力を一気に解き放つ

「デインバインバスター！！」

「サンダーレイジ！！」

上空から金色の雷と桜色の閃光を受け、魔力による爆発が起こる

それは地形を変えるのではないかと思うほどの大爆発だった

同時刻

アースラ ブリッチ

モニターに映し出された光景に皆、息を呑む

エイミーがはじき出された結果を告げる

「ジユエルシード、六個すべての封印を確認しました」

「なんてでたらめな・・・」

「・・・でも、すごいわ」

ブリッチでは未だにその光景に目を奪われているものが大半だった

海鳴市 海上

六個のジユエルシードの封印を完了し、なのはとフェイトは改めて向かい合っていた

（同じ気持ちを分け合えること、寂しい気持ちも、悲しい気持ちも半分個にできること、ああそうか、やっとわかった・・・

私、この子と分け合いたいんだ）

「友達になりたいんだ」

「え!？」

あまりに突然の事で、少しの間

フェイトはなのはの言葉を理解することができなかった  
それを他の三人が見つめる

「あの子、何を？」

「なのはは伝えたただだよ」

「自分の本当の気持ちを、な」

アースラ ブリッチ

艦内に、警報が響き渡る

「次元干渉！！別次元から本艦及び戦闘空域に向けて魔力攻撃が来ます！！」

あ、あと六秒！！」

「な！！」

アースラに紫の雷が落ちたのは次の瞬間のことだった

海鳴市 海上

そしてこちらにも紫の雷が落ちてきた

「！！か、母さん！！ああああああああああ！！」

「フェイトちゃん！？きゃ！！」

紫の雷がフェイトを直撃、なのも吹き飛ばされる

「ちい！！【天龍】！！」

《行けます！！》

「蒼破刃！！」

達也が【天龍】を抜刀しながら、蒼破刃を放つ

その魔力の斬撃は紫の雷を切断、フェイトは空中に放り出される

「フェイト！！」

アルフは人間形態に変身し、落ちてくるフェイトを抱きかかえ

そのままジュエルシールドの方へ向かい、回収しようとする

しかし、寸前でクロノが転移してきて、アルフを止める

「ジャマを・・・するなあ！！」

「うわあー!!」

アルフはクロノを全力で吹き飛ばし、ジュエルシードを見る

「あー!!三つしかない」

そこにあっただのは三つ、半分がなくなっていた

クロノに視線を向ける

クロノの手には三つのジュエルシードが握られていた

クロノはそれを自身のデバイスに収納する

「ぐうう、ああああああー!!」

アルフは力任せに魔法を放つ、それは海に着弾し水飛沫で

アルフ達の姿を隠した

なのは達が水飛沫による目くらましから回復したとき

フェイト達と残り三つのジュエルシードの姿はどこにも無かった

アースラ ブリツチ

紫の雷がアースラへの攻撃をやめ、引き返していく

「逃走するわ!!捕捉を!!」

「駄目です!!雷撃でサーチャーの機能が停止!!」

「機能回復まで後二十五秒!!追いきれません!!」

「くうう・・・!!」

リンディは苦々しい表情で椅子に腰をおろす

「機能回復まで対魔力防御、次弾に備えて」

「「はい!!」」

「それから、なのはさんとユーノ君、クロノ、達也君も回収します」

「彼もですか?」

「ええ、少し相談したい事があるの」

「了解」

海鳴市 海上

なのは達はただ空中にたたずんでいる  
アースラからの連絡が入るまで誰一人、  
声を上げる者がいなかった

t o b e c o n t i n u e d

決戦は海の上でなの（後書き）

サイクロンクラッシャー

広域空間殲滅魔法

竜巻を発生させ空間内に存在するものを切り裂く

範囲外にいても周りに風が渦巻いているため

吸い込まれる可能性がある

「風陣招来」

感想をユーザーではない方でも書けるようにしました  
意見やアドバイス等いただけるとうれしいです

それぞれの胸の誓いなの(前書き)

第十話更新

今回、原作の設定をかなり変えています  
ご了承ください

それぞれの胸の誓いな

アースラ ブリッチ

「三人とも戻ってきて、それと達也君も連れてきて頂戴」

「・・・了解」

リンディは現場にいるクロノ達に帰艦命令を出した

「で、なのはさんとユーノ君には私直々のお叱りタイムです」

それぞれの胸の誓いな

アースラ ミーティングルーム

「指示や命令を守るのは個人のみならず、集団を守るためのルールです」

勝手な判断や行動が貴方達だけでなく周囲の人達をも危険に巻き込んだかもしれないこと

それはわかりますね？」

「はい」

リンディの言葉になのはただ頷くことしかできない

だが、仕方の無いことだ、今回の命令無視は局員としては許されるものではないのだから

それは臨時局員であるなのは達にも当てはまることだ、しかし・・・  
「本来なら厳罰に処すところですが、結果としていくつかが得るところがありました」

よって今回のことは不問とします」

「え？」



二人とも驚いた顔をしている、当然だろうなのは達もことの大きさは十分に理解していたのだから

リンディの優しさに二人は感謝しなければならぬ

「ただし、二度目はありませんよ、いいですね」

「はい、すいませんでした」

二人はリンディに深々と頭を下げた

「さて、問題はこれからね・・・クロノ、事件の大元について何か心当たりは？」

早々と気持ちを切り替え、傍らに控えていたクロノと達也の方を向き声をかけるリンディ

「はい、エイミー、モニターに」

「はいはい」

クロノが前に出てきてエイミーに指示を出す

すると部屋の中央にモニターが現れ、一人の人物を映し出す

「あら!？」

リンディはその人物に見覚えがあったようだ

「そう、僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テストアロツサ・・・」

専門は次元航行エネルギーの開発、偉大な魔導師でありながら

違法研究と事故によって放逐された人物です・・・」

モニターにはプレシアのデータが次々表示されている

「登録データとさっきの攻撃の魔力波導も一致しています

そして、あの少女フェイトはおそらく・・・」

「フェイトちゃん、あの時、母さんて・・・」

なのははさっきの攻撃の時にフェイトが呟いていたことを思い出した

「親子・・・ね」

リンディが結論を口にする

「そ、その、驚いてたというより、なんだか怖がつてるみたいでした」

なのははその時の状況を思い出しながら告げる

「エイミー！！プレシア女史についてももう少し詳しいデータを出せる？

放逐後の足取り、家族関係、その他なんでも」

「はいはい、すぐ探します」

エイミーの声を聞きながらなのはモニターに映る人物を見つめていた

（この人がフェイトちゃんのお母さん・・・）

## 時の庭園

ほとんど人のいないこの場所に何かがしなり打ち付けている音が聞こえる

フェイトがバインドで縛られ、プレシアが鞭を持ち息を切らせていた

「はあ、はあ、あれだけの好機を前にして、ただボーっとしているなんて・・・」

「・・・ごめんなさい」

フェイトの身体には無数の傷がある

「酷いわ、フェイト・・・あなたはそんなに母さんを悲しませたいの！！」

プレシアが鞭を振るう、その痛みで朦朧とした意識の中で

フェイトは二人の人物の言葉を思い出していた

（「あいつなら、お前達を・・・」

「友達になりたいんだ」）

しかし、その言葉の意味を考えようとした時、更なる激痛がフェイトを襲い

フェイトはその痛みに耐えることができず、意識を手放したのだった

アースラ

数分後、プレシアの情報を集めたエイミーが説明を始める

「プレシア・テストロツサ、ミツドの歴史で26年前は中央技術開発局の

第三局長でしたが、当時彼女個人が開発していた次元航行エネルギー駆動炉“ヒュードラ”使用の際、違法な材料をもって実験を行い・  
・失敗

結果的に中規模次元震を起こした事によって、中央をおわれて地方に異動になりました」

モニターに当時の映像が映し出される、地面が割れ、炎が噴出し一面が焼け野原になっていた

「ずいぶんもめたみたいですが、失敗は結果に過ぎず、実験材料にも違法性は無かった、と・・・」

辺境に異動後も数年間は技術開発に携わっていました

しばらく後行方不明になって、それっきりですね・・・」

「家族と行方不明になってからの行動は？」

「その辺のデータは綺麗さっぱり抹消されちゃってます

今本局に問い合わせ調べてもらっていますので・・・」

「時間はどれくらい？」

「一両日中には・・・と」

リンディは報告を聞き終え、少し思考する

「ふむ・・・、プレシア女史もフェイトちゃんもあれだけの魔力を放出した直後では

そうそう動きは取れないでしょう、その間にアースラのシールド強

化も

しないといけないし・・・」

リンディは立ち上がり、なのは達に向かって告げる

「貴女達は一休みしておいたほうがいいわね」

「あ、でも・・・」

「特になのはさんはあまり長く学校を休みつばなしでもよくないでしょう」

一時帰宅を許可します、ご家族と学校に少し顔を見せておいたほうがいいわ」

そう言つてリンディは達也に向き直つた

「・・・はい」

なのはもこれ以上命令無視はしたくないので素直にうなずくしかなかった

「さて達也君、次は貴方への話なんだけど」

「ずいぶん待たされましたが、大体はわかってますよ」

達也はため息混じりに答える

「俺の力を貸してほしい、といったところですか？」

「ええ、その通りよ、相手は大魔導師ですもの、こちらの戦力を整えておきたいの

それに、プレシア女史が何をしようとしているのかはわからないけれど

このままだと高確率で貴方達の世界、地球を・・・あの街を巻き込むことになると思うわ

守護者である貴方に見れば、それは困るのではなくて？」

リンディは笑顔のまま告げる、逃げ道を塞いでおくうまいやり方だまあ、達也にしてみれば最初から断る気など無かったのだが

「確かに貴女の言う通りですね、俺には断る理由が見つからないですが一つだけ条件を出さしてもらいますがよろしいですか？」

「ええ、構わないわ、言ってみて」

「俺はあくまで、協力者という立場で取り扱ってもらいます、この

意味わかりますね？」

「元からこちらはそのつもりよ、それに必要以上に貴方のデータを取らないことを

約束するわ」

その意見に反対するものが一人

「艦長！！そんなあいまいな立場じゃ、何が起きるかわかりませんよ！！！」

クロノである、エイミィは何故そんなに反対するのかわからない為、聞いてみることにした

「クロノ君、ちょっと説明してもらえないかな？」

「彼は暗にこちらの命令は聞かないと言っているのさ、またそこにいる

彼女達のようなことをするかも知れないんですよ、僕は賛同しかねます」

クロノは説明もそこそこに否定の意見を出す

しかし、その程度で丸め込まれるリンディではなかった

「でもねクロノ、なのはさん達と違って、達也君にはこちらから協力を頼んでいるの

それでこちらの命令には絶対に従いなさいというのは無理があるわ」

「それは・・・」

「それに、これから先、彼ほどの力を持った人物に勝手に動かれるほうが厄介だわ

それなら、ある程度こちらの指示に従ってもらった方がいいでしょう？」

「・・・」

クロノの負けだった

「話は決まったみたいですね、ですが俺もなのは達と一緒に一時帰ります

俺もそろそろ学校に行かなければならないので」

「ええ、そうね、とりあえずなのはさんのご両親に話をしなければ

ならないから  
私も降りるわ」

リンディの突然の申し出になのはは慌てる

「ええ!!そこまですてもらわうわけには!!」

「いいのよ、なのはさんのご両親・・・、いえ、お母様には一度会  
つておきたいの」

「お母さんに・・・ですか?」

なのははきよんとした顔で首をかしげるのだった

## 時の庭園

「フェイト!!」

アルフはプレシアの部屋への入室は許可されていない

プレシアの部屋へ入るのはそんなに難しい事じゃない

ただ普通に木製の扉があるだけだからだ

しかし、アルフの入室は許可されていない

これはフェイトの命令によるものだ

フェイトはこの部屋で自分が傷つく事を知っていた

そして、アルフがそれを見れば我慢できない事も知っていたのだ

だからフェイトは命令した、自分の傷つく姿を見せないように

使い魔であるアルフが主の命令に逆らうわけにはいかなかった

だから今まではたとえフェイトの悲鳴が聞こえようとも部屋に入る

事はなかった

だが今回は事情が違った

まさに命を削つてまで母の為に頑張ったフェイトを事もあろう事が  
痛めつけたのだ

この瞬間、アルフの中で主の命令よりもプレシアに対する怒りの方が勝ってしまった

アルフは部屋へ入り、中央で倒れているフェイトを発見した

「フェイト、フェイト、フェイトフェイトフェイトフェイト!!!」

フェイトを抱え上げ、状態を確認する

体中のいたるところに傷がついていて、気絶しているようだ。命に別状はないようだ

アルフは更に奥へと続く扉を睨み付ける

怒りが更に膨れ上がり、アルフの思考は一つしかなかった

ぶっ飛ばす!!!これだけだ

アルフはフェイトに自身のマントをかけて寝かせる

そして奥へと続く扉に向かって行った

「たった九つ、これでも次元震を起こせるけど、アルハザードには届かない」

奥の部屋ではプレシアがジュエルシードを見つめながら思案していた

「!!!げほっ、ごほっ!!!」

身体から熱いものが込み上げ、吐き出す

それは真っ赤な吐血だった

「もうあまり時間が無いわ、私にも“アリシア”にも!!!」

その時、扉が吹き飛び誰かが中に入ってくる

その人物は名前は忘れたが、フェイトの使い魔だったはずだ

それを確認し、興味が無くなったので無視する事にした

フェイトの使い魔、アルフは階段をゆっくり降りてくる

「せえい!!!」

途中から一気に駆け出し、プレシアに飛びかかる

だが、一歩手前でプレシアの障壁が自動展開し、アルフの突撃を受け止め、弾き飛ばす

「くう!!!」

着地し、プレシアを見るアルフ、少しだけ振り返ったプレシアは余

裕の笑みを浮べている

「はあああああ!!！」

再度、飛び掛かるアルフ、やはり障壁に受け止められた

しかし、今回は弾き飛ばされなかった、それどころか障壁を押し込み

ついに破り去ったのだ、アルフはプレシアにつかみ掛かり

胸座むなくらをつかみ上げて吼える

「あんたは母親で!! あの子はあんたの娘だろう!! あんなに一生

懸命な子に

あんなに頑張っている子に、なんであんな事が出来るんだよ!!！」

アルフはさらに力を込め、プレシアを睨み付ける

「な!？」

プレシアの表情を見たアルフは、一瞬その激情を忘れた

その表情は・・・無

プレシアはアルフの言葉など気にも留めていないだろう

「が!!！」

次の瞬間、アルフは壁際まで吹き飛ばされた

何のことはない、プレシアが魔法を打ち込んで吹き飛ばしたのだ

「あの子は使い魔の作り方が下手ね、余分な感情が多すぎるわ」

「フェイトは、あんたの娘は、あんたに笑ってほしくて、優しいあ

んたに戻ってほしくて

あんなに!!!ぐっ・・・」

立ち上がるうとするアルフだが、身体が言う事を聞かず、思うように

動けない

「ふん、邪魔よ、消えなさい!!！」

プレシアの掌に杖型のデバイスが現れ、魔法を放とうとする

「!!！」

アルフは咄嗟に転移魔法を形成した

爆発が起こり、アルフは次元空間に放り出される

(どこかに転移しなきゃ、ごめんフェイト、少しだけ待ってて・・・

)



落ち行く意識の中、ただ主の事だけを心配するアルフ  
そこでようやく転移魔法が発動、アルフは何処かへ転移した

「フェイト、起きなさいフェイト」

「はい、母さん」

母の声に意識を取り戻したフェイトが最初に見たものは  
いつもの母の姿だった

「あなたが手に入れてきたジュエルシード九つ、これじゃあ足りないの

最低でも後五つ、出来ればそれ以上、急いで手に入れてきて母さんの為に」

「はい」

身体を起こしたフェイトは自分にアルフのマントがかけられている事に気付いた

「アルフ？」

「ああ、あの子は逃げ出したわ、恐いからもう嫌だつて」

プレシアはしゃがみ込み、フェイトの肩に手を置いて続ける

「必要ならもつといい使い魔を用意するわ、忘れないであなたの本当の味方は母さんだけ

いいわね、フェイト」

「はい……、母さん」

夕方

海鳴市 高町家前

「ここが家になります」

なのは玄関前で後ろにいる人物に告げる

「案内してもらってありがとう、なのはさん、立派なお家ね」

リンディが少し驚きながら答える

それはそうだろう住宅街の中にあるのにも関わらず、広い庭に道場まであるのだ

高町家は他の家とは広さが違っていた

「ここは元々、お母さんの知り合いの人のお家だったみたいで、それを安く

譲ってもらったらしいです」

「・・・なるほどね」

一人納得するリンディ、その様子になのははまたも首をかしげるのだった

「そういう話は中に入ってからでもいいんじゃないですか？」

リンディのさらに後ろから声が聞こえる

そこには肩にユーノを乗せた達也がいた

「ああ、そ、そうだね。ごめんなさい」

慌てて、なのはが家のドアを開けて中に入る

「お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、ただいま、お客さんを連れてきたよ」

なのはは玄関から中にいるであろう家族に声をかける

「リンディさん達もどうぞ入ってください」

リンディ達を中に入れる、そこへ

「なのは！？お帰りなさい、大丈夫だったの？怪我はない？」

桃子が台所から急ぎ足で向かってきて、なのはに抱きついた

「大丈夫だよお母さん、私は元気、それよりお母さんにお客さんだよ」

「私に？」

娘の身体に怪我などが無いことを確かめ、安心した後

ようやくなのはの隣にいる人物に気づく桃子

「！..！」

リンディの顔を見たたん、驚愕の表情に変わった

「リ・ン・ディ？」

「お久しぶりね、桃子」

リンディは悪戯の成功した子供みたいにつこり笑って、答えた

高町家の居間にはなのは、達也、リンディ、ユーノそれに桃子、恭也、美由希

が集まっていた・・・、あれ？何か忘れてるような・・・

「・・・という、10日間だったのよ」

「あら、そうなの」

ま、それはさておき、ここ数日間のことはリンディが簡潔に説明していた

まあ、要するに嘘である

『リンディさん、見事な誤魔化しというか、真っ赤な嘘というか・・・』

『・・・すごいよね』

『よくあそこまでペラペラと口が動くもんだ、桃子さんと同等くらいか？』

『あら、本当のことは言えないんですから、これくらい言わないと駄目なんですよ』

でもせめて、ご家族にご心配をおかけない為の気遣いと言ってください！！！』

リンディの口の上手さに呆れて、念話で話していた三人にリンディの突っ込みが入る

「でも、なのはさんは優秀ね、さすが貴女の娘さんと言ったところかしら

まったく、家の子にも見習わせたいくらいだわ」

「あらあら、貴女の子供だもの、優秀なんでしょう、謙遜しないでいいわ」

先ほどから親しげに話しているこの二人、リンディと桃子は知り合

いだつたらしい

何でも、リンディが前に捜査でこの街に来たときはまだ学生の年齢だった為

捜査する傍ら、隠れ蓑として此方の学校に通っていたそうだがそのときのクラスメイトだったらしい

二人とも口が上手い為、談笑はエンドレスで続きそうだった

「なのは、今日明日くらいは家にいられるんでしょう？」

そんな大人たちは放って置いて美由希がなのはに声をかけてきた

「うん」

「アリサもすずかちゃんも心配してたぞ、ちゃんと連絡したか？  
今度は恭也である

「うん、さっきメールを出しといた」

「そっか、それならいいんだが」

そんなやり取りの後、美由希は達也の方を向いて言った

「達也君、貴方も連絡しときなさいよ二人とも君のこと心配していたんだから」

「ええ、後で連絡しておきますよ」

「しかし、お前も大変だな、お祖父さんとの修行だっけか？」

巽の本家って、あの山の上なんだらう？あそこでの修行はつらそうだ

「もう、慣れたもんですけどね」

達也は祖父との修行で学校を休んでいたことにしていた

守護者としての仕事をするときはいつも使っている手である

「で、で、今回の修行ではパワーアップはしたの？」

目を輝かせながら美由希が聞いてくる

高町美由希、彼女は生粋のバトルマニアであるため戦いのことになると

目の色が変わるのである

「気になりますか？」

少し意地悪な笑みを浮かべ達也が聞いてみる

「それは気になるよ」

「なら一戦、やってみたらどうだ？」

「それは賛成、達也君やろうー!!」

もうすでに戦う気である美由希、そんな様子に苦笑しながら達也が応える

「まあ、闘ったからといって、そう簡単に手の内を見せるわけにはいかないんですけどね」

「それじゃ駄目ジャン!!」

二人の息の合った突っ込みが入る

「切り札・・・、ジョーカーはここぞと言つところで切るものですよ」

そう言つて笑いながら、席を立つ達也

しかし、そこに悪魔が降り立ったのだった

「ならジョーカーを出さなきゃならない状態にすればいいわけね？」

突然、恭也の後ろに現れた桃子は、そつと耳打ちするすると、突然、恭也が震え出した

「桃子さん、またですか・・・どうしていつもこうなるんだ」(T

T)

全速力で逃げ出す達也

「お兄ちゃんは・・・お兄ちゃんはそんな事許しませんよ!!」

それを追う恭也

「達也君!？お兄ちゃん!？」

さらに追うのは

「うーん、さすが母さん、面白くなってきた!!」

さらにさらに追う美由希、肩にはユーノを乗せていた居間には桃子とリンディしかいなかった

「ひどいことするわね、でもなんて言つたの？」

「秘密のこ・と・ば・よ」

桃子は再びリンディの隣に座り直し、お茶を啜る

ちなみに桃子がなんて言つたかと言つと

“なのはは将来、達也君のところにお嫁に行くかもよ”である  
さすがシスコン、おそるべし

「で、あなたの息子さんが何だったけ？」

ここでいきなり話を戻す桃子、やはりこの人はただ者ではない  
「愛想が無いのよあの子は、まったくもう少し笑えば、可愛げがあるのに……」

ため息を吐き、答えるリンディ、あなたもただ者じゃないですね  
「彼に似たんじゃない？あ、そう言えば彼は元気にしてるの？」

桃子は決して悪気があったわけではない、旧友との共通の知り合いの話で

盛り上がりたかったただけなのだが、今回はその選んだ人物が悪すぎた

「……亡くなったわ、ある事件の捜査中にね」

「……そう、ごめんなさい」

「気にしないでいいわ、もつずいぶん前の事だしね」

「……あなたがこの世界に来たと言う事は、また何かが起きているのね」

「ええ、少し厄介なのがね」

「ま、この土地なら仕方無い事もね

そして、なのははその事件に巻き込まれていると……」

「なのはさんの才能は本当にすごいわ

おそらく、あの時のあなた以上でしょうね」

「……」

「そして、達也君は守護者として私たちに力を貸してくれている……」

「一応、確認させて、達也君は……」

「そう、あの二人の息子よ、今は何処をほっつき歩いているんだかわからないけどね」

「やっぱり、そうよね、会いたかったな」

「連絡をよこさないから本当に何処にいるか分からないのよ」

「……」

「……」

二人は沈黙する、何分たっただろうか、桃子が沈黙を破った

「なのはの事、お願いね」

「桃子？」

「パティシエになる道を選んだ私が言う事じゃないかもしれないけどあの子は強い子だから、きつとこれからも魔導師の道を歩んでいくでしょうから」

「まだわからないわよ、9歳だもの」

「わかるわよ、母親だもの」

「……わかった、任せなさい、こちらとしても優秀な人材が入るのはうれしい事だから」

「ええ、よろしく、それと今度はあなたの息子さんやレティもつれて遊びにきなさい

おいしいお菓子をごちそうするから」

「そうね、クロノはともかく、レティもあなたにあいたいでしょうからね、きつと連れてくるわ」

「楽しみね、さて、そろそろ夕食の準備しないと、あなたも食べて行かない？」

「……んじゃ、お邪魔しちゃおうかしら、その変わり私も手伝うわ」

「ええ、お願い」

二人は台所に入り、夕食の準備に取り掛かるのだった

その頃、達也たちはと言うと

追いかけてこは夕食まで続き、最後はなのはの

「そういう事をするお兄ちゃん、嫌いです!!」

の一言で、恭也は瀕死の重傷になったらしい

なんか忘れてないかって？

そうなんだよね、な〜んか忘れてる感じが……

ん？なんだあれ？

家の片隅に黒いオーラのようなものが・・・

「俺だけ呼ばれなかった・・・、桃子や恭也や美由希は呼ばれたのに俺だけ呼ばれなかった・・・なぜだ？父さんはこんなになのはの事を愛しているのに、反抗期なのか？そうなのか？そうなんだねなのは！！！」

達也君が近くににいるのがいけないんだね！！

達也君がいるからそんなのはになって

しまったんだね！！やはりあの餓鬼！！今すぐに抹消してや・・・」

「そういう事言うお父さんも嫌いです！！！」

「ぐはあ！！！」

近くを通りかかったなのは「嫌いです」攻撃

高町士郎は死亡した・・・

なのはそのまま通り過ぎる

・・・つんつん

突っついてみた、反応が無いただの屍のようだ・・・

・・・げしっ

蹴ってみた、反応が無い以下略

・・・ごっつ

殴ってみた、反応が以下略

・・・ばしゃ

水をかけてみた、以下略

・・・よし、次、行ってみよう

「放置するな！！！」

あ！？生きてた？まあ気にせず行ってみよう

「気にしろ！！あ！！待ってカメラさん！！離れていかないで！！」

~~~~~



海鳴郊外 バニングス家送迎車

「送信と」

アリサはなのはと達也から来たメールに早速返事を返した

（まったくあの馬鹿共、心配させんじやないわよ）

そんなことを思いながらも顔が緩むのを抑えられないアリサ  
きつとすずかにも送っているだろうから、彼女も返事を送っている  
だろう

「アリサお嬢様、何か良いお知らせでも？」

アリサの機嫌が良いのに気づいた運転手が声をかけてくる

「別に、普通のメールよ」

アリサは外に視線を向け、何でも無いように取り繕った返事をする

「あー！鮫嶋、ちょっと止めて」

アリサの視線にあるものが映り、運転手・鮫嶋に車を路肩に止めて  
もらった

アリサは車から降り、近くにあつた脇道を入って行く

少し進んだところにオレンジの毛並みをした大型犬？が怪我をして  
倒れていた

「やっぱり、大型犬」

鮫嶋も後から追ってきた

「怪我をしていますな、かなり酷いようです」

「でも、まだ生きてる・・・、鮫嶋」

「心得ております」

鮫嶋は大型犬？を刺激しないようにそつと近づいて行った

アルフの意識は朦朧としていた

自分に誰かが近づいてくるのはわかったが、動く事が出来なかった  
（フェイト・・・）

そこでアルフの意識は途切れたのだった

夜

バニングス家 庭

月明かりでアルフが目を覚ますと、自分が檻の中にいる事に気付いた  
そして一人の少女と連れれの犬2匹が目前にいた

「あ、目覚めた？」

少女がこちらを見ながら話し掛けてくる

(あれ？このチビっ子何処かで・・・)

目の前の少女をアルフは見たことがある気がした

「あんた頑丈に出来てんのね、あんなに怪我してたのに命に別状はないってさ」

少女は檻を開け、ドックフードを目の前に置いた

「怪我が治るまでは家で面倒見てあげるからさ、安心していいよ」

少女はアルフの頭を撫でる

そこでアルフはこの少女を何処で見たのか思い出した

白い服の少女・なのはに初めて会ったときに自分に突っかかってきた少女がこの子だった

(・・・あの子の友達なんだ)

「ほら、柔らかいドックフードなんだけど食べられる？」

アルフは少しの間ドックフードを見つめ、食べ始めた

それを少女は微笑みながら見つめていた

「ふふ、そんなに食欲があるなら心配ないね、食べたらくよく休んで早く良くなりなね」

アルフはそんな声を聞きながら夢中でドックフードを食べつづけた

次の日

聖祥大付属小学校

「なのはちゃん！！達也君！！」

朝、なのはと達也が学校に着くと、アリサとすずかが駆け足で寄ってきた

すずかはなのはの手を握って

「よかった〜、元気で」

「うん、ありがとうすずかちゃん」

「お前達も元気そうだな」

「うん」

なのははアリサの方へ視線を向ける

「アリサちゃんもごめんね、心配かけて」

アリサは腕を組み、そっぽを向いて答える

「・・・まあ、良かったわ元気で」

アリサのそんな反応に、三人は笑い出してしまった

アリサはちよつと眉を吊り上げる

「何よ!？」

「いや、お前は相変わらずだと思ってさ」

達也の言葉にアリサは更に眉を吊り上げた

「何が相変わらずなのかわからないけど、何であんたまでちゃっかり10日も休んでんのよ!!」

「いつもの事だろ？」

こともなげに答える達也

「・・・また修行なんだよね？」

「ああ、今回は異様にきつくてな、今日も何とか中休みを取らせてもらえたんだ

また明日から、実家に籠りっきりになるな」

「ふん、あんたがいなくて清々するわ!!」

「アリサちゃん!!まったく、なのはちゃんはどつなの?」

「私は・・・」

「その話は教室に行つてからだな、もうチャイム鳴るぞ  
達也の言葉にみんな時計に目を向ける

時計はぎりぎり間に合う時間を指していた

「そうだね、まずは教室に行こつか」

なのはが歩き出す、みんなもそれに続いた

「そつか、また行かないといけないんだ・・・」

教室に着いたなのは達は早速、話の続きを再開した

「うん」

「大変だね」

「でも、大丈夫」

なのはは笑いながら、ガッツポーズをとる

「放課後は?少しくらいなら一緒に遊べる?」

「うん、大丈夫」

「じゃ、家に来る?新しいゲームもあるし」

「あ、本当!!」

アリサが誘つてくれたのがうれしいのか、なのははさらに笑顔になった

アリサはふと、昨日拾った大型犬のことを思い出した

「ああ、そういえばね夕べ怪我してる犬を拾ったの」

「犬?」

「うん、すごい大型で、なんか毛並みがオレンジ色でおでこにね赤い宝石が付いてるの」

「!!!!」

アリサの拾った犬について、なのはと達也はある使い魔を思い出した  
『なのは』

『うん』

二人が真剣な表情で頷き合う

そんなやり取りに気づかず、すずか達は話を進めていく

「へえ、見てみたいな、その犬、そうだ達也君も一緒に遊ぼう」

「ん？ああ、俺は構わないが・・・」

達也はアリサに視線を送る

「ふ、ふん、来たければ来ればいいじゃない」

との返事をもらった

「じゃあ、その犬も見てみたいし、今日はみんなで遊ぼうね」  
と、すずかが言って、この話題は終わりとなった

放課後

バニングス家

約束通り、アリサの家に遊びに来た一行は件の大型犬のところに来た

『やっぱり、アルフさん』

『ずいぶんと派手にやられたみたいだな』

『あんだ達か』

なのは達はそこにいた、想像通りの人物に念話で声をかける

『その怪我、どうしたんですか？それにフェイトちゃんは？』

アルフはなのは達に背を向け、動かなくなってしまう

「あららら、元気無くなっちゃった、どうした？大丈夫？」

アリサの声にも反応を返さない

「傷が痛むのかも、そつとしいてあげようか」

「うん」

その時、すずかの腕に抱かれていたユーノがすずかから離れ  
アルフに近づいていった

「ユーノ、こら危ないぞ」

「大丈夫だよ、ユーノ君は」

注意するアリサをなのはがやんわり止める

「なのは、彼女からは僕が話を聞いておくから

なのは達はアリサちゃん達と」

「うん」

それを聞いていた達也が話をきりだす

「そろそろ行こう、ずっとここにいても仕方がない」

「そうね、行きましようおいしいお茶菓子があるの」

なのは、アリサ、すずかが屋敷の方へ歩き出す

最後に残った達也がユーノに向かって念話を飛ばした

「ユーノ、頼んだ」

「ああ、任せてくれ」

「・・・アルフ、こいつらは信用にたるやつらだ、それは俺が保証  
する

だから、話してみないか？なぜ、お前がそうなったのかを」

そう言つと達也も屋敷へ向かって歩き出した

「いったいどうしたの？君達の間でいったい何が？」

達也が去った後、ユーノは早速事情を聞く為、話し掛けていた

「・・・あんた達がここに要るってことは、管理局の連中も見てい  
るんだろっかね」

「うん」

『時空管理局、クロノ・ハラウオンだ、どうも事情が深そうだ

正直に話してくれば悪いようにはしない、君も、君の主

フェイト・テストロッサのこと・・・』

アースラでその様子を見ていたクロノがアースラの念話通信で割り

込みをかける

『・・・、話すよ、全部・・・、だけど約束して、フェイトを助けるって

あの子は何も悪くないんだよ』

『約束する、エイミー、記録を』

「してるよ」

アルフは一つ深呼吸をすると、ことの成り行きを話し出した

『・・・フェイトの母親、プレシア・テストロッサがすべての始まりなんだ』

『なのは、達也、聞いたかい？』

アルフの話を聞き終え、クロノは話を傍受していただろう二人に声をかける

『うん、全部聞いた』

『俺の方もな』

なのはは廊下で、達也はベランダでその話を聞いていた

アリサ達は部屋でゲームに夢中になっている

『君達の話と現場の状況、そして彼女の使い魔アルフの証言と現状を見るに、この話に嘘や矛盾は無いみたいだ』

『どうなるのかな？』

『プレシア・テストロッサを捕縛する

アースラを攻撃した事実だけでも逮捕の理由にはおつりが来るからねだから、僕たちは艦長の命が有り次第、任務をプレシアの逮捕に変更する事になる・・・、君はどうする？高町なのは』

『私は・・・』

アルフの話はなのはの気持ちに火を付けるのに十分すぎる内容だった『私はフェイトちゃんを助きたい、アルフさんの想いとそれから

私の意志、フェイトちゃんの悲しい顔は私もなんだか悲しいの

だから助きたいの悲しい事から・・・、それに友達になりたいって伝えた、その答えをまだ聞いてないしね』

『わかった、こちらとしても君の魔力を使わせてもらえるのはありがたい  
フェイト・テストロッサについてはなのはに任せる、それでいいか？』

クロノの言葉にアルフは頷く

『なのは・・・だったね、頼めた義理じゃないけど、だけどお願い、フェイトを助けて』

あの子、今本当に一人ぼっちなんだよ』

『うん、大丈夫、まかせて！！』

アルフの想いを受け、俄然やる気になるなのは、アリサの部屋にいた彼女は

勢いよく、扉を開けた

「遅いよ、なのは」

「ほら、新しいダンジョンに入るの待ってたんだよ」

「にははは、ごめんごめん」

部屋の中からそんな声が聞こえるのを達也は風を感じながら聞いていた

『達也』

そんな彼にアルフからの念話が届いた

『・・・言ったら、あいつならお前達を助けてやれると、大丈夫さ』

『そうだね』

達也の言葉に安心したのか、アルフは静かになる

二人が話し始めないのを確認してか、クロノが声をかけてくる

『さて、達也、君はどうする？』

達也は部屋の中でゲームをしている三人を見詰めながら答えた

『・・・この街を、人々を、そして・・・あいつらを護る』

俺の戦う理由なんて、それだけで十分だ・・・

それに、フェイトの救出はなのはやアルフだけじゃない、俺の願いでもある』



『君も？』

意外な答えだったのか、クロノが疑問の声を上げる  
達也は少し笑いながら言葉を返す

『意外か？』

『いや、君は自分に関係の無い事にはあまり興味を示さないタイプ  
だと思っていたんだが・・・』

『間違っちゃいない、俺は守りたいと思ったものしか守らないしな・  
・・・、フェイトは、あいつは

俺に似てるんだよ』

『似ている？』

『ああ、おそらく俺とあいつは・・・』

達也は自分の手を見つめながら答える

『どうした？』

『クロノ、お前は過去に囚われる人間をどう思う？』

突然の達也の質問にクロノは困惑する

『過去に囚われる？』

その言葉の意味を考えようとするクロノ

しかし、その思考を遮ったのは他でもない、質問をした達也だった

『いや、なんでも無い、気にするな』

今を生きている、それで十分なはずなんだ・・・』

『おい、達也？』

『・・・俺は昨日話した通りで問題ない』

『・・・そうか、ならばこちらも、君を戦力として期待させてもら

う』

クロノも追求を諦めたのか、話を進める

『よろしく頼むよ』

それまで黙っていたアルフが念話で割り込みをかけてきた

『ああ』

その言葉に達也も返事をする

「こら！！いつまで外にいる気、こっちを手伝いなさいよ！！」

「ここから進め方わからなくなっちゃったんだけど、達也君わかる？」

「にゃー!!またやられちゃったよ、達也君ヘルプミー!!」  
部屋の中から声をかけられる

苦笑しつつも部屋の中に入る達也

『ずいぶんと賑やかだが、ちゃんと話を聞いてくれよ』

『大丈夫だ、聞いてるよ』

『ふむ、それじゃ、これからの指示だが、これはなのはも混ぜたほうがいいな』

クロノはなのはに念話を繋げ直した

「ここなんだけど、このモンスターが倒せないの」

「ああ、こいつ倒せないぞ

あるアイテムを使えば、それで終了だ」

「……ある、アイテム？」

「よく見てみる、こいつどこかで見たこと無いか？」

部屋の中に入った達也は、ゲームに悪戦苦闘しているアリサ達にアドバイスを出す

「確かに、なんか見たことあるわね……、ちょっと待ちなさい!?  
何で、そんなこと知ってんのよ？」

「いや、俺このゲームクリアしたし」

「何ですって!!」

あんたにクリアできて私にクリアできないわけがないわ!!

貸しなさい、絶対にあんたのヒントなんて貰わずにクリアして見せるから!!」

「うわあ、アリサちゃん燃えちゃったね」

と、そんなやり取りをしながら、なのはと達也はクロノの声にも耳をかたむける

『予定通り、アースラへの帰艦は明日の朝

それまでの間に君達がフェイトに遭遇した場合は……』

『うん、大丈夫』

『そつちも、その後のこと頼むぞ』

『わかっているさ』

「だあー！！なんでここのモンスターこんなに強いのよ！！」

数時間後、日も落ちてきて夕方と呼べる時間になった頃

一通りゲームをやり終えたなのは達は、お茶菓子を食べながら談笑していた

「ふう〜、なかなか燃えたわ」

「やっぱりなのはちゃん達がいた方が楽しいよ」

「ありがとう」

「たまにはいいなこういうのも」

「うん（ええ）」

四人でお茶を飲む、よく冷えていて美味しかった

「・・・多分、もうすぐ全部終わるから、そしたらもう大丈夫だから」

「なのは、なんか少し吹っ切れた？」

「え？あ、んと、どうだろう？」

アリサの質問になのは首をかしげる

「・・・心配してた、てか、あたしが怒ってたのはさなのはが隠し事をしていることでも

考え事をしていることでもなくて、なのはが不安そうだったり、迷っていたりしてたこと

それで時々、そのままもう私たちのところへ帰ってこないんじゃないかな  
いかなって

思っちゃうような目をする事」

アリサの気持ちを知り、なのはは目から溢れ出しそうな涙をぬぐって言葉をつむぐ

「行かないよ、何処にも・・・、友達だもん、何処にも行かないよ」  
「そっか」

一度は離れかけた心がまた、つながった瞬間だった  
達也も微笑みながら言葉をつなぐ

「俺達はみんな、それぞれまだ話してないことがあるかも知れない  
だが、それで俺達の心が離れることはないはずだ、それにもし  
物理的に距離が遠くなったとしても俺達の心は揺るがない

俺はそう思っている、違うか？」

「うん、そうだね、私もそう思うよ」

達也の言葉にすずかが同意する

他の二人も同じ意見なようだ

「ふん、なによカツコいい事言っちゃって」

「ま、たまにはな」

みんなの顔が笑顔になる

とても暖かく、幸せな時間が流れていった

夜

高町家 道場

幸せな時間もやがて終わりが来る

なのはは帰宅してから、夕食とお風呂を済ませた後、一人道場で  
自分の思いを再確認していた

（何処にも行かない、私はちゃんと此処に帰ってくる

ただ少しだけいつもと違う時を過ごすこと、それはこれから先  
自分らしくまっすぐいる為、後悔しないようにする為の小さな旅）

「いい顔になっただな、迷いは消えたのか？」

道場の扉が開き士郎が入ってきた

「お父さん、なのはが迷っていたこと知ってたの？」

「そりゃあそうだ、お父さんはお父さんだからな  
・・・明日は朝早くからまた出かけるんだろっ?」

「うん、ご心配おかけします」

「いや、なのは強い子だからな、お父さんはそれほど心配してないよ

頑張つてこい、しつかりな」

「うん!・・・でも昨日みたいなこと言つお父さんは嫌いです」

「本当にごめんなさい!」

o r z 三三三三三三三三 土郎

なのは

土郎はなのはの目の前まで滑りながら土下座する

それは見事なスライディング土下座だった

・・・いや、貴方に男とか親としてのプライドと言つものはないんですか?

「そんなもの、なのはに許してもらえらなら、喜んで投げ捨てよう」

・・・そうですか、でなのはさんは許すんですか?

「うん、どうしましょう?」

( \* \* ) ! ! !

「マジでごめんなさい!」

o r z 土郎

なのは

うお!!ちっちゃくなつちやつた!!

「うん、それだけ反省してるつて事かな?じゃあ許してあげるよ  
お父さん」

「本当かい!!」

「うん、だからもうあんな事言つちや駄目だよ」

「当然じゃないか、はっはっはっ」

その後、なのはたちは親子仲良く道場から出てきてた  
その様子を桃子は微笑みながら見つめるのだった

同時刻

海鳴市 山の中腹にある湖

達也は湖の縁に立ち、腰にある【天龍】に手を添える  
一陣の風が吹き、周りにある木の枝から木の葉が舞う  
その中の一つが達也の目の前を流れた

キンツ！！

と、澄んだ音がして続いて

カチツ

と何かをしまう音がする

すると、空中を舞っていた木の葉が何重にも分かれ、そのまま風で  
飛ばされて行った

達也の姿が消えていた、いや正確には移動していた

丁度、先程立っていた位置から、木の葉の舞っていた位置を挟んで  
反対側にいた

「まだまだだな」

《はい、本物はもつと速く、鋭かった》

「まあ、奥義と呼ばれる技だ、そう簡単に完成するとは思ってない  
さ」

《そうですね・・・、若》

達也は近くの岩に腰を下ろす

「なんだ？」

《昼間の言葉、まだ振り切れませんか？》

「・・・さあな、ただ時々夢に見るんだ

あの頃の、幸せだった日々のことを・・・」

《・・・》

達也は空に輝く満点の星を見上げる

「だからと言って、今が幸せじゃないと言っているんじゃない  
あいつに、あいつらに出会って俺は救われた  
それは紛れも無い事実だ」

《若……》

「昔は昔の、今は今の、幸せの形がある  
俺はそれを護り続けるために戦っただけだ」

《過去は振り切れなくても、ですか……》

達也は立ち上がり、【天龍】を抜きその刀身を見つめる

「いつかは向かい合わなきゃならない  
だが、今じゃない」

だから、今出来ることをするんだよ」

【天龍】の鍔が点滅を繰り返す

《……全力でサポートいたします

そのときが来るまで、必ず》

「ああ頼んだよ【天龍】」

達也は笑いながら山を降りる、その姿は夜の闇に消えていった

朝

高町家 玄関前

なのはが家を出ると、そこにはすでに達也が待っていた

「大丈夫か？」

「うん」

そして、二人は駆け出す、彼女が現れるであろう場所に向かうため  
「なのは」

なのはの肩に乗ったユーノが何かを見つけ声をかけてくる  
ユーノの視線を追うと塀の上にアルフがいた  
アルフが塀から降りて、なのはに並走する  
そしてその場所へ到着する

臨海公園に着いたなのはたちは彼女の姿を探した

「ここならいいね、出てきてフェイトちゃん!!」

風がそよぐ、みんなが無言で気配を探る中、最初に気づいたのは達也だった

「来た」

なのはもフェイトの気配を感じ、振り返る

《サイズフォーム》

フェイトは街灯の上にいる

「フェイト、もう止めよう、あんな女の言うこともう聞いちゃだめだよ

フェイト、このまんまじゃ不幸になるばかりじゃないか!!」

だからフェイト!!」

フェイトは悲しそうな顔で首を横に振る

「だけど、それでも私はあの人の娘だから」

その言葉を聴き、なのははゆっくりと左腕を横に伸ばした

なのはが体が桜色の光に包まれ、バリアジャケットと【レイジングハート】が形成される

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね、逃げればいいってわけじゃもつとない

きっかけはきつとジュエルシード、だから賭けよう、お互いが持つてる全部のジュエルシードを!!」

《《フードアウト》》

なのはとフェイト、二人の周りにジュエルシードが出現する

「それからだよ、全部それから」

なのはは【レイジングハート】をフェイトに向け構える



「私たちのすべてはまだ始まってもない、だから本当の自分を始める為に

始めよう、最初で最後の本気の勝負!!」

白と黒の魔導師の決戦の火蓋が今まさに切られようとしていた

t o b e c o n t i n u e d

それぞれの胸の誓いな（後書き）

桃子さんとリンディさんが同級生って・・・  
原作ではリンディさんの年齢は公開されてない  
はずなので大丈夫かな・・・  
ご意見、感想等いつでもお待ちしております

## 思い出は時の彼方なの（前書き）

第十一話更新です。

今回、シリアスシーンなのいろいろと台無しになっている場面が多々あります。ご了承ください。

思い出は時の彼方なの

白と黒、二人の魔導師の少女達の

最初で最後の本気の勝負が始まるうとしていた

思い出は時の彼方なの

???

そこは穏やかな風が吹く草原だった

そこに女性と少女が向かい合って座っていた

（母さん、私の母さん

いつも優しくかった私の母さん

私の名前を優しく呼んでくれた母さん）

「ねえ、とても綺麗ねアリシア」

女性は自身が作った花の冠を少女に見せる

（アリシア？違うよ母さん、私はフェイトだよ）

「さあいらっしゃい、アリシア」

「うん」

少女が頭を女性の方へ向ける

「ほら可愛いわ、アリシア」

女性は花の冠を少女の頭に載せる

「えへへ」

少女はそれが嬉しかったのだろう、とても幸せそうな笑顔になった

（ま、いいのかな・・・）

早朝  
海鳴市 臨海公園

フェイトが目を開ける、そこには杖型のデバイスを構えた白いバリ  
アジャケットの少女

そして、黒い髪をした少年、エロイタチ、アルフがいた

「しくしく」(Ｔ　Ｔ)

「ん？どうしたユーノ？」

「僕の扱いつていつたい・・・」

「作者にとつては、土郎さんや恭也さんと同じく、弄り易いギャグ  
要員のエロイタチだな」

「ひでえ!!」

「んなことはいいから、黙ってな!!」

アルフがユーノをひっぱたく

「ぎゃ!!」(　口　)。。。

ユーノは目玉が飛び出すほどの衝撃を受け、気絶した

「。。。。」

「あ、気にしないで続けてくれ」

シリアスな場面を形成していた二人は突然始まった漫才を見て

気持ちが一気にクールダウンしてしまった

「気を取り直そうか？」

「そ、そうだね」

「じゃ、勝負だよフェイトちゃん」

達也の一言で、とりあえず気を取り直し、再びシリアスな空気を  
作っていく

(ふう、・・・私は優しい母さんが好きだから、優しい母さんを  
取り戻す為に

この勝負、絶対に負けられない！！)

「！！」

フェイトは一気に跳躍、【バルディッシュ】を構える  
それが合図となり、戦いの火蓋が切って落とされた

同時刻

アースラ

「ふう」

エイミーが椅子に座ってモニターを見つめる

その頭にはまるで妖気を感じているようなアホ毛が立っていた

「戦闘開始、みたいだね」

「ああ・・・」

クロノはエイミーの言葉を聞いてはいるが何処か心ここにあらずだった

その視線はエイミーのアホ毛に釘付けになっている

「しかし、ちよっと珍しいよね？クロノ君がこういうギャンブルを許可するなんて」

クロノはエイミーの座る椅子のポケットからスプレー缶を取り出し軽く振る

「まあ、なのはが勝つにこした事はないけど、あの二人の勝負自体はどちらに転んでも、あんまり関係ないからね」

「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれているうちに、あの子の帰還先を

追尾する準備をしておく、てね」

クロノは振っていたスプレーをエイミーのアホ毛に吹きかけ、櫛で

髪をとかす

「頼りにしているんだからね、逃がさないですよ」

アホ毛が治ったのを見て、なんとなく達成感に包まれたクロノ

「おう！！任せとけ！！」

元氣よく振り向くエイミー、しかしその瞬間、またアホ毛が立ってしまった

「あら！？」

クロノもそれを見て、自分のやった事の空しさになんともなく脱力する  
エイミーは自分で髪をとかしながら、話を進めた

「でも、あの事なのはちゃんに伝えなくて良いの？」

プレシア・テストロッサの家族とあの事故の事」

クロノはモニターに映る、二人の姿を見つめる

「勝ってくれるにこした事はないんだ、今はなのはを迷わせたくない」

『そこら辺はあんまり気にする必要ないと思うが  
そう思うのなら、もうちょっと気をつかったらどうだ？

その気になれば丸聞こえだぞ、お前達の会話』

突然の念話による通信に二人は驚きの表情に変わったのだった

海鳴市 臨海公園

『達也？』

『突然何？どういう事？』

二人のあまりの驚きように苦笑しつつ答える

『大した事じゃ無いんだが、そっちに通信を繋いだらさっきの会話が聞こえてきたのさ』

あれじゃ、聞いてくださいと言っているようなもんだぞ」

『うぐっ』

『あはは、ちょっと不用心だったね、反省』

達也は徐々に激しくなりつつある戦闘を目で追いながら、念話を続ける

『まあ、なのは達は戦闘に集中してるから、気付いたのは俺だけだな』

『ふう、そうか・・・、で、なんの用だ？』

『一つは追跡の準備は出来ているのかって事、もう一つはプレシア・テストロッサに関する資料の件について聞いたかったんだが？』

『聞かせたほうが良いか？』

『あまり良い話ではなさそうだな・・・』

『・・・、彼女は“ドオオオン！”だ』

その時、なのは達の魔力が衝突した為か、大きな爆発が起こった  
だが、達也はクロノの言葉を聞き逃さずにいる事が出来た

『なるほど・・・、それは・・・』

『今は詳しい話は出来ないけど』

これは間違いないことだと思うよ』

『・・・この話はもういいだろ、質問を変えるぞ』

あんまり気にする必要はないとはどういう事だ？』

『・・・そのまんまの意味さ、気にする必要はない、今の話を聞いたら尚更だが』

俺もなのはもフェイトの出生なんてどうでもいい

フェイトはフェイトだ、たとえどんな過去があろうと俺達はあそこにいるフェイト・テストロッサ

を助ける、それだけだ』

『この情報じゃ、君たちは迷わないと言っ事か？』

『そうだ、この程度じゃなのはの心は揺らぎはしないよ』

だが、今すぐ伝える事でもないからな、今は勝負の行方を見守ろう』



『わかつている、こちらからは一切手出しはしない、それで良いのだらう?』

『ああ、よろしく頼む』

達也は念話を切り、なのは達の戦いを見守る

「達也、今まで誰と話してたんだい?」

さつきまでの達也を不信に思ってたか、アルフが声をかけてきた

「ああ、クロノ達とな」

「クロノ?」

ユーノが首をかしげる

「この戦い、絶対に手を出すなと言ったんだ、それはお前達もな」

「たとえなのはが負けそうになっても?」

「そうだ」

「……」

二人からの返事はない

仕方なく釘を刺そうとしたところで、なのは達の戦闘が一層激しさを増したのだった

二人の戦いはどちらも一步も譲らない膠着状態になっていた

今は接近戦、【レイジングハート】と【バルディッシュ】が衝突し、二つの

デバイス達に込められていた魔力が漏れ出し、金の雷を纏う桜色の膜が

二人の周りに出現する

数瞬の競り合いの後、お互いを同時に弾き飛ばし、距離を取る

「くっ」

《フォトランサー》

フェイトは【バルディッシュ】の魔力刃をしまいこみ、フォトランサーをセット

フェイトの周りに雷撃のスフィアが四つ展開される

「……」

《ディバインシューター》

それを見たなのはもディバインシューターをセツト

桜色のスファイアが四つ展開する

「ファイア!!」

「シュート!!」

発射はほぼ同時、二人の魔法は相手に向かってまっすぐ飛んでいく  
なのははフェイトのフォトンランサーをすべて避けきり

フェイトもなのはのディバインシューターを避けるが

誘導弾であるディバインシューターを避けることができず、シールドを使い防いだ

しかし、フェイトはシールドを使ったことで若干の隙を作ってしまった  
っていた

なのははその隙を見逃さず、フェイトの下に回りこみ、すかさずディバインシューターを展開

「シュート!!」

今度は五つの誘導弾が発射された

《サイズフォーム》

フェイトは回避は難しいと判断し、魔力刃を展開、迎撃を選択する  
高速で迫ってくる桜色の誘導弾を一つ、また一つと切り落としていく  
五つ目だけは迎撃できず、体を捻ってかわし、クロスレンジに持ち  
込むため

間合いを詰める

「あ!!」

ディバインシューターと同等かそれ以上の速さで間合いを詰めてきた  
たフェイトに

なのはは咄嗟に右手をかざしシールドを展開する

《ラウンドシールド》

桜色のミッド式魔方阵が右手に表れ、フェイトの魔力刃を受け止める

「はああああ」

フェイトがそのまま押し切ろうと力を込める

なのははその体勢のまま精神を集中、先ほどフェイトにかわされた  
デイベインシューターを呼び戻す

「……！」

再び迫るデイベインシューターにフェイトは身体を反転、左手をか  
ざし

シールドを展開する

シールドはデイベインシューターを防ぎ、その効力を失う

「な……！」

だが、フェイトがデイベインシューターに気を取られている隙に  
なのはの姿が消えていた

慌てて周囲を見渡すフェイト、しかしその姿を捉えることはできない

《フラツシユムーブ》

「せええええええい……！」

なのはは上にいた、魔法を使い、上空より高速で迫って来る

「なあ……？」

ようやくそれに気づいたフェイトが回避行動を取ろうとするが間に  
合わない

【レイジングハート】が迫る

回避を諦め魔力強化をし、何とか【バルディッシュ】で受け止めよ  
うとするフェイト

そこへなのはの渾身の一撃が振り下ろされた

ガキン……！！

どおおおおおおおん……！！

二人の魔力が反発しあい、大規模な魔力爆発がおこり、辺りは光に  
包まれる

そんな中、先に仕掛けたのはフェイトだった

《サイズスラッシュ》

「いやあああ……！」

一瞬で背後まで移動したフェイトは魔力刃でなのはに切りかかる  
なのはは身体を捻り、その攻撃をかわす

バリアジャケットのリボンが斬られたが、構わず身体を反転  
距離を取るうとする

「えー!!」

しかし、フェイトもそれを予測済み、先手を打っていた

《ファイア》

【バルディッシュ】のトリガーボイスとともになのはの目の前に展  
開していた

雷撃のスフィアが発射された

「あう!!」

なのはは【レイジングハート】の自動防御を使い

何とかフォトランサーを防ぎきった

「はあはあはあはあ」

両者とも肩で息をしつつ呼吸を整える

高レベル魔導師どうしの戦いの為、気の抜けない場面の連続だった

(初めて会ったときは魔力が強いだけの素人だったのに・・・  
もう違う、早くて強い、迷ってたらやられる!!)

フェイトは内心焦っていた、なのはの底知れぬ強さに長期戦は不利  
と判断した

精神を集中させ、魔力を充填していく

フェイトの足元には巨大な魔方陣が展開していた

「な!!え!!?」

なのはは自身の周りに金色の魔方陣が現れては消えていくのを注意  
深く

見回していた、上下左右そのすべてに金の魔方陣が現れては消えて  
いく

《ファランクスシフト》

【バルディッシュ】の冷静な声が響く、フェイトの周りには数十もの  
雷光を帯びたスフィアが展開されていた

「あ!!」

それに気づいたなのはが【レイジングハート】を構えるが

「ライトニングバインド!!」

左手が金色の魔力光の帯に絡め取られて、空中に貼り付けられる  
右手も同様に貼り付けられた

「まずい、フェイトは本気だ」

その光景を見ていたアルフが焦りの声を上げる

「なのは、今サポートを!!」

なのはを援護しようとするユーノ、しかしそれは一本の刀に止められた

「お前は俺がさっき言ったことをもう忘れたのか？」

【天龍】を起動した達也がその刀身をユーノの首筋へ当てている

「だけどこのままじゃなのはが!!」

「これはあいつらの戦いだ、それを邪魔する気か!!」

「そんなことで納得できるわけないだろ!!」

ユーノは強引に術式を構成、なのはを援護しようとする

『駄目!!』

そのなのはから拒絶の声が届いたのはその時だった

「アルフさんもユーノ君も手出さないで!!」

バインドで両足も張り付けられ身動きが取れないのはだったが  
援護を受けるのを良しとはしなかった

「全力全開の一騎打ちだから、私とフェイトちゃんの勝負だから!

!」

『でも、フェイトのそれはほんとにまずいんだよ』

「平気!! 達也君!!」

『大丈夫だ、こいつらには何があっても手を出させないよ  
だから、フェイトと思いつきりぶつかってこい』

「うん!! お願い!!」

なのはと達也はあくまで一騎打ちの態勢を崩さない

ユーノとアルフはそのことに納得はできなかったが、助けようとし

ても

達也が本気で止めに来ることがわかったので手を出せそうにもなかった

アースラの方にも達也が釘を刺しているので手を出してこないだろう現状でなのはを援護する人物が断たれた瞬間だった

「・・・、フォトンランサーファランクスシフト・・・打ち砕け、ファイア!!」

フェイトが魔力の収束を終え、それを放つ

何十という雷撃の槍が一斉になのはへ襲い掛かった

「!!」

【レイジングハート】の宝玉が輝く

しかし、なのはは身動きが取れないまま

その雷撃の束の直撃を受けるしかなかった

「くううう・・・」

攻撃したフェイト自身の操れる限界に近い魔法

徐々に制御が甘くなるのを感じながら

数秒間に千を超えらると思われる雷撃が発射された

「なのは!!」

「フェイト!!」

今にも飛び出しそうなユーノとアルフに達也は再度【天龍】を突きつける

“サクツ”

「まだ終わっていない、手を出すことはゆるさねえよ」

「きゃーーーーー!! 達也、刺さってる!! 僕に刺さってますよ!!」

そんなユーノの言葉を無視し、達也は続ける

「フェイトはまだ決着が着いたとは思っていない、その証拠にあいつの周りには

まだフォトンランサーのスフィアが展開されている

おそらく、とどめ用に魔力を残しているんだろう」

「それは、そうだけど・・・わかったよ」

達也の言葉にアルフは困惑しながらも引き下がる

「なのもあれじゃ落ちないよ、信じてやってくれないか？」

「わかった！わかったから抜いてくれ！！」

《いつそのまま貫きますか？》

「【天龍】（。口。）！！」

《冗談です（^- - ^）》

（何こいつ！！こんな性格だったっけ！？誰だこんな性格にしたのは！！）

注：作者です（笑）

ユーノが心の中で行き場のない怒りに燃えていると、いい加減先に進みたく

なった作者・・・もとい、達也が口を開く

「ま、冗談はさて置き、このまま抜けば血が噴出し大変な事態になるがいいんだな？」

「へ？」

ユーノは達也の言葉が理解できず首をかしげる

「そーか、んじゃ遠慮なく」

ここでユーノに考える時間を与えると先に進まなくなるので速攻で話を進める

「え！！ちよ、待った！！心友！！」

「スポッ」

「あ・・・」

「ピューーーーー」

「ドサッ」

「どくどくどく」

ユーノが事の重大さに気づいたときにはもう遅かった  
静止も間に合わず、【天龍】は抜かれる

ユーノは地面に横たわりその場を赤に染めていった

「い、いいのかい？達也」

さすがにやばいと思ったのかアルフが心配そうに声をかけてくる

「ギャグ仕様だからな・・・、こいつの顔見てみる」

「いや、この作品は何時からコメディー作品になったんだい・・・」  
達也の言葉を疑問に思いつつ、とりあえず言われた通りユーノの顔を覗き込むアルフ

(TへT) こんな顔で泣きながら不貞腐れていた

「おそらく何で自分ばかりこんな役をやらなければならぬんだつてところか？」

達也が【天龍】に付いた血を拭いながらの言葉にユーノは“ピクツ”と反応する

「ま、そのうち復活するだろう」

「ほんとにギャグ仕様かよー！！」

はあ、心配して損した・・・、ところでなのはが落ちないってのはどういうことだい？」

「ん？」

「フェイトのフランクスシフトを直撃、いくらあの子の防御系出力が高いつて言っただって

あれをまともに受けて耐えられるほどではないと思うけど」

「普通ならな」

「え？」

「今のあいつは信念の塊だよ、フェイトを助ける、その一点だけしか見ていない・・・」

あいつは頑固だからな、一度決めたら梃子でも動かない、その“不屈の心”があいつの最大の

武器だ、ああなったあいつを落とすのは至難の業だよ、ましてや自分の行動に迷い

魔法の制御も甘くなっているフェイトには特にな」

二人は顔を上げ、上空にいる少女達の戦いの行方を見つめるのだった



「はあはあはあ」

フェイトは貯めていた魔力を少しだけ残り攻撃を止める  
その少しだけ残った魔力を左手に集め、いつでも打ち出せる用意を  
しておく

（手ごたえはあった、でも私の制御が甘かったこともわかってる  
おそらく、あれじゃ、あの子は・・・）

魔力爆発によつてできた煙がはれる

（落ちない）

徐々にはれる煙の中で桜色のシールドが見えた

そこから現れたのは白いバリアジャケットに身を包む少女・なのは  
身体の周りがフェイトの魔力の残滓で放電しているが他に外傷はな  
いようだ

「たっはー、撃ち終わるとバインドって言うのも解けちゃうんだね」  
なのはの左手にはシューティングモードに変形した【レイジングハ  
ート】

「今度はこっちの」

《デイバイン》

その【レイジングハート】をフェイトに向けて構える

【レイジングハート】の先端に魔力が収束する

「番だよー!!」

《バスター》

桜色の収束砲が放たれた

「せえい!!」

フェイトも左手に集めていた魔力弾を撃ち出す

しかし、その金色の魔力弾はなのはの桜色の収束砲に飲み込まれ、  
消滅する

「!!」

とっさにシールドを張るフェイト、次の瞬間、収束砲が直撃した  
（直撃!!・・・でも、耐え切る、あの子だって耐えたんだから）  
その想いとは裏腹にフェイトのシールドはだんだんと押し込まれて

いく

「く、うあああああつあああ!!」

フェイトのグローブやマントが収束砲の威力に耐えられず、所々破けはじめ

数秒後、何とか耐え切ったフェイトは満身創痍だった

「フェイト!!」

「はああああ・・・」

アルフが声を上げる、だがフェイトに反応を返す時間はなかった  
「!!!」

さらなる魔力の収束を感じ取り、顔を上げるフェイト

目に入ってきたのは、巨大な魔方阵を展開し今までとは比べ物にならないほど

魔力を収束したなのはの姿だった

「受けてみて、デイバインバスターのバリエーション!!」

《スターライトブレイカー》

フェイトは射程外に逃げようとしたが、その両手両足に桜色の帯が絡みつく

「バインド!？」

バインドを解除しようと両手両足に魔力を込めるが時間が足りなかった

「これが私の全力全開!!スターライトブレイカー!!」

デバイスモードに戻した【レイジングハート】を振り下ろすのは流星のように集められた魔力が巨大な収束砲となつて撃ち出される

「あ・・・」

バインドによつて空中に貼り付けられたフェイトに襲い来る巨大な桜色の収束砲を回避する術など無かつた

【バルディッシュ】がシールドを張るが簡単に貫通、【バルディッシュ】にひびが入る

そのまま桜色の光がフェイトの体を包み込んだ

アースラでその光景を見ていたクロノ達はなのはの規格外の砲撃に  
驚愕する

「な!!!なんつー馬鹿魔力!?!」

「うわ、フェイトちゃん生きてるかな?」

「決まったな」

同じくその光景を見ていた達也がつぶやく

「しかし、あのバカ、自分への反動を考えてないな・・・  
ま、なのはらしいといえば、らしいがな」

達也は小さく苦笑しつつ、ユーノやアルフが気づく間もなく  
その場から消えるように移動したのだった

【レイジングハート】が排熱の為、煙を吐き出す

「はあはあはあ、あ!!!」

砲撃を終えたなのはが見たものは気絶したフェイトがゆっくりと落  
下していくところだった

「フェイトちゃん!!!」

一度は追いかけようとしたのはだが

「あ・・・」

そこに先回りしている人物を見て安堵の息をはく

その人物はフェイトが海へ落ちる前にやさしく抱きとめた

「ん・・・」

「目、覚めたか」

フェイトは自分を抱えている人物に目を向ける

フェイトを抱き抱えていたのは達也だった

「大丈夫か?」

「・・・うん」

「達也君!!!」

なのはが心配そうな顔をしながら寄ってくる

「フェイトちゃん、ごめんね、大丈夫?」

「うん」

「私の勝ちだよな」

「そう・・・みたいだね」

《フードアウト》

【バルディッシュ】からジュエルシールドが解き放たれる

「飛べるか？」

達也の言葉に答えるようにフェイトは達也から離れ、一人で浮遊する  
そこへクロノからの思念通話が入る

『よし、なのは、ジュエルシールドを確保して、それから彼女を』

『いや、来た！！』

エイミイの警告に呼応するようにフェイト達の上空から紫の稲妻が  
落ちる

「フェイトちゃん！！」

その稲妻はあきらかにフェイトを狙っていた

しかし、稲妻がフェイトに至る前にそれをさえぎる人物がいた

「そう何度も同じ手を通じると思うなよ！！」

「達也！！」

《ドラグーンブラスター！！》

達也はフェイトを庇いながら魔方陣より蒼い砲撃を放つ

砲撃が稲妻を打ち消しその先にある時空の歪みに到達する

達也の砲撃のダメージにより消えかかる歪みだが、消える寸前

【バルディッシュ】より解き放たれたジュエルシールドを飲み込んで  
いく

「エイミイさん！！」

「ビンゴ！！尻尾つかんだ」

アースラでは、達也の声に応えるようにエイミイがデータを打ち込  
んでいく

「よし、不用意な物質転送は命取りだ、座標を」

「もう割り出して送ってるよ」

その座標を確認したリンデイが指示を出す

「武装局員、転送ポートから出動！！任務はプレシア・テストロッサの身柄確保です」

「ハッ」「ハッ」「ハッ」

アースラの武装局員たちがプレシアの待つ、時の庭園へと転送された

## 時の庭園

「げほ、げほ、がほ」

プレシアは咳き込み、血を吐く

「まさか、あそこから押し返されるなんて・・・」

次元魔法はもう体が持たないわ、それに、今のでこの場所も捉まられたフェイト、あの子じゃ駄目だわ・・・、そろそろ潮時か・・・」

アースラの武装局員たちが飛び込んできたのはその時だった

「第三小隊、転送完了」

「第二小隊、進入開始」

アースラ司令室にはフェイトを連れ たなのは達が到着したそれに気づいたリンデイが声をかける

「お疲れ様、それからフェイトさん、始めまして」

フェイトは俯いて口を閉じている

リンデイはモニターに振り返りなのは達に念話を送る

『母親が逮捕される瞬間を見せるのはしのびないわ、なのはさん、彼女をどこか別の部屋へ』

『あ、はい』

なのはは自分に与えられた部屋に移動しようとフェイトを促がす

「フェイトちゃん、よかつたら私の部屋へ」

なのはの言葉を最後まで聞くことなく、一步踏み出したフェイトはモニターを真剣に見詰めていた

「総員、玉座の間に侵入、目標を発見」

モニターの中では武装局員に囲まれているプレシアが映っていた

「プレシア・テストロッサ、時空管理法違反及び管理局艦船への攻撃容疑で

貴方を逮捕します。武装を解除してこちらへ・・・」

そう一人の武装局員が告げるが、プレシアは薄く笑い、その場を動こうとはしない

その態度に武装局員達はさらに包囲の幅を狭める

すると、数人の武装局員が玉座の背後に怪しげな通路を見つけた

「おい、こつちに何かあるぞ!!」

武装局員達が背後の通路に侵入する

「!!これは・・・」

無数の木の根に覆われたその部屋の中央に驚くべき物があつた  
そこにあつたのはカプセル、そしてその中に一人の少女がいた

「え!!」

なのはは最初、自分の目を疑った

モニターに映し出された少女はフェイトと瓜二つだったのだ

「あ・・・」

そしてフェイト自身もモニターに映る少女に驚愕し、思考がフリーズした

「ぐわっ!!」

その時、それまで動きを見せなかったプレシアが表情を豹変させカプセルに近づいていた局員達を吹き飛ばす

「私のアリシアに近寄らないで!!」

他の武装局員達がデバイスを構える

しかし、プレシアは悠然と局員達に振り返り、少女を守るように立ちふさがる

「う、撃てえ!!」

一人の局員の声に反応して、それぞれが射撃魔法を放つ

だが、プレシアの自動展開された障壁に全てかき消されてしまった

「・・・うるさいわ」

プレシアはゆったりとした動作で左手を局員達に向ける

その左手を中心に高濃度の魔力が集まり、空間が歪み始める

「危ない!!防いで!!」

リンディの叫ぶ、しかしその叫びに反応できた者は皆無だった

次の瞬間、時の庭園に紫の雷が降り注いだ

『ふふふ、ふつふつふつ、ふははははは!!』

モニターには壊れたように笑うプレシアが映し出される

時の庭園に突入していた武装局員は全滅していた

幸い死者はいなかったが全員動ける状態ではなかった

「いけない!!局員達の送還を!!」

「りよ、了解です!!」

リンディが急ぎ指示を出し、エイミイがそれに答える

「・・・アリ・・・シア・・・?」

その背後ではフェイトがモニターを見て呆然としながら確かめるように呟く

アルフやユーノもモニターを見つめたまま固まっていた

「座標固定!!0120503」

「固定!!」

「転送オペレーション、スタンバイ」

エイミイを筆頭にアースラススタッフが局員の回収に全力を注いでいる

そんな状況を嘲笑うかのように、モニターではプレシアが動きを見せていた

『もう駄目ね、時間がないわ、たった9個のロストログアではアルハザードへ』

辿り着けるかどうかはわからないけれど』

プレシアはアリシアのカプセルに寄りかかりながら言葉をつむぐ

『でももう良いわ、終わりにする』

この子を亡くしてから暗鬱な時間を・・・、この子の身代わりの人形を

娘扱いするのよ』

「……！！」「……」

なのはやフェイト等、まだ状況を飲み込めていない者達はプレシアの言葉に

身体を強張らせる

『聞いていて？貴女の事よフェイト、せっかくアリシアの記憶をあげたのに

そっくりなのは見た目だけ、役立たずでちっとも使えない、私のお人形』

「・・・最初の事故の時にね、プレシアは実の娘アリシア・テストロッサを

亡くしているの、彼女が最後に行っていた研究は、使い魔とは異なる使い魔を超える人造生命の精製」

プレシアの言葉を補足するようにエイミーが調べ上げたデータを公表する

「そして、死者蘇生の秘術、フェイトって言う名前は当時彼女の研究につけられた

開発コードなの・・・」

『よく調べたわね、そうよその通り、だけど駄目ね、ちっとも上手くいかなかった

作り物の命は所詮作り物、失ったものの代わりにはならないわ』



プレシアはカプセルを撫でながら言葉を続けていく

『アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ、アリシアは時々我侭も言っただけど

私の言うことをとても良く聞いてくれた』

「止めて」

『アリシアはいつでも私に優しくかった・・・』

フェイト、やっぱり貴女はアリシアの偽者よ、せつかくあげたアリシアの記憶も

貴女じゃ駄目だった』

「止めて、止めてよ!!」

プレシアの言葉の一つ一つがフェイトに突き刺さる

なのは静止の叫びが艦内に響く渡る

『アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使うだけのお人形・・・だから貴女はもう要らないわ、何処へなりとも消えなさい!!』

「お願い!!もう止めて!!」

なのはの必死の叫びも虚しく、プレシアは最後の爆弾を投下した

『ふふふふ、ふははははは!!』

いい事を教えてあげるわフェイト、貴女を作り出してからずっとね私は貴女が・・・大嫌いだっただのよ!!』

フェイトの脳裏にこれまでの記憶がフラッシュバックする

優しい母を取り戻す為に戦ってきた自分

だが、その優しい笑顔は自分に向けられたモノではなかった

そして、最後の言葉がフェイトの耳に届いたとき、フェイトの中にある

自分という存在が砕け散ったのだった

フェイトの手から【バルディッシュ】が滑り落ち、フェイト自身も膝から

崩れ落ちる、近くにいた達也が抱きとめて、そのまま倒れることは防いだ

「フェイトちゃん!!」

「フエイト!!」

なのは達の呼びかけにも反応を返すことはなかった

「・・・意識はある、だが、精神的なショックで自我が保てなくなつたんだろう」

とりあえず、医務室へ運んで、休ませるぞ」

達也の言葉になのは達も頷いて、一緒に医務室へ行こうとする

「局員の回収、終了しました」

オペレーターの一人、アレックスがそう告げた瞬間

「た、大変、大変!! ちよつと見てください!!」

エイミイの声が艦内に響き渡る、そしてエイミイの操作でモニターに映し出された物に

殆どのスタッフ達は驚愕するしかなかった

「庭園内に魔力反応、多数!!」

「何だ、何が起こっている!!」

モニターには時の庭園内のいたる所に魔道兵器である傀儡兵達が生み出されて

いるところが映し出されていた

「庭園敷地内に魔力反応、いずれもAクラス!!」

「総数、60、80!! まだ増えています!!」

「プレシア・テストロツサ、一体何をするつもり!？」

プレシアはアリシアのカプセルに絡み付いていた木の根を魔法で外すさらにカプセルを魔法で持ち上げ、移動させる

「私たちの旅を邪魔されたくないのよ」

玉座の前まで移動したプレシアは自身の周りにジュエルシードを展開する

「私たちは旅立つの、忘れられた都・・・アルハザードへ!!」

「まさか!!」

それを聞いたクロノは驚愕の表情を浮かべる

「この力で旅立って、取り戻すのよ・・・全てを!!」

プレシアの叫びに答えるように、ジュエルシールドが大きく周りを旋回し

その力を解放する

「次元震です！！中規模以上！！」

アースラに警報が響き渡る

「振動防御！！ディストーションシールドを！！」

「ジュエルシールド9個発動！！次元震さらに強くなります」

「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い区域に移動を！！」

「了解です！！」

「艦長！！このままだと次元断層が！！」

オペレーター達の報告にリンディは早く、しかし確実に指示を出していく

「アルハザード・・・」

「馬鹿な事を！！」

「クロノ君！？」

いきなり飛び出していこうとするクロノに驚くエイミー

「僕が止めてくる、ゲート開いて」

そう言い残し、クロノはブリッチを飛び出していった

アースラの通路を走りながら、クロノはアルハザードについて記憶を引っ張り出す

（忘れられた都、アルハザード

もはや失われた禁断の秘術が眠る土地

そこで何をしようというんだ！！自分のなくしてしまった

過去を取り戻せるとでも思っているのか！！）

クロノは待機状態のS2Uを取り出し、起動する

「どんな魔法を使ったって、過去を取り戻すことなんて・・・できるもんか！！」

一方、ブリッチでは達也がフェイトを持ち上げ

医務室へ運ぼうとしていた……が

「馬鹿な……、なんであれが、なんであいつらがここにいる!?!」  
達也がモニターを確認し、その表情を驚愕に染める

達也の豹変に少し驚いたが、隣に居て

その光景をただ見守るしかないのはは、その目に新たな決意を宿して

モニターに映っている人物に向き直る

『ふははははは!! 私とアリシアは、アルハザードで全ての過去を取り戻すのよ!!』

少女達の出会いの物語はこうして最終局面を迎えようとしていた

t o b e c o n t i n u e d

思い出は時の彼方なの（後書き）

ドラグーンブラスター

砲撃魔法

なのはの“デイベインバスター”

と同等の威力を持つ

達也の砲撃魔法の主力

発射には一拍の溜めが必要だが

移動しながらでも撃てる為

優秀な砲撃魔法

すいません。

シリアスシーン台無しです。

こんな作品ですが読んでくださっている

皆様に感謝いたします。

感想等も宜しく願います。

**宿命が閉じるときなの（前書き）**

お待たせしました、更新です。

## 宿命が閉じるときなの

達也はアースラの廊下を走って進んで行く、目的地は転送ポート  
次の角を曲がればすぐそこだ

達也は走りながら、考える

「なぜ、何故あいつらがここにいる・・・

答える、【天龍】

あれは、俺の見間違いか？」

《・・・いえ、確かにあれは、あの時、あの場所に現れた

あの傀儡兵です・・・》

「だよな？と言うことはあいつも居ると言うことだな」

《わかりません、ですが可能性は高いかと・・・》

達也は角を曲がり、転送ポートのある部屋にたどり着く

「確かめれば良いだけだ、行くぞ」

《はい》

達也は【天龍】を抜き放ち、時の庭園へと転送したのだった

過去を取り戻す為に全てを捨てようとする者

今を生きる為に全てを守ろうとする者

両者の最終決戦が今、始まる

## 宿命が閉じるときなの

アースラ ブリッチ

「次元震、発生！！震度、徐々に増加しています！！」

「この速度で震度が増加していくと

次元断層の発生予測値まで、後三十分たらずです!!」

「あの庭園の駆動炉もジュールシードと同系のロストロギアです  
それを暴走覚悟で発動させて足りない出力を補っているんです!!」  
オペレーターが飛び交う

リンディはそれを聞き、プレシアの覚悟を垣間見た気がした  
「最初から片道のつもりなのね・・・」

通路ではフェイトを医務室へ運んでいたのは達にクロノが合流し  
ていた

「クロノ君どこへ？」

「現地へ向かう、元凶を叩かないと」

「私も行く」

「僕も」

「わかった」

クロノはアルフを見る

「君はどうする？」

アルフはフェイトの顔を見ながら応える

「フェイトを医務室へ運んでやらなきゃないから」

クロノは周りを見回し、達也が居ないことに気づいた

「達也はどうしたんだ？」

「わからない、モニターを見てたら急にどこか行っちゃって  
多分、あそこに行っただと思うけど・・・」

全員でモニターを見る

そこにはプレシアの居城、時の庭園が映っていた

「勝手なことを・・・、わかった、行こう!!」

「っうん」

クロノ達は転送ポートへ、アルフは医務室へそれぞれ走り出す

『クロノ、なのはさん、ユーノ君、私も現地へ出ます

貴方達はプレシア・テストロッサの逮捕を』

「っっ了解!!」



リンディの通信に力強く応え、三人は庭園へと飛んだ

## 時の庭園

クロノ達は前方にある入り口の辺りを見つめる

そこにはすでに、数十という数の傀儡兵が待ち構えていた

「・・・いつばいいね」

「まだ入り口だ、中にはもっというよ」

「クロノ君、この子達って」

「近くの相手を攻撃するだけの、ただの機械だよ」

クロノの言葉を聞き、【レイジングハート】を構えるのは

「そっか、なら安心だ」

「・・・なにが？」

「手加減なしで“殺っちゃっても”全然問題ないよね」（^- - ^）

「・・・貴女が手加減なしでやったら、この庭園ごと吹っ飛ばんじや

「え〜、そんなことないよ〜、・・・それは最後の手段だし」（

じ）

え！！今なんか小声で呟かなかった!？

しかもさっき“やる”っていう漢字の“殺”になつてなかつたか!？

「気のせい、気のせい、じゃあいつくよ〜!!」

魔法をぶっぱなそうとするのはをクロノが手で制する

「そんな物騒なことを誰と話しているのかは知らないが

この程度の相手に無駄弾は必要ないよ」

「へ？」

クロノは自身のデバイス【S2U】を構える

《ステインガースナイプ》

【S2U】のトリガーボイスと共に水色の魔力弾が駆け抜ける  
「早い!？」

その発動と弾速の速さになのは達は驚いた  
水色の魔力弾は次々と傀儡兵を撃ち落としていく

「スナイプショット!！」

クロノの新たな魔法が傀儡兵を貫いた

そのまま、頑丈な作りをしている大型の傀儡兵に接近する  
傀儡兵は持っていた巨大な斧をクロノに振り下ろすが

クロノはそれをかわし、傀儡兵の頭に乗る

《ブレイクインパルス》

【S2U】の声が聞こえた瞬間、大型の傀儡兵は爆散する  
なのは達はぼけつとその光景を見ているしかできなかった

「ボーとしてないで、行くよ!！」

「!!!うん!！」

無事に着地したクロノがさっさと先に進む

それを慌てて追いかけるなのは達だが途中で床が抜けていて

そこに黒い奇妙な光景が映っているのが見えた

「その穴、黒い空間がある場所は気をつけて」

「え!？」

「虚数空間、あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ」

クロノの言葉をユーノが補充する

「飛行魔法もデリートされる、もしも落ちたら重力の底まで落下する  
二度と上がってこれないよ」

「き、気をつける」

などと説明しているうちに前方に大きな扉が見えてきた

クロノはそれを蹴り破る

そこは大広間になっており、奥には階段があるのが見える

だがやはり傀儡兵が大量に待ち伏せしていた

「ここから二手に分かれる、君達は最上階にある駆動炉の封印を」

「クロノ君は?」

「プレシアのもとに行く、それが僕の仕事だからね」

クロノは階段のある方向へ【S2U】を向ける

「今、道を作る、そしたら・・・」

「クロノ君！！上！！」

「な！？」

クロノはバックステップで距離を取る

今までクロノが立っていた場所には数体の傀儡兵が折り重なって落ちてきた

《蒼破連刃》

そこに数十もの蒼い魔力刃が降り注ぎ、傀儡兵が爆散する

煙がはれた後、その場に少年が降り立つ

「来たのか？」

「達也君！！」

蒼い守護装束を纏う達也が立っていた

「状況は？」

「今から二手に分かれる、なのは達は駆動炉を止める為に上に僕はプレシアの捕縛だ」

「ならば行け、俺はここに・・・」

この下にいる奴に用がある」

「下？」

ユーノの声と同時に床が吹き飛び、砂塵が舞う

そこから巨大な機械が現れた

「なんだあれは！？」

クロノが叫ぶ

砂塵がはれ、巨大な機械の全貌が明らかになる

全体的に紫のメタルチックな身体

下半身は獣のような形をしており

上半身は翼のついたロボットのよう形をしていた

そして上半身と下半身、両方に顔がついている

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！」

巨大な機械が声を上げる

「出てきやがったか、やはり傀儡兵たちはこいつが生み出したものだったな」

「どういうことだ!？」

「そのままの意味だ」

この状況は、こいつが作り出したものだ」

「これだけ大量の傀儡兵を・・・、馬鹿な!!」

「こいつにはそれが出来るんだよ」

こいつの相手は俺がする、だからお前たちは

先に行け!!」

「駄目だよ、達也君!!」

こんなところに一人で残してなんて行けないよ!!」

なのはの声に、達也は少しの間黙り

ひとつ息をつくくと、懇願するように話し出した

「・・・頼む、やらせてくれ」

こいつは、こいつの存在だけは許すわけにはいかないんだ」

「・・・え?」

いつもとは違う、達也の雰囲気には三人は驚く

そんな様子を無視し、達也は巨大な機械に切りかかる

その斬戟は巨大な機械の腕に止められた

「クロノ!!」

達也の声に反応し、クロノは階段の方向へ魔法を放つ

《ブレイズキャノン》

クロノの魔法は階段まで一直線に敵をなぎ払った

「なのは、行くんた」

なのはもようやく意図を理解し、一瞬躊躇するがユーノの首根っこを掴んで

飛行魔法で飛び立つ

「達也君、クロノ君、気をつけてね!!」

なのはの言葉に二人は優しく微笑みながらなのは達を見送った



なのは達のことをモニターで見っていたアルフはフェイトに向き直り

「あの子達が心配だから、あたしもちよっと手伝ってくるね

すぐ帰ってくるよ、それで全部終わったらゆっくりでいいから

私の大好きな、ホントのフェイトに戻ってね

達也も言っただけ、これからはフェイトの時間は全部

フェイトが自由に使っていていいんだから」

フェイトの頭を二・三度撫でると、アルフは扉の方へ歩き出す

途中、振り返りフェイトを心配そうに見つめるが

すぐに向き直り、扉を出て行った

フェイトの心は揺れていた

一人になった医務室でフェイトはモニターへ視線を向ける

そこにはなのはや達也たちが傀儡兵たちとの死闘が映っている

（・・・母さんは最後まで私に微笑んでくれなかった

私が生きていたかと思っただけは母さんに認めてほしかったからだ

どんなに足りないと言われても、どんなに酷いことをされても・・・

だけど笑ってほしかった。あんなにはつきりと捨てられた今でも

私、まだ母さんにすがりついている・・・）

モニターにはアルフの姿が映し出される

どうやらなのは達と合流したようだ

（アルフ、ずっとそばにいてくれたアルフ、言うことを聞かない私に

きつとずいぶん悲しんで・・・）

次に映し出されたのは白いバリアジャケットに身を包む少女

（何度もぶつかった、真つ白な服の女の子

初めて私と対等にまっすぐ向き合ってくれたあの子

何度も出会って戦って、何度も私の名前を呼んでくれた

何度も・・・、何度も・・・）

そして、モニターには蒼い服の少年が映る

（最初に会ったときからとても不思議な感じがした男の子

白い服の子と一緒に私に話し掛けてくれた・・・）

敵のはずの私を何故かいつも助けてくれた

そして、私に何かを伝えようとしていた……)

ベットから身体を起こしたフェイトの目から涙が溢れ出す

(私は、母さんを嫌いになんてなれない!!)

生きていたいと思っただのは母さんに認めてもらいたいからだ!!

それ以外に生きる意味なんかないと思っただ!!

それができなきゃ生きていけないんだと思っただ!!

私はどうしたら……あ!!)

そんな時、フェイトは白い少女の言葉がよみがえる

(……捨てればいいってわけじゃない、逃げればいいってわけじゃもつとない!)

フェイトは自らの相棒を手にとり、起動する

(私の、私たちの全てはまだ始まってもない……)

ポロポロになつた相棒を見つめながら、呼びかける

「……そうなのかな、【バルディッシュ】?

私、まだ始まってもないかったのかな?」

《……ゲットセット》

フェイトの呼びかけに応えるように【バルディッシュ】の宝玉の部分が光り輝く

《主、貴女は一人ではありません、皆さんが……、そして私がいます》

「……そうだよね、【バルディッシュ】もずっと私のそばにいてくれたんだもんね

お前もこのまま終わるのなんてやだよね!!」

《イエッサー》

フェイトは涙を拭い【バルディッシュ】を構え、魔力を込める

「うまく出来るかわからないけど、一緒に頑張ろう」

その言葉と共に【バルディッシュ】が金色の光に包まれる

次の瞬間、【バルディッシュ】は傷一つなく光り輝いていた

《リカバリー》

(私たちの全ては、まだ始まってもない)  
フェイトはバリアジャケットのマントを身につける  
さらに病人用のパジャマもレオタードのようなバリアジャケットに  
変わった  
「だから・・・、ほんとの自分を始める為に」  
フェイトは足元に転送の魔法陣を展開する  
「今までの自分を、終わらせよう・・・」  
数瞬後、魔法が発動しフェイトは転送の光になり、その場から姿を  
消した

## 時の庭園

上空から襲ってくる、飛行タイプの傀儡兵をなのはの砲撃と狼形態  
のアルフの牙で  
次々に落としていく  
「くそ！！数が多い！！」  
しかし、その圧倒的な物量差に、アルフは焦り始めていた  
そんな中、なのははデバイスシュターを射ち、さらに数体の傀儡  
兵を落とす  
それでもその内の何体かは、なのはの砲撃をかわし  
襲い掛かってくる  
「だけならいいんだけど・・・、この！！」  
ユーノはチェーンバインドで傀儡兵を縛り上げながらその様子を見  
つめる  
「なんとかしないと・・・あ！！」  
焦りが一瞬の隙を招いた、大型の傀儡兵がその隙にバインドを無理



矢理引き千切り

手に持つ、巨大な斧を振りかぶる

「なのは!!!」

その先にいたのは、なのはであり予想もしなかった攻撃に  
身体が硬直し回避動作が遅れた

なのはは斧が振り下ろされるのをスローモーションで見えた気がした

「なのは!!!」

再び発せられたユーノの声で硬直は解けたが  
防御すら間に合うタイミングではなかった

次に来るであろう衝撃に、なのはは目を瞑る

《サンダ・レイジ》

一筋の雷が上空より傀儡兵に襲い掛かった

その直撃を受け、傀儡兵は一瞬動きを止める

突然の雷になのはは上空を見上げる

「あ・・・」

そこには黒きマントをつけた少女が閃光の戦斧を構えていた

《ゲットセット》

「サンダ・レイジ!!!」

さらに強力な雷が傀儡兵を直撃する

大型の傀儡兵は周りにいた傀儡兵たちも巻き込み、爆散した  
黒いマントの少女はゆっくりとなのはの隣まで下降してくる

「フェイト!?!」

その姿を見たアルフが驚きの声を上げる

その少女、フェイトはなのはの隣で止まった

なのはとフェイトの視線が交錯する

そこへ、壁を突き破り、現れる超大型の傀儡兵

傀儡兵は背中に背負った大型の魔導砲を充填する

「超大型だ、バリアが強い」

「うん、それにあの背中の・・・」

傀儡兵は魔導砲の充填したそのエネルギーを発射しようと構える

「だけど、二人でなら・・・」

「え！？・・・、あ！！うん！！うん！！うん！！」

「一緒に戦うと言うフエイトになのはは本当に嬉しそうに頷くのだった  
いくよ、【バルディッシュ】！！」

《ゲットセット》

「こっちもだよ、【レイジングハート】！！」

《スタンバイレディ》

二人の魔力が高まっていく

傀儡兵の魔導砲が発射されるより先に、二人の砲撃が炸裂した

「サンダーバスター！！」

「デイバインバスター！！」

金と桜の砲撃は傀儡兵のバリアにぶつかり、その進行を止める  
しかし、その強烈な衝撃に傀儡兵は体勢を崩し

魔導砲の発射シークエンスを一時中断する

「「セーの！！」」

二人は畳み掛けるように砲撃に魔力を込める

二人の強大な魔力の前に、超大型の傀儡兵はバリアを貫かれ爆散する  
砲撃は、あまりの威力に庭園の壁を外まで貫通してしまった

プレシアは庭園の最下層でその衝撃を感じた

「・・・来たのね、だけでもう間に合わないわ。ね、アリシア」  
プレシアは目の前にいる娘を見つめる

「ああ、アリシア・・・、ぐー！！」

その娘のカプセルを抱きながら、プレシアは地に膝をついた  
「後・・・もう少し」

プレシアの呟きに応えるように、傍らに控えていたジュエルシールドが  
一瞬、輝きを増した

「フエイトちゃん！！」

「フエイト！！フエイト！！フエイト！！」

なのはの声に視線を上げるフェイトにアルフは人間形態に戻り泣きながら抱きつく

「アルフ、心配かけてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ

本当の私を……」

それからなのは達は駆動炉への道をフェイトの案内で進む

また一つの扉を壊し、その先にエレベーターを見つけた

「あそこのエレベーターから駆動炉へ向かえる」

「うん、ありがとう……。フェイトちゃんはお母さんの所に？」

「うん」

なのはは近くにある瓦礫に【レイジングハート】を立てかける

「私、その……。上手く言えないけど……」

フェイトの手を両手で包みこむ

「え？」

「頑張つて」

最初は戸惑ったフェイトだが、自らも反対の手を重ね

「ありがとう」

と言った

二人の心がようやく通じ合った瞬間だった

「今、達也とクロノが向かってる。急がないと間に合わないかも」

ユーノの言葉に反応し、アルフが焦りの表情を見せる

「フェイト？」

「うん」

こうしてまた、なのは達は駆動炉、フェイト達はプレシアと二手に分かれたのだった

『エイミイ!!』

アースラにクロノからの通信が入る

「なのはちゃんとユーノ君、駆動炉へ突入

フエイトちゃんとアルフは最下層へ

達也君はまだあの機械と戦闘を続けているけど

大丈夫、いけるよきつと」

エイミイは現状を簡単に伝える

『ああ』

クロノもその声に応え、明るく返事をするのだった

同時刻

海鳴市

海鳴の街では次元震に呼応してか、大きな地震が発生していた

(また、この感じ・・・達也君)

すずかは身体を感じる力の奔流に自室の窓から心配そうに空を見つめ

「大丈夫、大丈夫だよ」

アリスは愛犬たちを撫でながら、自分にも言い聞かせるように呟く  
そして・・・

「この力、この前と同じような感じだな」

「ふん、髪がないのにそんなところは鋭いんだな」

異家の庭でスキンヘッドの男と金髪の若者が会話をしていた

「ちよつと待て！！髪のないのは関係ないだろう！！」

「うっせーよハゲ！！」

「ハゲではない！！これは髪が新天地を求めて旅立ったただけだ  
！！」

「それをハゲだと言っただろうが！！」

・  
なにやら登場早々、一触即発な展開に！！何やってんだこいつら・・・

「菊ノ丸、茂一」  
きくのまるもいち

それを注意するように声が響く

「お嬢」

「ふたみお嬢様」

屋敷から三人の人影が姿をあらわす

「何をやってんのよあんだ達は」

愛々々（めめめ）が呆れたように声をかける

「いつもの事だけど、喧嘩は駄目だ」

少し怒ったような表情で二人を諭すふたみ

「・・・」

そして無言で空を見つめる策

の三人だ

「大将？どうかしたのか？」

「御当主？」

「策？」

策が無言で空を見上げているのを変に思っ

喧嘩していたことも忘れた二人と愛々々が声をかけてくる

「この地震、おそらく達也が関わっているのだろうな」

「若（様）大将が？」

菊ノ丸と茂一がつかれて空を見上げる

「何をしているのかはわからないけど、ものすごく大きな力だね」

愛々々もそれに続く

「大丈夫だ、お主人ちゃん」

ふたみの言葉に全員が顔を向ける

「あの子ならきつと止めてくれる」

その顔は達也のことを信じきっているのか、優しい笑みを浮かべていた

「ふっ、そうだな」

策も笑みを浮かべ、もう一度空を見上げる

（頼んだぞ、達也）

それに続いて、今度は全員で空を見上げるのだった

## 時の庭園

エレベータに乗り、駆動炉まで来たなのは達を待ち構えていたのは  
またしても大量の傀儡兵たちだった

急いで構えようとするなのはユーノが止める

「防御は僕がやる、なのはは封印に集中して」

「・・・うん、いつも通りだね」

なのはの言葉にユーノは驚いて振り返る

「ユーノ君、いつも私と一緒にいてくれて、守っててくれたよね」  
笑顔で言葉を続けるなのは

《シーリングモード》

【レイジングハート】がシーリングモードに変形する

「だから戦えるんだよ、背中がいつも暖かいから」

なのはは魔方阵を展開、周りには桜色のスフィアが4つ、出現する

「いくよ、デイバインシューターフルパワー!!!」

通常のデイバインシューターより、スフィアが大きいフルパワー

「シュート!!!」

なのはは思いつき【レイジングハート】を振るい

その4つの誘導魔力弾を発射した

デイバインシューターは次々に傀儡兵たちを砕いていく

最後の傀儡兵を打ち抜いた、4つのデイバインシューターはそのまま  
動力炉を直撃、その元となっていたロストロギアを封印した

そのロストロギアを手になのはは振り返り、走り出す

「なのは!!!」

「行こう、ユーノ君!!」

「うん!!」

ユーノもなのはの言いたいことに気づき、走り出す  
二人は、地下への道を急いだ

達也の斬戟と魔法は確実に紫のロボットにダメージを与えていた  
だが、その直後にロボットの自己修復で回復をされていたのだった  
「蒼破刃!!」

【天龍】を振るい、蒼い魔力刃を放つ

魔力刃はロボットの腕に当たり、腕を吹き飛ばす

そんなことなどお構い無しに、数十のレーザーを放った  
達也は高速で動き、レーザーを掻い潜りながらかわした  
その間に、ロボットは腕を再生する

「やはり、あの再生能力は厄介だな」

《ですが、再生スピードは落ちています  
おそらく今回で再生は止まるかと・・・》

「ならば、一気に決めるぞ」

自らの体力にも限界が見えてきた為

達也は【天龍】を鞘に収め、抜刀の構えをとる

「“あんた”も望んでそんな姿になったわけでは無いだろう・・・  
その地獄から、今開放してやる!!」

その言葉と共に達也の身体が掻き消える

次の瞬間、達也はロボットの後ろに立っていた

【天龍】を抜いた状態で・・・  
「瞬天殺」

ロボットの身体が切り裂かれる

一瞬で何十にもおよぶ斬戟をくらったロボットの身体は、何十にも  
別れ

【天龍】の言った通りそこから再生することは無かった

《若、お見事です》

「ああ、ようやく完成した……」

【天龍】をもう一度、鞘に戻し

ロボットに振り返る達也

「こいつ……、”アルテマ・ウェポン”の入手先、調べる必要があるな」

《無理だとは思いますが……、そうそう簡単に尻尾を出すとは思いません》

「直接聞くさ、プレシアにな」

達也は新たな目的の為、庭園の奥へと進むのだった

最深部、アルハザードへ行こうとするプレシアに念話が聞こえてきた

『プレシア・テストロッサ

終わりですよ、次元震は私が抑えています

駆動炉も封印、貴女のもとには執務官が向かっています

忘れられし都、アルハザード……、そしてそこに眠る秘術は

存在するかどうかすら曖昧なただの伝説です!!!」

庭園の入り口辺りから碧の魔方陣と透明な二対の羽を広げ

次元震を抑えているリンデイの言葉にプレシアは反論する

「違うわ!!!アルハザードへの道は次元の狭間にある

時間と空間が砕かれたとき、その狭間に滑落していく輝き……

道は確かにそこにある!!!」

『そうね、それで？貴女はそこに行つて一体何をするの？

失われた時間を、犯した過ちを取り戻すの?』

「そうよ、私は取り戻す、私とアリシアの過去と未来を……

取り戻すのよ、こんなはずじゃなかった世界の全てを!!!」

次の瞬間、壁の一角が吹き飛ばされる

そこから出てきたのは額から血を流している執務官だった

「世界はいつだって、こんなはずじゃないことばかりだよ!!!

ずっと昔から、いつだって誰だってそうなんだ!!!」

さらに別の場所が吹き飛び、そこから達也が飛び出てくる





を守る

私が貴女の娘だからじゃない、貴女が私の母さんだから!!」

「下らないわ」

「え!?!」

プレシアは嘲笑し、デバイスを床に突きつける

紫の魔方陣が展開され、ジュエルシードがさらに強く発光する

「ちい、しまった!!!」

「まずい!!!」

ジュエルシードより放出される魔力が格段に上昇し、庭園を揺らす

「ああ!!!」

あまりの揺れにリンディが体制を崩し、発動していた魔法が解ける

『艦長!! 駄目です、庭園が崩れます!! 戻ってください!!』

この規模の崩壊なら次元断層は起こりませんから!!

クロノ君たちも脱出して、崩壊までもう時間がないの!!』

「了解した、達也!!!」

「ああ、大丈夫だ」

「フェイト・テストロッサ!!!」

「・・・」

「フェイト!!!」

クロノの呼びかけに応じないフェイト

その意識はプレシアのみに向いていた

「私は向かう、アルハザードへ、そして全てを取り戻す!!」

過去も、未来も、たった一つの幸福も!!!」

プレシアが叫ぶ

が、次の瞬間、足元の床が抜け落ちた

「母さん!!!」

「フェイト!!!」

駆け寄ろうとするフェイト、だが、アルフに抑えられた

プレシアとアリシアのカプセルはゆっくりと次元の狭間に落ちていく

「一緒に行きましょう、アリシア

今度はもう離れないように・・・」

二人はそのまま、次元の狭間へと飲まれていった  
フェイトはその光景を呆然と見詰める

「！！フェイト！！」

その頭上から岩が落ちてきた

『お願いみんな！！脱出、急いで！！』

エイミイの叫びが庭園内に木霊する

庭園は所々で爆発が起こり、もはやその原型を留めることはできな  
かった

t o b e c o n t i n u e d

宿命が閉じるときなの（後書き）

蒼破連刃「そうはれんじん」

蒼破刃の上位技

一振りで数十の蒼破刃を放つが

一つ一つの威力は蒼破刃と変わらない

空間制圧や一对多の状況で使用する

発動には一拍の溜めが必要

瞬天殺「しゅんてんさつ」

達也の父・蒼夜の編み出した奥義であり

達也が今回習得した超速の剣技

天翔による超高速移動から、抜刀による一撃

さらに数度斬りつける技

これを全て一瞬でやってのける為

相手は斬られた事に気付かない程である

アルテマ・ウエポン

時の庭園に現れた謎の機械兵

達也と【天龍】は何かを知っているようだ

庭園の傀儡兵はこいつが生み出したものらしい

イメージはFF8のアルテマ・ウエポン

無印編残り一話、更新頑張ります。

ユーザーでない方も感想を送れるようになっていきます。

一言でも良いので感想等送ってくれるとうれしいです。

なまえをよんで(前書き)

無印最終話、ようやく更新です。

## なまえをよんで

これは二人の少女と一人の少年の  
出会いと別れ、そして始まりの物語

## なまえをよんで

## 時の庭園

次元の狭間に飲み込まれたプレシアとアリシア

そしてジュエルシードと動力炉、それらの暴走によって

時の庭園の崩壊はもはや止められないほど進んでいた

『お願いみんな!! 脱出急いで!!』

エイミイの声が庭園内に響いている

それを遠くに聞きながら、フェイトはプレシアたちが落ちていった

次元の狭間を見つめていた

そこに庭園の崩壊によって巨大な岩が落ちてきていた

「フェイト!!!」

フェイトの身体を抑えていたアルフが叫ぶ

岩はフェイトたちの近くに落ち

その衝撃でさらに地面が崩れる

それによってフェイトとアルフがいた地面が割れ

フェイトの乗っていた場所が崩れ落ちていく

「ああ・・・」

「フェイトー!!! フェイト!!!」

アルフは腕を伸ばし何とか助けようとするが届かない

ゆっくりとフェイトの乗っている地面が落ちていく

その時、桜色の砲撃が天井を吹き飛ばした  
そこからはが飛び出してくる

「フェイトちゃん!!」

なのははフェイトの近くまで飛んでくるが、虚数空間の影響が魔法が不安定で上手く飛べない

これ以上落ちれば魔法が使えなくなる

「飛んで!!こっちに!!」

そう判断したなのはは必死に腕を伸ばし、フェイトに呼びかける  
「・・・」

フェイトはもう一度、プレシアたちが落ちていった場所を見つめ  
迷いを断ち切るように目を閉じた

そして、目を開けたフェイトは一気になのはまで跳躍した

二人の手が繋がる、二人は離さないようにお互いの手をしっかりと握り合った

しかし、ピンチは続く

「後ろ!!」

フェイトの声になのはが振り返る、そこには先程フェイトのそばに落ちてきたものと

同等の大きさがある岩が落ちてきていた

「っ!!【レイジングハート】!!」

《術式の構成が安定していません!!新たに魔法を使う事は不可能です!!》

咄嗟にバスターで吹き飛ばそうとするが、なのはも【レイジングハート】も

飛行魔法の制御でいっぱいであり

新たな魔法の発動は不可能だった

大岩がなのは達に迫る

なのはとフェイトはお互いを強く抱きしめながら目を瞑った

“ キンッ!! ”

と甲高いが心地よい音が聞こえた気がした

恐る恐る目を開けると、先程迫ってきていた大岩が四つに切断されて横を落ちていくのが見えた

「……ぎりぎり、間に合ったようだな」

上からの聞き覚えのある声になのはとフェイトは同時に視線を上げる

「達也（君）？」

【天龍】を持った達也がそこにいた

達也はなのは達と大岩の間に入り、大岩を十字に切り裂いたのだった

「急げ！！上に行くぞ、ユーノが転移の準備をして待っている」

《私たちがサポートします、お急ぎを！！》

「っっん」

三人は大急ぎでユーノたちが待つ地点まで飛んでいく

その間、何度か落下物により危ない目にあつたが

その度に達也が切り落としていった

「なのは！！」

「フェイト！！」

「達也！！」

上から順に淫獣、犬？、後のシスコン大魔王二号のちである

その声に導かれるようになのは達三人は合流し、すぐさまユーノが魔法を発動、六人はアースラへと転移した

同時刻

高町家 道場

海鳴市は前日から断続的な地震に見舞われていた

そして今、一際大きな地震に襲われ

美由希は恭也に抱きついて震えていた



恭也はそんな従兄妹な妹の態度に苦笑しながら地震が  
だんだんと収まってきていることに気がついた

その数秒後、地震は収まり、早朝の静けさが戻ってきた

「地震、止まったみたいだな」

恭也の言葉に美由希も顔を上げる

「え！？ホントだ」

「で？お前はいつまで抱きついていてる？」

「ふえ！！ご、ごめん！！」

慌てて飛びのいた美由希にもう一度苦笑し

恭也たちは朝のトレーニングを再開した

山の中腹に建つ、屋敷でも地震が収まったのを感じていた人物がいた

「どうやら、上手くやったようだな」

庭で佇む青年・策は暴走していた魔力も地震と共に収まったのを感じ  
安堵の息をつく

「お主人ちゃん？」

「ん？ああ、おはよう。ふたみ」

「うん、おはよう」

庭に出てきたふたみが隣に立つ

「達也、大丈夫かな？」

「この程度でくたばるような、やわな育て方をした覚えはない」

「ふふ、そうだな」

二人の間を風が吹きぬけていく

一日の始まりに相應しい、とても清々しい風だった

アースラ

「庭園崩壊終了、全て虚数空間へ吸収されました」

「次元震、停止します。断層発生はありません」

「了解」

アレックスとランディの報告を受け、リンディもようやく肩の力を抜く

「第三船速で離脱、巡航航路に戻ります」

アースラは次元の海をゆっくりと移動し始めた

一方その頃、医務室では負傷した局員の治療でみんなせわしなく動いていた

命に別状は無いのだが皆、かなりのダメージを受けている為だ

クロノたちも程度は低いとはいえ、怪我をしていたのでこちらに来ていた

だが、人手が足りない所為かクロノの治療は何故かエイミーがやっているが……

「なのはは怪我とかしてない？」

一緒に歩いてきていたユーノがなのはに聞く

「私は大丈夫だよ、達也君とユーノ君は？」

「僕は大丈夫」

「俺も特に怪我はしていないが……はあ」

なのはに視線を向けたままため息をつく達也に二人は首をかしげる

「どうかした？」

「なのは、右足を出せ」

「え!?!」( ; )

なのはが座っていた椅子のそばまで来た達也の言葉に

なのはは冷や汗を浮かべる

「……はい」( )

「俺は右足と言ったが」

「あう……」( T T )

左足を差し出したなのは達也は即効で切り捨てる  
もはや逃げ場はなかった

なのは泣きながら右足を差し出す  
「触るぞ」

達也は確認を取ってからなのは足に触れる  
その瞬間

(T□T)！！

なのは痛みを震えた

「やっぱり怪我をしているな、俺が気づかないとでも思ったか？」

「うう、達也君鋭すぎるよ」

「はあく、なぜすぐに言わなかった？」

「だって、あんまり酷い怪我じゃないと思ったから・・・」

「今、足をついただけで痛いだろうか？十分に酷い怪我だよ」

「僕が治療しようか？」

「ああ、たの・・・」

「ユーノ君、キミ治療魔法は得意かい？」

ユーノは突然、後ろからアースラの局員に声をかけられた

「え？あ、はい、一応結界魔導師ですので」

「じゃあ、こつちを手伝ってくれないか？」

命に別状はないが、怪我をしているやつが多くて人手が足りないん  
だ

局員の言葉にユーノは達也に一度視線を向ける

「こつちは俺がやろう、お前はあっちに行つてやれ」

「わかった、ごめんなのは」

「うん、私のことは気にしないでいいから早く手伝ってあげて」

「うん、じゃあ後で」

ユーノはそう言つと局員と一緒に怪我をしている人たちのもとへか  
けていった

「じゃ、こつちも治療するぞ」

「うん」

達也はなのはの足に軽い治癒魔法をかけて、慣れた手つきで包帯を巻いていく

「あれ？フェイトちゃんは？」

フェイトがいないことに気づいたなのはは近くで治療を受けていたクロノに居場所を聞いてみる

「アルフと一緒に護送室、彼女はこの事件の重要参考人だからね申し訳ないがしばらく隔離になる」

「そんな！あ、いたたた」（Ｔ　Ｔ）

「なのは、動くな。じつとしてる」

達也の言葉におとなしく治療を受けるなのは

「今回の事件は一歩間違えば次元断層さえ引き起こしかねなかった重大な事件なんだ、时空管理局としては関係者の処遇には慎重にならざるをえない、それはわかるね？」

「・・・うん」

真面目な顔をしてそんなことを言っているクロノだがその頭には包帯がりボン結びで巻かれていた、なんてシユールな光景だろう・・・

「エイミィ、やり直し」

「えー、こつちのほうが可愛いよ」

「可愛くなくていい！！まったくキミも達也みたいに綺麗に巻いてくれ」

「ん？達也君みたいに？」

その言葉にエイミィはなのはの足に包帯を巻いていた達也を見る  
包帯は一箇所も緩みのない完璧な状態で巻かれていた

「・・・うわー、上手いね達也君」

「今はそうでもないが、昔はよく怪我をしていたから自然とこういうのは上手くなるよ」

「キミもあれ位目指してやってくれよ」

「はーい、ちえー可愛かったのに・・・」

エイミィはしぶしぶクロノの包帯を巻き直し始めた

包帯を巻き終えた達也は立ち上がり

クロノの言葉でうつむいてしまったなのはに声をかける

「心配か？」

その声に反応し、なのはは顔を上げてこたえる

「うん、フェイトちゃん大丈夫かな？」

「立ち直るさ、きつとな」

なのはの隣に腰をおろしながら達也はそう呟いたのだった

次元震の余波が治まるまでは海鳴に転送はできないとの事で

なのはたちは転送できるようになるまでアースラの中で過ごすこととなった

そして、数日後

「クロノ君、フェイトちゃんはこれからどうなるの？」

今回の事件の解決に貢献したとして、なのはとユーノは

リンデイにより表彰され、賞状をもらった（達也は辞退した）

その後、廊下を歩いているときになのはは思い切って

フェイトの今後を聞いてみることにしたのだった

「・・・事情があったとはいえ彼女が次元干渉犯罪の一端を担っていたことは

紛れもない事実だ」

なのはの気持ちを考慮してか、クロノは重々しく口を開いた

「重罪だからね、数百年以上の幽閉が普通なんだが・・・」

「そんな！！」

なのはが声をあげる

それを押し留めるように達也が口を開いた

「なんだ“が”、という事は別の可能性もあるということだな？」

「え？」

達也は“が”の部分強調し、クロノに先を促す

「・・・状況が特殊だし、彼女が自らの意思で次元犯罪に荷担していなかったこともはっきりしている」

後は、偉い人たちにその事実をどう理解させるかなんだけど

その辺にはちよつと自信がある、心配しなくていいよ」

「クロノ君・・・」

「何も知らされず、ただ母親の願いをかなえる為に一生懸命なだけだった子を

罪に問うほど、時空管理局は冷徹な集団じゃないから」

「クロノ君でもしかして凄く優しい？」

「んな!？」

なのはが嬉しそうな顔でそんなことを言うのでクロノは思いつきり赤面してしまった

「ふふ」

その表情が面白かったのかなのは小さく笑う

「あはは・・・」

さらになのはの後ろでは

顔を引きつかせながら笑っているユーノと

静かに微笑んでいる達也の姿があった

三人の表情を見て、クロノは大急ぎで弁明を考える

「し、執務官として当然の発言だ!! 私情は別に入っていない!!」

「あはは、別に照れなくていいのに」

「照れてない!!」

必死に弁明するのが面白いのかなのはさらに声を出して笑ったのだった

「笑うな~~~~~!!!!!!」

とまあ、そんなことがあってさらに数日後

食堂でリンディに呼び止められたなのはたちは嬉しい知らせを聞くのだった

「次元震の余波はもうすぐ治まるわ、ここからはさんたちの世界になら

明日には戻れると思う」

「よかつた」

明日には帰れると聞き、なのはは表情を和らげる

「ただ、ミッドチルダ方面への航路はまだ空間が安定していないの  
しばらく時間がかかるみたい」

「そうなんですか・・・」

しかし、次の情報はユーノを少なからず落胆させるものだった

「数ヶ月か半年か、安全な航行ができるまでそれくらいはかかりそ  
うね」

「そうですか・・・。その、まあうちの部族は遺跡を探して流浪し  
ている人ばかり

ですから急いで帰る必要もないといえませんが

でもその間、ここにずっとお世話になるわけにもいかないし・・・」

「あら、そんなこと気にしないでいいわよ

貴方たちには今回は、本当に助けてもらったんだから、私たちが  
責任をもって貴方を部族のところまで送り届けるわ

それまではずっとここにおいても問題はないわ

というか、私が艦長権限で問題にさせないわ」

「凄い艦長ですね、いろんな意味で・・・」

達也が苦笑を浮かべながら言う

「でも・・・」

「だから気にしないの、人間持ちつ持たれつよ」

「・・・わかりました、お世話になります」

「よろしい」

そこへ、食堂に眠そうなエイミィを伴ったクロノが現れた

「あんなに寝てるからだよ」

「だって、ずっと徹夜だったんだもん。ふぁ〜、まだ眠い・・・」

呆れながら周りを見渡したクロノは食堂の片隅で話すリンディたち  
を見つけた

リンディたちは話しに夢中でこちらには気づいていないようだった

「一つ、聞いてもいいですか？」

「ええ、何かしら達也君？」

「あの人、プレシア・テスタロッサが目指していたアルハガードと  
いうのは？」

「・・・失われし都・アルハガード、ユーノ君は知っているわよね」

「はい、聞いたことがあります」

旧暦以前、前世紀に存在していた空間で

今はもう失われた技術がいくつも眠る土地だって」

「だけど、とつくの昔に次元断層に落ちたって言われてる」

ユーノの話のバトンを受け取ったのはクロノだった

「どうも」

その後ろには食事を載せたトレイを持ったエイミもいた

「あらゆる魔法がその究極の姿に辿り着き、その力を以ってすれば  
かなわぬ望みはないとさえ言われたアルハガードの秘術・・・

時間と空間を遡り、過去さえ書き換えることができる魔法、

失われた命をもう一度蘇らせることができる魔法・・・

彼女はそれを求めたのね」

「はい」

「でも、魔法を学ぶ者なら誰でも知っている

時間を遡ることも、死者を蘇らせることも決してできないって」

「だから、その両方を望んだ彼女は御伽噺に等しいような伝承にしか  
頼れなかった・・・、頼らざるを得なかったんだ」

「でも、あれだけの大魔導師が自分の命さえかけて探してたんだから  
彼女はもしかして、本当に見つけたのかも知れないわ

アルハガードへの道を・・・。今となってはもうわからないけどね」  
皆、食事をするのも忘れ話を聞いている

だが、達也は一人考えこんでいた

「どうかした達也？」

それに気づいたユーノが声をかけてくる



「いや・・・、ちよつとな」

「？」

その光景を見ていて少し重い話になってしまった  
と思つたリンディは勤めて明るく声をだす

「あは、ごめんなさい、食事中に長話になつちやつた

冷めないうちにいただきましょう」

それに続くクロノの言葉は場の空気を読めない“KY”な一言だつた

「なのはや達也には多分、アースラでの最後の食事になるだろうし」

「うん・・・」

なのはが寂しそうな声をあげる

クロノよ、せつかく盛り上げようとしているのに別れの話題を出し  
てどうする(。口。)ノ

とまあ、そんな“KY”のフォローの為、エイミィさんが一肌脱いで  
で差し上げようじゃ

あ~~~~りませんか( ; )

「お別れが寂しいなら素直にそう言えばいいのになあ

クロノ君てば照れ屋さん」

「な、な、何を!？」

「なのはちゃん、達也君、ここにはいつでも遊びに来て良いんだか  
らね」

「はい、ありがとうございます」

なのはは本当に嬉しそうな表情で応える

「エイミィ!!アースラは遊び場じゃないんだぞ!!」

「まあまあ、いいじゃない。どうせ巡航任務中は暇を持て余して  
るんだし」

「か、艦長まで!!」

クロノの必死の抵抗も空しく、なのはたちは立ち入り許可を貰うの  
だつた

そしてやはり今日も今日とて弄られキャラなクロノ君でした

「達也君、少しお話良いかしら？」

食事後、自分に与えられた部屋へ戻ろうとした達也に  
リンディが声をかけてきた

「来ると思っていましたよ」

「そう、じゃあ私の部屋で・・・」

そう促されリンディの執務室に来た二人は  
向かい合ったソファ―に腰をおろした

「ここなら誰に気兼ねなく話ができるわ」

そう言ってお茶を一口飲むリンディ

例によってリンディ茶（別名リンディスペシャルである）だ

「・・・プレシアが目指した場所、海鳴で起こった16年前の事件に  
クライド・ハラウンやレティ・ロウランと共に立ち会ったあなた  
なら気づいていたのではありませんか？」

「・・・そうね、でも信じてほしい

私たちはあの事件のことを一切喋っていないわ」

「ええ、大丈夫です

おそらくはあの事件の首謀者の資料が何かを参考にしたのでしょ  
うでなければ、あんな自殺まがいの方法は取らないはずですよ

達也も一口お茶（こちらは自分で入れた普通のお茶）を飲む

「プレシアがああ場所へ辿り着けたとして、彼女の願いはかなった  
と思う？」

「・・・答えはNOです。

あそこはアルハザードではありませんからね

あそこは海鳴の魔力の中心点ではない

膨大な魔力が集まる場所ではありませんが

死人を生きかえらしたり、時間を遡ることなどできませんよ」

「それもそうね」

「それ以前に、それができたとしても

“あの人”がそのようなことに力を使わせるわけありませんよ」

「確かにその通りね。“あの方”は海鳴に利益が出ることしかやら

ないだろうし

「・・・全ては彼女の勘違い、ね」

「ええ、あそこにあるのは無限ともいえる魔力だけです  
魔力があってもその使い方が

わからないんじゃないやあ意味がありません」

「それでも、その無限の魔力を求める者だっている  
その様な者たちからあの場所を守るのも貴方たちの  
使命なのでしょう」

「ええ」

達也はお茶を飲み干した、それが話の終了の合図だった

「今回はありがとう、貴方たちのおかげで被害を最小限に  
食い止めることができたわ」

リンディは立ち上がり右手を差し出す

「俺は自分のやりたいようにやっただけですよ」

達也も立ち上がり右手を出し、しっかりと握手をした

「またこの近くで事件が起こった場合、力を貸してもらえるかしら  
？」

「時と場合によりますが、あなた方の頼みなら喜んで  
それでは、俺はこれで」

リンディの言葉に達也は苦笑しながら答え外に向かって歩き出す

「転送は明日の明朝になる予定なの  
それまでゆっくりと休んでいて

あ、そうそうそれと、あなたの

“お爺様”や“お婆様”たちに  
よろしく伝えておいて貰えるかしら」

「・・・ええ、ちゃんと伝えておきますよ」

達也はそう言つと、そのまま部屋を出て行った

リンディが余つたお茶を飲みながら呟く

「“陽菜”、“蒼夜君”、貴方たちの息子は良い子に育っているみ  
たいね」

リンディは誰もいない部屋でそんな呟きをしている自分に苦笑したのだった

翌日、転送ポートになのはと達也

そして見送りに来たリンディやクロノ、ユーノにエイミィの姿があった

「それじゃ、今回は本当にありがとう」

「協力に感謝する」

リンディとクロノは順に声をかけながら握手を求めてきた

なのははにっこりと笑ってみせる

「・・・」

クロノは頬を染めて硬直してしまった

「!!!」

いつまでもなのはの手を離さないクロノを押しつけて

今度はユーノがなのはの手を握る

もちろんその際、クロノの足の小指の部分を思いっきり踏むのも忘れない

しかもなのはに見えないように素早くかつスマートに

さらに痛がるクロノを自分の身体で隠す完全犯罪っぷりをみせる

クロノはあまりの痛さに声が出ないのも幸いした

なのでなのははこの一瞬で何が起きたかまったく理解していないだろう

「なのは、僕にもお礼を言わせて

なのはには本当に助けてもらったね、ありがとう」

そんなことはお構いなしにユーノは話を進める

「ううん、私の方がいっぱい助けてもらったから

ありがとうって言うのは私のほうだよ」

「そっか、達也もありがとう」

笑顔で言うなのはに微笑を返し、ユーノは達也に向き直る

「気にするな、俺は俺のやるべきことをやったただけだ」

「それでも、僕たちが助かったことには変わりはない  
だからありがとうだよ」

「ふっ、お前も存外頑固者だな」

「お互い様だろ？」

「違うない」

二人は力強く握手を交わす

「いつつ・・・、後で覚えているユーノ」

後ろからそんな声が聞こえたがユーノは無視することにした

「フェイトさんの処遇は決まり次第連絡するわ

大丈夫、決して悪いようにはしないから」

「はい、お願いします」

なのははリンディに頭を下げてお願いした

そこへ、それまでゲートの調整をしていたエイミーから声がかかる

「じゃ、二人とも、そろそろいいかな？」

「「はい」」

二人は少し離れた位置へ移動する

「それじゃ」

「またねクロノ君、ユーノ君、エイミーさん、リンディさん」

二人の身体が光に包まれる

次の瞬間、二人はアースラから転送され

自分達のいるべき場所へ戻っていったのだった

## 海鳴市 臨海公園

二人が転送されたのはいつもの公園だった

「戻ってきたな」

「うん」

なのは深呼吸をし、懐かしい空気に身体をならす

「帰ろっか、達也君」

「ああ、学校に行かなきゃならないからな」

「うん!!!」

穏やかな風が吹く道を二人は歩き出す

戻ってくる日常、今まで通りだけど

今までとは少し違う日常が始まる

夕方

巽の屋敷

「　　以上が、今回の騒動の報告になります」

畳の引かれたその部屋で達也が話を終える

策にふたみ、その他の三人もその部屋にいて

達也の話を聞いていた

「なるほど、それでお前はそのプレシアの狙いは

“あの場所”だと言いたいわけだな」

「はい、先ほども言いました通り

五十年前のあの事件、それが

リンディさんの前では言いませんでしたが

十六年前の事件

そのどちらかの情報が漏れていたのだと思います」

策の問いに達也が答える

「懐かしい名前だな、十六年前のあの子か」

「ええ、よろしく伝えてくれと言われましたよ」

「そうか、大体はわかった

報告はもういいから、お前も休め」

「・・・“あの方”への報告はどうします？」

「俺がやっておくから大丈夫」その必要はないよ」っ！！」

策の言葉をさえぎるように年老いた女性の声が聞こえた

それと同時に出入り口の襖が開き、一人の老婆が入ってきた

「静様しずか、こちらに来ていたのですか？」

「外が少し騒がしかったものでね、様子を見に来たのさ」

皆が驚いた顔をする中、策が聞いたことに

何でも無いように応える老婆・静

「話は聞いていたから報告の必要はない

何もなく終わったんだ、それでいいだろう

達也、よくやったね」

「いえ、たいしたことはありません

頑張ったのはなのは達ですよ」

やさしい笑みを浮かべる静に

達也は苦笑しながら応えた

「そうかい？いつかその子に会ってみたいものだね」

「・・・いつか連れてくるかもしれないですね」

(このままあいつらと一緒に過ごしていくなら必ず)

そんなことを考えながら達也は疑問に思っていたことを口にする

「それよりも、こんなところへ出てきて大丈夫なんですか？」

「少しくらいなら構わないだろう」

私だって年がら年中“あんな所”にいたくは無いさ」

「いや、それが静様の役目でしょうに」

静の応えに達也はまたも苦笑しながら突っ込む

そんな和やかな雰囲気のまま、報告を終えた達也は

自分のマンションへと帰路についたのだった

夜

高町家　なのはの部屋

「はわ〜、お家のベットも久しぶり〜」

なのははお風呂から上がりパジャマに着替えると

一目散に自分の部屋まで戻り、ベットに飛び込んだ

「アリサちゃんとすずかちゃんも元氣そうでよかった」

浮かんでくるのは昼間の学校でのこと

久しぶりに会った親友達は目に涙をためて出迎えてくれた  
それだけ心配していたのだろう

まあ、アリサはその後すぐに二人のノートを

タダで見せる見せないで達也と言いつ争っていたが・・・

ちなみに結果はアリサの圧勝、達也は学校帰りに

翠屋でケーキ（何故かなのはの分まで）を奢らされていた

「達也君にとつては散々だっただろうけど・・・」

《あれは確かに可哀相でした

特にすずかさんの食べっぷりは凄かったですね》

傍らに置いてあった【レイジングハート】が同意する

「うん・・・」

確かに昼間の奢りで一番ケーキを食べたのはすずかだった

しかも達也に対して何処となく黒いオーラを出していた

達也もそれは承知の上だからだろうが、すずかの要求に素直に応じ  
ていた

なのははそんな二人の間に何か見えない絆のようなものがあるよう  
に思えた

（あれ？なにか胸が・・・？）

なのはは胸がちくりと痛んだ気がした



《……ター……マ……タ……？マスター？》

「え！？な、なに？【レイジングハート】？」

胸の痛みの理由を考え込んでいたなのは【レイジングハート】の自分を呼ぶ声に慌てて意識を戻した

《……いえ、少しお疲れのようですね

今日は早めにお休みなつたほうがいいと思います》

「……うん、そうかもね

【レイジングハート】もお疲れ様、ゆっくり休んでね」

胸の痛みも疲れの所為だと思つて

なのは早々に眠ることにした

家にいる安心感があるからだろう

寝ると思つたとたん意識は睡眠へと落ちていった

「お休み、【レイジングハート】」

《はい、お休みなさいマスター、良い夢を》

そんなパートナーの声が聞こえた気がしたが

なのは意識はすでに眠りに落ちていたのだった

数分後、なのはの部屋に一人の人影が入ってきた

「あらあら、電気をつけっぱなしで寝ちゃつたのね」

その人影、桃子は安らいだ顔で眠るなのはを見て

微笑みながらカーテンを閉め、なのはに布団をかけてあげた

「お疲れ様、よく頑張つたわね」

最後にそう言つてなのはの頭を撫でると

電気を消して部屋を出て行った

巽の家への報告も終わって

達也が家に帰ってきたのは夜も遅くなった時間だった

「疲れたな・・・」

《そうですね、お風呂に入って早く寝たほうがいいですよ、若》

「ああ、そうする」

達也は早速お風呂場に行き、お湯を沸かし始める

その間に思い出すのは昼間のこと

思わずため息をついてしまった

《若？》

「いや、ちょっと昼間のことを思い出してな」

《昼間？・・・ああ、翠屋のケーキですね

そつえば、さすがさんが物凄い量を食べてましたが

若、なにも言わなかったですね》

「あのな、顔は笑っていないながら背後に物凄い黒いオーラを出している相手に

『達也君、私、翠屋のケーキが食・べ・た・い・な・？』なんて言われて

逆らえると思うか？」

《思いませんね、逆らった時点でどうなるかはわかりきってますか

ら》

「ミイラになってるな」

《まず、間違いありませんね》

「・・・」

思わずその光景を洒落にならないくらい鮮明に想像して無言になってしまった

「風呂、入ってくる」

《そうですね、それがいいですよ！！あ、あははっはははは・・・

》

【天龍】の奇妙な笑いに見送られ達也は脱衣所へと足を進める

（まあ、いつも心配かけているからな  
今回はこれで許してもらえた事を喜ぶべきか・・・）  
達也はそんなことを思いながら服を脱ぎ  
ちようどいい温度になったお風呂に身体を沈めるのだった

数日後

高町家　なのはの部屋

朝、なのはの部屋で携帯が鳴り響く

なのははそれを手に取るうとして失敗、床に落ちた携帯に  
再度手を伸ばし、やっとの事で音を止めることができた  
まどろみの中、二度寝を決め込もうとするのは

しかし、そうは問屋が卸さなかった

再び携帯が鳴り響いたのだった

床に落ちたままだったそれを手に取り

携帯の画面を見ている

時空管理局と書かれていた

「わああ!!!」

一度切ってしまったことを悔やみつつ、急いで通話ボタンを押すな  
のは

「は、はい!!!なのはです!!!」

通話口から聞こえてきたのは数日前に別れたちっこい執務官の声だ  
った

『おはようなのは。実はキミに伝えておきたいことがあってね』

その次に聞こえてきた言葉はなのはをさらに驚かせるものだった

「え!!!本当!?!」

『ああ、さつき正式に決まった』

フエイトの身柄はこれから本局に移動、それから事情聴取と裁判が行われる』

「うん!!」

『フエイトは多分、いやほほ確実に無罪になるよ。大丈夫』

『クロノくん、あれからずう〜と証拠集めしてくれただからね』

『エイミー!!そういう余計なことは言わなくていい!!』

いきなり始まった夫婦漫才になのはは小さく笑う

「ありがとう、クロノ君!!」

どうせだったら自分も乗ってみようと思った

何せ今は自分もテンションが高いのだ、少しぐらいふざけたって許される

『ん、ん』

クロノが頬を染めて喉を整えるのが簡単に想像できて

なのははさらに笑ってしまった

『調書と裁判、その他諸々は結構時間がかかるんだ』

で、その前にフエイトがキミ達に会いたいと言ってるんだ』

「フエイトちゃんか!?!?すぐに行く、場所は!!!?!?」

『落ち着いてなのはちゃん。いつもの公園にフエイトちゃんたちを』

転送するから、そこまで来てほしいんだ』

「はい、すぐに行きます!!」

『待て、なのは』

こちらから何度も連絡するのは面倒だ

達也はキミが連れてきてくれ、家は近いんだろ?』

「わかった、すぐに行くから待って!!」

そう言っただけ早く携帯を切り、着替え始めるなのは

全ての用意を整え、達也の家に着いたのは十分後

寝室まで行くと、久しぶりの休日で一日ゆっくりしようとして

熟睡している達也の姿があった

まず普通に達也を起こそうとするのは  
しかしここで、なのはは自分のしようとしていることが  
実はとても恥ずかしいことなんじゃないかと思ひ始めた  
先日見たドラマの影響で、なのはの中では  
ベットで寝ている男性を起こす＝恋人  
みたいな方程式ができてしまった為だ  
「はう~~~~」

(ど、どうしよう？フェイトちゃんが待っているのに~~~~) (T  
T)

と、そこでなのはは家を出る前に桃子に渡されたものを思い出した

・・・回想・・・

「あら？なのは、こんなに朝早くに何処に行くの？」

急いで階段を下りてきたなのはに桃子が声をかけてきた

「た、達也君を起こしに行くの！！」

なのはは急いでいた為に要点を省いて桃子に伝える

しかし、その省き方が悪かった

桃子はともいっい笑顔を浮かべ

「そう、じゃあこれを持って行きなさい」

と、二つのアイテムを渡してきた

「これは？」

「これは寝ている人を起こす伝説のアイテムよ

もし何らかの理由で普通に達也君を起こせないようなら使いなさい」

さらにもう一つのアイテムを出し

「この使い方は言わなくてもわかるわね？」

「うん、ありがとうお母さん、急ぐからもう行くね！！」

三つのアイテムを受け取るとなのはは大急ぎで家を出て行った

・・・回想終了・・・

ちなみに桃子からなのはは達也を起こしに言ったと聞いた父と兄は  
「ゆるさ〜ん！！！！」

と大激怒、すぐさま達也の暗殺に取り掛かろうとしたが

「なのはの邪魔をしたら、私、実家に帰らせてもらいますからね」と、桃子の一言で士郎が撃沈

それでも強行突破をしようとする恭也

しかしそれを士郎が全力で邪魔をする

「父さん、なのはの為に犠牲になつてくれ!!」

「できるか!!」

「なのはと母さん、どっちが大切なんだ!!」

「どっちも大切じゃ、バカ~~~~!!」(T T)  
と泣きながら死闘を繰り広げたそうだ

閑話休題

なのはは桃子より預かりし伝説の道具を取り出した

チャララチャツチャツチャ(ドラえもん風)

「フライパンとおたま……」

なのははなにか釈然としないものを感じながら  
とりあえずフライパンとおたまを打ち鳴らした

「秘技!!死者の目覚め!!」

カンカンカンカンカンカンカン!!

「どわっ!!な、なんだいったい!?!」

効果は抜群だ

達也は驚き回りをキョロキョロと見渡している

その視線がなのはの位置で止まり

まだ寝ぼけ眼で声をかけてくる

「何やってんだ、お前?」

「え、いや、その……」

「ちょっと待て、その前にそれはなんだ?」

達也はなのはの持つフライパンとおたまを指差しながら尋ねる

「こ、これは伝説のアイテムだってお母さんに渡されて……」

「……ちなみにどうやって中に入った?」

「こ、これまたお母さんから達也君の家の合鍵を渡されて……」

そう、桃子がなのはに渡した三つ目のアイテムとは

達也の家の合鍵だったのだ

「桃子さん、どうして貴女が俺の家の合鍵を持ってるんですか・・・

・「——orz——」

なにやら打ちひしがれている達也の様子に

なのはの恥ずかしいといった

気持ちはどこかへ飛んでいったようだった

なのはは、この頃、なんかおかしいな〜と思いつつ

当初の目的を思い出し、達也に説明した

「フエイトたちが公園にいるから会いに来いということだな」

「うん」

「わかった、着替えてすぐ行こう・・・。その前に」

達也は傍らに置いてあった【天龍】に視線を向ける

「【天龍】、お前なら俺がなのはの気配では起きないことを知っているはずだな？」

何故起こそうとしなかった？」

《そんなの簡単なことじゃないですか!!》

こんな面白そうないイベントにわざわざ止める必要は・・・

い、いえ、私もスリープモードに入っていたため気づか無かったのです!!》

「ほお~~~~~。その映像、永久保存か？」

《当然じゃないですか!!》

この映像は若の成長記録として・・・、あゝ》

達也はおもむろに【天龍】を掴むと窓を開け

振りかぶって思いっきり投げた

ものすごいスピードで吹っ飛んでいく【天龍】

さらに、カラスがその【天龍】を受け止め

自らの巢へと持って帰るのだった

《なんと!!だが、たかだか鳥類なんか私にかかれば!!

あ、ちよっと待って、助けて、若~~~~~!!》

「よし、行くぞなのは」  
「た、達也君!!」【天龍】が!!」  
「なのは、フェイトに合う時間が無くなるぞ?」  
「・・・早く行こう、達也君」

【天龍】のことは無かった事とし、二人は公園に急ぐのだった

## 臨海公園

フェイトは風を肌で感じながら海を眺めていた  
その後ろにはユーノ、クロノ、アルフの姿もある  
「フェイトちゃん!!」  
「あっ!?!」

不意に響いた声にフェイトが振り向けば  
なのはが小走りに近寄ってきていた  
その後をゆっくりと歩く達也の姿も見える  
「あんまり時間はないみたいだけど  
しばらく話すといいと思うよ

僕たちは向こうにいるから」  
なのはが目の前まで来るとユーノがそう提案してきた  
「「ありがとう」」

二人の言葉を聞いて、離れていくユーノ  
その後を追って、クロノとアルフも離れていった  
それを目で追っていた二人は共に微笑む  
そこへゆっくりと歩いてきていた達也が声をかけてくる  
「いい顔をするようになったな、吹っ切れたか?」



「まだわからない、でもこのまま終わるのは嫌だった  
だから新しいほんとの自分を始めてみようと思ったんだ」  
その言葉に達也も優しく微笑む

「そうか。・・・お前は一人じゃない

どんなことがあっても皆がいる、少なくとも

俺やなのはお前の味方でいてやれる

それを忘れるなよ」

「うん、ありがとう達也」

「俺が言いたいのはそれだけだ

あとはお前ら二人でゆっくり話せ」

もう一度微笑むと達也はクロノたちのほうへ歩いていった

「もういいのか？」

「ああ、俺が伝えたいことは伝えた

あとは二人で話させてやりたいからな」

クロノからの第一声に達也はよどみなく答える

まるでそうするのが当たり前だというように

「ありがとう」

「ん？」

その言葉にアルフの方を見れば

深々と頭を下げていた

「なんだ？藪から棒に」

「あなたのおかげだ

あんたがフェイトとなのはを引き合わせてくれたから

フェイトに笑顔が戻った。だからありがとう」

「・・・そういうことにしておくか」

「なんだかいつぱい話したいことあったのに

変だね、フェイトちゃんの顔を見たら忘れちゃった」

「私は・・・」

そつだね、私もうまく言葉にできない  
だけど、うれしかった」

「え？」

「まっすぐ向き合つてくれて」

「うん、友達になれたらいいなつて思つたの

でも、今日はもうこれから出かけちゃうんだよね」

「そつだね、少し永い旅になる」

二人の表情が沈む

それを振り払うかのようになのはは声を上げる

「また会えるんだよね」

「・・・うん」

フエイトはなのはを安心させるように微笑みながらうなずく

「達也に言われて気づいたんだ

少し悲しいけどやつとほんとの自分を始められるから

・・・来てもらったのは返事をするため」

「え？」

「君が言つてくれた言葉・・・、『友達になりたい』つて

「うん、うん！！」

なのはは身を乗り出して続きを促す

「私にできるなら、私で良いならつて

だけど私、どうしていいかわからない

だから教えてほしいんだ、どうしたら友達になれるのか・・・」

「・・・簡単だよ」

「？」

「友達になるのすごく簡単・・・、名前を呼んで

始めはそれだけで良いの。君とか貴女とか

そついうのじゃなくて、ちゃんと相手の目を見て

はつきり相手の名前を呼ぶの」

なのはは笑顔でそつ答える

「私、高町なのは。なのはだよ」

「なのは・・・?」

「うん、そう!」

「な・のは・・・」

「うん」

「なのは」

「うん!」

なのははフェイトの手を取る

「ありがとう、なのは」

「う、ん・・・」

なのははこらえきれず、涙を流す

「なのは」

「・・・うん!」

「君の手は暖かいね、なのは」

少しわかったことがある、友達が泣いていると

同じように自分も悲しいんだ」

「フェイトちゃん!」

「ありがとう、なのは」

今は離れてしまっけど、きっとまた会える

そうしたらまた君の名前を読んでも良い?」

「うん、うん!」

「会いたくなったらきつと名前を呼ぶ」

だから、なのはも私を呼んで

なのはたちに困ったことがあつたら

今度はきつと私がなのはたちを助けるから」

二人はお互い、泣きながら自分の気持ちを伝え合った

「あんだのこの子はさ」

なのははほんとにいい子だね

フェイトがあんなに笑ってるよ」

アルフも精神リンクの影響か

涙を流しながら達也に話しかける

「ああ、俺もあいつに・・・」

あいつの優しさに救われた」

達也は二人の姿を見ながらやさしく微笑んでいる

「そろそろだな

あの二人を離れ離れにするのは忍びないが・・・」

クロノは席を立ち、なのはたちの方へ足を進めた

「時間だ、そろそろ良いか？」

「・・・うん」

クロノの言葉に振り返ったフェイトが答える

「フェイトちゃん!!」

なのはは自分の髪を止めてある白いリボンを取り外し

フェイトに差し出す

「思い出にできるもの、こんなしかないんだけど・・・」

「じゃあ私も」

フェイトも自分の黒いリボンを取り、なのはに差し出す

二人はお互いにリボンを交換する

「フェイト!!」

「え？わぁ!!」

フェイトは振り返り、突然飛んできた物をあわてて受け止める

それは黒に金字の腕時計だった

「俺からの餞別だ、パーツを取り替えられるやつでな

お前に合うようにちよつとカスタマイズしといた」

それは達也が身につけていたモノだった

「俺たちは離れていても同じ時間を共有してる、ってな

「で、でも私は達也に渡すものがない・・・」

「いらぬ、といたいたんだが

それはお前が納得いかないか・・・」

「うん」

「なら、今度会うときでいい

そのとき、フェイトが良いと思うものをもらおうかな」

「達也……、わかった

今度会ったときに絶対」

フェイトは力強くうなずく

「なのは、達也きつとまた……」

「うん、きつとまた」

「ああ、必ずだ」

「そうだ、なのは」

フェイトはなのはの近くにより耳打ちする

「私、負けないよ」

「へ？」

なのはは何のことかわからないといった顔をする

フェイトは少しだけ達也に視線を移し

それから笑って、なのはから離れていった

転送の魔法陣が展開される

なのはと達也はそれを少し離れたところから見送る

フェイトが小さく手を振る

二人も手を振り返す

フェイトたちは光に包まれその場を後にした

公園にはなのはと達也の二人が残される

「なのは」

「うん!!」

二人は歩き出す、新しくできた友といつか再会できる日を目指して

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

なまえをよんで（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

達也の独白？（前書き）

お待たせいたしました。

サブストーリー第一話 達也編です。

かなり短いショートストーリーですが  
ぜひお楽しみください。



## 達也の独白？

夜

山の中腹にある湖

達也は腰の【天龍】に手を添え、抜刀の構えをとっていた  
風が吹き、葉っぱが辺りに飛び交う

「シッ！！」

抜刀し、次の瞬間には達也は数メートル移動していた  
その背を流れていった葉っぱが何重にも分かれ  
風に飛ばされていった

達也の独白？

《お見事です。

ほぼ、完成と言って良いのではないのでしょうか？》

「まだまだだ、まだ改良の余地はある」

【天龍】の問いに達也は静かに答える

「だが、完成に近づいたのは間違いない

その点に関して言えば、あの“アルテマ・ウエポン”には  
感謝しなければならぬ

小さく苦笑し、【天龍】をしまい、近くの岩に座り体を休める  
達也は夜の少し冷たい風を感じながら、“時の庭園”にいた

“アルテマ・ウエポン”のことを思い出していた

《……あの個体は以前現れた“あいつ”と比べて  
どうでしたでしょうか？》

「……比べ物にならんさ、今回の奴は瀕死体だった

おそらく“あいつ”よりも以前に作られた個体で失敗作  
破棄するところをプレシアに渡されたんだろう」

《やはりそうでしたか・・・あの程度で倒せるのなら  
蒼夜が負けるはずありませんからね・・・》

達也は【天龍】の呟きを聞き、静かに目を閉じ  
その“瞬間”を思い出す。

忌まわしき、あの“瞬間”を・・・

「・・・あれは、俺の所為だ

俺が・・・俺があの時ちゃんと戦えていたのなら

父さんが“あいつ”に負けることはなかった・・・」

《若・・・》

「あれは俺の罪・・・ただの奴あたりに過ぎないかもしれないが

“あいつ”は俺たち家族をバラバラにした原因を作った

だから“アルテマ・ウエポン”を許すことはできない」

俯き、静かに自分に言い聞かせるように言葉を発する達也

《・・・》

【天龍】は言葉をかけられず、しかしどうにかしようと思考する  
数秒考え、行動に移る

【天龍】に魔力が集まり、達也の腰から離れ、目の前で浮遊する

一際、大きな光を放ち、精霊体の【天龍】が現れた

《・・・五年前、あなたは四歳だった

誰もあなたを責めたりはしませんよ》

「俺が、俺を責めるさ」

《ならば、私があなたを許します

ですから、あなたも少しは自分を許してください》

一瞬、呆ける達也

「・・・くくく、なんだそれは」

こらえきれなくなったのか笑いだす達也

しかし、顔をあげた達也の心は少しははれたようだ

「・・・いつになるかわからないが努力はしてみることにするよ」

立ち上がり、苦笑しながら答える達也

《そうですね、あんまり自分を責めるとなのはさん達や

“あの娘”も心配してしまいますよ》

その言葉を聞いた達也が星空を見上げながら静かに答えた

「・・・もう五年になるのか、元気にしているだろうか」

達也が思い浮かべるのはある家族、かつてずっと一緒にいることを疑わなかった、初めて守ろうと思った少女だった

「ところで、この間カラスに連れ去られた後、何処に行ってたんだ？

ずいぶんボロボロ戻ってきていたが・・・」

達也の問いを聞いたとたん、【天龍】は固まった

そして俯き、黒いオーラを出しながらプルプルと震えている

《あのトリは次に会ったら容赦しませんよ、ふふふふ・・・》

## 回想

カラスに捕らえられた【天龍】は抜け出そうと暴れていた

《離しなさい！！鳥類風情が！！じゃないと、どうなっても知りませんよ！！》

しかし、悲しいかな、待機フォルムの今の状態では、ただ騒いでいるだけだった

「アホーアホー」

そんな【天龍】をあざ笑うかのように鳴くカラス

ついに【天龍】がキレた

《上等だゴラ、格の違いを教えてやる！！》

空気中の魔力を集め、精霊体になる【天龍】

その光に驚き、【天龍】を離してしまうカラス

その隙を見逃さず、カラスに体当たりを仕掛ける【天龍】

「カアー！？」

突然の反撃にカラスは一目散に逃げ出す



追いつかれてしまう【天龍】

カラスはそんな【天龍】に容赦なく爪や嘴で攻撃を加える  
そして、一番過激に攻撃をしてくるのは、やはり先ほど【天龍】を  
さらったカラスだ

《ちよつとやめなさい!!》

ああ!! 魔力がー！ー！ー！ー!!》

ついに魔力が切れ、待機フォルムへと戻る【天龍】

極端に遅くなった【天龍】をカラスはその爪で挟み込んだ

《え~~~~と・・・、許してくれない?》

できるだけ優しく声をかける

カラスはニイと厭らしく嗤うと【天龍】を離れた

ホツとする【天龍】だが、それも一瞬のことだった

下に回り込んでいた一羽のカラスが【天龍】を翼で打ち上げる

返ってきた【天龍】を最初のカラスが爪で全力で蹴り上げた

《おぼえてなさいよ~~~~~~~~!!》

まるで悪役の退場シーンのように、空にキランと光って消えていった

回想終了

《あの後、私がどれだけ苦労したか・・・

おぼえてなさいよ!! あの腐れガラスども!!》

一人(一匹?) ブツブツと恨み言を言っている【天龍】を一瞥し

達也は冷や汗をかきながら声をかけた

「ほどほどにしておけよ・・・」

しかし、その言葉が聞き入られることが無いことは周知の事実だろう

《ブツブツブツブツブツブツ・・・》

いつまでもブツブツ言っている【天龍】に見切りをつけ

達也はゆっくり自宅へと歩き出した

一時間後

《あれ、若?》

【天龍】が気づいた時には周りには誰もいなかった  
《最近、私の扱ってひどくないですか?》  
泣きながらそんなことを呟いた【天龍】であった

t o b e c o n t i n u e d

達也の独白？（後書き）

どうだったでしょうか？

後半の【天龍】の回想はカラスに攫われた後の

【天龍】の話が見たいと妹に言われて書いてみました

感想・ご意見等お待ちしております。

## なのはの特訓（前書き）

お待たせしました、サブストーリーなのは編です。

と、言っても、コミックを再編集しただけですが・・・



## なのはの特訓

平凡な小学三年生

兼ミッドチルダ式魔導師

高町 なのは

の朝は早い

今日はそんななのはの一日を追ってみましょう

なのはの特訓

朝 4:30

高町家 なのはの部屋

この時間に起床する

これが毎日の習慣です

《あはようございます。マイマスター》

「うん、おはよう

【レイジングハート】」

朝 5:00

巽の山 登山道

その後、屋外で魔法の練習

今日は広域防御魔法を練習しているようです

「守護する盾

風を纏いて鋼と化せ

すべてを阻む祈りの壁

来たれ我が前に・・・」

朝食の時間まで、約2時間のトレーニング

心身ともに充実した時間を過ごします

「そんな硬い障壁を張られたら

なかなか、攻撃を通すのは難しいな」

「達也君、おはよう」

「ああ、おはよう」

なのはの幼馴染で魔法戦闘の師

巽 達也

なのはよりもずっと前から魔法に関わっており

戦闘技術も高い為、たまにはあるが

この早朝の訓練に付き合ってもらっている

「さあ、今日も始めるぞ？」

「うん、よろしくお願いします。」

そして、家に帰って家族と朝食

両親・兄・姉

4人の家族には魔法のことは内緒

家族との会話を楽しみながら

ゆっくりとご飯を食べる

しかし、一見のんびりしたこの朝食も実は

身に付けた【レイジングハート】が

なのはの魔力に強い負荷をかけています

それにより、日常の一挙手一投足に

魔力を消費するという

いわば“魔導師養成ギブス”

的な効果を発揮します

並の魔導師であれば

立ち上がることすら困難な負荷の中

なのは平然と日常生活を送っています

本人曰く

「最初はちよつと辛かったけど、今はそんなに・・・」  
とのことで

通学や体育の時間などは大抵この状態です

「なのは、はい、お弁当」

「ありがとー、お母さん!!」

じゃ、いつてきまーすっ!!」

#### 私立聖祥大付属小学校

ここではなのはもごくごく普通の女の子

「おはよ〜」

「なのはちゃん!」

「おはよー」

なのはの親友

月村 すずかやアリサ・バニングス

そして

「おはよう」

「うん、おはよう達也君!」

達也と一緒に授業を受けています

もちろん授業は真面目に聞いていますが

実はこの間も訓練をしています

2つ以上のことを同時に思考・進行させる

“マルチタスク”は戦闘魔導師には必須のスキル  
高速移動・回避をしながらの攻撃

防御をしつつ次の魔法を発動

これらは日頃の訓練量が明確に現れます

【レイジングハート】が送信する

仮想戦闘データを元に、心の中でイメージファイト  
飛翔・索敵・攻撃・防御魔法を使用しての空戦は  
高度な戦略と高速な思考を必要とします

「デイバインシューター」

《デイバインシューター》

なのはの周りから発射したデイバインシューターは  
仮想敵を捕らえ、それぞれが爆散する

なのはの戦闘スタイルは多方向から襲撃する

誘導操作弾と一撃必殺の魔力砲の二種類

【レイジングハート】からのイメージは  
限りなく実戦に近い経験をなのはに与え

なのははそれを胸に戦闘経験を積んでゆきます

《プランD - 391クリア

レベルアップ、プランFへ移行します》

「うん・・・、お願いね

【レイジングハート】」

《・・・いえ、ランクアップには

師匠の許可が必要なようですよ、マスター》

「ふえ？」

【レイジングハート】の言葉とともに

イメージ空間になのはとは別の人影が現れる

「次のレベルに行く前に俺と模擬戦してみないか？」

教室でそっと達也の方に顔を向けてみる

達也もなのは方に目を向けていた

『負けないよ』

『俺も負けるつもりはないぞ』

二人はイメージ空間で向かい合う

《始め!!》

なのはは開始の合図とともに距離を開ける

「【レイジングハート】!!」

《ディバインシューター》

なのはの周りに三つの誘導弾が現れ、達也に殺到する

「あまいな」

その全てを達也は紙一重でかわしていく

「まだまだ行くよ!!」

さらに誘導弾を増やし、達也に当てようとするが

それでも達也に当てることはかなわない

「どうした、なのは？その程度か？」

「なら!!」

なのはは誘導弾同士をぶつけ、魔力爆発をおこす

周りが煙で包まれ、達也の視界を奪う

「いつけー!!」

《ディバインバスター》

そこになのはの砲撃が迫る

「くっ!？」

それをギリギリでかわす達也、しかしなのはの攻撃は

ここでは終わらなかった

「そこ!!」

なのはは一つだけ残しておいた魔力弾で達也を追撃する

「・・・【天龍】」

《スライゴジン 粹護陣》

達也が手を魔力弾へと向ける

魔法陣が出現し、魔力弾を防いだ

「お見事、試験は合格かな」

「本当！？」

「だが・・・」

達也は【天龍】を抜き放ち、“龍視”を発動させる

「立ち止まるな、的になるぞ」

《ドラグーンブレード》

小刀型の魔力弾がなのはに迫る

「！！！」

《プロテクション》

なのはは突然の攻撃に反応できず

【レイジングハート】が防御魔法を発動する

しかし、達也の魔力弾はプロテクションに弾かれず

そのまま、突き刺さり、魔力爆発を起こし

先ほどとは逆に、なのはが煙に包まれた

「まだ教えたことはなかったな

この魔法に防御は無意味だ」

《デイベインシューター》

達也の言葉を遮るように、煙の中から魔力弾が飛び出した

それを達也は慌てることもなく、先ほどより

正確に、紙一重でかわし

さらに【天龍】で魔力弾を切り裂いていく

「魔力の制御があまい、今後は魔力弾のコントロール練習

を入れて、練習メニューを組んでいこうか」

ようやく煙から抜け出したなのはは

「デイベインバスター！！」

【レイジングハート】の切っ先を達也に向け

砲撃魔法を放った

「舞うは影」

砲撃は寸分の狂いも無く達也を捕らえた・・・はずだった

「残すは屍かはね」

なのはの背後に達也が現れ、なのはに斬りかかる

「ざんえいっせん斬影一閃」

なのははその奇襲をかわすことができず

【天龍】によつて切り裂かれたのだった

「うにゃ~~~~~!!!!」

突然叫び声をあげたなのはに

驚いたクラス中の視線が集まった

「……ど、どうしたの、高町さん？」

先生が顔を強張らせたまま、なのはに話しかける

「……あ、イエナンデモアリマセン」

なのはは片言で答えながら席に着き、達也を睨んだ

達也は我関せずというように窓の外を見ていたのだった

と、まあこんな感じで達也に教えを乞いながら

得意な砲撃系や苦手な機動系の練習を

ぐったりするまでやり

お風呂と睡眠で完全回復

以下、日曜日以外これを繰り返しています

そして……

「でね、スターライトブレイカーの発射シークエンスを

少し変えて、試射してみたいんだけどいいかな？」

《了解しました。ですが、達也様に内緒でいいのですか？》

「これは、達也君を倒すためでもあるんだから

教えるわけにはいかないよ、次こそは勝つんだから!!!」

“スターライトブレイカー”とは

周辺魔力を集束して放つ

なのは最大の放射計魔法である

《それで、どのように変えるのですか？》

「うん・・・、あれって発射が遅くて高速戦では使えないから」

《やはり、高速化ですか？》

「ううん、逆！！」

チャージタイムを増やして、威力を大幅アップ！！」

《は？》

「最大威力の強化を最優先にしてみたの・・・、できる？」

《・・・わかりました、やってみましょう》

結界を展開し、発射準備に入る

《スターライトブレイカー、スタンバイレディ

カウント9・8・7・6》

「むむ・・・！」

これは結構スゴイかも！」

《3・2》

「スターライトお・・・」

《1・0》

「ブレイカーっ！！！」

《スターライトブレイカー》

その収束砲はなのはの作った結界をいとも簡単に破壊し

周りに甚大な被害をもたらした

《ご、ごめんなさいマイマスター、お怪我はありませんか？》

「ふええ・・・、な、なんとか」

自分で撃つたのにも関わらず、ボロボロになったなのは

しかし、彼女の悲劇はこれだけでは終わらなかった

「単純魔力砲で広域結界を完全破壊・・・」

お見事だと言っておこう、だが・・・」

「ひー！！」



なのはがその声を聞き、恐る恐る振り向くとそこには、なのはの様子を見に来て収束砲に巻き込まれ、ボロボロになり額に青筋を浮かべながら良い笑顔を顔に張り付けた達也が居た

「これだけ派手なことをやってくれました

アフターケアが大変なことになりました

そのお礼と言ってはなんですが

その有り余った体力を有意義に使わせてあげましょう」

「た、達也君？ いったい何を？」

「俺特製、地獄の体力強化メニューだ

安心しろ、すべて終わるまで家には帰さないから」

「私運動苦手だから安心できない……!!」

「ははは、だからこそやるんじゃないか」

達也はなのはの首根っこをつかみ、連行の姿勢を取った

「い……や……!!」

高町 なのは

自爆と達也の特訓（おしおき？）により

魔力・体力ともに0

全治3日

こんな風に時々騒がしくなりながらも

なのはの日々は過ぎてゆきます

親友との再会に向けて

昨日よりもっと強い自分であるために

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## なのはの特訓（後書き）

斬影一閃「ざんえいいつせん」

達也が使用するカウンター技

魔力で分身を作り出し、回避及び高速接近後  
斬りつける

魔力探知を防ぐ為、分身後は殆ど魔力を使わず

斬戟も魔力強化はしていない

分身時「舞うは影」

斬戟時「残すは屍「かばね」

粹護陣「すいごじん」

達也の防御魔法、シールド系

掌をかざし、六花の魔方陣を出現させ攻撃を弾く

## フェイトの試験（前書き）

お待たせしました更新です。

今回はほぼオリジナルはありません

ご了承くださいませ（ ）

## フェイトの試験

「では、受験番号1番の方、氏名と出身世界をどうぞ」  
「ミッドチルダ出身、フェイト・テストロッサです！  
こちらが使い魔のアルフです」  
「よろしく」  
「なのは、お元気ですか？」  
「実は今日、私は試験を受けます」

## フェイトの試験

「使い魔持ちのAAAクラス魔導師か・・・、でも、ずいぶんおとなしそうな子ね」  
「いい子ですよ、素直でまっすぐで」  
時空管理局提督レティ・ロウランの言葉にエイミィが答える  
「ま、リンデイの推薦ならハズレはないわね。  
実力のほどを拝見しましょ」

『さて・・・、ぼちぼち始めようか、心の準備はオツケー？』  
「はいっ！」

## 時空管理局嘱託魔導師認定試験

これに受かると異世界での行動制限がぐっと少なくなるし  
リンデイ提督やクロノのお手伝いができるようになる

「行くよ、バルディッシュュ！」

《イエス、サー》

目標、一発合格！

『じゃ、まずは儀式魔法の実践から！』

「はいっ！」

「筆記試験はほぼ満点、魔法知識も戦闘関連に関しては修士生クラス」

レティは成績を確認しながらモニターでフェイトの試験の様子を見学する

「儀式魔法も天候操作に長距離転送フィールド形成・・・と、あなたの推薦も納得いくわね」

「でしょう」

その隣でフェイトの推薦人であるリンディも、試験を見守っていた

『儀式魔法4種、無事確認・・・と、はい、おつかれさま！

儀式実践終了だよ、1時間休憩だからお弁当食べて、ひと休みして

ね』

「はいっ」

エイミイの指示で二人は試験会場の木陰でお弁当を広げる

「でもさフェイト、試験はやっぱなのはと達也の影響？」

アルフが骨付きの肉を啜くわえながら尋ねると

フェイトもパンに手を伸ばしながら答える

「ん・・・、そうかもね。

なのはも向こうでがんばってるんだし、達也にも早く追いつきたいから、私もがんばらないとなってる」

主人の以前とは違うその態度に、嬉しくなったアルフは笑顔になる

「うん！負けないようにがんばろう！」

『さーて、お弁当と休憩は終わったかな？

最終試験は実戦訓練だよ！

いま試験管がそっちに向かうから、がんばって戦ってね』

「はい」

エイミイから再度指示があり、試験の準備を整える二人

「試験官って誰だろうね？」

「誰だろう？」

『僕だよ』

その言葉とともに二人の前に魔法陣が出現し、誰かが転送してくる

「クロノ！？」

そこに現れたのは黒衣に身を包んだ小人執務官だった

「だから誰が小人だ！！」

「！！ど、どうしたのクロノ！？誰に言ってるの！？」W(TOT)

W

突然叫びだしたクロノに驚いて、フェイトは涙目になりながら問う

「僕のことを小人だ、小さいだというやつがいるんだ！！」

「いや、あんた小さいだろう？」

「なんだと！！」

アルフが余計なひと言を言い、さらにクロノを怒らせる

「だから僕はいつも言ってるんだ！！この背は遺伝なんだ！！」

こんな遺伝子を持っていてる奴を連れてこい！！

僕が直々に粛清してくれる！！」

そんな暴走するクロノを止めたのは翠色の砲撃だった

「く、空間跳躍砲撃！！」

フェイトとアルフが驚き固まっているところに、一つのモニターが現れる

『クロノ、このままじゃいつまでたっても試験が終わらないわ』

「す、すいませんかあさ・・・、提督」

ポロポロになりながら答えるクロノにリンディはとても清々しい笑顔  
顔を浮かべ

『うん、よろしい、後でお仕置きするとして、いまは試験を進めなさい』

「え！！ちよ！！」

有無を言わず、リンディはモニターを閉じる

後に残ったのは呆然とするフェイト&アルフと、待ち受けているで

あろう悲劇に絶望するクロノだけだった

「気を取り直して試験を続行する、まあ、身内といえど手は抜かないから、安心しつつ、気を抜かず、全力でかかってくるといい」

急に試験官の顔に戻ったクロノだが、先ほどのやり取りを見ていた二人には、それが滑稽に見えて仕方がなかった

『フェイトちゃんの単身戦闘力を視るから、アルフは見学ね』

「えー!?!」

続いて聞こえたエイミイの声にアルフは抗議の声をあげる

「君の試験や連携戦は、またあとでやるから」

「へーいつ」

まだ少し渋い顔をしながらアルフは試験の邪魔にならないように離れていく

それを見送った後、自らのデバイスである【S2U】を起動したクロノはフェイトに声をかける

「さてフェイト、準備は？」

「・・・いつでも!」

それに応えるように、フェイトは【バルディッシュ】を構える

（クロノは私より上のAAA+ランク、訓練でも勝てたことはほとんどないけど・・・、だけど勝たなきゃ!）

「ランサーセット」

《ゲットセット》

フェイトがフォトンランサーをセットすると、それに合わせるようにクロノはステインガースナイプを準備する

二人の魔力弾はお互いを相殺する

（勝って試験に合格するんだ、あの時とはもう違う、迷わない、負けない!）

そこから先に動いたのはフェイトだった、ミッドチルダ式の魔術師では珍しい接近戦を仕掛け、クロノと切り結んでいく

数合したあと、距離が開いた所で、二人は同時に砲撃魔法を放つ



《サンダースマッシュャー》

《ブレイズキャノン》

先ほどと同じように相殺する砲撃魔法、しかしその際におきた爆風でクロノは思わず顔を腕で覆ってしまった

そこをフェイトは見逃さなかった

（次弾チャージ前にバツクを取った！

当たらなくてもここから崩せば・・・！！）

クロノの背後にまわり【バルディッシュ】を振り上げるフェイトだが、その攻撃が当たることは無かった

フェイトの体に突然、魔力の鎖が巻きついたためだった

「バインド？そんな・・・、いつ!？」

「ブレイズの発射前にね、死角に回り込まれた時の保険だよ」

驚くフェイトにクロノは冷静に答え、フェイトに近寄る

「近接の読み合いと罠の看破が今後の君の課題だな、勝負ありだ」

【S2U】がフェイトの眼前に向けられ、試験は終了した

「じゃあ、これで個人戦試験は終了だな」

「うん・・・、合格・・・したかったな・・・」

座り込み、落ち込んでいるフェイトの姿を見て、クロノはフェイトが勘違いをしていることに気づく

「・・・フェイト？

もしかして“負けたら不合格”とか思っていないか？」

「・・・え？」

クロノに言われたことの意味が分からず、顔が呆けるフェイト

そんなフェイトに助け舟を出すためか、エイミーの声が聞こえてきた

『戦闘技術を見るだけだから、別に勝敗は関係ないよ？』

「そうなの？じゃあ・・・!!」

「いまの戦闘だってそんなに得点は低くない、試験は続行だ」

その言葉を聞き、フェイトの顔は見事に輝きを取り戻した

「なに・・・？っつかりやさん？」

「少しね」

リンディとレティは微笑ましくフェイトを見つめる

「さ、次はアルフとの連携戦をみるよ」

『はいっ！』

そんな管制室にフェイトの明るい声が響いた

『魔法技術も使い魔との連携もほぼ完璧、戦闘も攻撃に傾倒しすぎ  
だけどもまあ合格点、囑託魔導師としては申し分ないかな。』

うっかりやさんは今後気をつけてもらうとして・・・、おめでとう  
フェイトさん。

これをもってAAAランク囑託魔導師認定されました、認定書の交  
付の時に面接があるから、あとはそれだけね』

「はい！ありがとうございます！」

レティより合格通知を受け、フェイトとアルフは抱き合って喜ぶ  
『じゃあ、帰っておいで！今夜はお祝いだ！』

エイミイの言葉を聞いて、帰路につこうとした三人にもう一度声か  
かけられる

『クロノ、あなたはすぐに私の執務室に来なさい、楽しいお仕置き  
が待っているわよ』

それを聞き、クロノは石のように硬直した

達也となのはへ

あの日、君たちに言った通り

私は少しずつ本当の自分を始めています

今度会う時に、ちゃんと胸を張って会えるよう

私なりに、自分なりに、がんばっています

追伸

きつと近いうちにそちらに会いに行けます

リボンと腕時計を眺めながら、二人のことを考えるフェイト

「いやだ

~~~~~!!

母さん!!それだけは勘弁してくれ

~~~~~!!

そんなフェイトにこのような叫びが聞こえてきたのが、それを空耳  
と思うことにして

地球に住む友人に送るためのビデオレターの作成に取り掛かったの  
だった

「あれ、今回僕何もやってないよね!？」

そんなことをほざいているエロイタチがいたとかいなかったとか・

・(笑)

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## フェイトの試験（後書き）

感想等お待ちしております

## アリサの旅行（前書き）

まずは謝罪を

遅くなつて本当に申し訳ありません

今回はアリサ編ですが、アリサがまったく活躍しておりません

ごめんなさい

その代わりと言つてはなんですが、今回はとある作者さんのキャラが登場しています

うまく書けているかどうかわかりませんが、どうぞお楽しみください  
い

## アリサの旅行

ジェット機内 スイート席フロア

「……………どういうことだ？」

そこにいるのは不機嫌な表情を隠そうともしない達也

「ご、ごめんなさい、達也君」「

必死に謝り倒している、なのはとすずか

「い、いつまでも不機嫌な顔してんじゃないわよ」「

バツが悪そうに、だが強気な態度のアリサ

「アハハハハ……………」

そしてそんな子供たちを苦笑しながら見守る、アリサの両親と執事の鯨島の七人だけだった

アリサの旅行

早朝

達也の部屋

突然だが時間は遡る

そこにはベットの上で熟睡中の達也

そこに忍び寄る怪しげな三つの影

「起きないわね？」

「うん、前に来た時もなかなか起きなかつたんだ」

達也に近づき、起きないことを確認するアリサとなのは

「何？あんた起こしに来たことあるの？」

アリサは聞き捨てならないことを聞いたとなのはに詰め寄った

「え、あ、いや、こ、この前ちょっと用事で・・・」

詰め寄られ、まずいことを言ったと後ずさりながら考えるのは

「詳しい話を聞かせてもらおうわよ」

「にゃ!?!い、いまはそんなことしている場合じゃ無いんじゃないかな?」

詰めるアリサ、逃げるなのは

そのまま、りあるおにごっこ(アイズさんの作品より借用しました>m(\_\_\_\_\_)m<)

を始めようとする二人を止めたのは、今まで静かに成り行きを見守っていた最後の一人

「二人とも、黙って」

「ひっ!?!」

真っ黒いオーラをその背に背負うずかだった

その迫力に寄り添ってガタガタと震える二人

「飛行機の間も迫っているから、余計なことをしないで早く行く」

言いながら達也の部屋を歩き回り、下着類などをバックに詰め込み旅行の用意を完了させる

そのあまりの手際の良さに呆然とする二人

「アリサちゃん?なのはちゃん?」

いつまでも動こうとしない二人に声をかけるはずか

「わ、わかってるわよ。さめじ「あ、待ってアリサちゃん」・・・何よすずか?」

さっそく達也を運ぶため、執事の鮫島を呼ぼうとするアリサをすずかが止める

「うん、ちよっと待ってて」

すずかは達也の傍らに近付くと、近くに置いてあった青い宝石を手に取り目を瞑る

「え!?!」

その行動になのは声をあげる



「どうしたのよなのは？あれは達也がいつも身に付けている宝石でしょう？」

「にゃ！う、ううん何でもないよ、ただすずかちゃんは何をしているのかと思ってる……」

なのははずすかの持つ宝石がただの宝石ではないことを知っていたそれをすずかが手に取ったことに驚いていたのだ

「確かにそうね、すずか、いったい何をしているのよ？」

「……いつも達也君が身に付けているものだから、大事なものだと思うんだ

だから、持って行ってあげようと思って」

アリサの問いに答えながら、達也の首にその宝石をかけるすずか

「待たせてごめんね、鮫島さん呼んで達也君を運んでもらおう」

「え、ええ……、鮫島」

すずかの態度に釈然としないものを感じながらも、自らの執事を呼び出す

「お呼びですか、アリサお嬢様？」

「待たせて悪かったわね、達也を運んでちょうだい」

「わかりました」

アリサに呼び出され、部屋に入ってきた執事の鮫島はアリサの指示を受け

起こさないように慎重に達也を担ぎあげる

達也は起きる気配がなく、ぐっすりと熟睡している

「……ほんとに起きる気配が無いわね、大丈夫かしら？」

「そうだね、達也君なら私たちが近づいただけで起きてしまいそうだけだね？」

起きない達也に疑問を浮かべる、アリサとなのはの二人

それに答えたのは、やはり達也の荷物を持っていたすずかだった

「達也君は確かに人の気配で起きることはあるんだけど、親しい人の気配は例外で

近づいてきても起きることは無いんだよ、だから私たちが近づいて

も起きなかつたんだね

それに普段から睡眠が深いみたいだから、ちょっとのことじゃ起きないらしいよ・・・

あれ？どうしたの二人とも？」

一気にそこまで説明したすずかだが、アリサとなのはが自分を凝視していることに気づいて首をかしげる

「いや、ずいぶん詳しいわね、すずか」

アリサのそんな言葉になのはがうんうんと首を縦に振っている

「え！！あ、その、達也君が前に自分でそう言っていたのを聞いたんだよ、うん！！」

さ、さあ早く行かないと飛行機に間に合わなくなっちゃうよ、行くうー！！」

「あ！！待ちなさいよすずか！！」

素早く部屋を出ていったすずかをアリサが追いかける

なのははそれだけじゃ納得できず、言いようのない違和感を感じてその場に佇んでいた

（本当にそれだけかな？いくら達也君が寝るのが趣味？で私たちに気を許していたとしても

さすがにあれだけやったら起きると思うんだけど・・・、それにすずかちゃんが【天龍】を

持つて何かやっていたようだけど・・・）

「なのはお嬢様、我々も行きましようか？」

「え！？あ、はい！！」

そんななのはに声をかけたのは、達也を担いでいる執事鮫島

それによって、思考を中断したなのはは慌てて部屋を出ていった

鮫島は苦笑を浮かべながら、その後を追いかけて部屋を出るのだった

「で、俺はなんでこんなところにいる？説明をしてもらおうか？」  
相も変わらず不機嫌そうな達也は、状況説明を要求する

「別に難しいことはないわよ、うち（バニングス家）がちよっとアメリカで用事があつて

夏休みなんだし、丁度いいから一緒に旅行しようっただけよ」

顔をそらしたまま答えるアリサ、残りの二人もうんうんと顔を上下させる

その答えを聞いた達也はまだ若干不本意そうだが、いつまでも怒つていてもしょうがないと思つたのか

ため息を一つ吐くと、一番の問題点をあげる

「それはわかつた、だが俺はそう簡単にあそこ（海鳴市）から離れられないんだ」

「あ、それなら大丈夫だよ、許可は取つてあるから、ね、なのはちやん」

「う、うん」

「なんだと……」

すずかの言っている意味がうまく理解できなかった達也は顔を引き攣らせながら聞き返す

「私のお母さんが達也君の実家に行ったみたい、それでこれを渡してくれって」

そう言いながら一通の手紙を差し出すのは

それを震える手で受け取り、内容を確認する達也

そこには達也の祖父の字で、旅行を許可するといった内容が書いてあつた

そして、その下には女性らしい丸っこい字で

“許可取っちゃつた（＾ｖ＾）テへ”と書いてあつた

まず間違いなく桃子さんの字であつた

(あの人は~~~~~!!)  
これで空港について、すぐにとんぼ返りといった方法が取れなくなりここに達也を囲う包囲網が完成していたのだった

アメリカ 空港エントランス

とりあえず飛行機に乗せられた以上、簡単に帰ることは出来ない為今回は諦めて、素直に旅行に参加することにする

「すずか」

到着後、達也はなのは達より離れてすずかに声をかける  
どうしても確認しておきたいことがあったからだ

「今回のこと、仕組んだのはお前だな？」

「・・・うん」

気まずそうに頷くすずか

「理由は？お前がこれほど強引に物事を進めるとは珍しいんじゃないか？」

「こつしないと達也君は今回の旅行参加しなかったでしょう？」

「・・・そんなことは」

「温泉旅行の時は海鳴から近い場所にあったから参加していたけど今回はアメリカ、巽の当主から許可が出ていたとしても、達也君は参加しなかったよね？」

達也の言葉を遮り、すずかは語り始める

「普段からそうだけど、達也君は頑張り過ぎだよ。」

授業中寝てるのは、夜寝れてないからでしょう、夏休み中もずっと休んでないよね？」

「……………」

「さすがの言葉に達也は返す言葉が無い、すべて事実だからだ」

「今回のことは達也君に休んでほしかったんだよ。私だけじゃなくて巽の人たちもね」

「……………だからって【天龍】に幻覚魔法を使わせて、寝てる俺を無理やり連れてくるか？」

《私もさすがさんの考えに賛成でしたから、若を休ませるために一肌脱がしてもらいました》

二人に割って入るように【天龍】がさすがを援護する

達也がいくらなのは達に気を許していたとしても、鮫島の気配や体を抱えられたりすれば

さすがに起きてしまう、そこですかが取ったのが【天龍】を使う方法

幻覚魔法で達也の感覚を鈍らせ、眠りが覚めないようにしたのだ

「……………今の私は、こんなことくらいでしか達也君を助けてあげられないから……………」

「……………気にするなど言っているだろう、お前は戦う必要なんてない」

「さすがが俯きながらの言葉に、達也は今回のさすがの行動の真意がわかった」

「達也く〜ん、さすがちや〜ん、どうしたの〜？」

遠くからなのは呼ぶ声が聞こえる

顔を向けるとなのはとアリサの両親、鮫島が集まっていた

「はあ、わかったよ、今回のことは感謝しているんだ」

「だから、この休みを目一杯楽しむことにする、それでいいか？」

「……………うん」

いつまでも話を続けるわけにはいかない、なら開き直って楽しむことにした達也

「ゴメンネ、達也君」

「気にするなど言っているだろう、今までも俺だけでやってこれた」

んだ、これからも俺一人で十分だよ」

顔を上げないすずかの頭に手を当て諭すように言う達也にすずかは黙って頷いた

「さあ、行こう」

達也がなのは達の方へ歩き出す、すずかもそれについて歩き出した

「おや、アリサは何処に行ったんだ？」

達也たちが合流した後、アリサの父が呟く

それに答えたのは母親だった

「さつきおトイレに行くって言っていたじゃないですか」

「なんだ、まだ帰ってきていないのか、長いなぐ……グハア！！」

「セクハラですよ、あなた」

夫の発言に裏拳を鳩尾に入れて黙らせる母親

「そ、そういう意味で言ったんじゃ……」

「問答無用です」

にっこりと笑い夫の言い訳を却下する母親

それを苦笑いで見守るその他の面々

ほのぼのとした雰囲気は次の瞬間、脆くも崩れ去った

アリサは足を挫いてしまい、その場から動くことができなかった

周りは火に包まれている、突然の衝撃と音が響いたと思ったら一瞬でこのような状態になっていた

「いったい何なのよ！！」

近くに人影はない、助けを呼べない状況はアリサを不安にさせる

「あいつら大丈夫なんでしょうね、早く合流しないと……」

無理をして立ち上がり、なのは達が待っていたであろう方向へ歩き

出す

少し進んだところでもう一度衝撃が起こった

その衝撃でアリサの真上の天井が崩れる

呆然と見上げることにできないアリサ

その背を突き飛ばした存在がいた、その反動で体が反転し、尻もちをつきながらその人物が確認できた

自分と同じ年くらいの少年が見えた、アリサ自身は天井の範囲から逃れたが

そのかわり少年がその範囲に入っていた、このままでは無事ではすまない

しかしアリサにはどうすることもできない、悲鳴をあげる暇すらなかった

天井は少年の上に落ち、アリサは思わず目を瞑っていた

その一瞬、影が通り過ぎるのが見えたが、アリサには確認する余裕はなかった

「あ、ああああ、あああ」

呆然と天井の破片を見つめ言葉が出ないアリサ、そこに優しい声がかげられる

「今は何も考えるな、ゆっくり休め」

声とともにアリサの体が淡い光に包まれ、心地よい眠気が訪れる

アリサは顔をあげ、自分を抱える人物を見つめる

その人物はアリサの知っている者だったが、その腕に抱かれ、安心したのか

眠気にあらがうことができず、アリサは夢の世界へと誘われた

「ギリギリ、間に合ったか・・・」

一息つき、眠ったアリサを抱えるのは達也

他のみんなは大した怪我も無かったので、その場に残し、達也はアリサを探しに出たのだが

見つけたアリサは危機的状况に立たされていた

思わず“天翔”を使用して、アリサと近くにいた少年を助け出した  
アリサは何が起こったかわかっておらず、そのままにすれば勘違い  
でトラウマを植え付ける危険性があったため  
ひとまず落ち着くまで眠ってもらった

「爆発は酷いが、余り大きな被害は出ていないようだな

しかし、こんなところまで来てこんなことに巻き込まれるとは・・・  
、何か憑いているかな？」

《私なら憑いていますか？》

「笑えないよ、【天龍】」

アリサと気絶している少年を見つめ、ため息をつく達也だった

## 病院 個室前

あの後、すぐに病院に運ばれたアリサと少年

幸い、アリサはすぐに目覚め、精神状態も良好で状況確認も済んで  
いる

少年が助かったことは伝えた、アリサも安堵し、今は個室で休ませ  
ている

「失礼します」

「どうぞ」

ドアをノックし、個室に入る

達也が部屋に入ると同い年くらいの少年がいた

「はじめまして、君が僕を助けてくれた人かな？」

「そういうことでもいいのかな？俺は巽 達也だ、よろしく」

「うん、僕は六道 立花、よろしく」

二人はお互い名乗り握手をする



「僕と一緒にいた女の子は大丈夫だったかな？」

「ああ、足を少し挫いているが、問題は無いよ」

「そっか、よかった」

それから二人は少しの間雑談する

するとドアがノックされ、立花が入室を促すと一人の女性が入ってきた

「母さん!!」

立花が驚愕の表情を浮かべる

「何よ、随分驚くわね、私が来たことがそんなに以外？」

「だって、あの母さんだぞ」

「私だって一人の母親よ、大事な一人息子が“事件”に巻き込まれているのに

仕事なんかしていられるわけじゃない」

ベットに歩み寄り立花を抱きしめる女性、立花は顔を真っ赤に染めている

「あら、この子ったら照れてるの、最近生意気になってきていたと思ったら、かわいいところも残ってたわね」

達也をほっといて繰り広げられる親子漫才、どうしようか考えあぐねていると、女性がようやく達也に気づいたのだった

「えーと、あなたはどちら様？」

「あーごめん、無視する形になっちゃって、母さん、彼は異 達也君、空港で僕を助けてくれたんだよ」

「あら、そうなの!? ごめんなさい、私は六道 司ろくどう つかさこの子の母親よ、よろしくね」

女性・司は立花を離し、達也に駆け寄り、抱きしめる

「は、はあ、よろしく願います?」

抱きかかえられ、困った顔をした達也がそこにいた

「じゃ、俺はこれで帰ります」

しばらく話をしてから、達也はそう告げる

「あら、もう帰るの？」

「ええ、待っている奴らがいますので」

「・・・また会えるかな？」

扉から出ようとする達也を立花の声が引き留める

「・・・俺はいつでも海鳴市にいる、もし来ることがあったらまた会おう、友達として歓迎するよ」

「ああ、わかった！絶対、行くから！！」

再会の約束をし、達也は部屋から出る、すると司も一緒に出てきていた

「今回は本当にありがとう、息子を助けてもらって感謝してもしきれないわ・・・」

「気にしないでください、俺が助ける前に立花には俺の連れを守ってもらいました、そのお礼です」

頭を下げる司を達也は制し、顔をあげさせる

「今回のこと、何か裏があるとみて間違いないですか？」

唐突に呟いた達也の言葉に司は何食わぬ顔で答える

「何のことかしら？」

「俺を試していたでしょう？今回の件はまだ“事件”か“事故”かは発表されていない

なのにあなたは“事件”といった、あなたは何か情報を掴んでいるそして、俺がそれに気づくかを試していた、違いますか？」

「そんなこと言ったかしら？ゴメンネ、私も立花がこんなことになつて動揺しているみたい」

頬に手をあて、困ったように謝る司、これ以上の追及は無理とふみ、達也は踵を返し歩き始める

「まあ、俺たちには関係の無いことでしょう、それじゃ“ロクドウ

”さん、俺はこれで・・・」

「そう？ありがとう、立花と一緒にそのうちそちらにお伺いするか、また会いましょうね」

「ええ、それではまた」

達也はそれ以上振り返らず廊下の奥に消えていった

「・・・さすがは“あの人”達の息子、巽の血を引く守護者と言ったところね、“あの子達”にも見習わせたいわ

・・・そうね、あの子にも合わせてみようかしら」

苦笑しながら一言吹き、病室に入る司

その顔は何かを企んでいるように笑っていて、それを見た立花が引いていたのはこの家族だけの秘密である

さすがに今回の件に巻き込まれ、すぐに帰るのだろうと思っていた達也だが

その思惑は外れ、以外に元気なアリサ、空港がしばらく厳戒態勢になる

といった理由から、アメリカで数日過ごすことになったのは別な話である

そんな中で

「あ、ありがとう」

「どうした？急に？」

「な、なんでも無いわよ」

と、言った会話がアリサと達也の間で交わされたのも、別の話である

t o b e c o n t i n u e d

## アリサの旅行（後書き）

今回御出演いただいたのは

アイズさんの作品“りあるおにごっこ”より

六道親子（立花&司）でした

アイズさん、こんな感じで大丈夫でしょうか？

さて、うちのすずかにはちょっと特殊な設定があります

今回はそこら辺を書いていきたいとおもいます

感想、アドバイス等お待ちしております> m ) ( m <

すずかの心傷（トラウマ）（前書き）

大変遅くなってしまいました、申し訳ありません。

全編シリーズになっております、すずか編どうぞお楽しみください

## すずかの心傷（トラウマ）

後ろは泉、周りは山、海鳴の守護者の最重要拠点であるそこで、すずかは達也を組み敷いていた

「はあ、はあ、はあ・・・」

息が荒く、頬は上気している、しかし表情は何かを我慢しているようにで苦しそうだ

「すずか・・・、いいよ」

そんなすずかを心配そうな表情で見つめ、達也がそう声をかけるそれは甘美な誘いだった、すずかは我慢が出来なくなり、達也の首筋に牙を突き立てた

すずかの心傷<sup>トラウマ</sup>

夜 すずかの部屋

「いやっ!!」

その夢見の悪さにすずかは飛び起きる

「またあの夢、・・・やっぱりこの時期になると見ちゃうんだ・・・」

┌

荒い息を整えながら、自分の状態を確認する。

パジャマと下着が汗でグツシヨリと濡れていて気持ち悪かった。

「シャワー浴びて来なくっちゃ・・・」

そう判断し、替えのパジャマと下着を取り出す。

（もう二年になるんだね、あれから・・・）

浴室に移動しながら、すずかは先程の夢を見る原因となった二年前の出来事を思い出していた。

二年前　　月村家

「お父さん、お母さん、海鳴の守護者ってどうすればなれるの？」  
（私にはなのはちゃんやアリサちゃんに話していないことがある。  
それは月村の家が吸血種であり、代々海鳴の守護者を輩出してきた  
家系だと言うこと、吸血種とは文字道理、私達が他人から血を摂取  
する種族だということ）

「どうしたんだ急に？」

「さすがの両親は娘の突然な質問に目を白黒させてそう聞き返す。

守護者のことは教えてはいたが、娘から話題にされることは初めて  
だったので、驚いたのだった。

「うん、今度お友達になった男の子が巽君と言うんだけど・・・」

「！！巽・・・達也君か！？元気にしているのか彼は！！」

「え！？う、うん元気だよ」

突然迫るように聞いてきた父親にすずかは答える。

「あなた、落ち着いてください」

「その子ってあれよね、今守護者を一人で受け持っている、巽家の  
若様」

母親が父親を宥めている間に、興味を持ったのか、姉の忍まで話し  
に入ってきた。

「で、その達也君がどうしたの？」

「うん、達也君が授業中によく居眠りしてるんだ、もしかしたら一  
人で守護者の任務に着くのが辛いんじゃないかって、だったら私  
も月村の血をひく者として守護者になって達也君を助けてあげられ  
たなら、て思ったの・・・」

(そして海鳴の守護者とは、この街に降り懸かる厄際を退ける者達のこと、巽家を中心に守護者を輩出する家系がいくつもある、月村家もその一つ)

「・・・すずか、守護者の任務は凄く大変なものだと聞いている、それでもやるのかい？」

「うん、お友達を助けてあげることが出来る力が私にあるなら、助けてあげたいの」

父親の問いにきっぱりと答えるすずか

(最初は本当にそれだけだった、自分に出来ることがあるならやってあげたい、そう思つて守護者になることを決意した)

「・・・わかった、お前が決めたことだ、それを尊重しよう、ノエル」

「はい」

「巽家に連絡を、明日守護者になりたいと言つる者を連れて伺います、とな」

「畏まりました」

ノエルの退出を見送つた後、父親はおもむろに話し出す。

「すずか、出来たらで良い、あの子を・・・達也君を支えてやってほしい、あの子はきつと辛い想いをしているはずだから・・・」

(後からお母さんが教えてくれたお父さんの想い、達也君のお父さんは月村の血をひく人で、うちのお父さんとはお友達らしい、そして達也君の御両親がいなくなった時、達也君に何もしてやれなかつたことを今でも悔やんでいるそうだ、だから私に達也君の支えになつてほしいと言つたみたいだ)



すずかはシャワーで身体を洗いながらも、トラウマに成るほどのその記憶を思い出すのを辞めようとはしなかった。  
（達也君の助けになりたい、その気持ちは今でも変わらない、でも彼を直接的に助けてあげることが出来なかった・・・）

二年前 山の中腹にある泉

（次の日、達也君の実家へと連れて来られた私は、そこで巽家の当主に守護者になりたい理由を聞かれ、お父さん達に伝えたことをもう一度伝えた、その答えに満足したのか、当主は達也を宜しく頼むと一言言った後、守護者になる儀式があると言って、この泉に連れて来られた、その道すがら守護者の現状について教えてもらった）  
「現状、君の年代の守護者は達也ともう一人だけ、しかもその“娘”は今諸事情で海鳴を離れている、だから君が今回守護者になることを決めてくれて本当に感謝している。ありがとう」

「いえ、そんな・・・」

（私達以外の守護者は泉の結界維持の為、この家から離れられないそうだが、それを聞いて私は尚更達也君を助けてあげたいと思った）  
そんなことを話していると、程なく泉に到着した。

「来たね、この娘が月村の娘かい？」

「は、はい、月村すずかです。よろしくお願いします。」

そこにいたのは黒衣着物を着た二十代くらいの女性

「今日はそちらの姿なのですね」

「女はいつでも若い姿でいたいものだよ、私は静、この泉を管理している者だよ、よろしくね」

(泉の管理者である静様、巽家御当主である策様、この二人から守護者のことを聞いて、私には精霊が憑くことになった)

「落ち着いて、耳を澄ませてみな、必ず声が聞こえてくるはずだから」

目を閉じて、静に言われた通り耳を澄ませてみる、最初は何にも聞こえなかったが、だんだんと周りが騒がしくなっていく

「聞こえてきたね、その中で一際明瞭ひときわに聞こえる声を探してみな、その子があなたとの相性が一番いい子だから」

さらに集中し、声の聞き分けを行う、雑音混じりの不明瞭な声を切り離し、どどん明瞭な声に近づいていく、そして数分、一つの声に辿り着いた

「見つけた・・・」

《はじめまして、お嬢様、あなたは何のために私の力を必要としますか？》

「大切な友達の為だよ、私にできることがあるのなら達也君を助けてあげたい、そのために力を貸して」

《・・・あなたは優しい方なのです、名前を付けてください、それで契約は完了、私はあなたのパートナーとして一生ついていくことを誓いましょう》

「ありがとう、・・・あなたの名前はフィーナ、これからよろしくねフィーナ」

《フィーナ、良い名前ですね、よろしくお願います、お嬢様》

フィーナの声と同時にすずかの体が光に包まれる

すずかが目を開けるとそこは先ほどと変わらない泉、一つだけ変わったのはすずかが魔力を放出しているということ

「無事契約できたようだね」

「君の年齢でそこまで放出できれば大したものだ、後は君の鍛錬しだい、無理しなくてもいいから今は休むといい」

「あ、はい、フィーナ終わりにしよう」

「はい、魔力の放出を止めます・・・！！止まらない！！お嬢様！！」  
（ここまでは順調にいった、この時、私がもつとしっかりしていればあんなことにはならなかったはずだったんだ）

異変に気づいた策はすぐさま周りの結界を強化する、そして達也に念話を送った

『達也！！気づいているな』

『今気づきました、何があったんですか！？』

『急げ、すずかちゃん危ない』

『！！！！』

念話が切れ、すごい速さで達也が向ってくるのがわかる、目の前には魔力を放出させたまま、うずくまり苦しんでいるすずか

「吸血種の血が魔力によつて暴走したといったところでしょうか」

「だろうね、急に魔力を宿してしまったから、体が防衛本能を働かせたんだろうね、普通はこんなことは無いんだけどね、あんたじゃ助けてやれないのかい？」

「あの状態の吸血種の止め方は一つだけ、達也にやらせるしかないでしょう」

そんな話をしているとだいぶ急いだのだろう、息を切らせた達也がやってきた

「・・・すずか、どういうことです」

すずかの状態を確認した達也は状況を策へと確認する

「彼女が守護者になりたいと言ってきた、それを受け入れ精霊と契約したが、その魔力に体が反応し、暴走しているというわけだ」

「なぜ守護者に・・・」

「お前の負担を少しでも減らしたいと言っていたぞ」

「・・・」

「止め方はわかっているな」

「はい」

一つ息をつくとすずかに近寄っていく達也

(暴走した私たち吸血種を止める方法は一つだけ、私たちはそれがほしくて堪らなくなる)

うづくまっていたすずかが達也を視界に入れる、その瞬間すずかは達也を押さえつけ、達也は抵抗することなくそれを受け入れる

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

息が荒く、頬は上気している、しかし表情は何かを我慢しているように苦しそうだ

「すずか・・・、いいよ」

そんなすずかを心配そうな表情で見つめ、達也がそう声をかける

それは甘美な誘いだった、すずかは我慢が出来なくなり、達也の首筋に牙を突き立てた

(血を求める私たちの衝動はそうそう我慢できるものじゃない、だから私は達也君の言葉に抵抗を緩めてしまった)

達也は自らの血を吸っているすずかをなでながらすずかのパートナーとなった精霊に魔力の放出を止めるように指示する

それを受け入れ、すずかからあふれる魔力が止まると、暴走も落ち着いたのかすずかから力が抜け、そのまま眠りにつくように気を失った

## 現代 すずかの部屋

シャワーを浴び終え、部屋に戻ってきたすずかは、窓に近寄り、空に浮かんでいる月を見つめる、その光に映し出された顔は雲ひとつない空とは反対に曇で満たされていた

(私たちが血を吸った人との関係は決まっている、一生友や恋人と

して過ごしていくことになる)

そこまで考え、一瞬顔を赤くしたすずかだが、すぐ顔を曇らせる  
そして、一つ気合いを入れると、体の内から魔力を呼び出そうとする  
だが、暴走するビジョンが脳裏をよぎり、その恐怖がすずかを襲う、  
体が強張り息が荒くなる

そして、魔力が霧散し体から力が抜け崩れ落ちるように座り込んだ  
(あの子の私は魔力を操ることができなくなった、もう魔力の所為  
で暴走することは無い、それはわかっているも体と心が言うことを  
聞いてくれない、戦えない、達也君の手伝いは出来ない、だから私  
は・・・)

《にゃ〜》

すずかの足元に紫の毛並みを持つ一匹の猫が擦り寄ってきた、それを  
優しく抱きあげる

「ごめんね、 “フィーナ” いつも心配かけて」

《いえ、焦らないでください、今は出来ることだけをやりましょう》  
「うん、そうだね、私は私の出来ることをやるだけだよね」

(だから私は、今の私に出来る範囲で、達也君をサポートするんだ)  
自らの気持ちを再確認したすずか、再び月を見上げその顔が映し出  
される、その表情は雲ひとつない晴れやかなものだった

t o b e c o n t i n u e d

## すずかの心傷（トラウマ）（後書き）

月村すずか

吸血種であり海鳴の守護者の一人

しかしその魔力は精霊と契約した際に起きた事件がトラウマになり  
ほとんど使うことができない

現在は日常生活で達也をサポートしようとしている

フィーナ

すずかの精霊

その能力はまだ謎だが精霊体は猫の形をしている

更新に約二週間かかってしまいました。

すいませんでした。

感想アドバイス等待っております。

はやての呪い（前書き）

お待たせしました。  
短くて申し訳ないです。

## はやての呪い

「んん・・・、今日も、えー天気やなー」

車椅子に乗った茶髪をショートカットにした少女、八神はやてが空を見ながら呟く

「だね」

車椅子を押す赤い髪を二つのおさげにした少女、ヴィータが答える  
二人は図書館に向かって歩いていく

そんなはやての手には分厚い装飾本が握られていた

はやての呪い

図書館に着いたはやてとヴィータは本を手分けして探すために一時的に別れて行動することにした

「うーん、ここら辺やと思うんだけど」

場所は合っているはずだが探している本は見つからない

「まあ、こういう場合のパターンは決まってるんやけどね・・・」  
苦笑して、視線を上げる。

案の定、少し高い位置にその本はあった

普通の人にとってははたいしたことのない高さ、しかし車椅子に乗っている自分には届くかどうか微妙な高さであった

「届くかな？」

手をのばせば届くかもしれない、しかしバランスを崩して倒れてしまえば、この静かな図書館に居る人達に迷惑をかけてしまう、そんな感じで動くかどうか迷っていると後ろから声をかけられた

「その本が取りたいのか？」

びっくりして振り返ると、自分と同年くらいの子が視線を私



の取りたい本に向けていた

「あ、はい、そうなんです」

反射的にそう答えると

「そうか」

とだけ言っつて、本棚に近づいてその本を取り

「ほら」

と渡してくれました

「あ、ありがとうございます!!」

「いや、どう致しまして・・・、俺も人のこと言えないんだが、少しは周りの人を頼るのも悪いことじゃ無いと思っぞ」

「えっ、あ、いや・・・」

と言葉がつかえて出てこない、その様子には彼は微笑みながら

「まあ、ただのざれ言だから気にするな」

と言っつて歩いていっつてしまった

「あ、待って・・・」

ときちんとしたお礼をしようと止めようとするが

「はやて」

その前にヴィータが現れ、その姿を見失ってしまう

「本は見つかったの、はやて」

「う、うん、見つかったんやけど・・・」

ヴィータの相手をしながら先程の男の子を探してみる、そして図書館

館から出て行く男の子を見つけ、その隣に紫の髪の女の子を見つけた

(あの娘は確かいつも図書館に来ている娘やな)

ならば話しは早い、次に会った時に改めてお礼を言おうと心に誓っ

「どうしたの？はやて」

「うん、何でも無いんや」

そう笑顔で答え、ヴィータとの会話に意識を戻すのだった

同時刻 ????

我は闇の書、かつての姿と名、いまはもはやなく、遠からず時は動き出してしまふ・・・

そうなった時、我が騎士たちや我が主は我を呪うだろうか・・・

此度はいつたいどのような形で我は目覚め、力を振るうのだろうか・・・

そして、誰がどのようにして我と主を破壊するのだろうか・・・

願わくばその時が、たとえ僅かでも先に延びるよう祈るばかり・・・

我は闇の書、破壊か再生か、いずれにせよ我はただその時を待つばかりなり・・・

同時刻???

(やっと見つけた)

漆黒に包まれた世界の中で彼女は安堵する

(この本の呪いを解くために、何年待っただろうか・・・、何人の死をこの目に焼き付けただろうか・・・)

その年月に、その罪に、彼女は想いを馳せる

(さっきの男の子、年齢を考えると孫かひ孫かな・・・策、ふたみ・・・)

そしてたどり着いたのは自らがまだ生きていた時の記憶、愛する者と親友、皆で過ごした楽しくてかけがえの無い日々

(あなた達が護っているこの街で、また私が事件を起こすのは本当

に申し訳ないけれど・・・)

それでも終わらせなくてはならない、幼くも優しいこの本の現在の主、それを護る騎士達、そしてこの本を呪いから解放する為に

(けれど、今回は時間切れかな)

急速に意識がおちていく、抗うことが出来ないその眠りに彼女は一つだけ息をついた

(おそらく、次に私が目覚めるのは事が起こっている最中、チャンスは一度きり、成功させる、絶対に・・・)

決意を胸に、彼女は最期の眠りについた・・・

この数カ月後、海鳴はまた大きな事件に巻き込まれる

それを知る者は黙して語らず、その歯車は今、静かに回り始める

運命の輪が紡がれるとき、巻き起こるのは禁断の魔導書、【闇の書】を巡る戦いの日々

新たな時がいま、始まるうとしている

t o b e c o n t i n u e d

はやての呪い（後書き）

感想お待ちしております。

特別編 魔的少女の海鳴訪問 前編（前書き）

お待たせして申し訳ありません。

A's 本編を期待していた方、もうちょっとお待ちください。  
今回は特別編、アイズさんの作品とのクロスです。

特別編 魔的少女の海鳴訪問 前編

夕方

海鳴市郊外 森の中

「……………何、これ？」

そこは木が鬱蒼としげる森の中、緑が溢れるその場所は、木々の間から太陽の光が降り注ぎ、心地よい風が流れる……

普段ならばそこは、訪れたものをリラックスさせる、とても心地よい空間だろう……………、そう、普段通りならば……………

「……………サボテン？」

偶然この場所を訪れた少女が見たものは、そんな空間をぶち壊しにする植物、サボテンだった。

魔的少女の海鳴訪問 前編

そもそも少女が海鳴を訪れた経緯からおかしかった

「ちょっと、どういうことよ、母さん」

「どういうことって、そのままの意味よ、あなた一週間くらいそこでお世話になってきなさい」

普段仕事の為、海外を飛び回っている母が、急に帰ってきたと思ったら、一枚の手紙を渡して、そう言った

「いや、だからどうしてここに行かなければならないのかを聞いているんだけど、私は……………」

「……………はあ、まだまだね、その手紙の宛名をみればだいたいの予想はつくでしょう？」

確かに、宛名の人物は私達の業界では有名人だ、たがそれゆえに解

らない

「不可侵のルールはどうするのよ？」

「だからその手紙が必要なのよ、それには貴女のことをお願いする内容が書かれているわ」

「じゃあ、私の受け持ちの仕事はどうするのよ、修行なんでしょう？」

「みかなぎ御巫とつくよみ月詠に頼んであるわよ、それに他の土地で経験を積むのも立派な修行よ」

冗談なのではないかとこれまで話してきたが、母さんの顔は真剣だったので真面目な話らしい……

「そんなに難しく考える必要は無いわ、ちょうど夏休みなんだし、ちよつとした旅行だと思えば良いじゃない？」

それに貴女が私の後を継ぐつもりなら、今代の守護者と面識を持つておくことも悪くないわ」

「今代の守護者？」

「この間、会ったのよ、なかなかいい子だったわ、将来的に親しくなっておいて損はないわよ」

そんなこんなで少女は海鳴に行くことになったのだ

その手に“巽 策”宛ての手紙を持って……

「何でこんなところに？」

公共の機関を乗り継ぎ、海鳴についたころには夕方になっていた早く巽家に向かおうと山に入り、森を歩いているところにそれはあったのだ

「それにしても変な形ね」

珍しい種類のサボテンなのか、上半分は違和感がない埴輪ハニワのような形をしているが

特徴的なのは下半分だ、足のように二つに分かれ、さらにくの字に折れ曲がっている

その全容はまるで走っている人のような姿だ

「って、こんなことしている場合じゃないのよ、早く行かなく・・・はあ!？」

歩き出そうとした少女はそのサボテンが動いたように見えて足を止めた

いや、動いたようではない、動いているのだ

まるで体を回転させるようにゆっくりと回っていたサボテンは、その少女と“目”が合って動きを止めた

そう、“目”が合ったのだ

サボテンにはまるで目と口のように黒い窪みがあった

「・・・」

二人？は無言で少しの間見つめ合った

先に動いたのはサボテンだった

少女に背を向け、一目散に走り出す

「早!・・・、ってちょっと待ちなさいよ!！」

一瞬茫然としていた少女だったが、すぐに意識を取り戻し、印を組み上げる

数秒後、辺りは朱い空間に包まれた

「追いつめたわよ」

空間の端まで行って、ようやくサボテンを追いつめる

サボテンも覚悟を決めたのか少女に向き直っていた

「と言っても、これ以上の術の行使は危ないかな？」

この空間を作り出したのもギリギリのグレーゾーンなのだ  
これ以上は間違いなくルールに抵触する

「となれば、これかな」



少女が取りだしたのは二丁の拳銃、両手に持ちサボテンに狙いを付け撃ちこむ

しかし、それがサボテンに当たるとは無かった

「このっ！！ちょこまかと！！」

飛んで、跳ねて、走って、時にはバツク転なども織り交ぜながら撃ちこまれる銃弾をかわしていくサボテン

そして一瞬の隙をつき反撃に出てきた

「くっ！？」

頭から発射される針の連射、それを周りの樹木を使いながら交わり、さらに銃弾を撃ち込む

何度か繰り返し、ようやく一発の銃弾が命中するとサボテンの動きが止まった

その隙を見逃さず、追撃をかける

するとサボテンが倒れ、光の粒子になり消えていった

## 結界の外

そこには一人の帯刀した少年がいた

「この結界、どう思う【天龍】？」

《以前に見たことがあります、しかし、なぜ彼らがこの地に？》

「さあな、確認すればいいことだ、行くぞ」

少年はそう言うと、刀を抜き放ち、結界を破壊する態勢に入った

## 結界内

サボテンを倒した少女だったが、次の瞬間には更なるピンチに見舞われていた

「まずつたな〜」

どうやらサボテンには仲間がいたようで、周りをすべて囲まれていた「術を使えば対処できるけど・・・」

そんなことを考えていると、サボテンたちが少女に狙いを付けるのがわかった

覚悟を決め術を行使しようとする少女、しかしその術が発動することとはなかった

少女の背後、結界の境目が破壊され、人影が飛び込んできた

「!!!」

驚き、その人物を呆然と見つめる

「・・・ふむ、君がこの結界を作ったのか？」

「え!・・・ええ、その通りだけど・・・」

飛び込んできたのは少女と同じくらいの蒼い服を着た刀を持つ少年だった

「了解、話は後で聞く、こいつらを片づける、そこで休んでいる」

「え？」

疑問の声をあげる暇もなかった

そこからは本当に一方的な戦いが繰り広げられていた

少年はサボテンよりも速く動き、手に持つ刀でサボテンたちを切り裂いていく

時には蒼く光る斬撃を飛ばしてサボテンを倒していった

「こんなものか」

倒されたサボテンたちはすべて光の粒子になって消えていったよく見ると周りが蒼い結界に包まれていた

少女の術を破壊する前に覆うように張っていたようだ

「大丈夫か？」

「うん」

座り込んでいた少女に手を差し出す少年

「俺はこの海鳴の地の守護者、巽 達也、君は？」

「私は神楽坂の・・・結花<sup>ゆいか</sup>」

これが少年と少女、達也と結花の初めての出会いだった

t o b e c o n t i n u e d

特別編 魔的少女の海鳴訪問 前編（後書き）

切りがいいので分けます。

次回更新も遅くなるかもしれませんが、よろしくお願いします。  
ちなみに今回出演の精霊はFFシリーズより○ポテンダーです。  
分かりやすいですね（笑）

特別編 魔的少女の海鳴訪問 後編（前書き）

お待たせしました。

特別編後編投稿です。

特別編 魔的少女の海鳴訪問 後編

深夜

海鳴市の山 上空

赤い空間の中央最上部、そこに佇むのは少年

少年は精神を統一するため、視界を閉じていた

そしてその周りに蒼い光球が数個漂っている

下の森の中には赤い空間を作り出している少女が隠れている

「ドラグーンブレード・フルバースト」

《セット》

少年が目を開く、そこは普段の黒ではなく蒼い輝きが宿っていた

「断絶の刃、呑まれる恐怖に震えるか・・・」

蒼い光球から小太刀型の魔力弾が連射され、赤い空間の森全体に降り注いだ

魔的少女の海鳴訪問 後編

海鳴市 巽の屋敷

時は少し遡り、達也に連れられて結花は海鳴の守護者の総本山へと連れてこられていた

目の前にはどう見ても二十代にしか見えない青年と女性が結花の持ってきた母からの手紙に目を通していた

この二人こそ、長年に渡り海鳴を守り通してきた“巽 策”と“巽 ふたみ”の夫婦

実年齢は六十を超える、巽の現当主であり、達也の祖父母である

「ふむ、ここに来た理由はよくわかった、丁度いい、今出現している精霊を倒すのを手伝ってもらおうか？」

策が顔を上げ、結花を見ながらそう発言する

「はあ、それは良いのですが、よろしいのでしょうか？」

「不可侵のルールのことか？気にしなくていい、他はどうか知らないがこの地は元よりそういう輩が集まりやすい土地

少なくともこの家に居る者はこの地に悪影響を与えると判断した者意外なら問答無用で強制退去みたいにはならないさ」

答えたのはふたみ、口調は少し乱暴だがその表情は優しく微笑んでいた

「と言つても、急に知らない土地で一人で行動も出来ないだろう？しばらくは達也と一緒に行動してみてはどうか？いいだろう、達也」

「はい」

達也は策の言葉に頷き、結花に近づく

「改めて、よろしく、結花って呼んでいいか？」

「あ、はい、よろしく願います、達也・・・さん」

それから数日、二人は協力してサボテンの排除を行った

そしてある区画を残して、ある程度排除し終わったことを確認した

二人は、その区画を結界で覆い

一気に殲滅する作戦を実施したのだった

現在

海鳴市の山 森の中

「凄い・・・」

結花は森で息を潜めながら、その光景に唾然としていた

「寸分の狂いもなく、一体一体確実に撃ちぬいてる……、この広い空間の全ての物の位置を把握する……これが“龍視”の能力」  
数秒の魔力弾の雨が終わると、そこには傷一つない森が広がっている、正確にサボテンだけを打ち抜いた証拠だ

《掃討完了、見える範囲での敵は駆逐しました》

「結花、最後は任せた」

「はい!!」

返事とともに森の一部が盛り上がる、そこからこれまでのサボテンの十数倍はある大きさの髭が生えたサボテンが現れた

「来た、あれがああの精霊たちの本体」

結花が木の枝を足場に近づく

「いつけーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

結花の瞳が巨大なサボテンを捉える

その瞬間、巨大なサボテンが炎に包まれ、大きな音をたてて倒れた

「やった?」

木の枝から砂煙に隠れた巨大サボテンを見降ろし、呆然と呟く

「結花!!」

「え!?!」

その時、急に誰かに突き飛ばされる

そこを狙い、万にも届く針が連射される

「ちい!!」

障壁で受け止めるが、もともと防御が得意ではない達也はその勢いに押され、森の奥に吹き飛ばされた

「達也さん!!……倒しきれなかった、生命力をはかり間違えた、私の所為だ」

そんなことを思っていると、土煙りの中から結花に向かい、針が飛んできた

木を使いやり過ぎそうとするが、あまりの針の多さに気までも撃ち抜かれる



それもなんとかやり過ごし、別な木に隠れ、気配を消す

巨大サボテンは立ち上がり周囲を確認するが、結花を見つけたことは出来ないようだった

「風陣招来」

《サイクロンクラッシュァー》

結花が攻めあぐねていると、巨大サボテンは特大な竜巻に包まれ身動きが取れなくなった

それを視線の先で捉え、今度こそ止めを射すべく、集中する

「次こそは・・・決める！！」

竜巻に包まれた巨大サボテンを凄まじい稲妻が襲った

それは先ほどの炎を超える威力をもった術だった

数秒後、稲妻の光が治まり、周囲が静寂に包まれる

「はぁはぁ、お、終わった？」

「ああ、終わりだ、御苦労さま」

振り返ると防護服が一部欠けた達也がいた

「大丈夫ですか？」

「問題ない、疲れただろう？早く帰って休もう」

その後、二人は巽の屋敷に帰り布団に入ったとたんあっという間に眠りについた

数日間戦い続けた影響か、起きたのは次の日の夜

結花が帰る日が迫っていた

夜

巽の屋敷 縁側

庭を見ながら、時間をつぶす結花に達也は後ろから声をかける

「こんなところで何してるんだ？」

「達也さん？この雰囲気、家に似ているんですよ」

「明日、帰るんだっけか？」

「はい、良い経験をさせてもらいました」

「またいつでも来い、というわけにはいかないか・・・」

「ええ、私は本来余り神楽坂から出るわけにはいかないの・・・」

「まあ仕方がないか、じゃあまたいつかだな」

「はい、またいつか、今度会う時はもつと力を付けて、達也さんの力を借りなくても事件を解決できるように頑張ります」

庭から目を離さずに会話をつづける二人、結花は最後に聞きたいことがあることを思い出した

「その、一つだけ聞かせてもらって良いですか？」

「内容によるが、何だ？」

少し聞きづらそうにしながらも、ゆつくりと言葉を紡ぐ

「兄は・・・、兄さんはどんな人なんですか？」

「・・・は？」

それは間抜けな顔だっただろう、口を開けたままポカンと結花を見つめてしまう

「えっと、その・・・私、兄さんに会ったことないんです・・・」

どんだん声が小さくなる結花、俯きながらも言葉を続ける

「私の家のしきたりで、十六歳までは会えないことになっていて・・・、それ以前に兄さんは私の存在も知らないし・・・」

だからその、どういう人なのか聞いてみたくて・・・」

「あゝ、まあ事情はわかった、どんな人か・・・」

ようやく思考が戻ってきた達也は、ついこの間会った少年を思い出す

「そうだな、優しく決断力と勇気を兼ね備えた奴かな」

「そうなんですか？」

ものすごくうれしそうな顔をする、おそらく結花の中でその兄はほとんど美化されていくことだろう

「俺の連れを自分の危険を顧みず助けてくれてな、そのあと少し話

をしたんだが、良い奴だったよ」

「ああ、さすが私の兄さん」

美化はどんどん進んでいく、もはや結花の中で兄はどんな人物になっ  
ているのか、達也には想像もできなかった

「明日は早いんだろ？今まで寝てて眠くないかもしれないが、休  
んだ方がいい」

「あ、はい、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

二人は分かれ、それぞれの部屋に入っていく

次の日、結花は満足そうに帰って行った

修行&兄の情報（美化度）で充実した時間を過ごしたことだろう  
これが海鳴に来た少女と達也の出会いの顛末である

次に彼らが出会うのはいつになるのか、それはまだ誰もわからない

なお、この期間中放っておかれた少女たちからお仕置きを受けるこ  
とになるとはこの時の達也は知りもしなかった（笑）

t o b e c o n t i n u e d

特別編 魔的少女の海鳴訪問 後編（後書き）

ドラグーンブレード・フルバースト

ドラグーンブレードの発展型射撃魔法

術前の溜めと術後の硬直に隙ができるが

フェイトの“ファランクスシフト”と同程度の性能を誇る  
達也は“龍視”により無数に存在する敵に全弾命中させた

「断絶の刃、吞まれる恐怖に震えるか・・・」

というわけでショートストーリーは終了

短いえにグダグダで申し訳ありません。

次回はようやくA、s編に入ります。

まずはプロローグ、短いですがオリジナルの話になると思います

この小説を読んでくださっている皆様には感謝してもしきれません  
これからも読んでいただけると嬉しいです。

A・S編プロローグ 戦いの幕開け（前書き）

オリジナルのプロローグですが  
お待たせしました、A・S編開幕です

## A's編プロローグ 戦いの幕開け

「何者だ、あんたら」

達也が問う、上空には達也を囲むように三人の人影が見て取れる

季節は冬、なのはとフェイトが友達になった事件

PT事件と呼ばれた事件から半年が経とうとしていた

そして後に闇の書事件と呼ばれる事件が

なのはたちの目の前まで迫ってきていたのだった

## A's編プロローグ 戦いの幕開け

その日、達也は守護者として海鳴に現れた複数の精霊を退治していた  
達也は結界を張り、圧倒的強さで殲滅して

今、最後の一体を切り捨てたのだった

そこまでは良かった

「さて、これで終わりと言いたいところだが・・・」

だが、達也は気づいていた

自分と精霊の戦闘を観察していた第三者の存在に

「何者だ、あんたら」

達也は上空を見上げながら問う

そこには達也を囲むように三人の人影があった

一人は褐色の肌に銀髪、青い服を身に纏う筋骨隆々の男性だ

何故かどこかで見たことがある犬科の尻尾と耳が付いている

手甲を両手にはめているということは彼女と同じ格闘戦を

得意とするのだろうと推測できる

もう一人は、真っ赤な長い髪を二つのお下げにした少女だ

髪と同じ真っ赤なドレスと帽子を身に纏い、右手には彼女の得物で

あろう

ゲートボールで使うようなハンマーが握られている最後の一人はピンクの髪をポニーテールでまとめ薄いピンク色のジャケットを身に纏った女性だ。全体的な格好は達也にそっくりだが、左手に持つ鞘に収まっているのは

片刃の西洋剣のようだ、無骨な刀身にまるで拳銃にしているようなスライドする部品が取り付けられているのを見るとただの剣じゃないことは安易に想像できる

達也が警戒を薄めることなく三人を見上げる

「我らヴォルケンリッター、貴公のリンカーコアを貰い受ける！！」  
リーダー格らしいピンク髪の女性が告げる

(リンカーコア・・・ね)

達也の記憶でリンカーコアと言うは一つしかない  
おそらくそれを狙ってきているのだろう

「・・・何の為に？」

「我らの悲願成就の為」

達也の問いに簡潔に答え、剣を構えるピンク髪

他の二人もそれに合わせて構えをとる

『《どうなされます若？彼ら、かなりの魔力反応がありますが》』

『売られたケンカだ、買わないのも失礼だろう』

『《ですが、先ほどの戦闘で魔力に余裕はありませんよ？》』

『わかつている、・・・切り札を1つ切らせてもらおうか』

『《仕方がないですね・・・了解です》』

達也は【天龍】との念話を切ると

【天龍】を鞘に収めた

「テメエ、なんのつもりだ！？」

赤髪の少女が声を荒らげる

「なに、あまり手の内を晒したくないだけさ

だが、そうそう簡単に奪われるわけにもいかないのでな

少し抵抗させてもらっぞぞ」

その言葉と共に、達也は指を動かし挑発する

「上等だ!!ぶっ潰す!!」

「待て、ヴィータ」

赤髪の少女が怒りをあらわにし飛び掛ろうとしたところを

銀髪の青年が止める

「止めんな、ザフィーラ!!」

「ここは俺が行こう、お前だと本当に奴を潰しかねん」

「ふざけんな!!あいつはあたしが!!」

「リンカーコアが奪えなければ意味がない」

「うっ……」

「少し頭を冷やせ、我らが何の為に行動しているか忘れたわけではあるまい」

「……」

悔しそうに顔を歪めながら下がる赤髪の少女・ヴィータを背に銀髪の青年・ザフィーラが前に出る

「大人しく差し出す気はないのだな」

「当然だ」

二人は一瞬にらみ合い、すぐに動いた

「おおおおおお」

先に動いたのはザフィーラ、素早く接近し拳を放つ

しかし、拳が捉えたのは達也ではなく地面だった

「なっ!!」

ザフィーラが達也を見失い、驚きの声を上げる

達也は素早くザフィーラの背後に回り、回し蹴りで頭部を狙う

ズガン!!

「……まあ、そうだろうとは思ってたけどな」

達也の蹴りは青い正三角形の魔方陣に止められていた

「はあ!!」

「っつと」



ザフィーラはその体勢から振り向きざまに裏拳を放ってくる  
それをバツク転でかわす達也、しかし次の瞬間には  
地面を蹴り、ザフィーラの懐に飛び込んで拳を放っていた  
バシィ！！

達也の拳はまたもや青い正三角形の魔方陣に阻まれる

その一瞬の隙をつき、ザフィーラは達也の腕を掴む

「もらった、動けなければこちらのものだ！！」

ザフィーラの言葉に達也は小さく笑みを浮かべ

「あまいな、もらったのはこちらのほうだ」

その言葉と共に余っていた左の掌をザフィーラの胸板に当てる

ドクン！！

「がはっ！！」

ザフィーラの身体に衝撃が走り抜ける

内臓が数箇所やられ、痛みで意識が飛びそうになる

達也はそのまま飛び上がり、顎を上げたザフィーラの顔に

後ろ回し蹴りを叩き込んだ

ザフィーラは防御することができず、まともくらい

近くのビルまで吹き飛ばされた

「ザフィーラ！！」

「てめえ！！」

ヴィータが達也めがけて急降下する

「でりやああああ！！」

達也が振り向く間もなくヴィータは手に持っていたハンマーを振り  
下ろした

ドガン！！

やはりヴィータが捉えたのは地面、そこに達也はいない

砂煙があがり周りが見えなくなった

「ちい！！」

ヴィータは急ぎ全包围に障壁を張る、先ほどのザフィーラと同様の  
展開だ

何処から来るかはわからないが達也は必ず仕掛けてくると勘が告げていた

得てして、その勘は当たることとなる

達也はいた、それも真正面で拳を構えた体勢で

「なあ!？」

ヴィータの攻撃を必要最低限の動きでかわしたのだろう

ハンマーが捉えた場所のすぐ隣にいたのだ

「吹き飛ばせ!!」

達也の拳が放たれる

しかし、ヴィータは今、障壁に包まれている

ザフィーラほどの硬さはないが、それでも十分な硬さをもち

全包围をカバーできる、赤いクリスタルの形をした優秀な障壁だった

その障壁と達也の拳が衝突する

ヴィータが防いだと思っただ次の瞬間、信じられないことがおこった

ぱりん!!

ズガン!!

「ぐはっ!!」

達也の拳は障壁を破壊し、ヴィータを捉え吹き飛ばしたのだ

それは先ほどザフィーラを吹き飛ばした後ろ回し蹴りよりも強力で

普通じゃありえない攻撃だった

「ヴィータ!!」

剣士が叫ぶ、ヴィータはザフィーラとは反対方向にある建物へ

突っ込んでいった

「さて、次はあなたの番だが・・・、まだ続けるか？」

達也が剣士を見上げながら問う

「・・・破導の極み、未寅が得意としていた技だな

やはり貴様は海鳴の守護者か」

剣士は地面に降り立ち、達也を見定めながら言葉を発した

これにはさすがの達也も驚きを隠せなかった

「あなたはいつたい・・・？」

確かに今使ったのは未寅の家が代々受け継いできた破導の極みという技だ

ザフィーラに使ったのは内部破壊の技、いかに強力なバリアや装甲に覆われていようと

触れることさえできればそこから内部に浸透し、破壊する防衛不能技そしてヴィータに使ったのは手または足のある力で覆い、攻撃力の底上げをする技だ

これらの技に使うのは魔力ではなく、どんなものにも流れているといわれる

“気”である、それ故に魔法を使う者に見れば、魔力反応を感じさせずに

防衛もできない脅威の技となっていた

「その技は魔力の低い未寅の一族が戦う為に編み出した技だったはずだが

貴公から感じる魔力は相当なものだ、未寅ではないとは思いが……」

《若！！後方より魔力反応！！》

「なに！！」

シグナムの言葉を遮り、【天龍】の音が響く

それと同時に瓦礫を吹き飛ばし、二つの影が達也の身体を押さえ込んだ

「くっ！！何を！！」

二つの影、ヴィータとザフィーラに押さえ込まれ、身動きが取れない達也

「すまないな、これも我らの主の為なのだ……、やれシャマル！

」

「な！！」

剣士の言葉と共に達也の胸から一本の腕が飛び出していた

その手には淡い光を放つ球体が握られている

魔力の源である達也のリンカーコアだ

「ぐうう ああああああああああああああああ！！」

『蒐集開始』

何処からか念話による声が聞こえてくる

「お前の作戦通りだなシヤマル、さすがはヴォルケンリッターの参謀と

いったところか」

『守護者を相手にまともに戦ってはこちらへも被害が出るわ

怪我でもして、これ以上心配させるわけにはいかないでしょう』

剣士の言葉に念話での返事が返ってくる

『凄い、20ページを超えるわ、これなら一気にページを・・・あれ？』

「どうした？」

『これは、魔力の封印？まだ魔力を隠し持っているというわけねしかもかなり頑丈に封印されてる、解けるかしら・・・』

「や・止め・・・ろ、それ・・・は・・・、ぐううううううううううううううう！！！」

封印が解除され始めたのを感じた達也が何とか止めようとするが身体から力が根こそぎ持っていられる感覚に、ついに膝をついてしまふ

「シヤマル、あまり無理はするな」

『大丈夫、もう少しで解けそうだから

これで結構稼げるはずよ、はやく完成させなくちゃならないもの』

「それはそうだが・・・」

そんな会話が聞こえてきたが、今は構っている暇はない

達也は急ぎ【天龍】と念話をつなげる

『【天龍】、二つ目の封印を解く・・・』

『《若、それは！！》』

『このまま魔力を奪われれば、俺の中で眠る、あいつが・・・消える』

『《・・・》』

「大丈夫だ、制御してみせる

だから、正規の方法で封印の解除を!!」

《・・・リミッターレベル？解除、行きます!!》

【天龍】の声と共に達也の身体が光に包まれる

「え!!何!!」

「どうした!?何があつたんだシヤマル!!」

「あの子、自分で封印を解いたんだわ、気をつけてシグナム!!」

蒐集がキャンセルされた!!一体何が!!」

「ぐあ!!」

「がはあ!!」

シヤマルの言葉が終わる前にヴィータとザフィーラが吹き飛ばされ

シグナムの横を通り過ぎていった

シグナムは光のはれた場所を見る

そこには変わらずに達也が立っていた、その目を蒼に染めて

「貴様!!その目は、“龍視”・・・なら貴様は巽の・・・、策のツ!!?」

最後まで言い切る前にシグナムの目の前から達也が消える

突然のことに反応が遅れたが、長年培ってきた勘で左に剣を振るう

達也の【天龍】とシグナムの剣が衝突、二人とも吹き飛ばされる

シグナムは体勢を立て直し、地面に足をつく

そして達也の方を見ると、すでに体勢を立て直し、砲撃を放つ寸前だった

「ドラグーンブラスター」

蒼色の閃光が放たれる、しかしそれはシグナムとは全然関係のないところに

向かって、飛んでいく

「きゃあああああああ!!」

「シヤマル!!」

先ほどの砲撃はシグナムではなく、シヤマルを狙ったものだった  
「ちい!!」

シグナムが達也に切りかかる、達也はそれを受け止めた  
数瞬の罅迫り合いの後、数回切り結ぶ両者

しかし、それも長くは続かなかった

「シグナム、かわせ!!」

突如上空より響いた声にシグナムは咄嗟に身体を捻る

するとシグナムの後ろから赤い魔力を纏った鉄球が飛び出してきた  
かわそうとした達也の動きが一瞬止まる

《若!!》

【天龍】が咄嗟に障壁を展開したが、鉄球が障壁に当たると障壁が爆発  
その衝撃で達也は地面に叩きつけられた

「何故？」

シグナムは刀を杖代わりにし、何とか立ち上がるうとする少年を見  
つめる

（何故かわさなかった？確かに完璧なタイミングの奇襲だった  
だが、“龍視”を使用していたのだ、かわすことはできたはずだ・

・  
それに、蒐集をキャンセルした力・・・、あれはいつたい・・・）

「シグナム、今のうちに退くぞ

一度蒐集した対象からの蒐集はできない

なら、この場にいる意味はないはずだ」

シグナムの後ろからザフィーラが現れ、シグナムを促す

「・・・ああ、シャマルたちは？」

「問題ない、さっきの砲撃は何とか防いだ、我らも今しがたシャマ  
ルが治療を完了した」

「わかった、行こう」

（ここで考えてもしかたがない

今考えなければならぬことは、いかに早く蒐集を終わらせるかだ）

シグナムは踵を返し飛び去っていく

それを三つの影が追いかけていった

かわせなかつたわけじゃない

“龍視”を発動していた達也は、達也が把握できる空間内に何者かが侵入したのを感じていたし、シグナムが突然身体を捻った意味を

即座に理解していた

「!!!」

だが、いざかわそうとした瞬間、身体が限界を迎えた

一つ目の封印を解除したとき同様、急激な魔力の増大と

その能力の特殊性に身体が耐えられなかったのだ

赤い魔力を纏った鉄球が迫ってくる中、達也は身体が中から

破壊されるような感覚に陥る

その痛みにより、達也は硬直を余儀なくされた

《若!!》

攻撃が当る瞬間、【天龍】が咄嗟に障壁展開

さらに爆破による後退、という手段をとったが

達也にはそれを制御する余裕がなかった

結果、地面に激突

なんとか立ち上がり、上空を見つめる

シグナムはすでに飛び去った後だろう、他の三人とともに魔力反応

が遠ざかっている

壁に寄りかかり、何とか立ち上がると【天龍】声をかけてくる

《若、身体は大丈夫ですか?》

「かなりキツイな、全身が中までポロポロだ」

《今、巽の家の方に連絡をとりました、すぐに来てくれるはずですよ》

「そうか、なら少し寝る、結界の維持は任せた」

《はい、ゆっくりとお休みください》

「ああ・・・」

その言葉を最後に達也の意識は闇へと落ちていった

???

達也が住んでいるマンションの自室、その場で達也は一人の少女と向かい合っていた

ここは達也の深層心理の中、もっとも馴染みの深い自室が投影されているのだろう

「無茶はしないでください・・・」

目の前の少女が涙を浮かべながら達也に懇願する

「すまなかつた・・・、だが、ああしなればお前が消えていた」  
少女の言葉に罪悪感が浮かんでくるが、達也は自分の考えを話す

「確かに私は助かりました・・・、あのままでしたら私はその存在を消していたでしょう

魔力体である私たちは魔力が無くなれば消えるしかありませんから・・・」

少女は言葉を続けながら達也に近づき、その体に手をつき、顔を見上げる

「でも・・・、それであなたが死んでしまったら、私はどうすればいいのですか!？」

私がここに居るのは、あなたの能力のリスクからあなたを守るためです

あなたが生きるためなんです、それを否定するような行為はやめてください・・・」

その言葉に達也は困った表情をして、少女の頭を撫で、落ち着かせながら口を開く

「約束する・・・、と言いたいが、それは出来ない

俺は俺の大事な人たちを守るためなら最後に残った封印も解除する



覚悟がある」

それを聞いた少女がさらに顔を歪ませる

「だけど、俺も死にたいわけじゃない、あいつらといつまでも共に過ごせたら良いと思っている

だから・・・、努力はしてみようと思う、それで勘弁してくれないか？」

「・・・どうしてあなたは」

顔を俯かせ、さらに何か言おうとした時、世界が歪み始める

「・・・時間です」

「また眠るのか？」

「それが私のやるべきことです・・・、私が表に出ると言うことはあなたのすべての力が

解放されるということなんですから」

「今の俺では、数刻を待たずして消え去るな」

苦笑しながら答える達也に少女は心配そうに歪め言葉を発する

「無茶だけはしないでください、“ご主人様”、母にもよろしくお伝えください」

「わかった、【天龍】に伝えておく、また会おう、“【蒼龍王】”」あいらん

それがこの場で二人が交わした最後の言葉になった  
世界が薄れる、少女・【蒼龍王】の表情に苦笑しながら達也は意識を現実に戻した

## 翌朝 巽家

達也が目を覚ますと見覚えのある天井が見えた  
ゆっくりと身体を起こす

「くっ……」

少しだけ身体に痛みが走るが他はもう大丈夫のようだ

「起きたか？」

襖をあけ一人の女性・ふたみが入ってくる

「ええ、身体の方も問題はないようです」

「私が直したからな、だが忘れるなよ、私にも死人は治せない」

「はい、わかっています」

「今はまだそれ程でもないが、三つ目の封印を解いたら

どうなるかはわからんぞ」

そんな言葉と共に一人の青年・策が入ってくる

「と、言っても、お前はそううち三つ目の封印も解くだろうがな」

「ははは」

達也も否定はできないので曖昧な笑みを返す

「ところで、何があつた？」

お前が二つ目の封印を解かなければならないような敵が現れたのか？

「それについて、こちらでも聞きたいことがあります」

「なんだ？」

「“ヴォルケンリッター”と言う者達を知っていますか？」

「「！！」」

二人が顔が険しくなったのを達也は見逃さなかった

「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ

この名前に心当たりがありますね」

「話せ、何があつた？」

達也は昨晚遭ったことを話す

「そうか……、お前には話しておくべきなのかも知れないな

ヴォルケンリッターと我らの関係を……」

策の話に耳を傾ける達也

新たな戦いの火蓋が切って落とされようとしていた……

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## A's編プロローグ 戦いの幕開け（後書き）

破導の極み「はどののきわみ」

海鳴の守護者の一族の1つ

未寅の一族に伝わる技で

触れた箇所から“気”を浸透させ

防御を無視して身体の内部を破壊したり

“気”を拳や脚に一点集中させ

威力を爆発的に高めたりすることができる

蒼龍王「そうりゅうおう」

達也の深層心理に眠る精霊の少女

本来の姿はその名の通り龍なのだが

人型を好み、その姿を取ることが多い

容姿的には戦女神VERIITAのペテレーネ

の髪を蒼くした感じ

現在は達也の命を守るため

姿を見せることはほとんどない

達也の抱える問題

達也が封印している能力は命を落とす危険性を秘めている

その為、【蒼龍王】がその能力のすべてを使い封印している

というわけでA's編プロローグです。

新キャラが出ましたが、しばらく再登場はありません

はじまりは突然になの(前書き)

お待たせしました。

A・S 本格始動!!

## はじまりは突然になの

時は少し遡る

その日、一人の少女の人生に転機が訪れようとしていた

はじまりは突然になの

六月三日 夜

海鳴市 中丘町

その日、一人の少女・“八神はやて”は自身の乗っている車椅子で電話の前まで移動した

電話は留守電のボタンが点滅している

はやてはそのボタンを押し、聞こえてくる声に耳を傾ける

『・・・もしもし、海鳴大学病院の石田です。』

えっと、明日ははやてちゃんのお誕生日よね？

明日の検査の後、お食事でもどうかな？と思ってお電話しました

明日、病院に来る前にもお返事くれたら嬉しいな、よろしくね・

『・

はやては自分の担当医師のママな対応に微笑んで車椅子を動かした

自分の寝室に戻ったはやては、身体を車椅子からベットに移し

脇にあったスタンドライトを点け、新しく買った本を読み始める

そして、気づけば日が変わる時間になっていた

「あ、もう十二時・・・」

日付が変わる

この瞬間、彼女は九歳になったのだ

そして、それに呼応するようにはやての机に置いてあった  
一冊の鎖で縛られた本が光りだした

「え？」

はやては本が光っているのをじっと見つめる

数秒後、家が小さく揺れた

「わっ、きゃー!!」

本はゆっくりと浮かび上がりはやての目の前まで移動し

鎖をちぎるように外して、中が開かれる

《封印を解除します》

本からそんな声が聞こえてくると

はやての目の前で本の真っ白なページが次々と捲られていった

全てのページが捲られると、本は閉じられ

ゆっくりとはやての目の高さまで下降した

「あ、あ・・・」

はやてはベットの上が後ずさる

《起動》

本からまた声が聞こえると、表紙にあった剣十字が

一層眩い光を放ったのだった

そして現在・・・

十二月一日 早朝

海鳴市 桜台

巽の本家がある山の高台に少女・高町なのはの姿があった  
なのはの手には空き缶が握られている

「それじゃ、今朝の練習の仕上げ  
シュートコントロールやってみるね」

なのはは傍らのベンチに置いてあるコートに置いてある ややし  
い ( ; )

赤い宝石の形をしている相棒・【レイジングハート】に声をかける  
《わかりました》

【レイジングハート】が応えとなのはは目を瞑り息を整え、集中  
する

「りりかるマジ刈る」 (笑)

なのはの呪文と共に足元に桜色をした円形の魔方陣が浮かび上がると  
手に持っていた空き缶を上放り投げる

「デイバインシューター、シューーーーーー！！」

その空き缶を追うように、なのはの指先から桜色の魔法弾が放たれた  
「コントロール……」

はのはの魔力弾は空き缶を落とすことなく、何度も打ち上げていく  
《……18、19、20、21……》

【レイジングハート】がその回数を正確にカウントしていく  
「アクセル!!」

なのはは魔力弾を加速させる  
《……55、60、64、68、70、73……》

かなりの速度だが、それでも正確に回数をカウントする【レイジン  
グハート】

「くううう……」  
なのははきつくなくなってきたのか顔を歪めるが、それでも集中力は切  
らさない

《……98、100!!》  
「ふう」

なのはは空き缶を打ち上げるのを止める  
ゆっくりと空き缶が落ちてくるのが見えた

《よい出来ですよ、マスター》



「あはは、ありがとう【レイジングハート】

今日の練習、採点すると何点？」

《約80点と言ったところでしょうか》

「そっか」

思いの他、高い点数について表情を緩めてしまう

《ですが、最後まで気を抜かずに・・・》

「うん、じゃあ、ラスト!!」

【レイジングハート】の言葉で気を取り直し

なのはが腕を振ると、空き缶と一緒に落ちてきていた魔力弾が加速し

なのはの近くに落ちてきた空き缶を缶入れの方へと吹き飛ばした

空き缶は頂を描き、缶入れのふちに当たる

そして、中には入らずに外に落ちていった

「はうう、残念」

なのはが外れたことを残念に思っていると

空き缶が地面につく瞬間に

「ドラグーンレイ・・・」

よく知った声が聞こえ、蒼い閃光が空き缶を打ち上げる

空き缶はそのまま缶入れの中に入っていった

「おお」

《お見事です》

なのはと【レイジングハート】が賞賛の声を上げる

すると後ろから先ほども聞いた、よく知っている声が聞こえた

「詰めが甘いようだな、なのは？」

「あはは、面目ない」

なのはが苦笑しながら振り返ると少年が一人、近づいてきた

《それでも、シュートコントロールがあれば出来れば大したもの

です、落ち込むことはありませんよ》

少年・巽達也の首にかかっている蒼い宝石の相棒・【天龍】がなの

はを励ます

「にははは、ありがとう【天龍】

でも、どうして達也君はここに？

この頃、学校も休んでたし……」

「家の実家がこの近くにあるのは知っているだろう？」

用事でこっちに来てたら、ここからお前の魔力反応を感じたから、すこし様子を見にな」

「用事って、守護者の？」

「ああ、ちよつと厄介な相手でな、今日も学校には行けそうにない」

「そっか……、私手伝おうか？」

なのはは少し考えてから聞いてみる

半年前の出来事から、なのははちよくちよく達也を手伝うようにしていたのだった

達也は気にしなくても良いと言うのだが、なのは曰く

（「ユーノ君を助けたときと同じ理由になっちゃうけど

自分の近くで問題が起こっていて、自分に手伝えることがあるのに無視してるなんて出来ないよ」）とのこと

と、言っても、魔力を感じて駆けつける頃には殆ど達也が終わらせていて

実際に手伝ったことなど二、三回しかないのだが……

「そのことなんだが、なのは

今回の奴らはお前の方にも現れるかもしれない」

「私の方に？」

「ああ、だから十分に気をつけてくれ

気配を感じたら、俺も出来るだけ早く駆けつけるようにするから」

「分かった、気をつけるよ」

なのはが素直に頷くと、達也は少し聞きづらそうに言葉を発する

「それと……、この頃会ってないんだが、高町家の皆はどうしてる？」

「ん？皆元気だよ

お父さんとお母さんは相変わらずだし、お姉ちゃんも剣術の修行を頑張ってるよ

お兄ちゃんは最近ボディガードの仕事で家を開けることが多いかな

何日か前の夜に帰ってきたけどね」

「そうか」

「そうそう、お母さんは達也君が遊びにこないから寂しいって言うてたよ」

続くなのはのこの言葉に達也はビクン！！と身体を反応させる

「なのは、必ず！絶対！！数日中に！！！！翠屋に顔を出すからと伝えてくれ」

顔を青くし、脂汗を流しながらなのはにお願いする

「う、うん、わかったけど大丈夫？顔色、真つ青だよ・・・」

「大丈夫だ、このままほっておいて、あの人が起こす事態に比べたら・・・な」

「にはははは、我が母ながら否定できないのが辛いところです・・・」

と、まあ達也が恐怖に震えているうちに時間が経ったようで

《マスター、そろそろ帰らないと朝食の時間に合いませんが・・・》

「にゃ！！もうそんな時間！？急いで帰らなきゃ！！それじゃ達也君、私は帰るね！！！」

【レイジングハート】の言葉になのはは急いで帰る準備をする

「ああ、とりあえず、さつき言った事気をつけておいてくれ

それと、来週あたりから俺も学校に行けるはずだから・・・」

「うん！！アリサちゃんとすずかちゃんに伝えておくね

二人とも心配してたから、喜ぶよ！！！」

「ああ、頼んだ」

なのはが走って階段を降りていくのを達也は穏やかな表情で眺めていた

《若、身体の方はどうですか？》

達也は右手で握ったり開いたりを数回繰り返して答える

「問題ない、今日一日休めば魔力もある程度回復するだろう

あの人たちが動いたら、俺も対処に回ろう」

《却下です、緊急事態・・・たとえば、なのはさんが襲われるようなことが

ない限り、動くことは認めません。無理は禁物ですよ

リンカーコアからの魔力蒐集、セカンドリミッターの解除

身体への負担は計り知れないものなんですから》

一陣の風が達也の横を通り過ぎていく

「・・・ああ、解ったよ」

その言葉は風にさらわれて消えていった

## 高町家 ダイニング

「ただいま〜」

なのはが早朝訓練から帰ると桃子が朝食の準備をしていた

「あら？お帰りなのは

こんなに朝早くから何処に行ってたの？」

「え！？ああ、散歩だよ

早朝の散歩は気持ちいいよね、にやははは〜」

咄嗟に出たなのはの言葉に、桃子は笑みを浮かべ言葉を返す

「そうね、とっても気持ちいいわ、で、達也君は何か言ってた？」

「うん、お母さん達に会いに翠屋の方に遊びに来るって・・・」

なのはが最後まで言い終わる前に桃子の顔は邪悪な笑みに変わり

「あら、珍しいことがあると思ったらやっぱり達也君会いに行っ

たのね

それもこんなに朝早くから、そんなに達也君に会いたかったのかしら？」

「ち、違うよ！！たまたま偶然会っただけで・・・」

顔を赤くして反論するなのは、しかし桃子の方が何枚も上手だった。「これはなのはと達也君が結婚して義理の息子になる日も近いわねさすが私の娘、達也君なら私は大賛成だから逃がさないようにどンドンアタックしちやいなさい」

瞬間、なのはの顔が“ボンツ”と音を立てて沸騰する

「け、けっこ・・・、お、お母さん！！」

「あらあら、顔が真っ赤よなのは散歩をして汗もかいたみたいだし

シャワーでも浴びてすっきりしなさい」

さらに桃子はなのはが何かを言う前にお風呂場まで引っ張っていく

「え！？ちよ、待って、おかあ・・・」

バタン！！

脱衣所になのはを放り込み、ドアを閉める

中で何か言っているようだが気にせず台所へ戻る

自分で煽っておいて、何かを言われる前に放置して安全圏へ逃げますが桃子さん、はた迷惑な人である

《娘さん相手に何をやってるんですか、貴女は・・・》

「何って、遊んでるに決まってるじゃない」

胸に下げているアクセサリーからの声に即効で断言する桃子

《あゝあ、断言しちゃったよこの人、娘さんに激しく同情しますよ》

「あら、人生楽しまなきゃ損じゃない

それにそれだけが目的って訳じゃないしね」

《と、言つと？》

少し考えるそぶりを見せた桃子は微笑みながら答える

「いろいろ理由は有るけど、今一番の理由は鈍感な娘に自分の思いを認識させる、ってことかな」

《そんな事をしなくてもくつつきそうですけどね》

「わからないわよ、ライバルが多いもの」

《アリサさんにすずかさんですか？》

「それもあるけど、この頃なのは話しに出てくる

フェイトちゃんもね、だけど負けないわよ

私は絶対になのはと達也君をくつつけて見せるわ」

くつつくつつくつ、と邪悪な笑みを浮かべる桃子

《・・・彼にも激しく同情しますよ、私は・・・、それよりも朝食を作らなくて良いのですか？》

「あら、そうだったわね

じゃあ、ちゃっちゃと作って

二人をくつつける策でも考えるとしますか」

料理に取りかかりながらそんな事を宣言する桃子

この時、達也となのはが言いよつうの無い悪寒に襲われたのは言つまでも無いだろう

なのははシャワーで汗を流した後、自室に戻り

制服へと着替えていた

さっきのことについて反論したいのは山々だが

口で桃子に勝てるわけがないので

ここは無視したほうが無難という考えにいたり

自室に戻ってきたのだった

途中、物凄い悪寒が襲ってきたがまた桃子が何かを企んでいるのだらう

と、いつものことなので構わずに制服を着る

ふと机の上を見ると、フェイト・テストアツサと書かれたDVDが置いてあった

フェイトからのビデオメールだ

PT事件・・・約半年前、なのはが魔法の世界と知り合ったあの事件の終わりから

なのはとフェイトは直接会えないまでも、ビデオメールでのやり取りで

お互いの近況を伝え合っていたのだった

なのはは主に達也や家族、それに親友のアリサとすずかのことをフェイトはアースラクルーやユーノとアルフ、そして自身の裁判の状況などを話していた

「もうすぐ裁判も終わり、頑張つてねフェイトちゃん」

今ごろ時空管理局の本局へ行っているであろう友人のことを思いながら

なのはは部屋を出て、朝食を食べる為にダイニングへと向かった

ダイニングには桃子の他に士郎と美由希がいた

士郎はテーブルに座り新聞を読み、美由希は桃子の手伝いをしていた為

なのはも朝の挨拶をしつつ、桃子の手伝いに向かった

「なのは、郵便が来てるぞ」

「あ、本当!？」

お盆で運んだものをテーブルに並べていると、玄関から恭也が手に小包をもつて戻ってきた

「海外郵便、差出人フェイト・テストロツサ」

「ありがとう、お兄ちゃん!!」

小包を受け取るなのはに近づいてきた美由希が声をかける

「いつものあの子だね、またビデオメール?」

「うん、きつとそう」

「その文通も、もう半年以上になるよな」

「フェイトちゃん、今度遊びに来てくれるのよね?

家に来てくれたら、お母さん、もう、うっんつと歓迎しちゃう」

「うん!!」

士郎と桃子の言葉になのはは元気に頷く

「ユーノも本当の飼い主が見つかって、めっきり寂しいしね・・・」

美由希が肩を落としながらユーノ（フレットモード）に思いを馳せる

「お前は特に可愛がってたからな」

そんな様子に恭也は苦笑しながら答える

「えつと、でもまた預かることになるかもだよ、その飼い主さん次第・・・」

なのはもあまりの美由希の落ち込みように苦笑しながら助け舟を出した

「だといいな」

「ね」

その言葉を聞いて一気に顔を綻ばせる美由希

それに何故か桃子も便乗してきた

二人は朝食の用意をしながら

ユーノ（フレットモード）の可愛がり方で会話を弾ませる

そんな会話を聞き流しつつ、なのははフェイトやアースラクルーのみんなは今ごろ何をしているんだろうな、などと考えながら

朝食の用意を再開した

同時刻

時空管理局艦船アースラ

「管理局本局へのドッキング準備、全て完了です」

アースラオペレーターズの一人、ランディの報告を聞く人物

アースラ艦長リンディは微笑みながら答える

「ん、予定は順調、良いことね」

そこへ近づいてきたのは、これまたアースラオペレーターズの紅一



点、エイミィだ

「失礼します。艦長、お茶のおかわり如何ですか？」

「ありがとう、エイミィ、戴くわ」

エイミィの手により、リンディ専用の湯飲み茶碗に緑茶が注がれる

「本局にドッキングして、アースラも私たちも、やっと一休みね」

「ですね」

エイミィからお茶を受け取ったリンディはそばに置いてあった角砂糖の入れ物を開ける

「子供達は？」

「今は三人で休憩中のはずですよ。クロノ執務官とフェイトちゃん、さつきまで戦闘訓練してましたし、ユーノ君、それに付き合ってたから」

そんな会話をしながら、リンディは角砂糖を掴んではお茶に入れるのを繰り返す

さらに極めつけにミルクを投入してかき混ぜ、リンディ特製・リンディスペシャルの完成だ

「そう、明日は裁判の最終日だって言うのにマイペースね」

そんなことを口にしながらリンディスペシャルを飲むリンディあんたが言うなよ、と作者は突っ込みたい

リンディがふと傍らに目をやれば、お茶請けの羊羹があった

それを一切れつまみ、そばにいるエイミィに「はい」と手渡す

「まあ、勝利確定の裁判ですから」

エイミィは羊羹を受け取り微笑みながらそう言った

「さて、じゃあ最終確認だ」

アースラの食堂の一角、そこにはクロノとフェイト、アルフ、ユーノが

真剣な顔をして集まっていた

「被告席のフェイトは裁判長の問いにその内容通りに答えること」

「うん」

「今回はアルフも被告席に入ってもらおうから」

「わかった」

頷くフェイトとアルフ、そしてクロノはユーノに視線を移す

「で、僕とこのフェレットもどきは証人席、質問の回答はそこに  
ある通り」

「うん、わかった・・・」

目の前にある資料に見つめながら、思わず頷いてしまったユーノ

一瞬後、自分が何と呼ばれたかに気づいた

「つて、おい！！」

「なんだ？」

不思議そうな顔でユーノを見るクロノ

その態度がユーノの怒りのボルテージをさらに上げていく

「誰がフェレットもどきだ！！誰が！！」

「キミだが、何か？」

「んな！？」(。°。°)！！

さも当然のように答えるクロノ、ユーノは思わず愕然とする

「そりゃ、動物形態でいることも多いけど、僕にはユーノ・スクラ

イアっていう立派な名前が！！」

「ユーノ、まあまあ」(、へ、へ)＼＼(＾＾i)

さらにヒートアップするユーノをなだめるアルフ

「クロノ、あんまり意地悪言っちゃ駄目だよ」

「大丈夫、場を和ませる軽いジョークだ」

苦笑いでたしなめるフェイトにクロノは平然と答えた

「ぐぬぬぬぬぬ」(、へ、へ)＼＼(＾＾i)「抑えて、抑えて」

今にも爆発しそうなユーノだが、アルフの頑張りで何とか怒りを抑  
えていた

「事実上、判決無罪、数年間の保護観察と言う結果は確実と言って  
いいんだが・・・、一応、受け答えはしっかり頭に入れて置くよう  
に」

「はい」

「・・・はい」

そんなことには構わず話を進めるクロノに三人は返事を返すしか出来なかった

ユーノの受難は相変わらず健在だった

「お疲れ様、リンディ提督、予定は順調？」

「ええ、レティ、そっちは問題ない？」

ブリッチでは、親友の提督レティからの通信をリンディが受けたところだった

「ええ・・・、ドッキング受け入れとアースラ整備の準備はね・・・」

「え？」

親友の浮かない答えに疑問符を浮かべるリンディ

そこへフェイト達と別れたクロノが近づいてきていた

「こっちの方ではあんまり嬉しくない事態が起こっているのよ」

「嬉しくない事態って？」

「ロストロギアよ、一級搜索指定のかかっている超危険物」

「!!!」

一級搜索指定、その言葉にクロノは息を呑む

「幾つかの世界で痕跡が発見されてるみたいで

搜索担当班はもう大騒ぎよ」

「そう」

「捜査員を派遣して、今はその子達の報告待ちね」

「そっか」

物凄く残念そうな顔をするリンディ

多分、休みが潰れる可能性が出てきたことを嘆いているんだろう

クロノはクロノで真剣な顔をして、思い出したくもない過去を思い出していた・・・

自室に戻ったフェイトは机の上にある写真に目を向ける

そこにはなのはと達也、そしてアリサとさすがが映っていた  
裁判が終われば皆に会いにいける  
その事にワクワクしながら、写真から自身の腕へと目を向ける  
達也から貰った時計の時間は夕方の十五時を指していた  
（もうそろそろ学校が終わった頃かな？）  
そんなことを考えながらもう一度写真に目を向けるのだった

12月2日 AM 2:23

海鳴市 オフィス街

「ぐあああ！！」

オフィス街を少し裏に入った死角から男達の悲鳴が聞こえる

「雑魚いな、こんなじゃ大した足しにもならないだろうけど・・・」

そこにいたのは赤いドレスのような格好をしたハンマーを持った少女

「ぐうう・・・」

「・・・こそ」

少女の目の前には管理局員の男性が二人、倒れている

すると、少女はおもむろにハンマーとは反対の手に持っていた本を  
掲げる

本は空中で開かれ、真っ白なページを開き静止する

「お前らの魔力、闇の書の餌だ」

本がひととき大きな光を放つと局員の身体から淡い光の玉が抜かれた

「あああああ！！」

その瞬間、局員達はさらに大きな悲鳴を上げ、意識を手放したのだ  
った

同時刻

異の名家

達也は集中し、オフィス街に現れた結界周辺の気配を探る

「どう思う？【天龍】」

《おそらく、この頃頻繁に現れていた管理局員の方たちでしょう、彼らもこちらの異変に感じているようですな》

達也は結界が解け、一つの気配が離れていくのを感じる

どうやら事は終わったようだ

「ごめん・・・」

ポツリと呟いた達也の言葉は【天龍】に聞こえていた

《若・・・》

「大丈夫だ、今日はもう寝よう」

何も出来ない自分への苛立ちを隠しつつ、達也は家の中へと入っていった

12月2日 PM 4:24

風芽丘図書館

一台のリムジンが図書館の前に止まる

降りてきたのは紫の髪の少女・月村すずか

「じゃあ、また明日ね」

すずかは車に乗っている親友の二人、なのはとアリサに声をかける

「うん」

「ばいばい」

二人と別れたすずかは図書館へと入り

目的の物を探し始める

すると途中、本の隙間から隣の本棚で車椅子に乗った

同じ年くらいの少女が、上の方にある本に必死に

手を伸ばしているのが見えた

すずかはほおつておくことが出来ず、急いで駆け寄り

少女が取るうとしてしている本を手にとった

「え？」

少女はポカンとした表情ですずかを見上げる

「これ、ですか？」

すずかは少し恥ずかしそうに微笑みながら少女に声をかけた

「あ、はい、ありがとうございます」

少女も少し恥ずかしそうに笑いながら

“ま”の部分にアクセントをつけた

所謂、関西弁でお礼を言ってきたのだった

「そっか、同い年なんだ」

「うん、時々ここで見かけてたんよ。あ、同い年くらいの子やって」

「実は私も・・・」

話してみると、本好きなこともあり

すぐに打ち解けたすずかと少女

お互い、何度もこの図書館で見かけていて

話してみたいと思っていたようだった

同じことを考えていたのがなんだか嬉しくて

自然に笑顔になる二人

「え、と・・・私、月村すずか」

「すずかちゃん・・・、八神はやていいいます」

「はやてちゃん」

「平仮名ではやて、変な名前やる？」

「そんなことないよ、綺麗な名前だと思う」

「あ、ありがとう」

「・・・ふふふ」

すっかり意気投合したすずかと少女・はやては

すずかがはやての車椅子を押しながら出口に向かっていている間も

お喋りが尽きなかった

「なあ、すずかちゃん」

「ん、なに？はやてちゃん」

はやては、にひひと笑いながら続ける

「この間一緒にいた男の子は彼氏さんなんか？」

「へ？」

思わず首を傾げるすずか

「ほら、前にここの図書館にいたやんか」

記憶を探るすずか、すると以前に達也と一緒にこの図書館に来てい

たのを思い出した

「違うよ、達也君はクラスメートで仲良しなお友達の一人だよ・・・

・今はまだね」

すずかの最後の小さな呟きは聞こえず

「ふくん、達也君て言うんか」

はやては名前をしっかりと覚えて、以前のことを思い出していた

(そうか、彼氏さんではないんや・・・)

「・・・てちゃん！はやてちゃん！！」

「つと、なんや、すずかちゃん？」

回想していたはやてはすずかの呼ぶ声に慌てて返事を返す

「はやてちゃん、急に黙っちゃったから

どうしたのかな？っと思って・・・」

「ああ、ごめんごめん、ちょっと考え事をな」  
そんなことを言いながら歩いて

出口の近くまで行くと金髪のショートカットの女性が  
はやてとすずかの姿に気づいて頭を下げた

「ありがとうございます、すずかちゃん、ここでええよ」

それに気づいたはやてはすずかにお礼を言う

「うん、それじゃ」

すずかもその女性がはやての迎えだと気づき  
車椅子に掛けてあつた自分の鞆を手にとる

「お話してくれておおきに、ありがとうございます」

「うん、またねはやてちゃん」

二人は笑顔でまた会う約束をし、別れた

「はやてちゃん、寒くないですか？」

すずかと別れたはやては金髪の女性に  
車椅子を押ししてもらい、帰路についていた

女性ははやてを気遣うように声を掛ける

「うん、平気、シャマルもさむない？」

「私は全然」

はやての言葉に女性・シャマルは笑顔で答える

しばらく進むと前方にピンクの髪をポニーテイルにした女性が立っ  
ていた

「シグナム」

女性に気づいたはやてが名前を呼ぶと

「はい」

と短く答えた

その女性・シグナムもはやての横に付き、三人でゆっくりと家まで  
の道のりを歩いていく

「晩御飯、シグナムとシャマルは何食べたい？」

「ああ、そうですね・・・、悩みます」



「スーパーで材料を見ながら考えましようか」

「ん、そやね」

と、そこではやては少し気になっていた人物について聞いてみることにした

「そう言えば、ヴィータは今日も何処かお出かけ？」

「ああ、えくと、そうですね」

シヤマルは困った顔を浮かべ答えを探す

「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラがついていますので、あまり心配は要らないですよ」

「そっか・・・」

シグナムが直ぐにフォローするように応える

それを聞いて少し寂しそうにするはやてにシヤマルが続ける

「でも、少し距離が離れても、私たちはずっと貴女のそばにいますよ」

「はい、我等はいつも貴女のそばに」

「・・・ありがとう」

さらに続いたシグナムの言葉にはやては嬉しそうにうつつむいて応えるのだった

同日 PM7:45

海鳴市 市街地

まだまだ、賑わいを見せる夜の街

その上空に二人・・・

いや、本を持つ一人の少女と一匹の青い狼がいた

「どうだヴィータ、見つきりそうか？」

目を瞑り、集中して何かを探している少女・ヴィータに狼が話し掛ける

「居るような・・・、居ないような・・・、こないだから時々出てくる、あいつとは違う、妙に巨大な魔力反応、そいつが掴まれば、一気に20ページくらいはいきそうなんだけどな」

「別れて探そう、闇の書は預ける」

「OK、ザフィーラ、あんたもしっかり探してよ」

「心得ている」

狼・ザフィーラはそう言うのと素早く飛び去ってしまった  
その場にヴィータだけが残される

ヴィータはもう一つの手に持っていたハンマーを前方にかざす  
足元から赤く正三角形の魔方陣が出現した

「封鎖領域、展開」

《了解しました、ゲフェングニス・デア・マギー展開》  
ヴィータの命令にハンマーから声が聞こえ

結界が辺りを包み込み

賑わいを見せていた街から、生き物の気配が消えうせた

《警告、緊急事態です》

「え!?!」

宿題を片付けていたなのはに【レイジングハート】が注意を促す  
「結界!?!」

次の瞬間、結界が回りに展開したことに気が付いた

「魔力反応、大物見つけ!?!行くよ、【グラーファイゼン】」

《了解》

ヴィータは結界に引っかけた魔力反応の元へ  
移動を開始した

《対象、高速で接近中》

「近づいてきてる？こつちに!？」

なのはは達也の言葉を思い出す

- 回想 -

「なのは、今回の奴らはお前の方にも現れるかもしれない」

「私の方に？」

「ああ、だから十分に気をつけてくれ

気配を感じたら、俺も出来るだけ早く駆けつけるようにするから」

「分かった、気をつけるよ」

- 回想終了 -

(狙いは私・・・かな、だったら!!)

なのはは意を決して、結界の中心地点である

街の方へと飛び出したのだった

なのははビルの屋上で周りを見渡す

《来ます》

【レイジングハート】の声で前方を確認すると

赤い魔力弾が飛んできた

「あ!！」

《誘導弾です》

かわすことは難しいと判断して、シールドを張るなのは

「くううううううう!!！」

しかし、誘導弾には思いの他威力があり

徐々に押し込まれ始める

「あ!！」

「テートリヒシユラク!!！」

さらに反対側からもヴィータが攻撃してきていた

それもシールドで受け止めようとすのは

だが、両サイドからの強烈な攻撃にさすがの

なのはのシールドも破られ、吹き飛ばされた

ヴィータは追撃をかける

「うくう!! 【レイジングハート】お願い!!」

《スタンバイレディ、セットアップ》

なのはの願いに反応し、【レイジングハート】が起動なのはの体が桜色の光に包まれる

次の瞬間にはバリアジャケットを身に纏い

杖になった【レイジングハート】を構えるなのはの姿があった

《シュワルベフリーゲン》

「ふっ!!」

そのなのはに向けて、ヴィータは【グラーフアイゼン】で鉄球を打ち出す

鉄球は寸分の狂い無くなのはを直撃、なのはを包んでいた

光と衝突し、爆発

しかし、そこから桜色の魔力弾が飛び出してきた

構わず、【グラーフアイゼン】で煙の中心点を攻撃するヴィータ

「いきなり襲いかかれる覚えは無いんだけど

貴女が達也君が言ってた人なの？

いったいなんでこんなことするの？」

なのはは煙から抜け出しヴィータに話しかける

ヴィータは何も言わず、指先に鉄球を生み出した

「教えてくれなきゃ、わからないってば!!」

なのはは先ほど作り出していた魔力弾を操作し

ヴィータの背後から攻撃する

「な!!」

何とか一つ目はかわしたヴィータだが、二つ目はかわすことができず

【グラーフアイゼン】で受け止める

「このやるおおおおおお!!」

すぐに反転、攻撃を仕掛けるヴィータ

《フラッシュムーブ》

なのはは落ち着いてこれを回避

《シューティングモード》

「話を聞いてつてばあ!!！」

《デイバインバスター》

【レイジングハート】を変形させ、デイバインバスターを放つ  
桜色の砲撃がヴィータを掠める

ヴィータの被っていた帽子が千切れながら吹き飛ばされた

「あ……」

それを見たヴィータの雰囲気が変わる

「あう……」

その迫力になのは一瞬圧される

「【グラーフアイゼン】、カートリッジロード」

《エクスプロージョン》

【グラーフアイゼン】がハンマーのコネクト部分をスライドさせる  
そこには弾丸のようなものが見て取れた

その部分を戻す力で打ち付ける

《ラテーケンフォルム》

煙を放出し、ヴィータの魔力が一時的に強化され

さらに、【グラーフアイゼン】が変形し

ハンマーの先に突起部分と噴射口のようなものがついた形になる

「え、ええ!!！」

「ラテーケン……」

驚いているなのは、ジェット噴射による

加速で接近するヴィータ

「うおおおおおおお!!！」

「!!！」

「ハンマー……!!！」

なのはは咄嗟に障壁を張るが、一瞬で破壊

さらに【レイジングハート】をも破壊され吹き飛ばされた

「あああああああ!!！」

なのははそのままビルへと突っ込んでいった

同時刻

市街地 上空

《若、無理です。まだ体が万全では無いのですよ!!》

「だったらなのはを見捨てると言うのか【天龍】!!」

なのはが巻き込まれたのを感じた達也は、全速で結界まで飛ばしていた

《そうは言っておりません!!ですが!!》

「俺のことは良い、今は全速であいつの元へ行くことを考える!!」

《・・・引いてはくれませんか。わかりました、ですか無理は!!・・・若!!上です!!》

「ちい!!」

【天龍】を引き抜き、上空からの奇襲をはじめく達也

それは一筋の稲妻だった

「GYAAAAAAAAA!!」

そこにいたのは雷を纏う鳥のような生物・・・精霊だった

「ちい、こんなときに!!」

達也は立ち止まり、精霊と対峙する

「GRAAAAAAAAAA!!」

その鳴き声とともに精霊と達也の戦闘が開始された

同時刻

ビル内部

「げほげほ!!！」

「うりやややや!!！」

《プロテクション》

何とか立ち上がったなのはヴィータが追撃をかける

それに反応して【レイジンググハート】が障壁を張るが

「ぶち抜けえええええ!!！」

《了解》

ヴィータの声に反応し【グラーファイゼン】が攻撃を強める

それにより障壁となのはのバリアジャケットが破壊され、吹き飛ばされた

「はあはあはあ・・・」

【グラーファイゼン】のコネクト部分がスライドし、薬莖が排出される

ゆっくりとなのはに近づくヴィータ

「くっ!!！」

なのははポロボロになった【レイジンググハート】をなんとかヴィータに向けるが、それはとても弱いものだった

そんなのはにヴィータは【グラーファイゼン】を振りかぶる

（こんなので終わり？嫌だ、達也君、ユーノ君、クロノ君、フェイトちゃん!!！）

ヴィータが【グラーファイゼン】を振り下ろし

なのはは目を瞑る

ガキン!!！

いつまで経っても来ない衝撃を不振に思い

ゆっくりと目を開けるなのは

そこには黒い戦斧で【グラーファイゼン】を受け止める

金髪の魔導師がいた

「ゴメンなのは、遅くなった」

さらになのはの後ろには人間形態の淫獣「ああん!!?」(、へ、)

もとい、ユーノがいた

「ユーノ・・・君?」

「ちい、仲間か」

一度後ろに下がり、三人を見つめるヴィータ

《サイズフォーム》

【バルディッシュ】を鎌へと変形させ、それを油断無く構えるフェイト

「友達だ」

二人の少女が再び邂逅した瞬間だった

t o b e c o n t i n u e d



はじまりは突然になの（後書き）

感想・アドバイス・質問等お待ちしております。

戦いの嵐、ふたたびなの(前書き)

更新、A・Sはバトルが熱い  
書いててすごく楽しいです

## 戦いの嵐、ふたたびなの

平穏な日々を過ごすなのには  
突如襲い掛かった襲撃者  
出会い、戦い、大きな力に導かれた  
少女達の運命の歯車が、今、静かに動き始めた

戦いの嵐、ふたたびなの

バニングス邸 アリサの部屋

「あはは、そっか、そうだったんだあ」

「うん、そうなの、それでね」

自室で自慢の犬達を撫でながら  
すずかと電話をするアリサ

話題はもうすぐ会えるであろう  
なのはの友達のことに移った

「でも、フェイトに会えるのちょっと楽しみよね  
「うん、そうだね

でも、私たちでもこんなに楽しみなんだから  
フェイトちゃんと一緒に思い出がたくさんある

なのはちゃんはもつともつと楽しみなんだろうね」

「そうね、フェイトがこっちに来るって聞いて

なのは本当に嬉しそうだったもんね」

「うん・・・、それに達也君もね・・・」(、)

「す、すずか？」(。□。)!!

突然ダークな空気を纏い出した親友に驚くアリサ

「達也君も結構嬉しそうにしてたんだよ

顔には出してなかったけど、雰囲気は、ね・・・」

途中、何かを砕くような“バキッ”という音がした気がするが  
気のせいだろう・・・多分・・・

というか、何故そんなことわかるのかを問いたいアリサだが  
おそらく「いつも見てるから」と満面の笑みを浮かべてそんな  
声色で答えてくれるだろう

なのでそこは無視しつつ、話を進めるアリサ

「そ、そうね、アイツからはそういう話は聞かなかったけど  
なのはやフェイトのビデオメールのやり取りを聞いてると  
達也もそうとう仲がいいみたいね」

「そうだね、うふふ、そんなところにもライバルが・・・、今度達  
也君を問い詰めなくちゃね、うふふふふ」(、)

さらに危ない雰囲気醸し出し始めた親友に、アリサはこの話題を  
続けてはヤバイと判断

とりあえず電話を終わらせることにした

「ふえ、フェイトのお迎えイベント、今のうちから考えておこうか  
?」

「あ、いいねえ」

「う、うん、ぱあっとやろう」

「誰のお家でやるの？」

「き、喫茶翠屋とかが良いと思うんだけど

そ、そこら辺は明日学校でね、もう大分遅いから切るわね」

「あ、うん、お休みアリサちゃん、また明日ね」

「うん、お休み」

ふう、と息をついて電話を切るアリサ  
たまに見られるすずかの豹変には対応の仕方が、どうもわからない  
アリサだった

「そりゃ、あたしもあの二人の関係は気になら……って違う!!  
気にならないわよ、別にアイツのことなんてどうでもいいわよ!!」  
自分の独り言に突っ込みを入れ、顔を真っ赤にし

ウガア~~~~~と喚き始めるアリサ

愛犬たちはそんな主人の姿に、何事かと目を向けている

一通り喚き散らすと

「お嬢様~~~~!! 如何なされました!!」

ドアを蹴破り、一人の老紳士が姿を現す

「さ、鮫嶋」

「賊ですか？ 賊なのですわ!! 不肖、この鮫嶋、どんなことをして  
もお嬢様をお守りして見せましようぞ!!」

と、言つて肩に担いだ“バズーカ”を構える鮫嶋さん

「さ、鮫嶋、落ち着いて、大丈夫よ、ちよつと、ムシャクシャした  
だけだから」

「でわ、そのムシャクシャの原因を私が吹っ飛ばしちゃうであらう、も  
う五月蠅い!! 五月蠅い!! 五月蠅い!! シ ナ？ あたしは寝る  
のよ!! 早く出てけ!!」 っがはあ!!」

鮫嶋を部屋の外まで吹き飛ばして、ドアを閉めるアリサ

「はあはあ、いいわ、達也のことなんてどうでもいいけど、すずか  
が聞くならあたしも偶然そこに居合わせる事だったことよ。そう、  
偶然聞こえてくるんだから仕方ないわ、うん!!」

と、なにやら、素直じゃない主に犬達は呆れてため息を吐いていた  
そうな……

同時刻

海鳴市 結界内

「民間人への魔法攻撃、軽犯罪では済まない罪だ」

フェイトはなのはを背中に守りつつ、ヴィータへ声をかける

「なんだテメエ、・・・管理局の魔導師か？」

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ

抵抗しなければ弁護の機会がキミにはある

同意するならば、武装を解除して」

「誰がするかよ!!!」

ヴィータはバックステップからそのまま飛行して

ビルの外へ飛び出した

「ユーノ、なのはをお願い!!!」

「うん」

フェイトもそれに続き、ビルの外へ飛び出す

「ユーノ君？」

「うん」

ユーノがなのはに治癒魔法をかけると

なのはのダメージが身体から少しずつ

抜けていくのがわかった

そのままの体勢で状況を確認する

「フェイトの裁判が終わって

皆でなのは達に連絡しようとしたんだ

そしたら通信は繋がらないし

局の方で調べたら、広域結界は出来てるし

最初は達也が守護者としての任務でだと思った

だけど、達也は他の場所で戦闘をしているようなんだ

だから、慌てて僕達が来たんだよ」

「そっか、ごめんね、ありがとう」

「あれは誰？なんでなのはを？」

「わかんない、急に襲ってきたの

でも、達也君は何かを知っているみたいだった

気をつけるって注意してくれたから・・・」

「そう、なら早くここをきりぬけて

達也の所へ行こう、大丈夫

フェイトもいるし、アルフもいるから」

「アルフさんも!？」

「クロノたちもアースラの整備を

一旦保留にして動いてくれてるよ」

その頃ビルの上空ではフェイトと

ヴィータの戦闘が始まっていた

「【バルディッシュ】!！」

《アーケセイバー》

「【グラーファイゼン】!！」

《シュワルベフリーゲン》

フェイトの魔力刃とヴィータの鉄球が交錯する

「障壁!！」

《パンツァーヒンガネス》

ヴィータの障壁はフェイトの魔力刃をかき消す

「くう・・・っ!！」

対してフェイトは鉄球を避けようとするが

鉄球は優秀な誘導弾であり、その追尾能力は

スピード自慢のフェイトについていけないほどだった

「!！」

その場で鉄球の操作に集中していたヴィータだが  
気配を感じ、再び障壁を張る

「バリアーブレイク!！」

しかし障壁は、その気配の主、アルフに打ち破られる  
フェイトはそれと同時に制御の甘くなつた鉄球を引き離す  
目標を失つた鉄球同士が衝突し、爆散して消滅した

「この！！」

ヴィータはアルフに向かって【グラーファイゼン】を振り下ろす

「うわぁー！！」

アルフは障壁を張り防御するが、その衝撃に  
耐え切ることが出来ず叩き落される

「く！！・・・」

そこへ再びフェイトの襲撃、ヴィータはかわすために  
魔法を使おうとするが、アルフがそれを妨害

ヴィータは【グラーファイゼン】で【バルディッシュ】を受け止めた

（くそ、ぶっ潰すだけなら簡単なんだけど、それじゃ、意味ねえん  
だ！！）

魔力を持って帰らないと・・・カートリッジ残り2発、やれっか！  
？）

罅迫り合いの最中、ヴィータは思考を巡らせる

そして力任せにフェイトを押し飛ばし

追撃を掛けようとする

しかし、それはアルフのバインドによって止められ  
空中に張り付けにされた

「終わりだね、名前と出身世界、目的を教えてもらつよ」

ヴィータはバインドを無理に解除しようとする

「なんかやばいよ、フェイト！！」

野生の勘、とでも言えばいいのだろうか

アルフは何かを感じ取り、フェイトに忠告する

だが次の瞬間、フェイトは攻撃を受け吹き飛ばされた

「シグナム？」

フェイトを吹き飛ばしたのはピンクの髪を

ポニーテールに結んでいる片刃の剣を持った女性



そして・・・

「おおおおおおおおおおおお！！！」

アルフは銀髪の獣耳と尻尾をつけた男性に吹き飛ばされた

「【レヴァンティン】、カートリッジロード」

《エクスプロージョン》

シグナムのデバイス、【レヴァンティン】のカートリッジシステムがスライドし、魔力が一気に膨れ上がり

【レヴァンティン】の刀身が炎に包まれる

「紫電一閃！！」

「なっ・・・！？」

シグナムがフェイトに切りかかる

その攻撃をフェイトは【バルディッシュ】で受ける

が【バルディッシュ】はその受けた部分から真つ二つに切り落とされた

「はあ！！！」

《ディフェンサー》

更なるシグナムの追撃に【バルディッシュ】が障壁を張る

だが二撃目のはずのそれは威力が衰えることはなく

フェイトは打ち落とされ、ビルに突っ込んでいった

「フェイトー！！！」

アルフが素早く助け出そうとするが

そこに銀髪の男性・ザフィーラが立ち塞がる

「この！！！」

アルフはザフィーラに連撃を叩き込むが

ザフィーラはその全てを受けきっていた

「フェイトちゃん、アルフさん・・・」

ビルを出たなのはとユーノはその光景に驚いた

フェイトとアルフがおされているのだ、無理もない

「まずい、助けなきゃ！！」

いち早く正気に戻ったユーノは結界を構成する

「癒しの円のその内に、鋼の守りを与えたまえ」

なのはの足元に緑色の魔方陣が出現し

その周りを淡い光が包み込む

「回復と防御の結界魔法、なのはは絶対ここから出ないでね」

「う、うん」

なのはにそう言い残すとユーノはフェイトの元へと  
飛び去っていった

「どうしたヴィータ、油断でもしたか？」

シグナムはヴィータの前に立ち話し掛ける

「うるせーよ、ここから逆転するところだったんだ」

「そうか、それは邪魔したな、すまなかった」

と、ちつともすまなそうな顔をせずに

ヴィータのバインドを解除する

「だがあんまり無茶はするな

お前が怪我でもしたら、我らが主も心配する」

「わぁーってるよ、んなの」

小言を言われたことが気に食わないのか

ヴィータは頬を膨らせそっぽを向く

「それから、落し物だ」

そんなヴィータの頭にシグナムは何かをのせる

それはヴィータの帽子だった

「破損は直しておいたぞ」

「ありがと、シグナム」

これにはヴィータも素直にお礼を言った

シグナムはアルフとザフィーラ戦闘、そしてフェイトが  
いるであろうビルの付近に目を移す

「状況は実質三対三、奴ら程度の腕で

「一対一ならば、我らベルカの騎士に・・・」

「負けはねえ!!!」

シグナムの言葉をヴィータが続け得物へと突撃していく  
それにシグナムも続き、自らの得物の元へと向かっていった  
不意にヴィータが背中を調べると、先ほどまでそこにあったものが  
無くなっているのに気づいた

「あれ、闇の書がない!?!」

一瞬、探そうかと頭を掠めるが近くに仲間の気配を感じた  
その人物の手に闇の書があるのを確認し  
ヴィータは胸を撫で下ろし、得物の元へと向かっていった

「大丈夫?」

「うん、ありがとうユーノ」

ピルの内部、ユーノはフェイトに  
簡単な治癒魔法をかけて傷を癒す

フェイトは傍らに落ちていたポロポロの

【バルディッシュ】を持ち上げた

「【バルディッシュ】が!?!」

「大丈夫、本体は無事」

《リカバリ》

フェイトの声に呼応するように

【バルディッシュ】は修復を開始

一瞬で元の【バルディッシュ】に戻った

「ユーノ、この結界内から全員同時に外に転送・・・、いける?」  
フェイトは立ち上がり、自らが落ちてきた穴を見上げながら  
ユーノに問う

「・・・うん、アルフと協力できれば、なんとか」

「私が前が出るから、その間にやってみてくれる?」

「わかった」

ユーノの返事を聞き、フェイトはアルフに念話を飛ばす

『アルフも良い?』

『ちよつときついけど、何とかするよ!!』

アルフの返事を聞きフェイトは満足そうに頷く

「外に出たらどうする?」

「・・・達也と合流してなのはを安全な場所へ転送、それから反撃、かな」

「わかった」

「それじゃ、頑張ろう」

「うん」

話を終えると、二人は穴から飛び出し

空を翔ける

フェイトは少しだけ、視線をなのはに向けた

なのはが心配そうにこちらを見つめているのが見えた

(大丈夫、きつと助けるから)

小さく微笑みながら、自分に言い聞かせるように

心の中で呟く

そして顔を戻し、先ほど攻撃をしてきた騎士と対峙した

## 同時刻 結界外部

達也は逸る気持ちを抑えながら、精霊の攻撃を裁く

達也の目的はなのはの下へ急ぐこと

しかし、精霊を放っておけば被害が広がるばかり、守護者としてそれを見逃すことは出来なかった

それに達也にはどうしても気になることがあった

「【天龍】、奴の発現に気づけたか?」

「いえ、そんな兆候は見られませんでした。」

「本当に突然出現した感じでしたが・・・」

「守護者や精霊は精霊の発現を感じ取ることができる」

「その感覚を頼りに精霊を討伐するのだが、今回はその感覚が感じ取れなかった」

「まるでその場で出現したような感じに達也は違和感を覚えた」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAA!」

「くう!!」

「精霊の攻撃をかわしながら蒼破刃で牽制していく」

「鳥型の精霊の属性は雷、素早く動き、体から雷撃を発して攻撃してくる」

「今、考えても答えは出ないか・・・、【天龍】」

「トルネードバインド」

「雷撃をかわし一気に接近する、同時に【天龍】がバインドで精霊を拘束した」

「そこへ達也が渾身の突きを放つ」

「それを精霊のシールドが防ぐ」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAA」

「しかし、その威力に精霊が押され始める」

「その一瞬の隙を達也は見逃さなかった」

「達也の魔力が急激に上昇する」

「無茶です若!!」

「何をするか気づいた【天龍】が声を上げるが」

「達也を止めることは出来なかった」

「龍牙穿!!」

「魔力が龍の形となって達也を包み込む」

「龍がシールドごと精霊を食い破った」

「精霊の体が真っ二つの分かれ、やがて光の粒子になり霧散していった」

「すぐさま龍から達也が飛び出し」

「結界の方へと飛んでいく」

龍は達也が飛び出した直後にはじけて消えてしまった

「やはり強いな、あの程度の精霊では足止めが精いっぱいか・・・」それを眺めていた人物がいたことを達也は気づくことができなかった

《その身体で、無茶はしないでくださいと言ったはずですが？》

「あの状態で、最も確実な方法を取ったまでだそれに、許容範囲内だ、無茶はしていないよ」

結界を指し急ぎながら達也は答える

《わかりました、とりあえずこの件は保留にしましょう》

【天龍】も呆れながら声を出すしかなかった

《それより、あの精霊は・・・》

「確かに気になるが、今議論することではない

今最も優先すべきことはなのはの元へ急ぐことだ」

《・・・なのはさんの位置は結界のちょうど中心地点のようです》

「・・・かなり時間を食った、急ぐぞ！！」

《はい》

（無事でいてくれ、なのは）

達也はなのはの無事を祈りながら

なのはがいるであろう結界の中心地点を目指しただひたすらに急いでいた

同時刻 八神家

「  
」

はやてがもう直ぐ帰ってくるだろう家族のために  
夕飯を作っていると、携帯の着信音が鳴る

「もしもし？」

『あ、もしもし、はやてちゃん？ シャマルです』

「あ、どしたん？」

はやては乗っている車椅子を器用に動かし

煮詰めておいた鍋のもとへと移動する

『すみません、いつものオリーブオイルが見つからなくて  
ちよっと、遠くのスーパーまで行って探してきましたから』

「あ、別にええよ、無理せんでも」

鍋の蓋を開け、中の状態を確認する

うん、良い出来だ

蓋を閉め、弱火にし、後はゆっくり煮えるのを待つのみ

『出たついでに、皆を拾って帰りますから』

「そうか？」

『お料理、お手伝いできませんで、すみません』

「あは、平気やって」

『なるべく急いで帰りますから』

「あ、急がんでええから、気をつけてな」

『はい、それじゃ』

そう言って電話が切れる

どうやら、帰ってくるまでもう少しかかるようだ

「ほんなら、もう一品なんか作るかな？」

ヴィータあたりなんか、物凄く喜びそうや

よっしゃ、帰ってくるまでに全部終わらせて

皆をびっくりさせたるか」

はやては冷蔵庫を開けると使える食材を

ピックアップしていく

一通り材料が揃うと、はやては早速調理を開始するのだった

## 結界内部

翠の騎士甲冑を来た金髪の女性がビルの上にいる  
左手にはヴィータの処から転移させた闇の書を持ち  
そして右手の指輪型のデバイス【クラールヴィント】でつないでいた  
通話を切る

「そう・・・、なるべく急いで、確実に仕留めます」

女性・シャマルはそう言うと【クラールヴィント】に魔力を込める

「【クラールヴィント】、導いてね」

《お任せを、ペンデュラムフォーム》

【クラールヴィント】の宝石部分が外れ、形を変えながら  
前方へと浮かび上がる

少し離れてから止まった宝石部分と【クラールヴィント】が  
光の線で繋がり、二つの宝石は空中で円を描いた

フェイトとシグナムの勝負はフェイトが劣勢のまま拮抗していた

【バルディッシュ】と【レヴァンティン】がぶつかり合い火花を散  
らす

何度かの交差の後、フェイトは距離を取り、魔法を展開する

《フォトンランサー》

フェイトの周りに雷を纏ったスフィアが4つ現れる  
それを見たシグナムは愛剣に語りかける

「【レヴァンティン】、私の甲冑を」

《パアンツァーガイスト》

【レヴァンティン】の声と共にシグナムの身体が  
紫色の魔力に包まれた



「撃ちぬけ、ファイヤー!!」

フェイトのフォトンランサーは寸分変わらずシグナムに襲いかかる  
だが、シグナムは一步も動かず、その攻撃を受け止めて見せた

「あ!?!」

「魔導師にしては悪くないセンスだ

だが、ベルカの騎士に一对一を挑むには、まだ足りん!!」

シグナムは一瞬でフェイトの前まで踏み込み

【レヴァンティン】を振り下ろす

【バルディッシュ】がディフェンサーを発動させるが

あつという間に破壊され、コアの部分で受け止め、コアが欠ける

「【レヴァンティン】、叩っ切れ!!」

《了解!!》

主人の声に答えるように【レヴァンティン】から薬莖が飛び出し

【レヴァンティン】が炎に包まれる

「はあ!!」

その一撃をフェイトはまたしてもコアで受け止める

いや、コアで受け止めるしかなかった

デバイスのコアの部分はその役割上、一番丈夫に出来ている

場所である、もし他の場所で受けていたなら

【バルディッシュ】は破壊され、フェイトにも深刻なダメージを

残しているだろう

それでも、受け止めきれず、【バルディッシュ】にはひびが入り

フェイトはまたしてもビルに落とされた

ユーノはシールドでヴィータの攻撃を捌きながら

転送の準備を完了させる

しかし、それではまだ足りない

『転送の準備は出来てるけど、空間結界を破れない・・・、アルフ

!!』

『こっちもやってんだけど、この結界、めっちゃくちゃ固いんだよ!

！」

二人も、思うようにいかない作戦に、焦りを見せ始めていた

フェイトは衝撃で痛む身体を起こし、シグナムを見つめる  
シグナムは【レヴァンティン】の柄から弾丸を補充しているところ  
だった

（あれだ、あの弾丸、あれで一時的に魔力を高めてるんだ）

「終わりか？ならばじっとしている

抵抗しなければ命までは取らん」

「だれが！！」

フェイトはゆつくりと立ち上がり、ビルから飛び上がる

「良い気迫だ、私はベルカの騎士、ヴォルケンリッターの将シグナム  
そして、我が剣、【レヴァンティン】、お前の名は？」

「・・・ミッドチルダの魔導師、時空管理局囑託、フェイト・テス  
タロツサ

この子は【バルディッシュ】」

「テストタロツサ、それに【バルディッシュ】か」

二人は一瞬の間の後、その身体を躍らせた

「助けなきゃ、つう！！私が皆を助けなきゃ！！」

フェイト達が劣勢なのは、なのはの目から見ても明らかだった

この状況を覆すのであれば、少なくとももう一人  
戦える人物が必要だった

《マスター》

【レイジングハート】の声になのはが反応する

《シューティングモードエクステンション》

【レイジングハート】から光の翼が出現する

「【レイジングハート】？」

《撃ってください、スターライトブレイカーを》

「そんな！！無理だよそんな状態じゃ」

《撃てます》

「あんな負担のかかる魔法、【レイジングハート】が壊れちゃうよ  
!!!」

《私はあなたを信じています。だから、私を信じてください》  
なのはは涙が出そうになるのを必死で堪える

「・・・【レイジングハート】が私を信じてくれるなら、私も信じ  
るよ」

ユーノの結界を解き、スターライトブレイカーの  
発射準備に取り掛かるなのは

「フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん

私が結界を壊すから、タイミングを合わせて転送を!!!」

「なのは!!!」

「なのは、大丈夫なのかい?」

「・・・」

三人から、とても心配されているのがわかる

「大丈夫、スターライトブレイカーで撃ち抜くから!!!」

それでもなのはは諦めない

「【レイジングハート】、カウントを!!!」

《わかりました、カウント9、8、7、6、5、4、3》

魔力の収束にヴォルケンリッター達も気づき始める

しかし、フェイトたちがそれを妨害する

《3、・・・3、》

「【レイジングハート】?大丈夫!??」

《大丈夫です、カウント3、2、1》

なのはが【レイジングハート】を振りかぶる

「!??」

その瞬間、なのはは身体から力が抜けるのを感じた

アースラ

「アレックス、結界抜きまだ出来ない？」

「解析完了まで後少し・・・」

エイミーたちアースラクルーは戸惑っていた

優秀なはずの彼らが未だに結界の解析が出来ずにいるのだ

「術式が違う・・・、ミッドチルダ式の結界じゃないな」

「そうなんだよ、かと言って達也君が使っているのも

違う・・・、何処の魔法だろうこれ」

その時、艦内にレッドアラートが鳴り響く

「どうしたの!？」

リンデイの声に答えるべく、ランデイが状況を説明する

「結界へ高速で接近する魔力反応が一つ!!」

「これは・・・、達也君です!!」

エイミーが続けると、クロノが安堵の顔で呟く

「ようやく来たか・・・」

「突入まで、後五秒!!四、三、二、一、突入しました!!」

「・・・エイミー、追跡の用意を!!急いで!!」

「え!?あ、はい!!」

リンデイの命令に、慌てて従うエイミー

そんな母親の姿にクロノは首をかしげた

「母さん？」

「達也君が中に行った事で状況が変わるかもしれないわ

いつでも対応できるように、準備しておきましょう」

「・・・わかりました」

クロノはいまだに解析できない結界を見つめる

(皆、無事でいてくれ・・・)

そんなクロノにはなにやら得体の知れない焦燥感のようなものがあ

ったのだった

結界内

「く・・・あ・・・!?」

なのは信じられないものを見ていた

スターライトブレイカー発射直前に自分の胸の辺りから腕が生えたのだ

「しまった、外しちゃった」

少し離れたビルから女性の声が聞こえる

女性・シャマルは【クラーヴイント】で作り出した

空間転送魔法“旅の鏡”により、なのはからリンカーコアを抜き出そうとしたのだ

その為、シャマルは再度、リンカーコアの摘出を開始する

そして、次になのはの目に現れたのは

腕が淡い光を放つ球体をつかんだ場面だった

「リンカーコア捕獲、蒐集開始」

《蒐集》

シャマルの声に反応して、【闇の書】が蒐集を開始する

フェイトたちがなのはのもとへ駆け付けようとするが

先ほどとは逆にヴォルケンリッターの面々に邪魔をされる

そうこうしているうちに、なのはのリンカーコアが小さくなり

【闇の書】のページが増えていく

このままギリギリまで蒐集しようとしたシャマルに突然、戦慄が走った

騎士としての経験で後ろに飛ぶ

「はあああああああ！！！」

次の瞬間、今までシャマルが居た位置に【天龍】が振り下ろされていた

「なあ！！！」

突然の襲撃に固まるシャマル、その選択は間違いだとわかっていたが体が動く前に、追撃が来ていた

（身体が、動く・・・これなら・・・！）

自らの胸から生えていた腕がなくなつて

身体を自由を少しだが取り戻したなのはは

発射寸前で止まっているスターライトブレイカーを見上げる

（・・・私が・・・私たちが、皆を、助けるんだ！！！）

残っている力を振り絞り、なのはは【レイジングハート】を振り上げた

達也が放った回し蹴りにより、シャマルが向かいのビルへと突っ込んでいく

達也はすぐに視線をなのはに向け

なのは最後の力を振り絞って【レイジングハート】を振りかぶっているところだった

「！！止めるなのは！！撃つな！！！」

達也の叫びになのはは顔を向け、笑って応えた

《カウント、0》

「す、スターライトブレイカー！！！」

【レイジングハート】が振り下ろされ、スターライトブレイカーが発動する

桜色の巨大な閃光が上空へと放たれ、結界を完全に破壊した

アースラ

「結界、破れました!!」

「映像、きますす!!」

アースラのモニターに海鳴の街並みが写される

そこに写っていたのは、なのはのスターライトブレイカーによって破壊された結界と、なのはたちと交戦していた人物たちだった

「な!!なにこれ!?!?どういう状況?」

「これは、こいつらは・・・」

クロノの表情が驚愕に変わる

クロノの頭の片隅にあった、忌々しい記憶がよみがえってきた瞬間だった

海鳴市 市街地

なのはは全身から力が抜けるのを感じた

立っでいらなくなり、その場へと倒れこむ

そんななのはを抱きとめる人物がいた

「撃つな、と言っただはすなんだがな」

「あはは、ゴメン、でも私がみんなを助けたかったん・・・だ」

そう言っで意識を失うなのは

なのはを抱きとめた人物・達也の周りにフェイトたちが降りてくる  
「達也!!なのはは!?!」

「大丈夫、気を失っているだけだ」  
達也は言葉を発しながら上空を見上げた

『結果が抜かれた！！離れるぞ！！』  
『心得た』

シグナムの指示にザフィーラが応える

『シヤマル、無事か』

『ええ、大丈夫よ』

『シヤマル、ゴメン、助かった』

ヴィータが声をかけながら離脱する

『うん、一旦散って、いつもの場所にまた集合！！』  
他の三人も続けて離脱していった

アースラ

「あゝ！！逃げる、ロツク急いで！！転送の足跡を！！」  
「やっています！！」

エイミイは懸命にパネルを操作し、追跡しようとする

「あれは！！」

その過程で、クロノは金髪の女性が持っている本に目がとまった  
「いけないわ、急いで向こうに医療班を飛ばして！！」

「転送ポート、開きます」

リンディの指示により医療班がなのはたちのもとへ飛ぶ

「それから、本局内の医療施設の手配を！！」

「了解です！！」

そこへ、アレックスの声がむなしく響く



「駄目です、ロツクはずれました」  
エイミイたちの頑張りも実を結ばず  
逃げ足の速さにロツクすることができなかった  
結果、犯人たちを見失ってしまった  
「ああ！もう！！」  
エイミイがパネルを殴りつける  
「ゴメン、クロノ君、しくじった」  
「・・・」  
「クロノ君？」  
「第一級搜索指定遺失物、ロストログア【闇の書】・・・」  
「クロノ君、知ってるの？」  
「ああ、知っている」  
「少しばかり嫌な因縁があるんだ」  
クロノは自らの衝動を抑えるように拳を握り締めていた

海鳴市 市街地

達也が抱きかかえるのはにユーノが治癒魔法をかける  
「達也、彼らはいったい」  
「やつらの目的は魔力を集めること・・・、今はそれしか言えない」  
「それは・・・」  
「すまない、だがやつらのことなら  
俺より、管理局の人たちのほうが詳しいはずだよ」  
達也がそう言い終わると近くに医療班が転送してくるのが見えた  
すぐさまなのはを預け、達也たちも一緒に本局の医療施設へと向か  
った

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

戦いの嵐、ふたたびなの（後書き）

龍牙穿「りゅうがせん」

結界貫通能力を持つ突きを繰り出す技

達也の能力により

結界や防御魔法の構成術式を分解対象を貫く

この技の使用時、魔力で体を覆い、それが龍の姿になる

その様はまるで龍に噛み砕かれたように見える

新技登場

これからどんどん増やしていけたらいいなと思います

感想お待ちしております

再会、そしてお引越しの！(前書き)

お待たせしました。

A・S 編第3話更新です。

再会、そしてお引越しの！

本局の医務室でなのは静かに寝息を立てている  
達也はそんななのはの姿を見つめ  
安堵すると共に自らの不甲斐無さに  
憤りを感じていた

再会、そしてお引越しの！

本局 医務室

達也は自分の掌を見つめる

「守れなかった、か」

《今回の場合、邪魔が入りました

仕方の無いことだとは思いますが》

「関係ないさ、たとえどんな理由があるにせよ

俺がなのは守れなかったことに変わりはない」

【天龍】の声に見つめていた手を

握り締めながら答える達也

すると、なのはが身動きし

ゆっくりと目を開くのが見えた

「目、覚めたか？」

「・・・達也君？」

まだ寝ぼけ眼のなのはは現在の状況を  
理解していないようだった

なのはが起きたことをナースコールで伝えた

達也は、とりあえず現在の状況を説明した

「そっか、ここは本局って処なんだね」

「ああ、リンデイさんやクロノたち管理局の本拠地がここらしい」  
一通り説明されたなのはは状況を

大体理解したらしい

そんなのはに向かつて

達也は申し訳なさそうに話を切り出した

「・・・ごめんな」

「ふえ？どうしたの急に」

「直ぐに駆けつけると約束したのに

お前を守ることができなかった、だから・・・」

「そんなことない、達也君は私を助けてくれたよ

だから、スターライトブレイカーを撃てたんだから」

「いや、俺的には撃つてほしくなかったんだが」(

い)

「にはやは・・・まあ、それは置いといて

私はいつも達也君に守られてる

でも、それじゃあ駄目なんだ

私にも守りたいものがあるから・・・」

「・・・だから？」

「強くなりたいんだ

その為にも早く身体を直して、訓練頑張らないとね」

達也の声に笑顔で答えるなのは

「・・・そっか」

達也もそれに答えるように優しく笑うのだった

「だが、あんまり無茶はするなよ

今でさえ、かなりぎりぎり訓練やってるんだ  
これ以上無茶をして、いざという時に

力が出せなかつたんじゃ、意味が無いからな」

「うん、大丈夫だよ」

「・・・言っておくが、お前の大丈夫は信用できん」

「むう、ひどいよ達也君!？」

なのはが膨れて顔を背ける

「だから・・・」

そんななのはの頭に達也は優しく手を乗せる

「だから、危ない時は俺を呼んでくれ、その時は俺がお前を助ける  
から」

「え?」

なのはは顔を戻し、達也の顔を見ながら

今の言葉を反芻する

とつても嬉しくて、恥ずかしかった

瞬間、なのはの顔は“ボンッ”と音をたてて

真っ赤に染まる

同時に達也の顔も赤く染まっていた

言った達也もものすごく恥ずかしかったのだ

「うん・・・」

「・・・」

なのははうつむいたままフリーズし

達也はどうしていいかわからず

とりあえず、なのはの頭を撫でる

しばらくそうしていると、ドアをノックする音が聞こえ

「失礼するよ」

と、医務室の先生が入ってきた

「どうかしたのかい?」

顔を真っ赤にしている二人を見て首をかしげる先生

「い、いえ、何でもありません」

「そ、そうか・・・」

二人にシンクロしながらそんなことを言われ  
先生は肯くしかなかった

「じゃあ、とりあえず、診察するよ」

と言いながら小型の機械を取り出し  
なのはのリンカーコアを調べ始めた

邪魔になるといけないので部屋のソファに座った

達也に【天龍】が声をかけてくる

《ラブラブですね》

「・・・」

達也は無言のまま【天龍】を握り締める

“ミシッ”と嫌な音が聞こえた気がした

《え！？またこれ！！きゃ~~~~~》

すみません、ごめんなさい、もうしません

だから許して~~~~~》

さらに“ミシッ”という音が聞こえた気がした

《え！！同じ謝り方じゃ駄目！？

い~~~~~》

や~~~~~！！》

ちなみに、【天龍】の声は、達也が空気の振動数を操り  
なのはたちには一切聞こえなかったと言っ……



「検査の結果、怪我は大した事無いそうです

・・・ただ、魔導師の魔力の源、リンカーコアが異様なほど小さくなっているんです」

「そう、じゃあやっぱり一連の事件と同じ流れね」

エイミイの報告を聞き、リンディは流れる景色を見ながらそう口にする

「はい、間違いないみたいです・・・休暇は延期ですかね  
流れるにうちの担当になっちゃいそうですし」

エイミイが苦笑しながら言うと、リンディも苦笑して答えた

「仕方ないわ、そういうお仕事なもの」

「はは」

「くす」

「「はあ〜〜」」

エレベーター内に二人のため息が木霊するのだった

本局内 医療施設 通路

「いや、キミの怪我也軽くてよかった」

「クロノ、ごめんね心配かけて」

クロノとフェイトはなのはの部屋に向かっていた

「キミとなのはでもう慣れた、気にするな」

「・・・うん」

二人は、なのはの部屋の前に来るとドアを開けて中に入った

「うん、さすが若いね

もうリンカーコアの回復が始まっている」

なのはのリンカーコアを調べた医務官の先生は  
にこやかにそう言った

「ただ、しばらくは魔法が殆ど使えないから  
気をつけるんだよ」

「はい、ありがとうございます」

なのはの声と同時にドアが開き  
クロノとフェイトが入ってくる

「ああ、ハラオウン執務官

ちよつとよろしいでしょうか？」

「はい、なんでしょう？」

先生はクロノを連れて外に出た

フェイトはベットのの上なのはを見つめる

「・・・」

だが、一向に声が出てこない

「フェイトちゃん？」

なのはが不思議そうに声を掛けると

「なのは・・・」

ようやく名前を呼んだ

どうやら久々の再会でなんと声を掛けていいか  
わからなかったらしい

「あ、ごめんねせつかくの再会がこんなで

怪我、大丈夫？」

「あ、ううん、こんなの全然」

なのはも何処かきこちなく声を掛けると

フェイトは包帯の巻かれた左腕を隠しながら答える

「それより、なのはが」

「私も平気、フェイトちゃんたちのおかげだよ、元気元気！」

なのはは元気をアピールしようとガッツポーズを作る、が・・・  
フェイトはなのはを守れなかった自分の不甲斐無さに

顔をそむける

「フェイトちゃん？フェイトちゃ、…いた!!」

そんなフェイトを励まそうとなのはは立ち上がるうとする

しかし、身体が思うように動かず途中で倒れそうになってしまった

「あ、なのは!!」

慌てて、フェイトが支える

「あはは、ごめんねまだちょっとフラフラ」

「・・・」

なのはが笑って謝るがフェイトは心配そうに

なのはを見つめつつける

「助けてくれてありがとうフェイトちゃん

それから、また会えて凄く嬉しいよ」

そんなフェイトを安心させる為、なのはは笑顔で話し掛ける

「あ、うん、私もなのはに会えて嬉しい」

ようやくフェイトにも笑顔が戻り

二人は抱き合って再会を喜んだ

「・・・あゝ、良い雰囲気のところ悪いが、俺の存在忘れないでく

れるか？」

「!!」

二人の様子を黙って見ていた達也が、さすがにこれ以上

放置されるのは悲しくなると思い、声を掛ける

「た、達也君」

「た、達也」

二人とも驚いて離れると、顔を赤くしてもじもじとした

「達也、いつからそこに？」

「最初から」

「ご、ごめん気づかなくて」

「まあ、気にするな、お前達二人のせつかくの再会だ

少しくらい周りが見えなくなっても仕方ないさ」

達也は苦笑しながらフェイトに向かって手を差し出す

「改めて、久しぶりだな Fayette」

「う、うん久しぶり達也」

少しあたふたしながらその手を取り握手する Fayette

「元気そうで何よりだ」

「うん、達也も」

お互いに笑い合い、手を離す

「ところで、達也はどうしてここに？」

「どうしてって、なのはの看病って言うか  
様子を見ていただけだよ」

「ずっと？」

「ずっと、なあなのは？」

「えー！あ、う、うんそうだね」

なのはは布団に潜り込み、顔を隠す

どうやら先ほどの達也の恥ずかしい言葉を思い出したらしい  
「・・・どうした？」

急に顔を隠したなのはに達也が声を掛ける

しかし、それになのはが反応する前に腹のそこから

響くような声が聞こえた

「ふ〜ん、ずっとつきつきりだったんだあ・・・？」

突如、黒いオーラを放つ少女に達也たちは身震いした

「「ふえ、フエイト（ちゃん）？」」

その光景はどこかで見たことあるものだったから

なおさら二人の恐怖感はおおられる

「ふふふ、なのは負けないよ、うふふふふふふふふふふ…」

「「な、何が？」」

「ふふふふふ」

このなんとも恐ろしい雰囲気はクロノが

話を終え、部屋に入ってくるまで続いたという

本局 技術部 メンテナンスルーム

ユーノとアルフがメンテナンス装置で

【レイジングハート】と【バルディッシュ】の様子を

見ていると、なのはたちが部屋に入ってきた

「なのは!!! フェイト!!!」

アルフは駆け足で寄っていき、ユーノもそれに続く

「ユーノ君、アルフさん」

「なのは、久しぶり」

「はい!!!」

なのはとアルフが元気に挨拶をする

「達也も久しぶり」

「ああ、お前達も元気そうで何よりだ」

前回、いろいろあり挨拶が出来なかった達也とユーノも挨拶を交わす

一通り挨拶が終わったところで、フェイトがメンテナンス装置

に近づき、ヒビの入った【バルディッシュ】たちを見つめる

「【バルディッシュ】、ごめんね、私の力不足で・・・」

「・・・破損状況は？」

「正直、あんまり良くない

今は自動修復をかけてるけど、基礎構造の修復が済んだら

一度再起動して、部品交換とかしないと

「そうか・・・」

なのはも装置に近づき、【レイジングハート】に目を向ける

そこでふと思いついたようにアルフが疑問を投げかける

「ねえ、そういえばさああの連中の魔法って何か変じゃなかった？」

「あれは、ベルカ式と言われる魔法だ」

アルフの問いに答えたのは達也だった

「ベルカ式？」

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

「遠距離や広範囲攻撃をある程度度外視して

対人戦闘に特化した魔法で、優れた術者は騎士と呼ばれる」

更なる問いをユーノとクロノが答えていく

「確かに、あの人ベルカの騎士って言った」

「だろうな、あいつらは騎士の中でもさらに上位に入る存在だろう」

フェイトが続けた言葉を達也が肯定する

「・・・随分詳しいんだな、達也？」

クロノが真剣な口調で問い掛ける

その態度に達也は肩を竦める

「・・・あれの特性を知っているなら自ずと答えは見えてくるんじゃないか？」

「やはり、そうか」

「まあ、俺達が知っている情報なんてお前達とさほど変わらんさ」

達也とクロノ、二人の話にまったくついて行けず

周りの面々は首を傾げる

そんな面々の為に話を戻したのは達也だった

「さて、話を戻すが、ベルカ式最大の特徴は武器にある」

「・・・デバイスに組み込まれたカートリッジシステムといわれる  
武装」

「儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで  
瞬間的に爆発的な破壊力を得る・・・危険で物騒な代物だな」

「だが、その威力は折り紙つきだ

それはお前ら二人も十分理解していると思うが」

達也はなのはとフェイトに視線を向ける

二人はその威力を思い出し、改めてぞつとした

「なるほどねえ、そう言えば達也の魔法は何か名称は無いのかい？」

「俺も詳しくは知らないが、リンディさんたちが海鳴に来たときは

“エレメント式”と呼んでいたそうだ、それでいいんじゃないか？」

「エレメント式か、そうだね、これからはそう呼ぶことにしようよ」と、ユーノが閉めたところで、なのはは再び【レイジングハート】に目を向け、声をかける

「いっぱい頑張ってくれてありがとね【レイジングハート】今は、ゆっくり休んでて」

ふと、クロノが時計を見るとかなり時間がたっていて次の予定の時間が近づいているのに気づいた

「フェイト、そろそろ面接の時間だ

なのはと達也、君たちもちよっといいか？」

と言うとさつさと歩いていってしまった為

なのはと達也は顔を見合わせ

疑問を感じながらもついていくことにした

なのはと達也と別れ、リフレッシュルームでジュースを

飲みながら休憩していたユーノとアルフにエイミィが声をかけて来た

「ユーノ君、アルフ」

「エイミィ」

「【レイジングハート】と【バルディッシュ】の部品さつき発注してきたよ

今日明日中には揃えてくれるって」

「ありがとうございます」

「でね、さつき正式に今回の件がうちの担当になったの」

「え？でもアースラは整備中じゃあ？」

「そうなんだよね・・・、あ！そうだ

クロノ君知らない？」

「なのはとフェイト、達也を連れて面接だった」

「何か、管理局の偉い人だそうですね」

「へー」

と、エイミィが面接の予定を調べてみると

自分の知っている人が面接官だと言ったことがわかった

「ああ、グレアム提督なんだ

ということは、フェイトちゃんの保護観察の話かな」

「グレアム提督？」

「うん、グレアム提督はクロノ君の指導教官だった人なんだよ

歴戦の勇士、一番出世してたときで艦隊指揮官

後に執務官長だったかな」

「めっちゃくちや偉い人じゃん!!」

あまりの大物ぶりに二人の表情は驚愕にかわる

「うん、でもいい人だよ、優しいし」

二人の驚きぶりが面白く、エイミィは笑いながら

そう言ったのだった

なのは達が部屋に入ると

初老の男性が窓に向かって立っていた

管理局で顧問官を務める

ギル・グレアムと言う人だそうだ

彼はフェイトの保護監察官になるという話だった

「保護監察官と言っても形だけだよ

リンディ提督から先の事件やキミの人柄についても

聞かされたしね

とても優しい子だと」

「あ、ありがとうございます」

照れながら頭を下げるフェイト

グレアムは資料に目を通す

「うん？なのは君と達也君は日本人だったな、懐かしいな、日本の

風景は」

「え？」

「来たことがあるのですか？」

「私もキミ達と同じ世界の出身だよ、イギリス人だ」



「ええ！！そんなんですか！？」

グレアムの答えになのはが驚きの声を上げる

「あの世界の人間の殆どが魔力を持たないが稀にいるんだよ、君たちや私のように

高い魔力素質を持つものが」

グレアムがさらに資料を読み進めると

ある項目が目に入った

「はは、なのは君の魔法の出会い方は

私にそっくりだ、私の場合は、助けたのは

管理局の局員だったのだがね

もう、五十年以上前の話だよ」

話し終わるとグレアムは達也の資料に目を通す

「達也君は巽家の後継者か

海鳴の守護者としての使命は大変だろう」

「・・・、何故それを？」

それまで黙って話を聞いていた達也が

探るような目つきで、グレアムを見つめる

「はは、安心したまえ、この資料には何一つ

重要なことは書かれていないよ」

そう言って資料を差し出すグレアム

確かにその資料は殆どが空白だった

「十六年前、リンディ提督たちをあの地へ送ったのは

私なのだよ、私は彼女達の上官だったからね」

「では、海鳴の話は？」

「私も直接、先代の守護者に聞いたよ

そして上へ上げる資料の改竄を行ったのも私だ」

「そうですね、すみません、疑うようなことをして・・・」

「いや、気にしなくてもいい、私もちよっと意地が悪かったからな」

グレアムが微笑みながら続ける

「しかし、本当に大変だろう？守護者としての使命は」

「いえ、それほど大変に感じたことはありません  
あそこには守りたいもの・・・、守りたい人たちが  
いますから、だから俺はあの土地を守るんです  
どんな大きな事件が起こったとしても、必ず・・・」

「「達也（君）」」

なのはとフェイトが達也を見つめ

「そうか・・・」

グレアムの表情が綻ぶ

だが達也だけはその表情に違和感を覚えた

（なんだ今の感覚は？）

達也がその答えを見つける前に

グレアムは表情を戻し、フェイトに顔を向ける

「フェイト君、キミは彼らと友達なのだろう？」

「はい」

「保護監察官として約束してほしいことは一つだけだ  
友達や自分を信頼してくれる人のことは決して

裏切ってはいけない、それができるのなら

私はキミの行動について何も制限しないことを約束するよ」

グレアムの目がフェイトを見つめる

「できるかね？」

「はい、必ず」

フェイトもグレアムに正面から向き合い

はつきりと答えた

「ん、いい返事だ」

その目と言葉にグレアムは満足そうに頷いた

話が終わり、なのはたちが退席するとき

クロノが足を止め、グレアムに声を掛ける

「提督、もうお聞きおよびかも知れませんが

先ほど自分達はロストロギア、闇の書の

捜索・捜査担当に決定しました」

「そうか、キミがか、私が言えた義理では無いかも知れんが無理はするなよ」

「大丈夫です、窮地にこそ冷静さが最大の友、提督の教え通りです」

「ん、そうだったな」

「では」

頭を下げ退室するクロノ

グレアムは見えなくなるまで

その背中を見つめていた

クロノが部屋から出ると

達也が壁に寄りかかりながら

何かを考え込んでいた

「どうかしたのか？」

「・・・いや、なんでもない」

先ほどの違和感について考えていた達也だが

どうにも思考が上手くまとまらない為

答えを出すのを断念し、そのまま歩き出す

クロノは首をかしげながらも

その後が続いたのだった

同時刻

海鳴市内 八神家

「はやてちゃん、お風呂の支度できましたよ」

グイータやザフィーラと共にテレビを見ていたはやてに

シヤマルから声がかかる

「うん、ありがとう」

「ヴィータちゃんも一緒に入っちゃいなさいね」

「はい」

はやてと一緒に入れるのでヴィータも素直に頷いた

「明日は朝から病院です、あまり夜更かしされませぬよう」  
新聞から目を上げたシグナムが一声かける

「はい」

「それじゃ失礼しますね」

返事をしたはやてをシヤマルが静かに持ち上げ

お風呂場へ移動する

「シグナムはお風呂どうします？」

「私は今夜はいい、明日の朝にするよ」

シグナムが答えると、ヴィータが意外そうな顔をした

「お風呂好きが珍しいじゃん」

「たまにはそういう日もあるさ」

「ほんならお先に」

「はい」

はやてたちがリビングを出たのを見計らってザフィーラはシグナムに声をかける

「今日の戦闘か？」

「聡いな、その通りだ」

シグナムはその言葉と共に服を少し捲り、腹部を晒す

そこには細長い痣のようなものがあつた

「お前の鎧を打ち抜いたか」

「澄んだ太刀筋だった、良い師に学んだのだろうな」

服を戻し、先ほどの戦闘を思い返すシグナム

「武器の差が無ければ、少々苦戦したかも知れん……」

「だが、それでもお前は負けないだろう」

「そうだな……、管理局が相手ならまだ何とかなるだろうが」

シグナムはソファァーから立ち上がり、窓に移動する

「巽、か？」

「ああ、奴の戦闘技術、“龍視”、そして蒐集をキャンセルしたあの力

どれも侮れるものではない」

「それでも、我らが悲願はやり遂げなければ」

「ああ、我らヴォルケンリッター、騎士の誇りにかけて、空を見上げるシグナム

そこには綺麗な月が浮いている

夜天の空が広がっていた

同時刻

時空管理局本局 艦船ドック

「あら」

リンディが扉を開けるとちょうどフェイトが歩いてきているところだった

「あら、フェイトさん」

「リンディ提督」

「怪我は大丈夫？」

「はい、なんともありません」

リンディが優しく微笑むと少し照れくさそうに答えるフェイト

「良かったわ、フェイトさんもアースラに？」

「はい」

「じゃあ、一緒に行きましょうか」

フェイトの答えに安堵して、ゆっくりと歩き出すリンディ

フエイトはやはり照れながらその後についていった

その頃なのはは、もう一度簡単な検査を終え

エイミイの案内で艦船ドックへと向かっていた

「え！？親子って、リンデイさんとフエイトちゃんか？」

「そう、まだ本決まりじゃないんだけどね

養子縁組の話をしてるんだって

プレシア事件でフエイトちゃん天涯孤独になっちゃったし

艦長の方から家の子になるって・・・

フエイトちゃんもプレシアの事とかいろいろあるし

今は気持ちの整理がつくのを待っている状態だね」

「そうですか・・・」

「なのはちゃん的にはどう？」

「ふえ！？うんくと、なんだか凄く良いと思います」

「そっか」

エイミイがなのはの答えに満足そうに微笑む

「でも、そうするとクロノ君

お兄ちゃんですね、フエイトちゃんの」

「そうそう、でも結構気が合うみたいだし

案外いい感じの兄妹かも」

「あははは、そうですね」

と、そんな話をしながら二人は歩いていた

リンデイとフエイトがドック入りしている

アースラを一望できる部屋に入ると

達也とクロノがいた

「クロノ、達也君」

「艦長」

「お久しぶりです、リンデイ提督」

「ええ、貴方も元気そうで何よりだわ」

二人が挨拶を交わすとリンディの後ろから

フェイトも部屋へと入ってきた

「フェイトも一緒か」

「うん」

リンディは手に持った端末をクロノに見せる

「今回の事件資料、もう見た？」

「はい、さつき全部」

リンディとフェイトが達也の対面の席へと座り  
クロノも達也の隣に座る

「なのは達の世界が中心なんですよね

魔導師襲撃事件って？」

「そうね、なのはさん達の世界から個人転送で  
行ける範囲にほぼ限定されてる」

「あの辺りは本局からだとかかなり遠いですからね  
中継ポートを使わないと転送できない」

「・・・達也の方で止めたりとか出来なかった？」

「残念ながら、俺の役目はあくまで海鳴の

平和の維持なんだ、海鳴以外の場所へは

そうそう、首を突っ込むわけにもいかない」

「そうなんだ・・・」

「それに、俺も奴らにリンカーコアをやられて  
動けなかったからな」

「・・・え!?!?!」

三人は心底驚いた顔をする

「正確には、魔力を吸い取られる際

二つ目の封印を解除して、無理やり脱出したから  
その反動で動けなかったんだけどな」

「・・・あれをまたやったの」

フェイトは一つ目の封印を解除したときのことを思い出し  
悲しそうな顔をする

「もうほぼ回復したから大丈夫だから、そんな顔をするな」

達也はフェイトに微笑みかけながら話を続ける

「話を戻すぞ、その時に奴らをこのまま野放しにすれば

海鳴に危険が及ぶ可能性が出て来た

俺も上からの命を受け、あいつらを止めるつもりだが・・・」

「あの精霊ね」

リンディが答えると達也は静かに頷く

「はい、どうもおかしい。あのタイミングで、しかも俺たちに感知されることなく

精霊が誕生した・・・、これを偶然で済ませるにはちょっと出来過ぎていて・・・」

「・・・」

達也の言葉に三人は無言になる

達也の考えを否定する要素がない

三人は今回の任務の難しさを改めて認識したのだった

「アースラが使えないのは痛いですね」

「あいている艦船があるといいのですが・・・」

フェイトの言葉にクロノは整備されている艦船たちを見つめる

「長期稼働できる船は二カ月先まで空きがないって・・・」

「そうか・・・、というかフェイト、君は良いのか？」

「え、なにが？」

「囑託とはいえ、キミは外部協力者だ、今回の件に無理につき合わなくても・・・」

「クロノやリンディ提督が大変なのに呑気に遊んでなんかいられないよ

アルフも付き合ってくれてるって言っているし、手伝わせて」

真剣なフェイトの顔にクロノは困った顔で黙り込んでしまう

「やっぱり、あれで行きましようか」

「・・・へ？」



急に手をポンと合わせ、そう宣言するリンディにその他三人は呆けた顔でリンディを見た  
「うふふ」

それを見たリンディは笑顔を深くして三人を見るのだった

数時間後

ミーティングルーム

あの後、リンディによってアースラの主要メンバーが集められた

「さて、私たちアースラスタッフは今回、ロストログリア“闇の書”の搜索、および

魔導師襲撃事件の捜査をすることになりました

ただ、肝心のアースラがしばらく使えない都合上、事件発生時の近隣に臨時作戦本部を

置くこととなります。

分割は観測スタッフのアレックスとランディ」

「はい」

「ギャレットをリーダーとした操作スタッフ一同」

「……………はい……………」

「司令部は私とクロノ執務官、エイミー執務官補佐、フェイトさん以上三組に分かれて駐屯します

ちなみに司令部はなのはさんの保護も兼ね、なのはさんのお家のすぐ近くなりま〜す」

笑顔で宣言するリンディになのはとフェイトは顔を見合わせ

「わぁ……！」

体で喜びを表す

「さらに詳しく言つと、達也君が住んでいるマンションの部屋の隣の部屋になりまゝす」

さらに良い笑顔で宣言するリンディに達也は自身の耳を疑い

「はあ!?!」

体で驚きを表した

数日後

海鳴市 達也の住むマンション

「フエイトちゃん、あそこが私の家」

「うん」

宣言通り達也の部屋の隣に引っ越してきたリンディ一家なのは達は嬉しそうに玄関先で街の様子を見つめていた

「ほんとに引っ越してきたよ、おい」

達也は手を額に当てながらため息をつく

「ああ、達也君、達也君の部屋を挟んで反対側の部屋の人っていつ頃帰ってくるのかしら?」

引越しの挨拶をしたいのだけけど・・・、他の部屋の方々は終わって、後はあの部屋だけなのよ」

「その部屋は帰っては来ませんよ、部屋は借りられています、ここ数年、姿を見かけていません」

「そう、真霜さんマシモといったかしら、どんなご家族なの?」

「・・・そうですね、とても賑やかな家族ですよ、父親と母親

そして俺と同一年の娘さんの三人家族でした、昔はよく遊んだんですが・・・」

達也が思い出すように話すのを見て、リンディは笑みを浮かべる

「あら、もしかしてその女の子は達也君の好きな子かしら？」  
「……！！」「……」

達也の後ろで誰かが反応したが、達也はかまわず答える

「そうですね、初恋というのならそうかもしれません

俺が初めて守りたいと思った奴ですから、まあ今は近くにいないので  
守りたくても守れないのですが……」

苦笑を浮かべる達也の肩が両方掴まれた

「はぁ？」

後ろを振り向くと四人の鬼が出現した

「なのはにフェイト、それに何でいるのか分からないがアリサにす  
ずか……、どうした？」

あまりの黒いオーラに達也が冷や汗をかきながら聞く

「ちよつとその話、詳しく聞かせてもらえないかな？」

「私も凄く興味があるんだその話」

肩を掴んでいるすずかとフェイトが腹の底から声をだす

「私たちもききたいな（わ）その話」

後ろに控えるなのはとアリサも同じような声だ

「あら、それじゃあ、どこかでお茶してきたら、ここはまだ散らか  
っているし」

「じゃあ、うちのお店で」

「……うん、そうしよう」「……」

リンディの提案に四人はすぐに同意すると達也を引きずっていく

「は！？ちよ、まで、ええ……！！？」

何が何だか分からず四人に引きずられていく達也だった……

「あ、ちよつと待って、私も挨拶と一緒に行くわ」

そのあとをリンディも一緒に歩いて行くのだった

数十分後

翠屋 オープンテラス

四人に尋問され、昔の女？のことを吐かされた達也はテーブルでぐったりしていた

四人はアースラオペレーターであるリンディの持ってきたフェイトの聖祥の制服

を囲み笑い合っていた

「大変ね、達也君？」

「誰のせいですか、誰の……」

達也の正面に座り、笑いながら話しかけてくるリンディに達也は恨みの籠った目を向ける

「あらあら、浮気はいけないわよ」

「いや、浮気つて、俺があいつ、“氷澄”<sup>ヒスミ</sup>と一緒に居たのはなのは達と出会う前なんです……」

もう何を言っても無駄だと思いたため息を吐く達也、そこで一つ気になったことが合ったのを思い出した

「そう言えば、どうしてあの家が家族だと？一人暮らしだとは思わなかったんですか？」

「真霜冬馬<sup>マシモ トウマ</sup>、都<sup>ミヤコ</sup>、それと娘さんは氷澄さん<sup>ヒスミ</sup>だったわよね？」  
それだけで達也は全てを悟った

「そういえば、あの人たちも母さんや桃子さんと幼馴染なんでしたね十六年前にあなたたちに会っていたとしても不思議じゃない」

「ふふ、そういうこと」

リンディはいたずらの成功した子供のように笑ったのだった

「え、足りない部品ってこれ？」

部屋にいたエイミーは送られてきたデータを前に驚きの声をあげる

《エラーコード203、必要な部品が不足しています》

エラー解決のための部品、“CVK-792”を含むシステムを組み込んでください》

(【レイジングハート】と【バルディッシュ】、本気なの？

“CVK-792”・・・、ベルカ式カートリッジシステム・・・)

《お願いします》

それは【レイジングハート】と【バルディッシュ】の切実な願いの  
声だった

t o b e c o n t i n u e d

再会、そしてお引越しの！(後書き)

感想お待ちしております。

間章 アリサ・バニングスのスクールデイズ（前書き）

遅くなりました。  
今回は短いです。

## 間章 アリサ・バニングスのスクールデイズ

なのはの友達、フェイトが転入してきて一週間  
学校そのものが初体験なフェイトは、なんだか色々と危なっかしい  
つたらなくて

なのはやすすか、ついでに達也共々、なんだかんだで目が離せない  
あたし“アリサ・バニングス”だったりします

## 間章 アリサ・バニングスのスクールデイズ

### 学校 昼休み

「はあ、やっとお昼だよ」

「おなかすいたね」

なのはとすすかがそんなことを話しながらあたしの周りに集まっ  
てくる

「達也、お昼だよ、起きて」

フェイトは四時間目を寝て過ごしていた達也を起こそうとしている  
だが、そんな起こし方じゃ達也は起きない

助けてやるうと席を立とうとすると二人の男子が達也に近づいてい  
った



「テストロツサさん、そんなんじゃ達也は起きないよ」

「ここは俺に任せてよ」

達也とよく一緒に居る男子二人組だ

「あ、うん、お願いしていいかな？」

フェイトが達也のそばから離れ、一人が達也の前に立つ

何をするのかと見守れば、そいつは達也の耳に息を吹きかけた

「!!!」

ガタン、と机を鳴らし達也が飛び起きる

一瞬呆然と周りを見渡し息を吹きかけた奴を見つける

「・・・何をしている？」

「フェイトちゃんがお前を起こそうとしていたから俺が代わりに起こしてやったんだ」

どうだ、と言わんばかりに胸を張るその男子無視し

もう一人の男子に目を向ける達也

「・・・どうして止めなかった？」

「そいつが何をするか俺にも読めなかったんだ・・・、でも良い反応だったな

お前が飛び起きるところなんて初めて見たぞ」

「だよな!!身体がビクンツてなったぞ」

二人が笑いながら話しているのを聞いた達也は、一度フェイトに視線を向ける

「・・・フェイト、何か用があつたのか？」

「ふえ!?あ、その、今日は達也も一緒に私たちとお昼食べないかなと思つて・・・」

急に話を振られ、ドモリながらも答えるフェイトの声が達也の顔を見た瞬間に止まった

「そうか、じゃあ先に食つててくれ、俺も後から行く」

「え!?う、うん」

フェイトの答えを聞いて達也は男子二人に振り返る

するとそれまで笑っていた男子二人が固まった

「お前たちはちょっと俺とつき合ってもらっぞ」

達也はそう言うと二人の首根っこを掴んで引きずっていく

「ちょ、待て、起こしたのは俺じゃないだろう!!俺もなのか!？」

「フェ、フェイトちゃん助けて!!」

「え、え?え!？」

オロオロしているフェイトの肩に私は手を置いた

「ア、アリサどうしよう?」

「いつものことだから気にしなくていいわ」

まあ、クラスメイトともうまくやっているようだし、当面問題はなさそうだ・・・、多分・・・

私たちはとりあえず、達也が来るまで少しずつ食べていることにした

「そう言えばフェイトちゃん、宿題ってちゃんとやってる?」

「うん、ちょっと難しいけど何とかやってるよ」

「頑張ってるね」

「うん、ありがとう」

すずかとフェイトがそんな話をしていた

海外出身?のフェイトは漢字の読み書きがあんまりできないので先生から特別な宿題が出されている

(なんか、凄いスピードでおぼえているみたいだけど・・・)

「でも、アリサは凄いいよね。英語も日本語も完璧なんて」

「えっへん、パーフェクトバイリンガル」

「「「わー」」」

褒められて悪い気はしない・・・だが

「でも、フェイトの理数系の成績についてはビミョーに納得がいかないのよね」

そう、納得いかないのだ、フェイトだけじゃない

「なのはもだけど、なんで二人して理数系だけが抜群に成績いいのっ!?!？」

私特製の成績表を出して二人に詰め寄る

ちなみにこんな感じだ

文系 アリサ 学年一位 (満点)

達也 上の上 (90点台)

すずか 中の上 (70点台)

なのは 中の下 (50点台)

フェイト かなり気の毒 (泣) 滲んでいて読めない

理系 なのは 学年一位 (満点)

フェイト 学年一位 (満点)

アリサ 学年一位 (満点)

達也 上の上 (90点台)

すずか 中の中 (60点台)

「わゝ、わかりやすい」

すずかがそんなことを言っているが、今は無視しさらに二人に詰め寄る

「えゝ？」

「ええとなんでだろう・・・？」

視線を逸らし、ごまかしにかかる二人

(私からそんな簡単に逃げられるとは思わないことね)

二人を詰問するために口を開こうとした時

「何やってんだ？」

そんな声に遮られた

「あ、達也君お帰り、アリサちゃんがね私たちの成績表を作ってくれたんだよ」

すずかが成績表を達也に見せる

「へゝ、よくできているじゃないか」

そんな一言で片づけ、自分のお昼を用意する達也

そこでちよつと気になったことを思い出した

「達也、あんたテストで手を抜いているでしょう？」

「・・・なんでそうなる？」

私の突然の言葉にみんなが驚き視線が集まる

「あんたがこの間のテストで間違えたところがおかしかったのよ」

「……」

「基礎問題を間違えて応用問題が出来てるなんてどういうことよ」

「なんでお前がそれを知っている？」

「先生が“なんでそんなところを間違えたのかしら？”って呟いてたわよ」

「……ケアレスミスだろ、ほら俺授業中よく寝てるし」

なんて言ってるが成績を一度も落としたことのないこいつが言っても何の説得力もない

「わかったわ、今度のテストから勝負よ達也！！」

一度でも相手より低い点を取った方が負け

負けた方が勝った方の言うことをなんでも一つ聞く

「これであんたも本気を出さないといけないでしょう！」

「……いや、俺に何のメリットもないだろう、それ」

「な！！私がなんでも一つ言うことを聞くって言ってるのよ！？」

「いやいや、俺はそんなこと望んでないから」

「なんですって！！」

昼休み中そんな話をしていたらすっかりお昼ご飯を食べる時間が無くなってしまった

しかも、結局テストの勝負を認めさせることができなかった

「……二人は何してるの？」

達也とアリサが言い争っている後ろでさっさとご飯を食べたフェイトとすずかは

勉強道具を机の上に出し、急に勉強を始めた

そんな二人になのはが声をかけたのだった

「「え！？い、いや、達也（君）にお願いを聞いてもらおうなんて思っただけよ」」

二人は慌てて否定するが、その手が勉強をやめることは無かった・

その時、アリサと言い争いを続けていた達也の背筋に悪寒が走ったのは気のせいではないだろう

校庭

五時間目 体育

「はーい、準備は良いですか？」

先生が試合を始めようとしているが私はちょっとやることがある

「すずか、フエイト、なのは、この間は達也の幼馴染の話しをあんまり聞けなかったわよね」

私の話を聞いた三人は動きを止める

そして私たちの雰囲気気づいたのか達也はそっとその場を離れようとする

しかし、それはもう対策済みだ

「な！？お前ら、離せ！！」

達也の足に二人の男子、お昼に達也に連れて行かれた二人だ

その二人を誘導し、達也の足止めをしてもらったのだ

「悪いな、さっきの仕返しをさせてもらっぞ」

「バニングスさんには逆らえん、諦めろ」

「くっ！！」

達也は周りを見渡す、みんな目を逸らしてしまった

「達也君」

前を向くとドッチボールのボールを持った鬼神・・・、いやすずかがいた

「話してくれないかな、その女の子のこと・・・」

「いや、話すようなことじゃ……」

「じゃあ、話そうよ」

「うん、話しても問題ないんだよね」

「すずかの後ろに別のボールを持った、なのはとフェイトが現れる」

「いや、まあその、なあ……」

「その女の子と一緒に寝たことはあるのかな？」

「……」

「その女の子と一緒に風呂に入ったことはあるのかな？」

「……」

「その女の子とキスはしたことあるのかな？」

「……」

「……まさか、全部？」

「い、いや、キスといつても頬、頬だし、その小さい頃の話だから……」

「……」

達也がその言葉を言った瞬間にその場の空気が凍った

「……」

三人が徐々に達也に近づいていく

「やば、俺もしかして地雷踏んだ」

「……うん」

達也は自分の失言を自覚し、さらに抑えている二人からダメ押しを

くらう

三人は達也の目の前で止まるとボールを思いつきり振りかぶる

「……達也（君）の馬鹿！！」

「……ギャー——————！！」

そのボールは達也+二人にめがけて叩きつけられた

なお、あえて誰も突っ込まなかったが、この時三人のボールは光り

輝き

通常ではありえない威力を持っていたことを追記しておく

「なんかすつきり出来ないわね」

その光景を見ていたアリサは達也の話聞いた辺りから  
もやもやとした気分になっていた  
とりあえずムカついたので、ボロボロになっている達也に思いつき  
りボールを  
ぶつけ、何事もなくドッチボールを始めているクラスメイトに混じ  
り授業を始めた

この気持ちは何なのか、少女は気づかない  
それはまだまだずっと先の話

t o b e c o n t i n u e d

**間章 アリサ・バニングスのスクールデイズ（後書き）**

すずかは無意識で魔法を使ったため、拒絶反応を起こしませんでした。

感想等、お待ちしております。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9262k/>

---

魔法少女リリカルなのは～風の辿り着く場所～

2010年12月19日08時27分発行